異世界語入門
～転生したけど日本語が通じなかった～
Fafs F. Sashimi
イラスト 藤ちょこ

私は
アレス・シャリヤ、
シャリヤよ。

浅上 慧
フェリーサ・アタム
レシェール
ヒンゲンファール・ヴァラー・リーサ
登場人物紹介

フィシャ・レイユアフ
アレス・シャリヤ
八ヶ崎 翠
スカースナ・ハルトシェアフィス・エレーナ

えっと、君は私の文字を知りたいの?

目次

一日目　出立（ɯɓɒɔ ɒиɜɯиӣ）

#1　頻度解析の時間だ！

異世界転生作品と聞けば大抵の人は次のようなことを想像するだろう。

主人公が神様によってろくでもない理由で命を奪われ、お詫（わ）びとして高スペックを与えられて異世界に転生する。転生した主人公は力を発揮して敵をばっさばっさとうち倒し、複数の女の子と仲よくなる。

これが通例である。

俺、八ヶ崎翠（やつがざきせん）も異世界転生作品の主人公たる典型的な人生を経て、神様にろくでもない理由で命を奪われ、転生させられた。この流れはどう考えても俺が、この先複数の女の子とハーレムを構成して、楽しい生活を満喫するはず。

満喫するはずである。

——するはずであった。

“cБłʒБu ʒэ uɒ инłюuɤ”

目の前にいる少女は今何と言ったのだろうか。彼女が驚いた顔で言った一語一句を反芻（はんすう）しても、何を言っているのかさっぱり分からない。分かるのは、その言葉が日本語とは違うものであるという事実だけで、言っている言葉の一つも分からないなんて何かがおかしい気がした。

気が動転していたから気づかなかったが、少女の髪は白銀色に輝いていた。電灯の光を受けて輝くその瞳は透明度のある蒼色であることが分かる。背丈は自分より小さく、中学三年生ほどという印象を受けた。まさに異世界転生作品に出てきて主人公とハッピーエンドで結ばれるのにふさわしいヒロインなのだが、どうしても納得できないところがあった。

（さっきからこの娘、言葉が通じてないんだよなあ）

　一言、二言聞いたが英語だったり、聞き覚えのある言語のいずれでもない。
　異世界転生作品の典型に沿い、きっと自分もトラックにでも轢かれて、神様に謝られて、チート能力を貰ったのだろう。ただ単に異世界に放り込まれるだけなんて酷すぎるからだ。だけど、能力の使い方も分からなければ、言葉も通じないのは、さすがに「典型」じゃない。
　なんだ……一体なんなんだ……神様は俺をおちょくって遊びたいだけだったのか……？

「あー、えっと……日本語喋れる？」

　翠を見て、固まっている少女に話しかける。とりあえず、日本語だ。
　異世界で日本語が通じるのは異世界転生作品の基本だが、少女は首をかしげて答えに困っている。

　通じてないようだ。

だがまだ、希望はある。
今のようによく分からない言語が喋られているような異世界転生作品もあるが、大抵は日本語をひらがな・カタカナ・漢字ではなく別の文字で書いているだけだったり、日本語の音をそのまま入れ替えていたりする例が多い。SNSでよく流れてくる“異世界言語”解読勢の解読を見ていると大体そんな感じだった。
だから、この異世界もきっと話は通じていなくても、その音の入れ替え方を理解するだけで日本語に簡単に変換できるに違いない。

しかし、どうやって……？

単純に考えれば、50音の並び替えだったとしても50の階乗通りの可能性がありうるわけだ。濁点・半濁点なども別カウントなら80種類は下らない。英語を基にしたら26の階乗。
天文学的数字だが、希望はある。エドガー・アラン・ポーの『黄金虫』やアーサー・コナン・ドイルの『踊る人形』とかにあるように、英語ならeが一番よく出てくるから、多く出てくるものをeと置いて解いていけばいい。英語だろうと日本語だろうと先人の解読法によって頻度解析に使う音は大抵決まりきっている。
つまり、文字の頻度解析は“異世界言語”を理解する鍵になるはずだ。

手元に手帳とペンを携行していてよかったと思う。
異世界に転生してきて、気がついたらこの少女と共に家の中にいた。これは非常に幸運なことだった。
異世界転生作品というのは、大抵中世ヨーロッパ風の街並みや文化をベースにしている。しかし、この家はそういった時代の木組みの家というよりはコンクリートなどで造られた現代風の家屋のような雰囲気であった。壁にはベージュの壁紙が貼られていて、自分が

今座っている椅子、目の前にあるテーブルも単なる木製ではないようだ。テーブルの横には本棚があり、その中から一冊を引き抜いて、出てくる文字の頻度分析を試みることができた。
　少女はというと、こちらをじっくりと見つめて観察している様子であった。

（ん……？）

　見たところ、辞書のようである。
　いちいち英語を覚える時のようなことをやらなくて済むはず。何故なら、どうせ日本語が基となった置換型暗号を言語と言っているに過ぎないからだ。日本語に変換する規則が分かれば、規則に慣れればいい話である。

　この頻度解析が完了すれば、俺は『異世界言語母語話者（フォーリンランゲージ・ネイティヴ・スピーカー）』だ。
　少なくとも異世界人との意思疎通に問題はなくなる。

#2　言葉は通じずとも

「うわあああああああ、分からん！！！！」

　翠は椅子からのけぞって分析作業を投げた。銀髪蒼目の少女は翠を横目に見ていたが、大声に驚いたのかびくっと体を震わせていた。やがて彼女は翠がのけぞって放心しているのを見て呆（あき）れたのか、椅子から離れて、何処（どこ）かへ行ってしまう。そうかと思ったら、何か本を持ってきて開いた本と翠のことを見比べたりしていた。
　異世界語と日本語や英語の文字や音の対応を見出（みいだ）すために、数時間ぶっ続けで頻度解析を行い、それに沿って音韻を当てたりしてい

たが、意味不明な文字列しか出てこないのである。少女はその間、翠にお茶（やっぱり都合がいいようにできているのか、この異世界にもお茶があるらしい）を出して作業の様子を眺めていたが、決して焦ったり、翠を追い出そうとしたりするような行動に出ることはなかった。

普通なら、いきなり家の中に見知らぬ人間が現れたら「幽霊だ！」とか「泥棒だ！」とか騒ぎになっていることだろう。それなのに、この少女は自分を客人として扱っている。いくら何でも人が好過ぎるだろう。もしくは、追い出すまでの勇気がないのか。

だからこそ、作業に集中できていたのだが、

「ははぁ…………」

さっぱりである。

“異世界言語”の文字はどうやら40数種ほどあるらしく、そのうちのアルファベットのuっぽい字形が一番出てくる回数が多かった。これを日本語の仮名だと仮定して「い」を当てはめたり、ローマ字の「a」を当てはめても、全くお目当ての日本語訳が出てこない。

この何の生産性もない作業を切り上げて、この銀髪蒼目の少女と意思疎通を図った方がよさそうな気がしてきた。今必要なのは異世界言語と日本語の変換の仕組みより、身の安全と状況確認だ。

少女は翠の容姿や行動から何か情報を得ようとして観察したり、何か本を取り出してはその記述などと翠を照らし合わせて状況を理解しようとしているようだ。しかし、ほどなくして諦めたのか頬杖をついて翠を見つめ続けていた。

人間は腹も減るし、寝場所を探さなくてはならない。少女はお茶も出してくれたし、敵意を見せていないところから寝首を掻かれることもないだろう。しかし、ここで寝泊まりができるとしても、無

言で寝食するほど翠の人間性は腐っていない。

しかし、最初のコミュニケーションをどうするかというのはわりと問題である。

少女に目をやると、目が合った。
蒼玉のように綺麗(きれい)な青い瞳、地球では見られないような銀色に輝く美しい髪に目を奪われる。創作の世界ではいくらでも見てきたそれを実際に目の前にすると、また違った感情を抱くものだ。

（さて、最初のコミュニケーションか）

少女が今まで翠の頻度解析の作業を邪魔してこないところを見ると敵意は持っていないし、自分の作業を眺めていたところを見ると興味を持っているようにさえ見える。
言葉が通じずとも、言葉を通じさせることができる——というのは、昔関西に飛ばされたとある先輩が言っていた言葉であった。

「俺は八ヶ崎翠。やつがざき、せん」

自分の顔を人差し指で指して言う。
次は少女を指して。

「君の名前は？」

#3　等式文って言うらしいよ

少女は、翠の言っていることに頷(うなず)いて答えようとして、何か考え

るような顔になっていた。しかし、翠がとにかく自分を指しながら名前を連呼していると少女も何を言いたいのか分かったようで、翠と同じように自分を指して言った。

“ꝺn uᴅ бзuᴅ.ɱбзnцб. ɱ́бзnцбᴅиn.”

ふむ。「ミ　エス　アレス　シャリヤ、シャリヤスティ」と言ったな？

どうやら、名前を言っているようだが、彼女の名前がどの単語か分からない。手当たり次第に、少女を指でさして言っていくとしよう。

「シャリヤスティ？」

少女はこくこく頷いて答えた。

“цб, ꝺn uᴅ ɱбзnцб ꝺбз 3э uᴅ цбиπбᴅбпn(八ヶ崎翠).3uю иnłюuɤ”

何か長文を言われているらしいが、なぜだか明確に単語の間の区切りがしっかり頭に入ってくる。

神から貰った能力がこれと言われたらさすがに悲しいが、異世界の言語を習得していく上でこれほど分かりやすいことはない。多分、文脈から考えて自分の名前と彼女の名前を言っているのだろう。

シャリヤスティという名前の時には「ミ　エス」と言っていて、俺の名前の時に「ソ　エス」と言っているあたり、“3э(ソ)”が「あなた」を指していて、“ꝺn(ミ)”が「自分」を指しているんだろう。

となると、構文も自(おの)ずと分かってくる。

エスが英語の be 動詞のような働きをしていると考えると、英語のような単語の並び方をすればいいということが分かる。いわゆる、

主語・動詞・補語
ＳＶＣだ。

さっそく、翠は口に出してみることにした。

「ミ　エス　八ヶ崎翠！　ソ　エス　シャリヤスティ！」

しかし、少女は首を横に振った。どうやら間違えているらしい。

私はシャリヤ。――――　シャリヤスティ
“ʒn ub ɱбзnцб. uɫb юnǫ ɱбзnцббиn.”

うん……？
多分、シャリヤスティじゃなくて、シャリヤと言えと言っている
んだろうが、よく分からない。じゃあさっきの語尾のスティは、な
んだったんだろうか。

「翠スティ？」

自分を指して、言ってみせる。
だが少女は依然としてそれは違う、という顔をしていた。

（スティはよく分からないから保留にするか。とりあえず、be 動
詞みたいな単語の使い方を確認しておこう）

「ミ　エス　八ヶ崎翠。ソ　エス　シャリヤ。おーけー？」

少女は胸に手を置いて、“uɫb цɔзubю.”（エース　エレスン）と答えた。
「ソ　エス　シャリヤ」で何回か確認してみると、どうやら肯定す
るときのしぐさがこれらしい。

――――　シャリヤスティ！　――――　私　――――
“bбзбɫɔб, ɱбзnцббиn¡ uшnɱб ʒn пзnu шuб шэ¡”

と、そんなこんなで言語を理解しようと努力していると、家の外から誰かが呼ぶ声が聞こえてきた。
当然、意味は分からないのだがシャリヤを呼び出そうとしているようであった。

#4　使える言語

シャリヤはその呼び声に気づいたのか翠のいる机の前から離れて、奥の方に行ってしまった。翠も気になったので、シャリヤについていって誰なのか確認しようとしていた。
シャリヤが玄関のドアを開けると、そこにはシャリヤと同じくらいの年頃の少女が立っていた。しかしながら、髪の色は黒、目の色も黒で日本人に近い見た目であった。考えられることは、この異世界の今いる国において、この子かシャリヤのどちらかが外国人ということだ。ただし、この国が多民族国家である可能性も捨てきれない。

もし、インドのような多民族国家であれば、自ずと地域によって使われる公用語が莫大（ばくだい）な数となる。
ただでさえ、インドにおける州公用語と連邦公用語をあわせた数は19言語。そのうちの一つであるタミル・ナードゥ州の公用語のタミル語を取り上げても、その地域方言の数がインド国内で6つから7つほど。社会地位やカーストによって分けられる社会方言はまた別に細分化され、相互通用性は低い。これがインド全体の公用語、また公用語にされていない地域言語やそれらの方言まで数え上げるとインド全体で話される言語数は膨大になる。

————というようなことを、インドから関西に引っ越してきた先輩（通称、インド先輩）が言っていた気がする。つまり、重要なことはシャリヤの話す言語がインドで例えるうちのどの言語地位に当てはまるかだ。

例えば、英語を脇において発展途上国の公用語にもなっていないような地域言語を勉強するやつはよっぽどのもの好きである。有用な言語を学んでコミュニケーションをできるようにする。多くの人と助け合い、生活できるようにしていく。経済大国の言語を学び、商売に役立てる。こういったことがまともな人間の考える語学であると、インド先輩は言っていたのである。

ただ、彼はその「語学」を嫌っていたようだけど。

“ʒułʒ, ɱбзnчбɒиn(シャリヤスティ). cбłʒбu збłиб uɒ(である) ɱбз ɱжбɤ”

黒髪の少女が、シャリヤの後ろに立つ翠を指さして何かを言っている。

どうやら、シャリヤと同じ言葉で話しているように聞こえて、翠は安心した。見ず知らずの自分を指さして、「この人は誰だ？」と訊(き)いているように見える。イントネーションを尻上がりに発音すると質問を表すのは英語もこの言語も同じようだ。

“чб...... ʒn(私) юбu ɒnбʒбłзu юnɒ юб xб ʒn(私) юnuɱnɱ uɒэ ɒnɬɒ oбɱэюшuuюułɬʒ.”

“cюю, oбɱэюшuuюułɒиn, cбłʒnu ʒэ юuб юnuɱnɱɤ”

黒髪の少女は、両手でがっしりとシャリヤの肩を掴(つか)む。その様子はどうやら何かを諭しているようにも見えた。

“nɒ юnɒ юuʒnзэnnɬułn̈эюч, ɒбчɒиn. юnuɱnɱ ʒnɒɒuю

ꝾЗБDЮБꝾЭЗ……”

黒髪の少女は瞬間振り返るとシャリヤを押し込んで家に入り、ドアを閉めた。
次の瞬間、聞こえてきたのは度重なる銃声と軍靴の駆ける音であった。

#5　俺は異世界転生作品の主人公だぞ

“ʒɔиɔƚз эз ƚuиэ ɱБn шuɱБɱuз шuБ¡”

男の怒号が家の外から聞こえてきた。
黒髪の少女は、シャリヤと翠の頭をジェスチャーで下げさせながら、窓の脇から外側を覗(のぞ)いて様子を見ている。依然、銃声と思わしき音と爆発音、悲鳴と怒号が混ざり合って聞こえてきていた。
空気がバリバリと振動し、窓がおどろおどろしい音を立てて割れる。走って逃げているのか、それを追いかける兵士なのか分らないが、近くを多くの足音が通り、そして、少しして静寂が訪れた。
散発的な銃声と爆発音はいまだ続いている。黒髪の少女は、外を確認しながら、逃げ出す機会をうかがっているようだった。

（ただごとではないな……）

そう、ただごとではない。
窓から見える遠くの街の風景は異世界にしては味気ないものだった。ガラス張りの高めのビルが幾つか建っているのが見えるし、ファンタジーらしくもなく道路は綺麗に舗装されている。それも古代ローマのように石を敷き詰めているのではなく、アスファルトで舗

装されているように見える。そこに長年使われているのか緑青（ろくしょう）に覆われた街灯が等間隔で並んでいた。ここまで整備された都市でいきなり戦闘が始まったのだから驚きを隠せなかった。

何が起こっているのか、誰が敵で味方なのか分かるはずもない。当然地球なら世界の情勢から大体の見当がつきそうなものだが。

地球でこんな目にあえば命を守れるかどうかも、運動経験のない翠にとっては疑問なところである。銃弾を受ければ、即死するかもしれない。地球に帰って異世界で膝に矢を受けたなんてギャグは絶対に通用しないだろう。

そもそも、帰れる保証というものはないのだが。

それでも彼には変な安心感と自信があった。

つまり、こういうことである。

（そもそも、異世界転生作品の世界なんだから主人公である俺が死ぬことはないだろ）

というわけで、別に何があろうと大丈夫という変な自信があった。黒髪の少女もシャリヤも怯（おび）えて、隠れているように見えるなかで、翠は一人だけその変な自信に胸を張って、事の成り行きを見つめていた。

いくぶんか時間が過ぎ、外が静寂に包まれる。黒髪の少女も外を見て安全を確認していた。どうやら、外に出ても大丈夫なようであったが、もちろんこれからどうすればいいかなど分からない。とりあえず、黒髪の少女についていくほかなかった。誰が味方で、誰が敵かは自分には分からないが、彼女たちにはきっと分かるだろう。

そんなこんなで、家から出て街に向かおうとしていた時であった。

“ɥuni ðnзni ᴅcłзэ ðnзnэю ɱuᴅюnuxnюᴅ зuɯɔɯɬni”

後ろから大声で怒鳴られる。黒髪少女もシャリヤもゆっくりとそちらの方を向くと、そこには黄土色の制服らしきものに身を包んだ一人の男がおり、こちらに銃を向けていた。
驚いた翠はすぐに両手をあげた。交戦の意思がないことを示すためであった。だが、男は一瞬驚いた顔をした後、怪訝（けげん）な様子で翠を眺めていた。さらに、翠の様子を見て少し経つとイライラしたような顔で、銃を翠に向けてきた。

“ɥuni ɱuɒюnuxnюɒ зuɯэɯi ɱuɒюnux ɱзuƃюuɫuюnɫɫзi”

何を言っているか全然分からないので振り返って、シャリヤに助けを乞うが、何も答えてくれない。
両手を挙げたまま、男に向き直ると、男は引き金に指を掛け翠に向けた銃を構え直した。

“ʒэ（お前） ƃụnɔɫṇƃɫi ɯuзnɔ ɫuиэi i”

そう男が言い放った瞬間、引き金が引かれた。鈍い銃声と共に銃弾が放たれる。当然銃口は、翠に向けられているので、銃弾は翠に向かって放たれた。即（すなわ）ち至近距離からライフルで撃たれたのである。
シャリヤも黒髪の少女も唖然（あぜん）としている。撃った方の兵士の男は茫然自失（ぼうぜんじしつ）という感じで、銃を構えたまま微動だにしなかった。

「……」
「……」

本当に撃たれたのか分からず、翠も撃たれたと思わしき足を手でさすってみる。触れた指が紅（あか）く染まるほどに、血が出ていた。

「——なんじゃこりゃぁあ！！！」

#6　蒼い旗を掲げよ

“ϱnэчБɒɒБɒиnі ɒcƚзэ nɒ йБюиБюБɒ3cиɔі ɱБƚϱnзиɒ ɒиэɱnии ɱБƚϱnзɈn юэɈ3иɔі”

歌声が聞こえてくる。
力強く、何人もが歌っているその歌詞はやはり聞いたことがない言語であった。何かを訴えかけ、そして連帯を求めるようなその歌は言葉が分からなくても、心に染み入るものがあった。
つまり、つまり…………、

「俺死んでなかったのかよ！？」

がばっと起きたところ、翠はソファーの上に寝かせられていた。周りを見渡すと先程までいた家ではなく、何処かよく分からない少し大きめの部屋に連れてこられたようだ。窓が一つもないために閉塞感を覚えるうえ、同じ町の中なのかすらもよく分からなかった。
撃たれた場所に痛みは感じない。手でさすったり、押し込んだりしてみるが、傷もなくなっているらしい。

（確かに撃たれたはずなのに……）

歌声は、翠が起きたことにも気づかずに続いていった。

“ϱnэчɒɒБɒиnі ɱи эɯn3из зБ зиɱ. ɱжБ иɒ зɔБƚиБ из϶э ɯБ.”

“ᴅюuƚnuю збɯnƚʒʒэᴅunɪ ǫuƚɱuю юэнƚuбuбᴅunɪ ᴅэнᴅюɔзɔᴅuбю uᴅ пзбюuuӥ ʒэɿɯ бɱuзnɱɱбюunз.”

“зuʒɔ uuɱu ɗзnƚɿuƚʒcбǫnз ɱбззuƚ ᴅnɗɔƚзɿɯ ᴅюuюnп. nᴅxnuюuƚɞuɯбƚюuɔᴅu ᴅcƚзэ ɯб uюэɞnэюбᴅɪ”

なるほど、歌声に込められた連帯感が熱気として伝わってくる。やっぱり歌詞は全く分からないが。

翠には身寄りがいない。そりゃあ、異世界なのだから家族も知り合いもいるはずがない。それは当然として、異世界転生作品の主人公なら俺はすでにチート能力を駆使して、自分好みのハーレムを作り上げてウハウハになっているはずではないか。

だが、現実はそう甘くないようであった。

起き上がってみると、横にシャリヤがいた。ソファーに寄りかかりながら床にぺたんと座って、顔を伏せて寝ている。その銀色の髪は艶やかな光を放って、ソファーの曲面に沿って垂れていた。おかしい、ハーレムとは何だったのか。

可愛(かわい)い彼女の様子を観察しているうちに、歌を歌っていた集団の方から男が一人歩いてきた。

“ᴅбзбƚɔб, ɱnɥ. ʒuюu ʒэ(君) ƚnuɥnuзɤ”

「あ、ええっと……」

だめだ、全然何を言っているのか分からない。多分、最初の「ザ

ラーウア」というのは挨拶のようなものだと思われる。黒髪の少女がシャリヤを訪ねてきたときにも言っていたからそんな感じだろう。
　外を見るともはや昼とも朝とも言えず、日が暮れていた。黒髪の少女は日中に来たのでこの挨拶の単語は「おはよう」や「おやすみ」のように時間を気にせず使えるらしい。
　翠が答えに窮していると、先程の黒髪の少女が横から男に近づいてきた。

“ᴅƃзƃɫɔƃ(こんにちは), ɱnɥ. ʒuюu юnϱ ᴅn зnɔɫɱ зnюuxƃɫnюu.”
“cƃɫϐnuɤ ʒuюu юnϱ зnɔɫɱ зnюuxƃɫnюu ϐƃз ᴅn uᴅ(である) зƃюuɫϐu эз uиɤ”

　男は翠の方を一瞥（いちべつ）し、黒髪の少女に尋ねた。

“юnϱ, ᴅn uᴅ(である) oƃɱɔюɯuuюuɫ йɔ ʒnɫᴅи зnɔɫɱ.”

　黒髪の少女はシャリヤを指さして言った。何の話をしているのかよく分からないが、多分俺について話しているのだろう。
　シャリヤはといえば、まだソファーに顔をうずめてぐっすりと寝ている様子であった。

#7　本当に喋れないの？

　男はといえば、黒髪の少女の話を聞いて、また怪訝そうな顔をしていた。

“ᴅn uᴅ(である) oƃɱɔюɯuuюuɫ......ɤ”
“ɥƃ иn, ᴅn uᴅ(である) oƃɱɔюɯuuюuɫ.”

どうやら話し声に気づいたようでシャリヤは起き上がって、男の問いに答え始めていた。男はさらにシャリヤに問いかける。

“ɥun, ʒэɒиn, cБƋu зБ зuɱ uɒ（である） nɔззэɤ”

“ɒn ɥэɒюɔжю жɔncɔɫпɥ ƋБз зБ зuɱ ƍэзuɒ юnƍ ɱnзɱ ouɫзɱɔɫx ƋБп̤ ɒn п̤ꞁuɒ oБɱɔюɯuuюuɫ, ɯuзnɔ пБюuп зnюuxБɫnюu.”

「ふむ」という感じで男は頷いていた。当然だが、翠には長文は全く分からない。まだ「……は……である」という形式の等式文くらいしか分かっていないのだ。

“Ƌn uɒ зuɱuɫз（私はレシェール。）. ɒnꞁɯ Бзэбɥuɫзuɫƌ uɒ cБɫƋnuɤ”

“ɒn uɒ……（である……）”

シャリヤは困ったようにこちらを見てきた。文脈的に考えて、男の名前は多分レシェールでレシェールは俺の名前を訊いているのだろう。コミュニケーションのチャンスだ。

今まで覚えてきた単語を駆使して異世界人からの信頼を勝ち取ってやる。これこそ異世界もの主人公の真髄——ご都合主義戦法（ストラテジー・オブ・オポチュニズム）だ！（そんな表現があるかどうかは知らない）

“ɒБзБɫɔБ¡（どうも！） Ƌn uɒ ɥБи̤п̤БɒБпn.ʒuюi¡（私は八ヶ崎翠です！）”

そう勢いよく言い放つと、シャリヤも黒髪の少女もレシェールという男もみな「え？」という顔をした。調子に乗りすぎて、なにか間違えたのかもしれない。

“ɥun, ƍБɥ. uɯnɱБ ʒэ（君） зnɔɫɱ юж зБ зuɱ ɱБз зэƍnп юuɒuпзɤ

ʒuюu юnɋ ɒn ʒпɔɫɱ ʒnюuxƃɫnюu."
"цƃ...... цƃ, xƃ uɯnɱɔ ʒuюu юnɋ ɒn ʒпɔɫɱ...... ʚuɫʒ, ʒuюuɒиn."

シャリヤが、翠を指さして、こいつは怪しいとばかりに顔を近づけてくる。絶対に何かを間違えた。完全に何かを疑われている雰囲気だ……。

"ʒnɫʒƃ nэ, ʒuюu ʒэ(あなた) ʒпɔɫɱ ʒnюuxƃɫnюuɤ"

翠は、さらに詰め寄って訊いてきたシャリヤの怪訝そうな顔に、何かを失敗したことを確信した。

#8　貴方(あなた)は人間かって聞く人、正直言ってアレだ

"ʚƃз, ʚuɫ......"

あの後、シャリヤとレシェールが交渉のような感じで話していたが、結局翠には何一つ理解することはできなかった。英語の借用語の一つでもあれば楽に言語習得の糸口を掴めそうなところだが、ここは異世界である。ヒロインがいきなり異世界ファンタジーのおやつと称してスニッ〇ーズなんかを渡してきたら萎えるし、そんな世界を設定した神(ラノベ作家)を笑う。

(…………)

現状――シャリヤと向かい合わせになって小部屋の中で椅子に座らされている。目の前の卓上には綺麗に揃(そろ)えられた紙とペンがあった。何をしたいのか結局よく分からずに数分経過している。シャリ

ヤは何かを深く考え込んでいる様子だったので、邪魔せず黙ってこれまでの状況を整理してみることにしよう。

状況は簡単で、翠は熱烈な思いが伝わってくる歌を大合唱する謎集団と一緒に屋内を移動して、別の部屋にシャリヤと共に連れてこられていた。

この建物にはあまり色彩がなく、壁も天井もグレーや白で塗りつぶされていた。唯一の彩りといえば、通路にある老朽化した吊(つ)り下(さ)げ電灯が黄色い光を壁や地面に投げかけていることくらいだった。

連れてこられた部屋は白い壁で窓はない。閉鎖的な雰囲気を感じる空間は、しかし異世界ものの主人公にふさわしい大変な生活をしてきた翠にとってはどうということもなかった。

レシェールがペンと紙をシャリヤに持たせたのだろう。多分、意思疎通が取れなければどうにもならないと考えて、シャリヤをコミュニケーション要員として使ったのかもしれない。……本当にそうかは分からないが。

現代的なビルがあっても街の印象的な色は灰色だった。道路も街灯もビルの壁も灰色で、色のセンスに問題があるのだろうと思うくらいに灰色で統一されていた。ところどころ迫撃砲で崩れた建物や壁に残る銃撃戦の痕も含めて酷く温かみのない街だった。

それもそうで、ここは市街戦が始まるような場所だ。銃撃戦が起こっても、シャリヤたちが混乱せずに外の様子を見ていたあたり、こういったことは日常的に起きているのだろう。歌っていた謎集団の一部には不安そうな声色で地図を広げてバツ印をつけていた人もいた。日常に温かみを求めるよりも、命の危険から離れることの方が重要であったということだ。敵さんは味気ない街の灰色に色を足そうとでも思ったのだろう。迫撃砲と人の血を画材にするのは相当アヴァンギャルドな都市芸術だ。

冗談はさておき、紛争が続いている現状、一人で外を出歩くのは

自殺行為なのかもしれないし、シャリヤのような娘にコミュニケーションを担当させられるとは多分自分はその程度としか見られていないのだろう。人間社会というのは戦わないと生きていけないというのはどこでもそうなのであるが、彼らは自分たち現代の日本人が体験していない本物の戦場に身を投じている。言葉も通じず、戦うこともできない人間を救う余裕が彼らにあるのだろうか。

そういえば、今更だけど自分はあの時撃たれたはずなのに何故無傷で生きているんだろう。確かどこかの小説に、弾で耳を掠(かす)めることで三半規管に衝撃を与えて人を気絶させたりするスナイパーが登場したが、翠は撃たれた太腿(ふともも)を流れる血を触って確認したはずだった。

そんなことを考えているあいだ、シャリヤは悩みながら何かを描いたり、消したりしていたようだった。描き終えた紙を半回転させ向かいに座っている翠に見せる。

（……人？）

人の象形のようなものがそこには描かれていた。棒人間の頭がなくて、「人」の文字に「一」を足したような、「大」によく似たものだ。ここの言語の文字は先程、辞書の文字を見たときにアルファベットのような字形であることは分かっているから、多分棒人間にあたる人を表すシンボルなのだろう。

である
“ɱжБ uD зБ꜔иБ.”

シンボルを指しながらシャリヤは言う。ふむ、１単語目の「フクヮ」も３単語目の「ラータ」も当然知らない単語だ。語彙力不足が否めないが、未だ異世界に来て一日経ったかくらいだ。英語に疎い翠でも等式文を覚えられただけ上々といえるだろう。

しかし、教えてもらえるものは習得したい。
　シンボルを指しながら言っているということは英語で言う“This is 〜”の構文に当たるのかもしれない。とすると、“зБłиБ(ラータ)”は人を表すのだろう。

（確かめるか）

“ʒэ uD зБłиБɤ(貴方は人ですか？)”

　翠はシャリヤを指さして、言った。彼女の反応が正誤を示してくれるはずだ。

#9　貴方の文字は

“ðuł...... цБ, ðn uD зБłиБ.(私は人間です)”

（やったぜ！）

　シャリヤは困惑しているようだが、言語習得に日常会話で通常使わないような例文が出てくることなんて普通だろう。「これはペンです」とか「これはプエルトリコヒメエメラルドハチドリです」とか日常で使うわけがないのだが、文法構造を理解するには必要なプロセスだと思う。
“ðuł(メー)”というのは今まで何回か出てきているが多分英語のwell...... に当たるような表現なんだろうと推測した。あと、“цБ(ヤー)”もどうやら今までの反応を見ていると肯定を表すらしい。ということは否定表現も聞き出せるはずだ。
　翠は、椅子から立って椅子をガタガタを揺らしてみせた。

“ɱжб uᴅ збłибɤ（これは人？）”

目的を理解したかのようにシャリヤは椅子を指さす。

“юnọ, ɱn̈nł uᴅ（である） xułюбз”

なるほど、距離的に相手側にあるものは“ɱn̈nł（フギー）”で指すらしい。英語の“this（これ）”と“that（あれ）”のようなものだろう。“ɱжб（フクワ）”とは似てるから覚えやすいな。とすると、“xułюбз（ペーナル）”が椅子を指していることが分かる。多分、否定の感嘆詞は“юnọ（ニヴ）”なのだろう。
ここで翠はインド先輩から聞いた一つの逸話を思い出した。

1906年、東京帝国大学のとある学者がアイヌ語の調査のために北海道に渡った。
彼はとにかく「何」という一言を求めていた。それが分かれば物を指して、「何？」と訊くだけで名詞をどんどん習得していくことができるのだ。
彼はそこでアイヌの子供にわけの分からないぐちゃぐちゃを描いて見せた。すると、アイヌの子供たちは怪訝な顔をして、「ヘマンタ？」と訊いてきたのである。アイヌ語の「何」を指す単語ヘマンタを習得した彼は、滞在した40日の間、大抵の話はできるようになっていた上に大体のアイヌ語文法と多くの語彙、口頭伝承の調査ができるようになっていたのである。

というわけで、翠もそうするのが手っ取り早い方法だと思った。先人に倣えとはよく言ったものだ。翠は手を出して、シャリヤから紙とペンを貸してもらい紙にぐちゃぐちゃと殴り書きをした。アイヌ語学者と同じく、それをシャリヤに見せた。

“ɱжб ɯɒ...... ʒэʇɯ зɜчэиɤ”（これは……）

どうやら、「何」という単語は「ソド　リュヨット」という２単語で表されるようである。それでは早速これを使って、ものを訊いていこう。
翠は再度立ち上がり、椅子をガタガタさせて彼女の意識を向けさせた。

“ɱжб ɯɒ ʒэʇɯ зɜчэиɤ”（これは何ですか？）

すると、シャリヤは怪訝そうな顔をした。

“юnɒ, ɱnnɫ ɯɒ xɯɫюбз. ʒэʇɯ зɜчэи ɯɒ xɯɫюбзɤ пэɫзnɱиизэю ɯɒ юnɒ зɜ.”（違う、それは椅子。何は椅子？――ではない）

…………。

あれ？

#10　ナシ・ゴレン

とりあえず、“ʒэʇɯ зɜчэи”（ソド　リュヨット）が椅子ではないことだけは分かった。では、“ʒэʇɯ зɜчэи”（ソド　リュヨット）とは何だろうか。全く見当もつかない。
シャリヤはというと、翠から紙とペンを取り上げ、また何かを描いているようであった。多分、“ʒэʇɯ зɜчэи”（ソド　リュヨット）を説明するために絵を描いているのだろう。
少し経って、シャリヤは紙を翠に見せたがそれは絵ではなかった。

（これは……見たことがあるぞ）

シャリヤの部屋で見た辞書らしき本に書いてあったこれらと同じ文字らしきものは、頻度解析をしようとしたときに何度も見ているので音は分からなくとも字形は覚えていた。それが“ʒɘɿɯ（ソド） зэнɥэи（リュヨット）”と何か関係があるんだろうか。

“m̰жб uɒ（これは） ðnɿɯ（――） зэнɥэи（です）.”

シャリヤは文字列を指してそう言った。

（ん……？　待てよ）

“ʒɘɿɯ（ソド）”が“ðnɿɯ（ミド）”に入れ替わってるが、もし「私の文字」と言っているのであれば多分“ðnɿɯ（ミド）”が「私の」で、“зэнɥэи（リュヨット）”が「文字」なのだろうということは推測できる。

だが、翠の心の中には一つの懸念があった。

インド先輩が勉強していたと何回も言っていたインドネシア語のように、英語や日本語と違って名詞の後ろに形容詞を置く言語もあるそうなのだ。

例えば、マレー料理として有名なナシゴレンはインドネシア語では“nasi goreng”と表せるが、nasi は「飯」で、goreng は「油で揚げた」の意味だ。日本語では「焼き飯」となり、英語では“fried rice”となるわけだが、いずれも前の単語が後ろの単語を修飾している。しかし、インドネシア語のように後ろの単語が前の単語を修飾しているかもしれない。

つまり、“зэнɥэи（リュヨット）”が「私の」で、“ðnɿɯ（ミド）”が「文字」かもしれない。ただ、前に出てきた“ʒɘɿɯ（ソド）”と入れ替わっているのは

“ʊnꜧɯ（ミド）” だから、その可能性は低いかもしれないが、一応確認しておこう。

翠は目の前に提示された文字列を指差さす。

これは――ですか？
“ɱжɓ uɒ зɜнɥэиɤ”
はい、　これは私の文字です
“ɥɓ, ɱжɓ uɒ ʊnꜧɯ зɜнɥэи.”

どうやら、後置修飾ではなかったようだ。あと、今の質問で“зɜнɥэи（リュヨット）”が「文字」であることは確定的となった。

先程の質問でシャリヤに“ɱжɓ uɒ ʒɘꜧɯ зɜнɥэиɤ（フクワ エス ソド リュヨット？）”と訊いていたが、これは椅子を指して「これは文字ですか？」と尋ねていたということになる。どうりで怪訝な顔をされて、否定されたわけだ。何も分からずこの世界に放り出されたとはいえ恥ずかしい。

そういえば、“ʊnꜧɯ（ミド）”が「私の」であれば、“ʒɘꜧɯ（ソド）”は「あなたの」のはずだが、よく考えれば、「私」が“ʊn（ミ）”で、「あなた」が“ʒɘ（ソ）”だったよな……？　つまり、単語に“-ꜧɯ（ド）”を付ければ「～の」って意味になるのか……？

これはレシェールの椅子ですか？
“ɱжɓ uɒ зuɱuƚзꜧɯ xuƚюɓзɤ”

シャリヤは思案顔になった。まあ、そりゃいきなり連れてこられて椅子が誰のものかとか言われても多分分からないだろう。

はい、これはレシェール――の椅子です
“ɥɓ, ɱжɓ uɒ зuɱuƚзuɒɒuꜧɯ xuƚюɓз.”

答えてもらえたが、レシェールと“-ꜧɯ（ド）”の間に何かよく分からないものが挟まれていた。よく分からないが、肯定はしているようであった。

そんなところで、翠は背伸びをした。今のやり取りで数十分では

あるが、こんな感じで40日も続けていればそりゃあ完璧に話せるようになるだろう。しかも、それ以上に方法はないし、やることもないんだからなおさらである。
　集中力が切れて、空腹にやっと気づいた。そういえば今日は、異世界に来てから何も食べていないのである。気づくとさらにひもじく思えてきた。同時にお腹がぐぅ……と鳴る。

“ʙƚ, ʒɘ(あなた) ɜnɯuɒɪoʊɒ. ʚnɜn ʚn(私) xɜʙɱ.”

　何かに気づいたように、シャリヤは翠にそう告げて部屋から出ていった。ドアが開けたられたまま、部屋の中に翠は残された。

#11　ヴラジーミロヴィチ

　さて、シャリヤが部屋を出ていって十数分経ったが未だに戻ってこない。誰も知らない、何も分からないこの地で無味乾燥な部屋に残されて気分も真っ白になってしまいそうだった。
　だが、行動には慎重を要する。翠には成し遂げなければならない目標がある。そのためにはまだ死ぬことはできなかった。

（そうだ、せっかく異世界に来たんだ。チートを使って英雄になって、甘酸っぱいハーレムを構成するまで俺は死ぬことはできないのだ…………ッ！）

　すぐに英雄になって、チートで努力せずにハーレムを作り、とんとん拍子で報酬を勝ち取りたかった。そのための現実世界での生(苦しみ)ではなかったのか。
　そんなことを考えているうちに開いたままのドアの向こうに人影

が見えた。

（シャリヤが戻ってきたらしいな）

そう思って翠は無意識に姿勢を正していた。だが、開いたままのドアを怪訝そうに見ながら入ってきたのは黒髪の少女であった。翠を見ると少し驚いたような顔をして、十数分前までシャリヤがいたところに座った。

シャリヤ ――――――
“ɱБЗпцБ иэшпuDиɤ”
「……?」

シャリヤについて話してることは分かるのだが、それ以上はやはり語彙力不足で何を言っているか分からない。日本語・異世界語単語帳でもあれば すぐに会話も楽々できるようになるはずだが、こんなハイファンタジー空間にそんなものはあるはずもない。だが、何も言えずにいてもただ気まずいだけである。
そういえば、黒髪の少女の名前は訊いていなかった。それで話を繋（つな）ごう……。

えっと、俺の名前は八ヶ崎翠なんだけど、君は？
“ðuɫʒ, ðn uD цБӣɔп̈БDБпп.ʒuю. ʒэ uDɤ”
え？　私のフェールクですか？
“uɤ ðnɺш ɱuɫзп uDɤ”
うん
“цБ.”

文脈的に“ɱuɫзп”（フェールク）は多分「名前」だろう。

私の名前はスカースナ・ハルトシェアフィス・エレーナ
“ðn uD DпБɫDюБ сБзиɱuБɱпD uзuɫюБ.”

なるほど、「エレーナ」という名前らしい。

そういえば、考慮しなければならなかったことが他にもある。名前の形式についての問題だ。
大抵の現代の日本人の名前に対する意識は、現代日本語名に慣れ過ぎているせいで姓（苗字（みょうじ））−名（いわゆる後ろの名前）の形式に縛られがちだ。
異世界ものの定番として何故かヒロインの名前が西洋名を借りたものになっている場合が多いが、これの順番は名−姓であることが多い。これは我々が触れる機会のある外国語が英語くらいであり、その姓名の順が日本語と逆で異世界感があるからなのだろう。
人名の事情はこんな簡単なものではなく、例えば韓国語では五つの姓で国民全体の五割ちょいを占めていたり、タミル人やアイスランド人はそもそも姓というシステムを持たなかったり、ロシアには父親の名前を変化させ「〜の息子・娘」という意味にした言葉を名と姓の間に挟む父称というシステムがあったりする。これに従うとヴラジミール・ヴラジーミロヴィチ・プーチンはつまるところ「プーチン家のヴラジミールの息子・ヴラジミール」と解釈できるんだろうか。ロシア語はよく分からないのだが。
…………ということをインド先輩が言っていたが、つまり名前にも色々な形式があるわけなのだ。ただ、語彙数が少ない今確認することは難しいだろう。とりあえずはエレーナもシャリヤも後に出てきた名前で呼ぶほかない。呼ばれたい名前があるのであれば、訂正してくれるはずである。
呼ばれたい呼び方といえば、ドイツ語で話す相手を表す単語には“Sie”（あなた）と“du”（君）があるらしい。そして、彼らはある程度親しくなると Sie から du に呼び方を変えるようだ。“duzen”（duで呼びかける）という動詞があるほどなのだから、文化と深く結びついているのだろう。なお、Sie で話すべき仲で du を使ってしまった場合“Seit wann duzen wir uns?”（いつから du で呼び合う関係でしたっけ？）と言われてしまうらしい。

まあ、シャリヤやエレーナたちが話している言語でどのような呼び方の文化があるのか分からないが、呼び合っているうちに自ずと分かるだろう。

そんなこんなで、黒髪の少女エレーナと一緒に座っていると部屋にプレートを持ったシャリヤが入ってきた。

“ʒuюuɒиnἰ uɯnლნ ðn(私) ლuюლu пюззэбюuɫз цбἰ”

（おっ？　食い物か……？）

食い意地の張っていた翠はシャリヤの持っているプレートに目が釘付け（くぎづ）けとなってしまっていた。

#12　まるで異世界料理の宝石箱や！

（お、おう……これは……）

目の前に並べられた料理を見ると、わりとゲテモノらしいゲテモノはなかった。変なものはあるが。
香り高いスープ、飯、豆腐のようなもの、ヨーグルトと玉ねぎのサラダ、謎の白いぷるぷるした物体、なにかの肉、香辛料だと思われる真っ赤なペーストにらっきょうが入ったようなものは多分この地方の漬物、副菜に当たるのだろう。
緑のペーストと醤油（しょうゆ）のようなソース、塩のようなものも小皿に付いていた。見るからに豆腐みたいな何かにはこれをつけて食べるのだろう。
とりあえず、本当に自分に出されたものなのか確認することが礼

儀というものだろう。異世界でも現実世界でもそれは変わるまい。

“ɱɔжɓ uɒ ðnɿɯ......ɣ”（これは私の……？）
“ɥɓ, ɱɪ̈nɫ uɒ ɱɔɓ ʒɘ.”（うん、これは君――である）

どうやらそうらしい。
ならば、極限まで腹が減っているので食べるしかない。

まずはスープに手を付ける。
表面に黄色い油が浮いていて、ラーメンのスープみたいな状態になっている。スープの色自体は茶っぽいが、香りからして悪いものは入っていないはずだ。多分。
食器を持ち上げて口を付けて啜（すす）ろうとしたところ、シャリヤが“ðnзn（ミリ） ʒuıюɿɒ（センス）.”と止めてきた。プレートの横の方にあるレンゲのようなものを指さす。

（ほほう、なるほど。口を付けてスープを飲むのはマナー違反と）

お食事のマナー、といえば大げさだが、もちろんどの国にだって守った方がいい最低限の常識というものがあるはずだ。例えば、日本では嫌い箸という箸の使い方のルールがあったり、インドでは左手を不浄な手として食事に使わなかったり、基本的な作法にも地域によって様々なものがある。
言語文化や宗教観と密接に関わっていて、あまりそれに背くのはよろしくない。「異世界旅行パックいちきゅっぱ！」なら帰るまでに何もなければいい話であるが、翠はといえば帰り方も分からない。とりあえず、郷（ごう）に入（い）っては郷に従えの精神を徹底していくことで信頼を得ていく必要があるだろう。

レンゲで口にスープを運ぶ。
おいしい……。

彦〇呂でもないのでそんなグルメレポートみたいなことは言えないが、うるさい肉汁の風味がスープの酸味で程よく消されており、美味だ。多分何かを骨ごと煮込んで出汁（だし）を取っているから、こんなに油が付いてくるのだろう。
ただ、このスープ。唇が脂っこくなってしまうのでそこだけが文句の付けどころだ。

次は、豆腐のようなものだ。
シャリヤはずっと食べるのを眺めている様子であったので、どの調味料を使えばいいのかと指さしで確認したが、やはりどれでもいいようであった。少しずつつけて食べて確認するしかない。
……緑のやつは辛い。それも香辛料っぽかった。わさびかと思っていたのに、グリーンチリソースとは。このプレートは一体どこ風の料理なのだろうと愚痴りたくなるが、地球の料理なんてここで出てくるはずもない。間違いなくこの地方の料理なんだろう。いきなり市街戦が始まるような戦時中にまともな料理を出してくれているとも限らないが。
ちなみに、醤油のようなやつは風味は違えど、ソース系の味であったので醤油に近い用途なのだろう。塩っぽいやつは普通の塩だった。さすがに異世界でも、塩を使わない料理はないだろうし、まあそういうわけで普通に存在はするのだろう。

次に何かの肉。
本当に何の肉かよく分らないので恐る恐る食べてみたが、やっぱり何の肉かはよく分からなかった。柔らかいし、おいしいのだが。そもそも、一般人に肉を食べ比べさせて、どれが何の肉か、とか聞

いてもそうそう当たるものでもないような気がする。翠は美食家ではない。
　ちなみに、肉の方にも味付けはなかった。どうやらさっきの調味料群を利用するらしいのだが、どうも調味料と肉の食べ合わせが翠の口にはあまり合わなかった。

　次に真っ赤なペーストだ。
　多分この地方の漬物だと思うんだが、におうだけで強烈な酸味臭が感じられて、とてもじゃないが食いたいとは思わなかった。ただ、少し食べてみると、これは漬物と調味料の両端の要素を持ち合わせているのだろうということが分かった。あまりにペーストの味が濃かったので、多分肉はこちらにつけて食べるべきだったのだろう。

　ヨーグルトと玉ねぎのサラダ。
　まあ、ヨーグルトサラダというものは地球にも普通にあって、インド先輩と一緒に行ったインド料理屋とかでも出てくるので慣れているのだが、異世界にもあるとはなあ。それともドレッシングなんて贅沢品（ぜいたくひん）は戦時中だから持ち合わせていないとかだろうか？　どちらにしろ口に合わなかったわけでもないので問題はないだろう。

　最後に謎の白いぷるぷるした物体に手を付ける。
　よく分からなかったが、やはり食感はナタデココより柔らかく、寒天よりは堅く、素朴な甘さがあった。どうやらデザートだったらしい。食べたことはなかったがこれもおいしかった。

　とまあ、一通り食べながら翠は何かおかしいことがないか確認していたが、特にそんなところは見当たらず食べ終わってしまった。
　エレーナはいつの間にか本を持ち込んで読んでいたようだ。読書に夢中でこっちには興味がないようだし、テーブルマナーに関する

情報を得ようとシャリヤを観察してもあまり理解できなかった。

（ふむ、面白くないな……）

食べ終わったタイミングで、シャリヤがお茶をいれてくれた。最初にいれてくれたのと同じ味だったので安心した。まさか、お茶以外の飲料がこの異世界にないわけないだろうが、戦時中のようなのであまり贅沢は言えないだろう。
食べ終わって、数分休んだのち、翠はシャリヤに手を引かれて部屋を出た。エレーナはというとまだ本を読み続けているようだった。シャリヤは特に彼女に声を掛けることもなく翠を引っ張っていった。

案内された先は個室であった。シャワーもあるらしく、着替えも用意してあるらしい。ここで今日は寝ろということなのだろう。
シャリヤの言っていることは相変わらずよく分からないが、親切にしてくれている。本当にこの異世界が戦時中であれば翠は幸運な部類に入るのだろう。
シャリヤが部屋を後にしたのち、翠はベッドに身を投げ込んだ。

（今日は本当に色々あったな）

何があっても驚かない覚悟はしていたが、まさか言語が通じないとは思っていなかった。だが、ことは上手くいっている。ハーレムまでの道のりが長いだけで、いずれそこには到達できるはずだ。異世界もの主人公らしく、とりあえずはチート能力とハーレム、略してチーレムを目指してこの異世界を生きていこう。
そんなことを考えながら、翠は疲労の中で深い眠りに落ちていった。

・一日目習得内容

1. 等式文の動詞は uɒ（エス）を使う。英語の be 動詞のように語順は SVC（主語–述語–補語）の順だ。
2. 挨拶は ɒƃзƃƚɔƃ（ザラーウア）をいつでも使うことができる。
3. 「はい」、「いいえ」はそれぞれ“ɥƃ（ヤ）”と“ɪonɒ̰（ニヴ）”である。
4. 「これ」、「あれ」はそれぞれ“ɰ̰ɔɕƃ（フクワ）”と“ɰ̰ṉ̈nƚ（フギー）”である。
5. 属格（〜の）は“-ɿɯ（ド）”を名詞に付ける。

語彙

зƃƚиƃ（ラータ）（【名】人）、xuƚɪoƃз（ペーナル）（【名】椅子）、зɔнɥэи（リュヨット）（【名】文字）、ɰ̰uƚзп（フェールク）（【名】名前）

Ex.1 side シャリヤ

驚いた。

いきなり家の中に自分より少し年上の男の子が入ってきている。政府軍の軍人か、はたまたそれに追われてきた市民か。ともかく何故（なぜ）ここにいるのかよく分からない。彼は椅子に座ってきょとんとしていた。

シャリヤは素性を訊いた方がいいだろうと思って、目の前にいる少年に話しかけることにした。

“cƃƚϑƃu ʒэ uɒ иnƚɪouɤ”（あなたは誰なの？）

少年は自分の質問を聞いて、唖然としていた。身元を知られてはいけないとかそういう様子ではなさそうだ。

もしかしたら、言葉が通じないラネーメ系の人やリナエスト系の人かもしれない。もしそうだったら、政府軍に追われて逃げ出して

きた可能性の方が高い。

「◇▲、◇＊■◆……%◇c！#▲&▲%◇▲」

首を10度ほど傾げ、彼の素性を特定しようと考え込んでいた私に少年が話しかけてくる。
何を言っているのかはさっぱり分からないが、肌の色や言葉の雰囲気からしてリパラオネ系ではなさそうだ。首を傾げてよく分かっていないことを示す。多分、リパライン語を利用した会話は彼には難しいはずだ。
彼は頬杖(ほおづえ)をついて考え始めた。よく見ると、銃や兵器は何一つとして持っていないようだった。つまり、政府軍の人間ではないということだろう。

そんなことを考えていると、少年は机の横にある本棚を物色して、一冊の本を引き出した。題名は“зnхБзБnю ɔюиnɫπɫзun̰nх”(リパライン語詳解辞書)だ。それぞれの単語に説明を加えている辞書だが、彼はそれを引き出して何かを見ている様子だった。懐からペンと手帳を取り出しては辞書と手帳を行き来して、何かをメモしている。

結構な時間が経っても、作業に熱中しているところを見ると、こちらへの敵意はないのだろう。喉も渇いているだろうし、バルサフィーカをテーブルに置いてみたが、手もつけずに作業を続けていた。

「●@■■■■■■■■、＝▲%■▲！！！！」

少年はいきなり大声を出してのけぞりながら手帳をテーブルに投げてしまった。何が起こっているかは分からないが、完全に脱力し

ているあたり、やっていた作業が行き詰まってしまったのだろう。いきなりの大声で驚いてしまったが、とりあえずコミュニケーションを取って、どういう意図で家に入ってきたのか、そろそろ訊（き）いた方がいいのかもしれない。ただ、相手の言語が分からないことには、どうしようもない。

投げ出された手帳の文字は私たちの母語を書き表すのに使うリパーシェとは全く違うものだ。ぐにゃぐにゃに曲がったり、回ったりした文字と角ばった文字が混在している。たしか、本で読んだことがあるが、タカン人の使う文字はこのような文字だった気がしなくもない。

少年はのけぞったままだったから、シャリヤはそのうちに部屋の奥の方にある本棚からいくつか本を持ち出してきた。

1冊目は“ɔюɯuᴅиБюuю зпɔɫɱизuᴅᴅ（この世界の言語）”。本棚の中で一番分かりやすそうな本だったので取り出してきた。以前読んだとき、様々な外国の文字が書かれていたことを覚えている。

2冊目は“зпю-пэɔ-ɞБю-п̤uɻɯ зэцэиБɯnɫɫзɞu（燐帝字母の字源研究）”。題名は難しそうに見えるけど著者のキャスカ・ファルザー・ユミリアという学者は昔、ラネーメ人の言語に関する研究に一生を捧（ささ）げたらしい。タカン文字っぽい形なのだからヒントが書いてあるかもしれない。

そして3冊目は“п̤ɫэʒБᴅпэюБюБᴅʒc зпxБзБпю（古典的理語詩の） ɯɔɫɱuɻɯ ɱuᴅиuзэ ɞБиипзпuюэɻʒи（復興試論）”。これは勢いで取り出してきた本だった。表紙にエスポーノ・ドーハという著者名が見えたから、あることを思い出して持ってきた。エスポーノ・ドーハは古い形のリパライン語詩を復活させようとして、スキュリオーティエ叙事詩を発掘、翻訳し、研究した考古学者だ。スキュリオーティエ叙事詩をその細部に至るまで、物語と民俗性・文化と宗教の繋がりについて研究してきたシャリヤの一番尊敬できる歴史上の人物だったからである。

そんなことはさておき、２冊目を開いてページをめくりながら手帳に書かれた文字と見比べる。手帳に書いてある文字にはリパーシェや数字が少し混ざっているところをみると少しはリパライン語が分かりそうだ。あまり、遠くの国にルーツがあるという印象も受けないが、文字に関してはタカン文字とはよく似ていた。角ばった文字は“зпюӥпзбŀ（燐帝字母）”と呼ばれるものらしい。古代はリパライン語もこの文字で書かれていたと本には書いてあった。

「◇▲、◇＊■◆。」

さっきまでのけぞっていた少年が、いつの間にか上体を起こしてこちらに話しかけてきた。異邦人に囲まれて、言葉も通じなくて寂しい日々を送ってきた末にこの家にやってきたのかもしれないと思うと、自分たちと同じような境遇の人間なのだろうと思ってしまう。もし、政府軍に自分の安住の地を奪われたのなら似た者同士だ。助けざるを得ない。

「？◇＝◆゛％■？▲＋■◇！■％●゛！◆゛％◇゛？■＝●＃◇」

少年は伝わらない言語でこちらに話し続けてくる。手当たり次第に家に入ってはその言語で話しかけて、言葉が通じる人を探そうとしていたのだろうか。しかし、「ヤツガザキ、セン」と自身を人差し指でさして言い続けていたところを見て、やっとその意図を理解した。

彼の言語は分からない。だから、自分の言語で返答しようと思った。

“ðn uɒ бзuɒ.ɱбзпцб¡（私はアレス・シャリヤ！） ɱ́бзпцбɒип¡（シャリヤよ！）”

それが彼との最初のコミュニケーションとなった。

紛争が始まって人とのふれあいが少なくなってから、久しぶりの新鮮な交流だった。リパライン語が話せない人とはあまり接したことはない。それに、彼には読書の趣味がありそうだったし、気が合うと思った。今はまだリパライン語の辞書を読むレベルだが、いずれスキュリオーティエ叙事詩も読めるようになるのだろうか。

二日目　移動

Бюпбзиɯиюuɒэ

#13　無意識の英雄

暗闇に居た。
手も足も、上も下も、右も左も、分からず。存在せず。
自分が何者なのかも、分からず、ただそこに存在している。
精神が融合し、全となり、自らを分割し、個となる。
故に私は、全であり個であった。
淡い光が近づいて、自分を照らす時、自分はそれを忌んだ。
私の睡眠を邪魔する存在は近づき、光は私を包んだ。
全であり、個であったそれは、つまり私を包む存在であった。
それは私であり、私でなかった。

「まだ、変なことを考えているのか」

変なこと。
変なことを考えることが私は出来たのだろうか。
全であり、個である私が何を考えるのだろうか。

「お前を個にしたのは私だ」

光がさらに近づく。
ないはずの手や足、頭、胴体が露になる。

「お前を変え、さらに良くするために私はやってきた」

良くする？

「無意識の英雄に従え、うわべだけの目的にとらわれるな」

目的？
私の目的は……何？

「これ以上は、お前に触れられない。また、いつか会えたら会おう」

光は消え、手も足も、頭も胴体も、自分も、何もかも消えて、眠った。

#14　リンゴの読み方

“ᴅƃзƃɫɔƃ¡(おはよう！) ʒuюuᴅиn¡(セネスティ)”

ううぅ……あと、5分……いやできれば永遠に寝ていたい……。

“ᴅиɔnnuп ʒuюɫᴅ¡(翠！)”
「うわわっ！？」

部屋に入ってきたシャリヤに睨(にら)みつけられていた。時間は……この部屋に時計がないのでよく分からない。日は昇っているらしいが、ついつい疲れすぎてぐっすり寝てしまっていた。個室はこぢんまりとしたホテルの客室のような感じであった。とはいえ、この部屋には寝室やリビング、キッチン、シャワールームなどが揃っており、生活環境としては悪くない感じである。ベッドもふかふかで、ファンタジー小説に出てくるように丸太を枕にすることもなくて、睡眠の質も悪くなかった。

ただ、なにか変な夢を見ていたような気がしなくもないが、夢のことなんかはこの際どうでもいい。
さて、改めて現状を整理しよう。俺、八ヶ崎翠はなんやかんやあって異世界に転生したが、この異世界は日本語が通じないらしい。戦時中らしく、自分も兵士に撃たれたはずだったが、何故か生きていた。そんなこんなで、一応今のところ一番信用できそうな人間は、煌（きらめ）く銀髪と蒼玉（せいぎょく）の如く透き通った青い目を持ついかにもファンタジー作品にいそうな少女、眼の前にいるシャリヤだ。
異世界ライフを満喫するために異世界語を習得しなければなるまい。将来、チートを使いこなし、ハーレムを作り上げるためには、異世界語を完全習得しなければ無理そうに思えるからだ。

“DБЗБ꜔ͻБ.（おはよう）”
“あ、え……っと、DБЗБ꜔ͻБ（おはよう）......”

うむ、挨拶は上々だ。
シャリヤはシャワーを指さして、一応部屋を出ていった。多分、シャワーを浴びろということなんだろう。さっさとシャワーを浴びて着替える。用意されていた着替えは地球の服と比べてもそこまでファンタジーな感じでもない。水色無地のＴシャツと深緑の長ズボン。材質から中途半端に現代化したような雰囲気を帯びていた。部屋で待ってると、ノックの音が聞こえた。シャリヤが戻ってきたようだ。

“uɯnŋБ ʒэ ŋБϑnБЗэнDɤ（――あなた――）”
“ԿБ, ԿБ¡（あ、行くよ！）”

何を言ってるかよく分からないのは語彙力の低さから恒例なのだが、大体文脈で翠を呼んでいることは分かる。答えなければとは思

うのだが、咄嗟(とっさ)の反応は適当になってしまいがちだ。本当に語彙力は重要だ。人と面と向かって外国語で話しながら、「あっ、ちょっと待って今辞書引くから」なんてみっともなさ過ぎないか。まあ、日本語・異世界語辞書が存在しない今、翠にできることは大体沈黙か、何かジェスチャーで伝えようとするくらいだ。
急いでドアを開けると、当然シャリヤが立っていた。シャリヤの手には、小さい冊子が握られていた。ペンとノートらしき別の冊子も持っている。

“зułɒɒu зuɔɒɥ ɱжɕ(これ).”

（ん……？　これで何しろって……？）

冊子を渡され戸惑う。シャリヤを見ていると合わせた手を開くジェスチャーをした。多分、冊子を開けということなんだろうが……。
冊子を開いてペラペラとめくってみる。辞書に書いてあったような文字と共に絵が描いてある。子供に文字を教えるための冊子のようなものに見えるが、語彙力のない翠にとってはありがたい。ただ、ただ……。

（文字が読めないなあ……）

これはまずい。冊子にも辞書にも英語と同じようなアルファベットが書かれているわけではない。まあ、英語と同じようなアルファベットが書いてあっても読み方が英語と同じとは限らないし、結局正確な読み方は分からない。だが、見た目から発音を推測することすらできないなんて、どんなハードモードだろう。
どうにかして教師のシャリヤにこの文字の読み方を教えてもらわなければならない。一体どうしよう。

“ɱжƃ uɒ……ɣ”（これは……？）

文字を指さしながら、その読み方を教えてもらおうとする。

冊子に書いてある５つの文字。その上にリンゴらしき絵が描いてある。いや、異世界にリンゴがあるのかどうかは知らないが、今は難しいことは考えずにリンゴということにしておこう。

文字はどれが母音で、どれが子音なのかは大体分かる。というのも、頻度解析をしたときに集中して出現する比率から母音と子音の字がどれかは大体見当がついたからだ。

だから、多分この文字が音素文字（アルファベット）であることは分かる。だが、それだけでは音声が何なのかまでは分からない。

文字は“ɯnɥɔп”という形をしている。言葉では言い表しづらいが、２文字目はアルファベットのエヌっぽく、３文字目はワイっぽい。何とも言い表しづらい１文字目はお椀（わん）に縦線を引いたようなもので、４文字目はシーを左右反転したようなものと縦線をつなげた形だ。最後の文字は口の下の線を取り除いたような形だ。

“ɯuƚ, nƚ, ɥuƚ, ɱuюэюuю ɔƚ, xuƚ”（デー、イー、イェー、シェノネン ウー、ペー）

ふむふむ？　ɯ、n、ɥ、ɱ、ɔ、x それぞれの文字の名前なんだろうか。

“ɯnɥɔп.”（リンゴ）

ディユク、この“ɯ”という字は /d/ という音を表しているらしい。同じように“n” /i/, “ɥ” /j/, “ɔ” /u/, “п” /k/ と当てられる。次の鹿っぽい絵の下には、さっきあった“ɔ”から始まる“ɔɯɔю” /ud--/ という読みの言葉なのだろう。

“ɰжб иɒɣ”（これは？）
“ɔнɯɔю.”（鹿）

ユドゥン……あれ？
“ɔн”は /u/ であったはずなのに、この単語ではユという発音になっている。よく分からず、その次のページにある文字列を見るとそこにも“юɔнuɔн” /nu-u/ とあった。本の絵が描かれている。指で示し、教えてもらう。

“……ɣ”
“юɔнuɔн.”（本）

ニェユ……。
うーん、この“ɔн”という文字が非常に曲者（くせもの）のように思えてきた。

廊下で文字解読に没頭していると、シャリヤはいきなり翠の手を引っ張って、建物の廊下を進み始めた。彼女も疲れてきたのか、気分転換に出かけようとでも考えたようで、別の場所に連れていかれることになった。
女の子と手を繋いだことなんて一度もなかった。頬の紅潮が抑えきれない。きっとシャリヤは俺を自分のお気に入りの場所とかに連れていくに違いない。
なぜなら……。

（俺は異世界転生作品の主人公だからだ……ッ！）

#15　破裂するリンゴ

（なんだこの状況は……？）

　目の前の状況を確認し直す。
　てっきり連れていかれるところは建物の外かと思いきや、自分たちは屋上にいた。確かにここからでも街を見下ろすことはできるが、銃弾がめり込んだ射撃練習用の標的らしきものや、小銃が幾つか掛けられている台が置いてある。ここが展望台だと思う人間がいるだろうか。防弾ベストやゴーグル、関節用の防具に身を包んでいたその少女は初見のイメージとは違い、民兵のような様相を呈していた。屋上まで来たのちに可愛らしい服に似合わない装備に着替え始めたのだからその時は驚いた。
　シャリヤは、弾倉（マガジン）を銃に装着し、槓桿（レバー）を引く。薬室（チャンバー）に銃弾が入り込み、かちゃりと音がすると、指先で切り替え軸（セレクター）を単発（セミオート）に切り替える。
　銃床（ストック）を肩に当て、引き金（トリガー）を引く。
　銃弾は見事に真ん中に命中し、標的であるリンゴはバラバラに四散した。薬莢（ケース）は独特の金属音を鳴らしながら、地面に落ちていった。

（なんなんだ……この状況は……！？）

　シャリヤに連れられて、街を見下ろせるような彼女のお気に入りの場所を紹介してもらえるというシチュエーションを期待していた。だが現状はといえば、第二次世界大戦ばりの小銃を繊細でひ弱そうな少女が持ち上げて、一寸の狂いもなく標的を撃ち抜いているところを見せられているのであった。
　この施設の屋上は、防護柵と標的の台などが配置された射撃場の

ようなところになっている。シャリヤがこんなところに案内してくれるとは微塵（みじん）も思っていなかった。
　一体どういうつもりなのだろう。

“ʒuюuɒиn, ʒuиnɱ ɱ（これ）жб.”

　シャリヤが銃を差し出してくる。一応受け取ってしまうが、何をすればいいか分からない。生まれてこの方、銃なんて持ったこともない。

“uɯnɱб ɱжбɭээю ɱбɒиnu ɱuзɭnюɥ n̈uзɱ, ʒɔюɔзɿn ʒnюбɒиuɫn̈uɒэю сбзɿɥnю ɒсɫзэ.”

　銃床（ストック）と標的を指してから、シャリヤは標的に向かって人差し指を複数回折り曲げるジェスチャーをする。

（——撃てと？）

　目の前にある標的のリンゴをじっと見つめる。
　日本に住んでいる限り、特別な事情がなければ拳銃やライフル銃を持ったり、撃ったりする機会などない。だが、このファンタジー異世界では……ファンタジー異世界では……？

　あれ、ここってファンタジー異世界ではない？

　翠はこの施設に来るまでの間、何回か街を見てきた。周りの街を一望できるこの場所からは、普通に第二次世界大戦後くらいのいわゆる現代風の街並みに見えたし、洗練されたライフル銃だってあった。どう考えても、ハイファンタジー異世界には見えないじゃない

か。
　ファンタジー異世界といえばログハウスが立ち並び、街道は石で舗装され、街頭には屋台が立ち並び……という情景が一般的だろうが、ここは道を見てもアスファルトで舗装されていて、建物はコンクリートの灰色ばかりが立ち並んでいる。無彩色の街の道には屋台などなく、人気もなかった。では、ここは地球上のどこかなのだろうか。

（いや……そうではなく……）

　これがリアルな異世界なのであろう。
　そもそも戦争もほどほどに、魔法を使って敵を吹き飛ばし、三人以上の女の子に囲まれる状況自体がハイファンタジーの上に作られたファンタジーなのかもしれない。

（理想の異世界と違うとは……苦痛だ……とにかくにも……まだだ……っ）

　これは好機に違いない。
　翠は主人公、そう、異世界転生作品の主人公なのだ。
　銃を構える。銃床（ストック）を肩に当て、脇を締めて、標的に集中する。

“зию（翠）......ᴅиnɣ（スティ）”

　引き金（トリガー）をなかなか引かなかったから不思議に思ったのか、シャリヤは不安そうな声で名前を呼んできた。銃を持つ手とこちらの顔を交互に見て、何があったのかと訝（いぶか）しむ様子で少しずつ近づいてくる。
　でも、もう大丈夫。

放たれた銃弾が標的のリンゴに命中し、翠の標的もまたシャリヤのそれと同じようにバラバラに砕け散る。シャリヤは驚いたように、目を見開いた。

“ðn uᴅ(俺は) 異世界転生作品主人公、ならばチートとハーレムを目標にこの世界を闊歩(かっぽ)するのみだ！”

翠は決意で満たされた。

#16　移動開始

“ʒuю(翠)……ᴅиn(スティ)……ʒэ uᴅ(君は)……ɔзuᴅю(――――)¡”

シャリヤが驚いたような顔をしながら、翠に向かって言う。
まあ、銃を扱ったこともないように見える貧弱な人間に銃の扱い方を教えようとしたら、見事に標的に命中させてしまったから当然であろう。そりゃあ凄いと驚くわけだ。絶対シャリヤは驚いたに違いない。うんうん。

“ɔзuᴅю(――――) ʒuю¡¡(翠！！)”

ん？
身を屈めたシャリヤが翠に向かって、警告するように言う。さすがに違和感を覚えたのでシャリヤと同じ姿勢を取ると、下手な笛のような音が鳴った直後に、今屋上にいる建物からすぐ近くの建物が爆発した。
よく戦争映画で銃弾が至近距離で飛び交うときの音を聞くことがあるが、それが聞こえた直後のことであった。

建物の上部が爆発で破壊され、白煙が立ち、轟音（ごうおん）が鳴り響く。コンクリート片は高速で弾け飛んで近くの建物の窓ガラスを割り、それがそこかしこで続いた。

「う、嘘（うそ）だろ……」

知っていたがこの世界は戦時中である。状況から考えて、迫撃砲弾がいつどこに降り注いでもおかしくはない。何の陣営同士がどのような大義名分を掲げてぶつかり合っているかは知らないが、翠は決意した目標を達成せずには死なないのだ。

“ɱƃз ɱжƃ（これ） юnɔɫю. зƃ зuɱ ɱƃзu зnɔɫɱ ɒnɫɒ uɯnɱƃ xƃi̇”

シャリヤはそう言いながら翠の手を摑（つか）んで、階段を下りようとする。階段に続くドアまで動いたのちにこの建物にも砲弾が着弾した。コンクリート片が翠の頰を掠（かす）り、一直線に傷を残した。血が垂れても、そんなものを気にしている余裕はない。すばやく階段を駆け下り、シャリヤに随行する。駆け下りた先には、レシェールが指揮をして負傷者を運び出していた。

“cƃɫϑnu ɱэзuɒɤ”
“зnƃɱn ƃn̈ɱnɫ ƃзɫɯ uзϑnюƃзƃxuɫɒ ʒuʒuɒi̇”

焦り顔でシャリヤの質問にレシェールは答えていた。きっと予想外のことが起こったに違いない。シャリヤが状況を理解する間、負傷者が何人か運び出されていた。迫撃砲の着弾を直撃か至近で受けた者は、不幸中の幸いかいないようであった。しかし、それでも痛ましい負傷者は何人もいるようだった。

“ʚnɒɒ ɓɱuɫɲэю ʒɔисɔɫз зɓɖэз ɱɓn шuɒuз uз ɫuизɓ.”

――――　あなた　――――――――

“шuɒuзuɒиnɣ ʒ э ɱɓзʚuи uɒ иɓʚɓɁш ɒuʚэɫпэɁnɣ”

シャリヤがレシェールの発言にまた何かを訊き返している。確かに状況整理は大事だが、もたもたしているとさらに負傷者が増えかねない。

はい　――――――　いいえ　――――――

“ɥɓ, ʚnɒɒ зuиnɱ юnɖ uиuю ɒɔɫɔз.”

――――　私は　――――

“......ɱnɫзuɱ. ʚn ɓзʒɓʚuɒ.”

シャリヤはレシェールから地図を受け取り、翠に向かって広げた。多分避難経路とかを説明するんだろうが、翠に説明してもあまり意味はなさそうだった。だが、空気に圧されたのと語彙力の低さから、要らないという一言も言えずに息をのんで地図を見つめていた。

気づいたことの一つに、これはこの地域の地図だと思うのだが、描き表された地域は不自然に四角かったことがある。きっとアフリカ諸国とかアメリカの州とかのように、数奇な歴史を経て今に至っているのだろう。

これは――――である　　あなたは　――――　これ

“ɱжɓ uɒ ʚnɒɒuɁɒи ʚэзɓз. ʒэ ʚэз ɱɓз ɱжɓ.”

ふむ……。

シャリヤが地図を指さしていることを鑑みるに伝えられた文のどちらかは存在文だろう。地図に向けて指さして話すことと言えば、今自分たちがどこにいるのかくらいだ。これで「教室に学生がいます」や「机の上に本とノートがあります」のような文章が言えるようになった。

だが、今は確認する暇はない。シャリヤの話をじっくり聞くことにする。

“ðnɒɒ ижшnuɒи ɱбз ŀuизб йɻuɒ ɱжб（これ）.”

シャリヤが地図をなぞり、指した位置から南の方へと指を動かす。大きな文字で何か書かれているが、よく分からない。ただ、シャリヤがその文字を指で丸を描くようになぞったので、目的地はどうやらそこらしいことが分かった。ここは危険なので移動するということなのだろう。

“ɱnŀзuɱð”

シャリヤが尋ねてくる。“ɱnŀзuɱ（フィーレシュ）”はさっきシャリヤがレシェールに応答するときにも使っていたので、文脈と状況から見て「分かる」とかの意の単語なんだろうと考えた。

“цб. ðn ɱnŀзuɱ.”（ああ、分かったよ）

シャリヤもその応答に頷（うなず）き、“ðnзn ɱбз ɱжб（これ）.”と言って、地図をしまう。そして、レシェールと共に移動の準備をしに行ってしまった。この隙に今まで聞いてきた異世界語を考えてみることにしよう。

“ðnзn（ミリ）”って単語は今まで何回も出てきたけど、最初撃ってきた兵士も“ðnзn（ミリ）”と必死に言っていたので「待つ」とか「止まる」とかそういう意味なのだろう。そして、多分、“ɱжб（フクワ）”は「ここ」という場所の意味も併せ持つと仮定すると、“ɱбз（ファル）”の意味が予想できる。“ɱжб（フクワ）”の位置を指す前置詞なのであろう“ɱбз（ファル）”は「〜において」の意味だ。そうすると色々とシャリヤの地図説明もつじつまがあう。“зэ ðэз ɱбз ɱжб.”（あなたはここに――）は地図説明をするときに言っていた言葉であるが現在地を指しながら言っていたので、“ɱжб uɒ（これは）”

から始まる等式文というよりは「いる」を表す存在文らしい。
“ȣэз（マル）” は多分、「ある」や「存在する」、「いる」のような意味だ。

（大分分かってきたぞ……）

言語考察に熱中していると、シャリヤがやってきて手招きした。移動の手はずが整った様子であった。

#17 レトラの灯り

「退屈だ……」

歩き始めて数時間。迫撃砲弾があれほど街に降り注いだにもかかわらず、銃撃を受けることもなく市街地を抜け、郊外の道路を進み続けていた。ただ、数時間も休みなしで歩いてきたのでさすがに疲れつつあったし、皆無言になっていた。

レトラに　——がある——　レシェーレスティ？
“ɱбз ꜔uизб, nuиэɒи ȣэз иn꜔ıou. зuɱu꜔зuɒиnȣ”
ああ、あっちにはある　——人がいる
“ɥб, ɱбз ɱn̈n꜔, ȣэз ȣбз ɱэıon꜒б꜒ɯ зб꜔иб ȣэз.”

負傷者がこれ以上増えることはなかったが、これほど暇な異世界転生作品の主人公なんていてよいものだろうか。

（というか、ただ暇なだけなんだよなあ）

人間、実際に危険な状況に投げ込まれたときは緊迫した状態で冗談も言えなくなるが、解放されてしまえば、例えばバンジージャンプを飛んで楽しむ者のようにスリルを求めたがるのでダメだ。

翠は改めて自分の目標を意識すると、絶対に達成することを再度誓った。その時、行軍中の一人が前方を指して何か言った。

“uч, ǫ́ʙɒɱ̨ʙˀɯ зʙɫиʙ（人がいる） ϑэз.”

そう指された方に目をやると、自分たちとは違う服装をした男が３人いた。一緒に歩いている人間が驚くのだから敵だと思われる。

“ɒn xʙи̤uɒi̥”

その発言と同時に横にいた仲間が被弾する。予想通り前方の制服さんがこちらを撃ってきているようであった。３対多数。数的にはこちらのほうが有利に見えるが、相手が連絡手段を持ち合わせていると、撃退が難しくなる。被弾した仲間も立ち上がって、横一列に並んだレシェールたちが応戦射撃をする。敵のうちの２人は射撃を受け倒れたが、残りの１人は物陰に隠れてしまった。このままでは増援を呼ばれて形勢不利に陥るかもしれない。

“зuɱ̨uɫзuɒиni̥（レシェーレスティ！）”
“ϑnɒɒ uиnɱ̨эю ɔϑпuɒ зuɫч ɱ̨（これ）жʙi̥”

レシェールは踵（きびす）を返して、この場から脱出しようと先導を開始した。シャリヤや翠もそれに従う。数人の負傷者は荷台に乗せられて、それに何人かの護衛が付いていた。まだ敵は１人生きているので、脱出時に背を向けていればいつ撃たれるかも分からない。しかも、周辺に敵がどれだけいるかも分らない状況では、警戒に神経をすり減らすしかなかった。

とにかく歩いた。
一体どれだけ歩いてきたかも分からない。一体ここがどこかも分からず、誰が何のために戦っているのかすらさっぱり分からない。言葉も通じないのだから、情報も入ってこないまま数時間も歩き続け、疲れて気分もすっかり落ち込んでしまっていた。そうして日が落ち、夜になってやっと目的の街の明かりが見えてきたとき、翠は生きていることに、感謝した。
レシェールたちの会話を聞いているとどうやらこの街はレトラという名前らしい。レトラの街は広大で、四方八方が非常に高いバリケードで囲まれているために、敵の侵入から守られていた。
街の中は活気にあふれていた。疲れてやってきた翠たちを見たレトラの人間の一人は、その中にレシェールを見つけて非常に喜び、手厚く迎えてくれた。どうやらレシェールはこのレトラの指導者と知り合いであるらしく、だからこそ救援を求めたようであった。
経緯はよく分からなかったが、翠たちに個人部屋を与えることは難しかったようで、翠たちには二人部屋となるように部屋があてがわれ、そういうわけで翠はシャリヤと相部屋となったのであった。

ついに、シャリヤと相部屋になったのだ！！！

#18　やっぱり読めねえや

“зиюuɒиnꜝ зиʒɔ зиƚɒɒu зnюuхБƚnюu иn ц(はい)Бꜝ”

違う。

“ʚ(私)n ŋƚзииnϖ иэϖ Бш иэшnϱ, изϖ зиюu зиƚɒɒu зnɔƚϖизиɒɒиБю ꜝ”

違うんだ……。

部屋の一角、テーブルの上に広げられた辞書類とノート、ペン。
翠は、言語学習をさせられていたのである。内容としては今までの復習のようなものであるし、有用で嬉(うれ)しいのだが。

（異性との相部屋で期待してたけど、甘酸っぱい青春とか、そういう展開になるはずもないよなあ……）

むしろ、健全ではないか。
どこぞの異世界純百合ADVでは日本から異世界への訪問者に対して、日本語の資料と単語集を与えてくれる超絶イージーモードをかましてくれるが、日本語の「ニ」の字も、故郷の街の姿すら見えないこの本当の異世界で今やれることは、とにかく言語を教えてくれる人にありがたく教わること、相手の動作や発言の細かな違いをつぶさに観察して、習得することである。
チーレムを達成したいという目標はあるが、この段階で何か人間関係を構築して、女の子とキャッキャウフフなんて無理難題である。言語と振る舞い方と社会情勢を習得して、まずは状況を把握することが先決だ。

（……）

横にいるシャリヤを見る。シャリヤは手を止めている翠をきょとんとした目で見てくる。銀髪が部屋の照明に照らされて淡く光っている。目の鮮明な青色が瞳を宝石のように見せている。
今までの考え方はどうだったろう。まるで、チーレムを構成するための踏み台として彼女らを見ていたかもしれない。確かに、せっ

かく異世界に生まれ変わったならハーレムを目指したり、チートな人間になりたいという欲求はどんな人間でも思うところだろう。でも、他人を踏み台として消費して得た結果を何も言わずに喜んで受け取れるだろうか。

そんなことは翠の良心が許さない。この世界で最初に出会い、そして色々助けてもらっている恩人たちに対してそんなことができようか。使えるだけ人間を使って、要らなくなったらポイだなんて、さすがじゃないけどまともな人間にできる所業ではない。

自分一人でこの世界で生きられるようになったときに、シャリヤの恩義に報いなければならないときが来るだろう。シャリヤだけではない。言葉の通じない異世界でまともに暮らせるときが来るまでには、本当に多くの人に助けられることがあるはずだ。彼らの恩義にも報いなければならない。

そのときのために、ちゃんと感謝の言葉が言えるように今はとりあえず言語学習に励もう。

ノートには単語が並べられているが、全く読めないのは恒例のことだ。とはいえ前回の文字学習でいくつかの文字は教えてもらっている。頻度解析の作業で文字の数は 40 くらいであるということが分かっていて、そのうち前に学んだものは 8 種類。

ɯ /d/
ɜ /u/ ?
ɔ /u/
ю /n/
u /e/
n /i/
ч /j/
п /k/

多分あと、22文字くらいアルファベットがあって、後の10文字くらいは記号類じゃないかと予想される。シャリヤは文字を書いて発音してくれるが、一文字ずつ詳しく説明してもらう必要があった。確か、「文字」は“зэцэи(リュヨット)”で、「分かる」が“ɱnɫзuɱ(フィーレシュ)”だったはず。否定は適当に“юnϱ(ニヴ)”を動詞につけていた気がしなくもない。

これで言いたいことが伝えられるはずだ。

“ɱбзnцб(シャリヤ), ϑn ɱnɫзuɱ юnϱ зэɬɯ зэцэи(俺は君の文字が分からない。). ϑuɫ(えっと), ϑn ɱnɫзuɱ(俺はその) юnϱ ɱn̈nɫɬɯ юэиэ(本が理解できてない).”

シャリヤはそこで思案顔になる。どうやって文字を教えようか、と考えている様子であった。

#19 嫌われたかと思った

“ɒuзuюı зэ(あなた) бnɫбюиn юэиэϑ xб, зuюı юnϱ зэ ɱnɫзuɱ(私の文字が) ϑnɬɯ зэцэи зэɒϑ(理解できない)”

ほう。多分文字が本当に理解できていないのか？　と訊かれているのだろう。前回の学習ではいくつか文字を勉強しただけなので、そりゃ全部読めるようになるわけがない。インド先輩も「ブラーフミー系文字の習得には不断の努力が必要である」と言っていた。よく分からないけど。

“цб, цб(そうそう). ϑn ɱnɫзuɱ юnϱ зэцэи(俺は文字が分からない。).”

シャリヤはそれを聞いて、またうーんうーんと唸(うな)りながら考え始

めた。ついに翠に“ðnзn.（待ってて）”と言い残して、部屋を去ってしまった。
文字一つ教えることがそんなに難しいだろうか。

（文字か……）

インド先輩が言うに地球の文字体系というものは大体の場合、主に５種類に分類されるらしい。
まず、１つ目に文字が語などを表す「表語文字」。漢字が代表的なものでヒエログリフの一部や西夏文字、マヤ文字もそうらしい。文字が音を表すのではなく、意味を表しているのは漢字文化圏における状況を見るとよく分かる。「日」という一文字には中国語の方言のそれぞれにおける読み方やその古い音、日本語の音、朝鮮漢字音やベトナム語の漢字音など様々な読み方が存在するらしい。
一番覚えるのが面倒で、同じ漢字でも日本語の読みのようにいくつもあるとなると更に難易度が上がる。実際、アメリカのとある役所が英語のネイティブスピーカーにとって極めて習得が困難な言語として日本語を挙げたらしいのも納得がいく話だ。だが、前回の異世界語学習でみたように、ここの文字はそれぞれ音を表していたので「表語文字」ではないという確証は得ている。

次に「音節文字」。カタカナ、ひらがなのように文字が音節という一つの音のまとまりを表す文字のタイプだ。アメリカのチェロキー語という言語に使われるチェロキー文字の形は、英語に使うアルファベットとよく似ているが、これも“WᏒMᏧG”で「らりるれろ」というように一つの文字が一つの音の塊を表していると聞いた。それぞれの文字が独立して音節を表すから数が多く、表語文字までとはいわずとも非常に覚えづらい。ただ、ハングルなどの結合音節文字は元々の構成要素が少なく、それを組み合わせるだけでいいので「音素は覚えやすい」らしい。

どうやらインド先輩は東洋言語に酷いトラウマを持っているようで、それ以上訊こうとすると「東洋言語の話をすると、この古傷が痛むんだ…………あっあっ！　お前！　古傷を普通話（Pǔtōnghuà）発音するんじゃない！　やめろ！　うわああああああああ！」と騒ぎ始めて教えてくれなかったので、音素が覚えやすいとは何のことなのか詳しくは分からなかった。多分覚えにくいところがあったのだろう。これも、前回の文字学習と照らし合わせてみると何か違う感じがする。

３つ目に、「アブギダ」。音節文字に似ているがちょっと違うらしい。確かに基本的には音節を表すらしいのだが、ある基礎的な形を書くと、音声上ではその形で表される子音に決まった母音が続くものとして読まれ、その基礎的な形に色々符号を足すことで子音とそれに続く様々な母音や無母音を表すことができるという文字体系らしい。インド先輩の第二の故郷、インドのタミル・ナードゥ州で話されるタミル語を表すタミル文字は、この文字体系の分類に相当するそうだ。基礎的な形“ப”は「pa」と読まれ、その派生的な形である“பி”“பு”“ப்”はそれぞれ「pi」「pu」「p」と読むと教えてくれた。

東洋言語の話をした後で、インド先輩はタミル語に関して34時間話し続けた。

…………さて、４つ目は「アブジャド」。聞きなれない単語だが、アラビア文字が代表的なそれらしい。インド先輩の友人が教えてくれたことだが、アラビア文字は特別な用途（クルアーンとか）以外では実は母音を表記しないという。よく分からないが、そっちのほうが言語の構造に合うとかなんとかいう話だそうだ。これも文字学習と照らし合わせると当然違うことが分かる。なぜならあの文字には母音字があったからだ。

最後にみなさん大好き「アルファベット」。ギリシャ文字からラテン文字、キリル文字、中二病御用達のルーン文字まで、子音と母音とが分かれて表される文字体系のことをアルファベットと言うらしい。その話を聞くまで、てっきりアルファベットとは英語を書くために存在する文字だと思っていた。もっぱら普通の人が触れるアルファベットといえば英語を書く文字だが、あれは「ラテン文字」と呼ばれるらしく、元々はラテン語を書くために使われていたものとのことだった。

今までの文字の読み方と照らし合わせると、母音字はあったのでまず「アブジャド」は除外される。また、「アギブダ」や「音節文字」のように一つの文字で一つの音節を表すような読み方をしているわけはない。やはり頻度解析から分かっていた通り、子音と母音が分けて表記される「アルファベット」が一番それらしく思えてくる。

しかし、簡単に教えられるはずのアルファベットを教えるためにあれほど悩むというのもおかしいことだ。教えてもらおうとしたときに自分が言った異世界語が間違っていて、シャリヤに変なことを伝えてしまった……？　それで部屋から出ていって、レシェールに報告しにいったとか……？

（この八ヶ崎翠、さっそく異世界人に嫌われたのか！？）

想像をすれば悪いことがとめどなく噴き出してくるが、そんなことを考える間もなくシャリヤが戻り、持ってきた一冊の本を見せてきた。

“п꜔бюиnизэн꜔ию бйnɔп꜒ии зɔɔэ х꜒циз ʒэ(あなた) зб бп̈ǫn꜔꜒ʒ, зб спɔ꜔ю

uɒ（ではない） юnɖ ɖɔнюɔи ɜɔнɒ ɥɜɜ."

翠は美しい表紙に目を奪われた。

#20 "ɔн"との再戦

シャリヤが持っている本を翠に渡してくる。

外見は重そうでシックな装丁であり、中身を見てみると、微妙な長さの文章が適当に並んでいた。その文章の周りには非常に凝った模様が描かれている。世界史などでよく見るクルアーンのような飾りが文字の周りについていた。

"ɱɔжɕ uɒ ɒnɔнɜnɬɘɫиnɬuɬɯ ɱuюɯɔɒnɫɕ."（これはスキュリオーティエのシェンドゥズィーア）

その本を指してシャリヤは言った。スキュリオーティエのシェンドゥズィーアってなんだ。

またもや語彙が少なすぎて、よく分からない。もしかして、スキュリオーティエ教みたいな宗教があってそのクルアーン的立ち位置のことをシェンドゥズィーアというんだろうか。そしたら、"ɱuюɯɔɒnɫɕ（シェンドゥズィーア）"の意味は教典だったりして。

シャリヤはそのスキュリオーティエ教を信仰しているんだろうか。宗教はよく分からないが、インド先輩がタミル・ナードゥ州の様子がどうかというのは教えてくれていた。お昼時にイスラム教のアザーン（礼拝の呼びかけ）がなりながらも、近くにキリスト教教会があり、多数派はヒンドゥー教徒というカオス状態。本当に多数派がヒンドゥー教徒なのか疑うくらいに街中にブルカを着た女性がいて、ヒンドゥー教とキリスト教が習合している場合だってあるほどに宗教にセンシティブでインセンシティブな社会だったらしい。

シャリヤの信仰する宗教が何であれ、信仰を強制さえされなければ翠の気持ちは別に変わらない。ただ、もしかしたら紛争の原因はスキュリオーティエ教と相対する別宗教の存在である可能性も否めない。

（まあ、どのみちこの紛争は長続きしそうな気がするが）

シャリヤはそのスキュリオーティエの教典（仮）の表紙を捲（めく）って、ノートに書きだした。ノートに垂れる髪をかき上げて、丁寧にゆっくりと書いていく。一文字ずつ、丁寧に書き出してくれたので文字の形が分かりやすかっただけでなく、筆順も理解しやすかった。いやはや、女の子が自分のために書いてくれた文字。このフレーズを復唱するだけでも翠の身の上に降りかかった俗にいう「非リアな日常」問題の最終的解決に近づく。

リア充は絶滅せよ。極東非リア生存圏の実現はまだか。

私　はい
“uшnɱб ϑn бпłбюип цб.”

書き終えたところでシャリヤはそれを読み上げていく、ゆっくりと分かりやすく。今までの会話でだって単語の発音は大体聞き取れていたが、文字との対応はゆっくり読み上げてもらわないと分からないものだ。

バン　ミスゼン　トニー　レス　ピーレーン　アレフィス　ヨ
ɗбю ϑnɒɒuю иэюnł зɬuɒ ɗnłзuuю бзuɱ̡nɒ nэ
ヴューレ　エス　ゼット　ロレーセ　ヤ　ミレ　エシュ　ニル
ɱ̡энłзu uɒ ɒuи зэзułʒu цб ϑnзu uɱ юnз.
アルス　ズィェーオスタス　ネア　ラモル　ジョスニー　ファリ
бзɒ ɒnułэɒибɬɒ юuб зɬбϑэз ɱэɒюnł ɱ̡бзц,
ショールネム　レスプリ　フェギ　サフレク　ズィスト　セーネ　ニヴ
ɱэłзюuϑ зuɒxзn ɱ̡uп̈ɬn ʒбɱ̡зuп ɒnɬɒи ʒuюu юnɱ̡.

なるほど、とりあえず分かったことが幾つかある。
“D”が小さくなったくらいの字“ᴅ”は基本ザ行の音を表すらしい。ただし、“ɞnᴅᴅuю（ミスゼン）”や“ʙзuɱ̠nᴅ（アレフィス）”を見ると分かるように音節の最後に来ると常に「ス」と清音で発音するようだ。“Ꞁ”を反転させたような字“ł”は長音を表すらしい。“n”に似た字“n”は“nэ（ヨ）”や“ᴅnułэᴅиʙꞀᴅ（ズィェーオスタス）”から鑑みるに母音の前だとヤ行の子音に変化するらしい。

（それで……）

前回から問題の文字“ɜ（シェノネン・ウー）”/y/ は、今回は一回だけ出てきているが、これは“ɡ̠ɔнłзu（ヴューレ）”で普通に「ユ」と読んでいる。前回の状況は“dijyk（ディユク）”, “ydun（ユドゥン）”, “nyey（ニェユ）”と一致しない読み方を見せられた。それに“vyrle（ヴューレ）”が加えられた状態で分かるのは次のようなことになる。

1. /y/ が単独で立つ、或（ある）いは後に母音が続かない状態で ɥ 以外の子音が前に立つ場合は「ユ」で読む。
2. /y/ が ɥ の後ろに立つ場合も「ユ」になる。
3. /y/ が母音の後に立つ場合は、/i/ と同じようにヤ行の子音に変化する。

（う、うーん……）

やっぱり癖のある文字の読み方をする言語だ。
ここでまたぐうとお腹がなった。レトラに着くまでほとんど食べ物や飲み物を口にしておらず、それでもって部屋での待機をさせられているのだから当然のことだ。文字勉強の集中が切れるとともに

また強烈な飢えと渇きが脳を支配してくる。「お腹と背中がくっつくぞ」という表現を作った人間は多分、表現の天才じゃないかと思う。その表現の通りに飢えと渇きが強烈に感じられる。

“cƋƋ, зuʒɔ иэшnuɒи ɱɔб пюзэбюэ.”

そう言ったシャリヤに、翠は手を引っ張られて、二人は部屋を出ていくことになった。

そういえば、この街に来る前、食事を用意してもらった時に“uɯnɱб Ƌn(私) ɱuюɱu пюзэбюuƚз цб.”とか言っていたような気がするが、この“пюзэбюэ(クンロアノ)”と“пюзэбюuƚз(クンロアネール)”って関係があるんだろうか、もしかして「食事」とかそういう意味かもしれない。

そんなことを思いながら、翠はシャリヤにまたも手を繋(つな)がれていることに気づかずに言語解析に没頭していた。

#21 ことのはアフィクスリラート(afiksrilato)

“ɱбзnцб(シャリヤ), пюзэбюuƚз(クンロアネール) uɒ(は) пюзэбюэƋ(クンロアノ?)”

スプーンでスープを啜(すす)り、疑問に思っていたことを訊く。

例の相部屋を出たシャリヤと翠は、近くの建物に移動して席に座っていた。どうやら皆食事はここで行うらしい。戦時中にもかかわらず明るい声が聞こえる。レトラが安全な町である証拠なのであろう。迫撃砲弾が降り注いだ街より数倍も居心地の良さを感じられる。

質問は重要な話で、“пюзэбюuƚз(クンロアネール)”も“пюзэбюэ(クンロアノ)”も似たような単語だが、ちょっと違うということについてだ。単語の形が似ているけど違うということは、表す何かが違うということだと考えるのが普通で、それは時制かもしれないし、ちょっとしたニュアンスの

違いとかかもしれない。これで全く異義語だったりしたらさすがに笑うが。

“юnǫ, пюзэБюuꝉз uᴅ юnǫ пюзэБюэ.”（いいえ、クンロアネールはクンロアノではない）

なるほど、やはり違うらしい。では、その違いとは？

“ɱжБ uᴅ пюзэБюuꝉз.”（これがクンロアネール）

シャリヤはスープを指して言った。え？　クンロアネールってスープのことだったのか……？

それとも主食が代表して食事を表す表現とかだろうか。日本語では「ご飯」のように米を炊いた飯を食事の代表としていて、この異世界でもそのような表現をするかもしれない。ただ、以前食べた食事と同じようにこの地域のメインはどう考えても肉料理で、平べったいパンのようなものも供されているので、多分そうではないだろう。

次にシャリヤは、食べるふりを翠にしてみせた。

“ɱжБ uᴅ пюзэБюэ.”（これがクンロアノ）

ふむふむ、よく考えてみよう。

シャリヤはスープを指して、“пюзэБюuꝉз（クンロアネール）”と言った。その後で、食べるふりをしてみせて、それを“пюзэБюэ（クンロアノ）”と言った。つまり、“пюзэБюэ（クンロアノ）”は「食べること」という意味の単語だと思われる。とすると、“пюзэБюuꝉз（クンロアネール）”は「食べ物」と訳せばいいんだろうか。それぞれ違う部分を分けて表記すると共通部分の“пюзэБю（クンロアン）”が出てくるが、これがもしかしたら「食べる」という意味か……？

（確認してみよう）

　翠はシャリヤに貰（もら）った美しい装丁の本を持ってきていたのでシャリヤの前に掲げる。

これは……
“ɱɔжБ uᴅ……”

　と、そこで気づく。

（「読む」に“-ulːз（エール）”を付けて「読み物」で確認しようと思ったのに、「読む」って動詞知らないじゃん！）

　唸りながら記憶の底を辿（たど）ってみるも、聞いても分からない表現は耳に残らないから全く覚えていなかった。翠が困惑していると、シャリヤはその意図をくみ取ったかのように次のように言った。

それが読み物かって？
“ɱn̈nŀ uᴅ nŀБюиuuŀзɤ”
うーん、はあなるほど
“ðuŀ, ɥБ……”

　なるほど、その「読み物」＝“nŀБюиuuŀз（クランテール）”という単語も多分“-uŀз（エール）”がくっついているんだろう。語尾を除いた形を語幹と呼ぶとして、クランテールの語幹はきっと“nŀБюи（クラント）”に違いない。

　翠は、シャリヤに向けてそのクランテールのページをぺらぺらと捲り、読むふりをした。多分これで動詞“nŀБюи（クラント）”を使ってあっているか、確認できるはず。

私はこれを読んでいるか？
“ðn nŀБюи ɱɔжБɤ”
うーん、いいえ、あなたはそれをアクランティしている
“cðð, юnŋ, ʒэ Бnŀбюиn ɱɔжБ.”

また別のが出てきた！
どうやら、“пɫбюиuuɫз（クランテール）”で指す「読み物」を「読む」行為に対しては“пɫбюи（クラント）”ではなく“бпɫбюиn（アクランティ）”という動詞をまた別で使うようだ。

“ʒбз, шuзпɔ ʒэ（あなた） зпɔɫɱ <пɫбюиu（「クランテ」）>.”

シャリヤは“пɫбюиu（クランテ）”のところを強調して、懐から出したメモとペンで書くふりをした。
書くふり……そうか、語幹“пɫбюи（クラント）”は誤りで、“пɫбюиuuɫз（クランテール）”の語幹は“пɫбюиu（クランテ）”でそれの意味は「書く」だと言いたいのだろう。すると「読み物」を意味する“пɫбюиuuɫз（クランテール）”の原義は「書かれたもの」であって、翠が書くものではないから動詞“бпɫбюиn（アクランティ）”をその対象に使う必要があったらしい。
会話のマナーとして、シャリヤにはちゃんとそれが分かった旨を伝えるべきだろう。

“сб, сб……（は、は……）ʒn ɱпɫзuɱ（分かったよ）.”

（分かるか！　難しいだろ！）

頭がぐるぐる回転して、眩暈（めまい）までするほどに頭を酷使している。腹が減り、喉が渇き、長時間の歩きで体力をすり減らし、その上語学勉強で精神力を削られ、これ以上何を減らせばいいのだろうか。
翠は質問のせいで手を付けていなかったメインディッシュの肉料理を、手当たり次第に口の中に放り込んでいた。疲れのせいで、以前の食事のときほどにマナーに気を付ける余裕さえなかった。

食事が終わると、翠はシャリヤと共に部屋に戻った。シャリヤも

疲れたのか、部屋に戻るまでは一言も発しなかった。翠としては、語学のシチュエーションでもない状況で、変なことを口走って嫌われたりしたくなかったから、別に気まずいという感じでもなかった。
シャリヤはベッドを整えて、先に寝るようにといつの間にか翠の寝巻まで用意して、部屋をまた去ってしまった。
翠もこれ以上起きていては、友人とオールナイト翻訳作業を行った後のインド先輩のような、みっともないやつれ姿をシャリヤに見せてしまうと考えて、早めに寝床に入らせてもらった。
部屋から出ていくとき、シャリヤは微笑みながら翠を見ておやすみの挨拶をした。いつの間に着替えたのか青のボーダーのパジャマを着て、目を擦って眠そうにしていた。

“ᴅБзБƚɔБ(おやすみ), ʒuюoᴜᴅиn(セネスティ).”
“......ᴅБзБƚɔБ(おやすみ).”

その微笑みが忘れられない。
異世界人で、いきなり家に現れた自分を受け入れ、どこまでも面倒を見てくれる。やはり、シャリヤの存在は奇跡的なのだ。そう、異世界転生作品の主人公だからこそ、この厚遇を受け……ちょっと待て。なんで、シャリヤは俺を呼ぶときに“ʒuюoᴜᴅиn(セネスティ)”とばっか呼んでくるんだ？　俺は「セネスティ」なんて名前じゃないぞ。これは徹底解析しなくては……あ、眠気が、ちょっと待ってもうちょっと考察させて——。

そうして、翠は重大なる謎“-ᴅиn(スティ)”と共に深い眠りについた。

・二日目習得内容
1.　ɱɔcБ(フクワ)は位置も表す。

2. 動詞に -э《オ》を付けると「……ということ」という意味の動名詞を作る。-u꜔з《エール》を付けると「……する対象・物」という意味の名詞になる。

語彙
ɯnцэп《ディユク》（【名】リンゴ）、эшɔю《ユドゥン》（【名】鹿）、юэнuэ《ニェユ》（【名】本？）、ɱn꜔зuɱ《フィーレシュ》（【動】理解する）、ɗnзn《ミリ》（【動】待つ）、ɗэз《モル》（【動】ある）、ɱuюɯɔɒn꜔ Б《シェンドゥズィーア》（【名】教典？）、ɒпэнзn꜔э꜔un꜔u《スキュリオーティエ》（【名】スキュリオーティエ教？）、пюззэБюэ《クンロアノ》（【名】食べること、пюззэБю《クンロアン》の動名詞）、пюззэБюu꜔з《クンロアネール》（【名】食べるもの、пюззэБю《クンロアン》-u꜔з《エール》）、п꜔Бюиuu꜔з《クランテール》（【名】読み物、п꜔Бюиu《クランテ》-u꜔з《エール》）、п꜔Бюиu《クランテ》（【動】書く）、Бп꜔Бюиn《アクランティ》（【動】読む）

Ex.2 side シャリヤ

　助けられる人間が助けなければならなかった。
　ヤツガザキ・センというこの青年にはきっと身寄りがないのだろうから、自分たちが最後の命綱といえる。言葉も通じず、仲間や家族ともはぐれ、それでも生きていこうとする彼が自分やレシェールたちから離れたときが最期だ。無力のまま彷徨《さまよ》い、酷い死に方をする。せっかく、命拾いしたのに戦える力がなければ現状ではそうなってしまう。だから、私が彼にここでの生き方を事細かに教える必要がある。戦い方もだ。
　シャリヤはレシェールたちのアジトの中で起床してそんなことを考えていた。

　ユエスレオネではリパライン語が喋《しゃべ》れなければやっていけない。その上、今は革命のせいで戦争が続いている。自分の身は自分で守

れるようにしておく必要がある。だからこそ、屋上の射撃場が使えるかどうか、レシェールには事前に聞いておいた。

PCF-99 シェルトアンギルという銃は、ユエスレオネでは一般的に政府軍も革命派も使っている銃らしい。昔、ユエスレオネにくる前に、父親の狩猟を見ていたので銃の使い方を知っていた。自分の身は結局は自分で守らなくてはならない。だから、見て覚えておきなさい——という感じで。

翠の手を引っ張って射撃場まで連れてきた。翠は顔を赤らめていたが、私は何かそういったハートフルな理由でここまで案内しているわけではない。説明できればよかったが、多分理解できないだろう。

レシェールに貸してもらったシェルトアンギルのグリップを握って、弾倉（マガジン）を装着し、槓桿（レバー）を引いた。手際の良さに翠が驚いていると見えて、嬉しかった。

シェルトアンギルは初めて使う銃だった。フォルムに魅せられて、側部を眺めてみると、猟銃と違い切り替え軸（セレクター）があった。思えば、動物を猟銃で撃っている父親を見ることすら、あまり気分がいいものではなかった。いざというときに自分は人を撃つことができるだろうか。敵であったとしても、できるならば話し合いで解決したい。

そんなことを想いながらも、切り替え軸（セレクター）を単発に切り替える。脇を締めて、標的のリンゴを見据え、集中する。この瞬間は何度銃を持って、何度撃ってみても慣れない。しかし、慣れないからといって命を投げ捨てるわけにはいかない。銃を花束だと思えばいい、と父親に言われたのを思い出した。今になって考えてみれば、子供だましのようでいけ好かない。だが、実際に銃を花束だと思うと不思議に気が軽くなった。引き金（トリガー）を引くと薬莢（ケース）が排出される。

翠はといえば、そんな私を見て、ぽかーんと口を開けて何が起こ

っているのかよく分かっていない様子だった。でも、詳しく説明したとしても言葉が通じないんじゃ、分かってくれない。分かっていようがいまいが、脅威はいずれ迫ってくる。その時は自分の身は自分で守ってもらわなくてはならない。

“ʒuюuɒиn(翠), ʒuиnɱ ɱжб(持って).”

翠に向けて、銃を差し出す。きょろきょろと辺りを見回してから、自分に銃が差し出されているのだと気づいたようで、受け取ったまま固まっている。

“uɯnɱб ɱжбϱэзэю ɱбɒиnu ɱuзϱnюч n̤uзɱ, ʒɔюжз˥n ʒnюбɒиułn̤uɒэю cбз˥чnю ɒcłзэ(既にこれで装填されているから、引き金を引いて狙い撃って。).”

言葉だけでは多分分からないだろうから、ジェスチャーを加える。すると、翠は目を瞬いてから、渡された銃を見つめていた。
数分経っても、彼は銃を見つめて何かを考えるような顔をしていた。もしかして宗教上の理由で銃が撃てないとかだったら、申し訳ないことをしたかもしれない。
そう思って、シャリヤは近づいていった。翠の顔を覗（のぞ）き込むとその表情は口を一文字に引き結んで何かを決意した様子だった。

“ʒuю……ɒиnɣ(翠？)”

翠は顔を上げて、銃を持ち直す。頭を振って、標的を見据え、そして、引き金を引いた。
驚いた。初めて銃を扱ったように見えるのに、さっきの私の射撃と寸分狂わず銃の操作も、反動制御もできていた。

“ʒn uᴅ（俺は）！　●％●＝▲＊◇＆◇、＋▲゛？◇●゛＋●！●＆◇＊■！！■％●＊●▲＊▲＆■％◇●゛！◇●！”

翠は空に向かって吠（ほ）えていた。意味は分らないが、きっと何らかの決心を表すものだろうとシャリヤは思った。言葉が分からないのに、ヤツガザキ・センには戦場に立った経験があるのだろうか。銃の扱い方は完璧であったし。

“ʒuю.....（翠……）ᴅиn...... ʒэ uᴅ......（あなたは……）”

驚きながら、その意気を讃（たた）えようとした時、何か違和感を覚えた。視界の端に空から高速で降り注ぐ灰色の物体を捕らえたのだ。本能から身をかがめて、遮蔽物となる出入り口まで下がる。翠はといえば、言葉が伝わってないようで、私のいきなりの警告にきょとんと立ち尽くしているだけだった。

“ɔʒuᴅю¡（伏せて！） ɔʒuᴅю ʒuю¡（翠、伏せて！）”

必死の警告と両手によるジェスチャーで意図が伝わったのか、翠は身をかがめる。その瞬間、近くの建物の屋上がはじけ飛ぶ。破片が周りの構造物を無残に破壊していく。窓ガラスの割れる音、悲鳴。

「゛＋＃◇●％▲゛！■……」

翠はかがんだまま、周りを見て状況を理解したのか顔が真っ青になっていた。いきなり連れてこられた先で、攻撃を受けて死ぬかもしれないという状況なのだから、パニックにならないほうがおかしい。

ここは安全だって。　そう思ってたのになんで！
“ɱƃɜ ɱɔжƃ юnɔɟю. ɜƃ ɜuɱ ɱƃɜu ɒn ɜnɔɟɱ uɯnɱƃ xƃi”

ともかく、茫然自失(ぼうぜんじしつ)となっている翠の手を引き、出入り口側に引き寄せようとする。その瞬間屋上の床が轟音と共にはじけ飛んだ。怯(ひる)んで一瞬手を離した途端に、翠の頰(ほお)にコンクリート片が一筋の傷を付けたのが見えた。

早くここを離れねば。その一心で階段を駆け下りた。

三日目　平穏な日々（ч ɜ ч и ɒ э）

#22　ギリシャの国の標語

（おかしい、思い出せない）

朝の目覚めは至って良好。シャリヤはまだ寝ていたので、翠はベッドの上でこの世界に来る前のことを回想していた。

典型的な異世界転生作品の主人公たる八ヶ崎翠は、至って普通の人生を歩んできた。ただ、知り合いにアメリカ帰りのスーパースター……ではなくインド帰りの言語マニア——インド先輩がいるくらいである。問題は、至って普通だったその日常が、全く思い出せないのである。しかし、普通だったということだけは覚えている。

忘れるというのは、人間の強い力だという。記憶力が最強であれば、どんなに勉強ができるやらと考えることはあるだろうが、翠には楽しいことも、苦難も、トラウマになりそうな出来事も何回も想起され、それが反復しながら冷静に生活するのは難しそうに思える。

（でもなあ……）

詳細な記憶が一つもないというのはおかしいではないか。あまりに記憶力がない人でも、今朝食べたものを思い出すくらいのことはできるし、それなりに日常に何があったかは思い出せるはず。なのに、自分が通っていた高校の名前すら出てこない。

きっと、これが「異世界転生」なのだろう。

転生、転生と言ってきたが、今までのここでの生活を振り返るとどう考えても異世界転移だった。日本語は覚えているし、元の世界の常識もある。インド先輩とかいう変人の知り合いの言ってくれていたことも覚えている。人に対する振る舞い方も知っているし、赤

ん坊の身体のままこの世界に投げ込まれたわけでもない。
　多分、自分はこの異世界に来るために記憶の一部を代償にしたのだろう。記憶を代償に、翠は目的を果たすための片道切符を渡されたのだ。もしそうだったら、それは異世界転生と同じようなものだ。八ヶ崎翠という人間が最初から最後まで貫徹する目的——チート使いとハーレム構築の日——は、面倒な現世との繋がりが絶たれ、この世界でゼロから始めた今なら、必ず実現できる。その為に女神によってトラックに轢(ひ)かれて転生させられたのだろうから。

（女神……？）

　考えの流れで自然に出てきた言葉にまた違和感を持つ。そういえば転生した当初の記憶も思い出せていなかった。女神だの神だのが、転生させたい奴を汎用異世界転生用装置(主に貨物の運送に用いられる、荷台を備えた自動車)、通称トラックを利用して轢く、殺す——というのがよくある典型的な異世界転生作品の流れである。このことは日本の崇高なる伝統文学作品群(ライトノベル)のテクストリーディングの結果より判明していることであるわけだが、記憶を代償に異世界転生したからといって、女神や神と会った時の記憶までないというのはおかしい。
　いや、そもそも女神や神というものに会っていないのかもしれない。崇高なる伝統文学作品群(ライトノベル)の中であのように書かれていたとしても、それがそのまま現実に適用されるわけがない。文字を見ただけで数秒で言語理解できるひきこもり兄弟が存在したり、異能持ちがいる社会でそれを統制するために戦う人間が総じて粗末な能力持ちだったり、出会ったヒロインが超有名な探偵の子孫だったり。
　現実にこういうことが日本で集中して起きているわけではないのは自明だ。どこぞの小説サイトに書かれているだけ日本人が破竹の勢いで異世界転生しているなら、少子化問題どころの話ではなくなっているはずだ。そんな現実がないなら、実際に起きた異世界転生

にフィクションの異世界転生作品の事例を当てはめること自体がほぼ無意味なのではないだろうか。

“ююю……зuюouᴅиn（セネスティ）……”

　シャリヤが寝言を言っている。部屋に配置された二つのベッドの片側には寝相よくシャリヤが寝ていた。
　どうしても、シャリヤは目的（チーレム）の対象には思えない。恩人であり、最初に会った異世界人に対してそんな承認欲求を満たすだけの役目を押しつけることはできな――――というか、何か重要なことを忘れているような気がするけどなんだろう。何か昨日やり忘れて、そのまま眠ってしまって……。

（あ、зuюouᴅиn（セネスティ）のことか）

　寝言ですら、セネスティと言われてしまっている。
　名前を間違えられる主人公とかさすがに不格好すぎる。早く叩（たた）き起（お）こして、正しい名前を教えなければ。
　ベッドから出て、シャリヤのベッドに近づこうとするが、翠は寝ている女の子を叩き起こすのも悪い気がして一時思いとどまることにした。しかし、やはり異世界語の話を聞くにはシャリヤ以外に信用できる人間がいない。

（叩き起こすしかねえ）

　じりじりとシャリヤのもとに近づく。ベッドに乗ってもシャリヤは気づかないで寝ている様子であった。口を少し開けて、瞼（まぶた）は緩く閉じている。頬はほんのりと赤く、表情はどことなく自分に微笑みかけているように見えた。小さい寝息が深く呼吸していることを伝

えてくる。完全に眠っている。
　女の子に寝起きドッキリするほど根は腐っていないので、どうせどこか触って、起こすという方法を取らざるを得ない。だが、触るところをミスれば、レシェールたちに報告されて敵前逃亡した敗残兵と共に丸太に括り付けられて、銃殺刑を受けることになる……かは知らないけど、多分よくないことが起きることは必然である。
　体勢に気を付けながら、シャリヤを見下ろすような状態になり、肩にちょっと触れてみる。全然起きないばかりか、くすぐったそうな反応をして寝返りを打ってしまった。これはこれで面白いが、用事があるのに起きてくれないのは面白くない。

「これでは埒（らち）が明かない……」

　シャリヤは寝ているときは鈍感すぎるらしい。これはもう肩を摑（つか）んで、揺さぶって起こすほかないだろう。漢、八ヶ崎翠、これはもう覚悟を決めてやるしかない。
　シャリヤの肩を摑もうとして、手を近づける。なんか、不審者みたいな感じになっているが、これは学習意欲……そう健全なる学習意欲に基づくものなのだ。決して女の子と相部屋になったので触り放題やんけ！　やったぜ、とかいう不純な目的ではない。

“ɱБЗnɥБDИnį（シャリヤスティ）”

　翠がシャリヤに触れようとした瞬間、ドアが開いた。

　開いたドアの先にいた黒髪の少女――エレーナの姿を認めて、翠は人生がこの世界でも終了したことを悟ったのであった。

#23　ゼロから始める信頼再建

“み、ɗnзni(待って！) ɗnзn uзuƚюБi(待ってくれ、エレーナ！)”

　とっさに出てきた言葉がそれだった。
　エレーナは、一瞬身を引いて驚いていたようであったが、特に怪(け)訝(げん)そうにこちらを見る様子もなかった。寝ているシャリヤを確認すると、少し申し訳なさそうな顔をして、静かに部屋に入ってきた。とりあえず、レシェールに引き渡されて銃殺刑の憂き目を見ることはなさそうな感じだ。

“ɱn ʒэ ɱnƚзuɱ(あなたが理解する) зnюuxБƚnюu, ɒuзuюu ɗn(私) иɜшnuɒи ɱэБ Бпɬnюэɒи ʒэю ɱuюɱu зuƚɒuюu ɱэБ зБƚиБɒиБюБɒɒ.”

　うん、なんか長文を話し始めたぞ？
　エレーナは髪を弄りながら、小声ですばやく話し始めた。窓からの光を受けて瞳がラブラドライトのような光沢を見せる。小声なのは多分、シャリヤが寝ているのを横目に確認して起こしたくはなかったからなのだろう。

“ʒэ(あなた) зnƚɱ зuƚɒuюuɤ”

　エレーナは首を傾げてこちらに尋ねてきた様子だった。
　分からん、さっぱり分からないが、多分銃殺刑の代わりにお説教を受けているに違いない。「理解する」とか言ってるし、「〜ってこと分かってる？」みたいなことを言っているに違いない……。
　異世界転生して社会的な死とか括り付けられて銃殺刑とか、そういうのよりは説教のほうが5000兆倍いいんだが、問題はその内容

が語彙力不足でさっぱり頭に入ってこないってことだ。
　だが、こういう咎(とが)められている場合は偉大なる事なかれ主義の方法が準用できる。とにかく、イエスマンに徹していればいずれ解放されるだろう。
　ある国の人は、謝るときに理由をちゃんと言い、またある国の人はとにかく平謝りして許しを請う。謝罪の文化というのは国ごとに、文化圏ごとに違うそうだが、この地域はエレーナとシャリヤの姿の違いとかこのレトラに住む人々の姿、衣服の違いで様々な文化が混在して生活しているということがよく分かる。
　つまるところ謝罪の文化もまだ煮詰まっていないはずだし、人間、普遍にただ相槌(あいづち)を打ち続ければ相手も気持ちよくなってくれるというものである。以前インド先輩に「非常に大雑把(おおざっぱ)に言うとカウンセラーの仕事は聞くことだと聞いたことがある」ということを又聞きしたことがある。やはり、人間はそのようにできているのだろう。

“чБ, чБ¡”(はい、それはもう！)

　説教している人に対して意味も分からないのに頷(うなず)き、相槌を打つなんて非常に失礼な気がしなくもないが、シャリヤがなかなか起きないのが悪い。
　そうして相槌を打たれたエレーナは気を悪くするでもなく、逆に笑顔になってしまった。
　やはり人間、頷き続けられると気をよくしてしまうようである。とはいえ、エレーナの笑顔はそんな機械的なものでもなく、部屋の中に一輪の花が咲いたように感情があふれたものであった。多分、エレーナは翠に対して怒っているというわけでもなく、少し諭しただけなのだろう。そうでもなければ、怒号による長文が延々と続き、ついぞ何も理解することはなかっただろう。
　ここで、エレーナは意気揚々と部屋を出ていった。まるで海外旅

行に行くときにはしゃぐ子供のように、抑えきれない好奇心と興奮が雰囲気に滲（にじ）み出ていた。
　はあ、可愛（かわい）いことは可愛いのだが、戦時中なだけあってへまをやらかすとどんなことをされるか分かったものではない。とにかく、エレーナがやさしい人間でよかったことをひたすら天に感謝していると、がちゃりとまたドアが開いた。

——————　——————　貴方は——である？　——————
“ʒuюoupиnɣ cƃƚϑnu ʒэ uɒ uɥnɣ ʒuʒɔ иэɯnuɒи.”

　ドアを開いたのはエレーナであった。
　翠がぽかーんと口を開けていると、エレーナは微笑みながら“xзбɱ.”（プラシュ）と言って手を握ってきたのであった。

#24　Court case は裁判格ではない

　ちゃんと歩けているはずなのに足元がおぼつかない気がする。目の前がちかちかと輝いている。さっきまでの安心はどこへやら、何をされるか全く分からない状況に怯えながらも、エレーナの引率に逆らうこともできずについていっていた。

（ただ、無意味に反抗しても無駄だろうな）

　街を囲むように立てられている高いバリケードは、レトラの主要な外部と繋がる主要街道からはよく見える。エレーナに連れられながら街の様子を見ていると、おどろおどろしいバリケードが道を全て塞ぎ、息苦しさを感じられるほどに閉鎖された状態であった。もちろん外部からの敵を防ぐための構造なんだろうが、それ以上に見張り番がバリケードの上に多く配置されているらしく、逃げようと

しても見張りに射殺されるだけだろうと分かる。

（旧西ドイツへの亡命者を銃撃する国家保安省（シュタージ）かよ）

内紛の状況がどうなっているか分からないが、こんな不安定な情勢で何か変なことを言えば処刑は免れても、独房くらいには入れられてしまうのではないか。考え始めると止まらないので何も考えずにエレーナについていく。反省の意思を見せれば、許してもらえる？　そんな簡単にはいきそうもない。

“ʚuƚ, uзuƚюʙ......”（えっと、エレーナ……）

とりあえず、名前を呼んでみる。
自分がどうされようとしているか、それを知る権利くらいはあるはずだ。殺すなら殺すと知らせてくれたほうがいっそ潔い。戦時法廷に引き出されたりしたら「俺は日本国民で、非戦闘員で、人間としての尊厳が尊重されることを望む」って言ってやる。多分相手には何一つ分からないだろうけど。

“ɯuзnɔ ʒuю（翠） зnɔƚɱ <uзuƚюʙ -ᴅиn>（「エレーナスティ」） ɱɔʙ ᴅиnuᴅɔ.”

また、長文だ。全然分からないが、“uзuƚюʙ”（エレーナ）に“-ᴅиn”（スティ）が付けられているところから鑑みるに、またスティ関係の何かなのだろう。シャリヤもエレーナも分からないことを察しているだろうが、説明されることもなく、永遠にスティの謎が解けない状態ではある。これを訊く前にこれまでのスティの用法を見て、とりあえず理解してみよう。エレーナと移動する間に何もしないよりも、意思疎通のために少しでも、言語を理解する努力をする方が誤解を解いたりするためには有利だ。

1. 『ϑn uᴅ бзuᴅ.ɱбзnцб.（私はアレス・シャリヤ） ɱбзnцбᴅиn.（シャリヤスティ）』
2. 『ᴅбзбƚɔб,（おはよう） ɱбзnцбᴅиnꜝ（シャリアスティ！） uɯnɱб ϑn（――私――） пзnu ɯuб ɯэꜝ』
3. 『ᴅбзбƚɔбꜝ（おはよう！） ʒuюuᴅиnꜝ（セネスティ！）』
4. 『ϑuƚʒ,（えっと） ɱбзnцбᴅиn.（シャリヤスティ） cбƚϑбu збƚиб uᴅ ɱбз ɱɔcбɣ（――人間はここに？）』
5. 『цun, ʒэᴅиn,（――ソスティ） cбϑu зб зuɱ uᴅ（――である――） nɔзэɣ』

思い出せるのはこれくらいだが、挨拶である“ᴅбзбƚɔб（ザラーウア）”のあとに“-ᴅиn（スティ）”が付いたものがよく続いている気がしなくもない。シャリヤが翠を呼ぶときは常に“ʒuюuᴅиn（セネスティ）”になっている。これらを鑑みると、もしかしたら何かを呼ぶときに“-ᴅиn（スティ）”が付くのかもしれない。

そういえば、インド先輩が言っていたことに言語の文法には格《Case》という概念があるらしい。英語では消滅しているそうだが、ラテン語とかギリシャ語とかロシア語とかアラビア語とかは名詞が格変化を起こすとかで、その格とやらは文章中でその単語がどのような立ち位置になるのかを表すらしい。例えば、「ブルータスよ、カエサルの父親はイタリアで少女に花を与えよと命じた。」という文章をラテン語で考えてみると、

Brūte（ブルータスよ）, Caesaris pater（カエサルの父は） imperāvit（彼は命じた） ut（～と） flōrem（花を） puellae（少女に） in Italiā（イタリアで） dōnārēs（あなたが与えるよう）.

となるらしいが、ラテン語はいちいち格で名詞が変化するので格の内訳はこうなっている。

Brūte（呼格）, Caesaris（属格） pater（主格） imperāvit ut flōrem（対格） puellae（与格） in Italiā（奪格） dōnārēs.

このようにラテン語は格変化で文中の単語の役割を表すことができるから……、

Brūte(ブルータスよ), pater(父は) imperāvit(彼は命じた) Caesaris(カエサルの) ut(〜と) dōnārēs(あなたが与えるように) flōrem(花を) in Italiā(イタリアで) puellae(少女に).

と、語の並べ方をぐちゃぐちゃにしても全然通じるのだそうだ。pater と Caesaris の間に imperāvit が入っているけど、「まあ、分かる」ということらしい。英語などの場合は語順が大体限られて、自由に語を並べることは難しい。まあ、語の並べ方をぐちゃぐちゃにして何の得があるのかということもあるが、この特徴はどうやら詩とかで有用に働くようだ。

この格の仕組みがそのまま異世界語に存在するかどうかは分からないが、“-ᴅиn(スティ)” の存在がラテン語の呼格に当たることはここから推測できる。

さて、ここで推測した語法のテストといこう。

エレーナが何を思って意気揚々と翠を引っ張っていっているのかは知らないが、ここで一つ「分からない」と言って、知る権利を行使しなければ。

“uзuɫюбᴅиn(エレーナよ).”

エレーナは、翠のその声を聴くと、鼻歌を歌いながら進んでいたその歩みを止めてしまった。

“ðn юnŋ ɱnɫзuɱ ɱжб(俺はこれを理解していない).”

精一杯の語彙力と一緒にボディーランゲージでも意思疎通を試み

る。先人が作り出した業界人のスタイリッシュなポーズの一種である「両手でろくろを回すポーズ」を基本として、自分が部屋から引っ張り出されているという現状が理解できていないことを表現しようとした。
　だが、その疑問はさらに次の瞬間に増幅されてしまった。

これは　食べ物——　——　はい
“ɱжб uɒ пюзэбюuɫзɬɯ бпɬnюɔɒибз чбɨ”

　目の前に見えてきた目的地と思わしき場所は——

「製菓材料のお店……？」

　目の前に現れた量産型フ〇ール・ド・ラパンじみた建物に驚かされた。何故(なぜ)部屋から引きずり出されて、エレーナに連れられているのか。いよいよ本当によく分からなくなってきた。

#25　疑わない

（えぇ……）

　エレーナに連れられて来た場所は処刑場でもなんでもなかった。扉を開けると、袋詰めされた粉やらパンやクッキーのようなお菓子などが並んでいる様子が見て取れた。
　翠にはお菓子作りの心得など何もない。だから、一つ一つを指さして言われてもそれが何かは分からないうえ、製菓材料の店に入って色々な粉を物色するエレーナを見て、翠は違和感を覚えていた。

これはキィッツレスニェル
“ɱжб uɒ пчпиӥзuɒюnuз.”

なるほど、キィッツレスニェル粉。
キィッツレスニェル粉って何だろう。なんか戦隊モノで超絶合体して、一瞬で怪物と街を滅ぼすビームを出すロボットみたいな名前の粉だな。
というか、違和感を覚えたのはそういうことではなく、「何故エレーナは翠を製菓材料店に連れてきたのか」ということである。懲罰を受けるべき罪人と一緒にお菓子作り？　平時の犯罪者更生うんぬんならまだしも、戦時中にそんなことをする奴はまず正気じゃない気がしてならない。
もしくは、処刑される前に好きなものをなんでも食べさせてやるとかそういうのか。いや、その人権を尊重した心意気は認めてやらんでもないが、残念ながら翠にはその異世界語は全くもって通じていないので、食べたいものを指定することは不可能なのだ！
ことのはインヴァリッド(Invalid)なのだ！

“зиюuᴅиn(翠よ), ᴅuзuюu(———) зэ пюзэбю(あなたは食べる) cbƗʚnuɤ(———)”

エレーナは顔を笑みで輝かせながら、翠に質問を投げかけてくる。うーん、多分「何が食べたいのか？」ということを訊(き)いているのだろうが、罪人に向かって最後の晩餐(ばんさん)に食べたいものを答えよと笑顔で訊いてくるのは、どう考えてもヤバい。ここまでおかしいことが続いてくると、さすがに自分が間違っている気がしてくる。
ただ、訊かれていることに正確に答えることはできない。“пюзэбюuƗз(クンロアネール)” が食べ物であるということは分かるのだが、個別の食べ物の名前は全く分からない。でも、自分の意思は伝えなくてはならない。間違えることを恐れていては意思疎通などできるわけがない。単語も文法も分からなくても、意思疎通しようとする意識があれば言葉を通じさせることができるのだ。

エレーナ、　俺は食べ物の名前が分からない
“uзuɫюбɒuп, ʒn ɱnɫзuɱ юnϱ пюзэбюuɫз ɱuɫзп.”

訊いてくるエレーナにはっきりと言うことができた。
しっかりと今まで覚えてきた単語を頭の中で反復して言うことができるからこその技ではあるが、food name みたいな感じで「食べ物」の意味の“пюзэбюuɫз（クンロアネール）”、「名前」という意味の“ɱuɫзп（フェールク）”をそのまま並べてみたことは少し怪しい。確か、格変化を起こすラテン語だったら“nōmen（主格） ēscae（属格）”になるはずだし、日本語だったら「食べ物の名前」という風に「の」という助詞が入るはずだ……ってそういえば「〜の」って表現は確か“-ɭɯ（ド）”だったっけ。いくら物覚えがよくてもさらっと間違えてしまうことはよくあることだ。不自然な表現をしてしまったかもしれないが、まあ通じるだろう。

食べ物の名前……？　あなたは名前を食べるの？
“пюзэбюuɫз ɱuɫзп......ɣ ʒэ пюзэбю ɱuɫзпɣ”

エレーナは首を傾げてよく分かっていない様子だ。どうやら通じていないようだ。不自然な表現というより、通じない表現だったらしい。言い直した方が良さそうである。

いいえ、　俺は「食べ物の名前」が分からない
“юnϱ, ʒn юnϱ ɱnɫзuɱ <пюзэбюuɫзɭɯ ɱuɫзп>.”

“бɫцбɫ（アーヤー）...”とエレーナは得心したように頷く。どうやら通じたことには通じたらしい。

――――　君は食べ物の名前を理解する？
“ɒuзuюu ʒэ ɱnɫзuɱ пюзэбюuɫзuɭɯ ɱuɫзпɣ”
えっと……いいえ
“ʒuɫ......юnϱ.”

食べ物の名前は知らない。それをきっちり伝えるだけでも、何を

食べたいのか訊きだすためには単純なやり方では上手くいかないということが分かるだろう。

“cδδ(ふむむ), ɱn(——) ƚзuɱ, δnзn ɱбз(分かった、そこで待ってて) ɱn̤nƚ.”

そう言って、エレーナは製菓材料店の材料が並ぶ脇にある椅子に座って待つことを指示してきた。素直に従って待っていると、エレーナはお目当ての粉を見つけたのかサンプルの後ろにある紙袋をいくつか取って、会計の場所に持っていった。しかし、店の人間はエレーナからお金を貰うでもなくノートに何かを記入したかと思うとエレーナと握手した。そのままエレーナは嬉々(きき)として翠のもとに帰ってきた。

なんなんだろう、戦時中だから一定量の配給は市民に分配されているとかだろうか。それとも、イスラエルの各地にある集産主義的協同組合キブツみたいな感じで、働いたら欲しいものが貨幣を通じずに貰えるとかか？

そんなことを考えていると、お腹がぐぅと悲しい悲鳴を上げた。

朝からシャリヤを起こそうと神経を使ったり、エレーナにここまで連れてこられたりした結果、朝飯なんて一口も食べてなかった。

エレーナはそれに気づいたようで、翠に“δnзn(待ってて).”と言ったのちカウンターに向かって何かを頼みにいった。きっと食べ物を頼みにいってくれたのだろう。カウンターの体格がいいおじさんはささっとマグカップに飲み物、プレートにパンを用意して出してくれた。エレーナは笑顔でそれを翠のいるところまで運んできた。

（もう、疑う必要はないだろうな）

エレーナは最初から処刑とか考えてなかったんだ。一緒に製菓材料のお店に行きたくてシャリヤを呼び出そうとしたけど、シャリヤ

は寝ていて、翠が起きていたから、代わりに連れていこうとした。部屋にこもりっきりなのも可哀想だと思ったのかは知らないが、きっと悪意で部屋から引っ張り出してきたのではないはずだ。
　翠はそう確信して、目の前のエレーナに微笑み返してみせた。
　それにしても不思議なのは、シャリヤに覆い被さるように見えたはずなのに、エレーナは全くその点を気にしていない様子だったことだ。窓からの逆光でこちらがよく見えていなかったとかそういうことなんだろうか。まあ、なんにしても変に事態が大きくならなかったのは幸いだ。
　翠にはチーレムという一つの絶対的目標がある。しかし、そこまでに到達するには、この世界では非常に苦労を要することであるはずだ。ここまでどこの馬の骨とも知れない翠を助けてきてくれた異世界人たちは、戦時中にもかかわらず利益なんて考えずに手をさしのべてくれた。早く言語を習得して、恩を返さなければいけないが、今はこれだけでも善意のお返しにさせて欲しい。
　エレーナは、微笑みかけてくる翠を見て、満足してくれたのだと喜んだ様子で顔を明るくした。

#26　バターの香り

　製菓材料のお店から帰ってきた。
　さすがにエレーナに材料を全て持たせるのも忍びないので、材料は翠が持った。そんなに重くないと思っていたが、宿舎に戻ってくるまでにくたくたになってしまった。風土は違うだろうが、夏の日差しに近い陽光がじりじりと肌を焼いている感覚があった。そうはいっても気温はそこまで高いわけではない。つまり、強い日差しで熱中症になったわけではなく、日光に当たって疲れてしまったというわけだ。

（転生前は昼夜逆転の生活を送ってた……のかな）

朝いくら思い出そうとしても思い出せなかったように、転生してくる前に何をやっていたのかについては、「そうであったかもしれない」という推測しかできない。自分が何を思って転生してきたのか、ということは転生者なら誰だって興味を持つはずだ。記憶を代償にするほど、そこには何かがあったのかもしれないが、今の段階ではそれを調べる術は何もない。

シャリヤはといえば、宿舎に帰ってくると口元をほころばせて“ᴅБЗБトɔБ.”（おはよう）と挨拶をして出迎えてくれた。既に着替えていて、青いノースリーブのシャツにキュロットスカートを合わせている。髪は一面雪の銀世界かのような透き通った色で光を反射させていて、異世界ファンタジーっぽくない異世界において、一番異世界らしいのは彼女である気がする。正直これで惚（ほ）れてしまってもおかしくはないのだが。

（まだ、シャリヤのことは何も知らないんだよな）

シャリヤの家らしき建造物の中に翠が突然現れたときにシャリヤは誰も人を呼ばなかった。しかも、頻度解析にあれだけ長い時間を掛けておいて、シャリヤ以外の誰も翠に近づかなかった。

これを偉大なる伝統文化的電子遊戯作品群（ノベルゲーム）の脚本から紐解（ひもと）くに、多分シャリヤとその親の間に何かの問題があったのだと推測できる。翠がそれを解決することができたら、シャリヤへの最大の恩返しになるかもしれない。

“ʒuюuᴅиn（翠よ）, ᴅuзuюu（――――） ʒэ пюзэбю пuиэᴅиɤ（あなたはイェトストを食べる？）”

シャリヤがコップを差し出しながら何かを訊いてきた。
“nuиэDи（イエトスト）”を食べたいかどうかなんだろうけど、このコップに入っているものが“nuиэDи（イエトスト）”だったりして？　中を見てみるが、普通に透明の液体、水だ。

“ɜuɫ, ɱжб uD nuиэDиɤ（えっと、これはイエトスト？）”
“ɥБ.（うん）”

やはり、水のことを“nuиэDи（イエトスト）”と言うらしい。どうやら、飲み物や食べ物で動詞を使い分けることはないようだ。つまり、「食べる」と「飲む」を区別しないらしい。なんだか語法が奇妙に思えるが、そもそも“пюзэбю（クンロアン）”が「食べる」ではなく「口にする」くらいの意味だったのだろう。
奇妙な語法といえばインド先輩が教えてくれたタミル語の“சாப்பிடு”という動詞についてのことがある。日本語では「薬を飲む」だが、タミル語では「薬を食べる（“மருந்தை சாப்பிடு”）」と言うらしいのだ。
美少女に好まれて、ハーレムを作る上でこういった細かい語法を覚えることは重要だ。この地域の人間と何回も会話して、矯正していくのがよさそうだ。
そして、こういった食べ物関連の単語は非常に重要だ。水くらい人に要求できるようになっておくべきだろう。異世界に転生した挙句、干からびて死ぬとか無様すぎる。こちとら、年下の美少女と同じ部屋に泊めてもらっているだけであり、ゲームのプロで賭け事に勝ちまくって小銭儲（もう）けができるわけでも、圧倒的軍事力を見せつけて武器商人になったりしているわけでもない。いつそこらへんでぶっ倒れて「水をくれぇ……」と延々と助けを求め続けることになるかも分からない。サバイバル単語はできるだけ揃（そろ）えておくべきとみた。

（そういえば「～がしたい」って言い方を知らないな）

　そんなことを考えながら、シャリヤと共に部屋のテーブルについて水を飲んでいた。エレーナはといえば、同じ部屋にある台所を使って何かを作っていた。お菓子を作るのだと思うが、多分できるまで1時間はかかるであろう。

（今のうちに願望の表し方を訊き出しておこう）

　さて、しかしどうやって願望表現を訊き出そう。“пюзэбю（食べる）”を使って“ϑn пюзэбю юnϱ юэиэ.（私は本を食べない。） ϑn пюзэбю шnцэп.（私はリンゴを食べる）”だとか訊いたらいいのだろうか。しかし、それではシャリヤに「そりゃまともな人間は本なんて食べないわね」と言われてさらっと終わるかもしれない。屋外と屋内を交互に指して、“юnϱ（いいえ）”と“цБ（はい）”を交互に言ったら察してくれたりしないだろうか。それではただ単に「外に行きたくない」に取られそうで、やはり願望表現を訊き出すことはできなそうだ。

　難しいことだが、まだ手段は残っている。図を描いて分かってもらうという手段がある。昔から通じ合えないときは言語より図示したほうがいいと、外国で筆談する人という存在によって証明されている。言語が通じ合わなければ、絵で通じ合ってやる。

　手元に手帳があったので開いてみる。コップに入った水の絵と、以前単語帳のような冊子をシャリヤに見せてもらった時に出てきたリンゴの絵を並べて描いておく。

“ḿБзnцБɒиn.（シャリヤ）”

“cБƚϑnuɣ”

ん？　呼びかけで返ってきた答えのハーミェは「何」だろうか。

それはさておき、翠は手帳に描いた絵をシャリヤに見せた。それぞれ“ɱжБ uɒ nииэɒи.”(これは水)と“ɱжБ uɒ ɯnцэп.”(これはリンゴ)と説明しておいて、ɯnцэп(リンゴ)の方に丸を付ける。それを強調するようにペン先でリンゴの方を指してみる。

“ʒэ......ɱuзnɱuз иuɱи ɯnцэпɣ”(あなた……――――リンゴ？)

今シャリヤは“ɱuзnɱuз иuɱи”(フェリフェル テシュト)と言った。でも、この句をそのまま鵜呑(うの)みにすることはできない。鵜呑みにして失敗したのは以前の“ʒэɿɯ зэцэи”(あなたの文字)の件がある。「あなたはリンゴが欲しい？」みたいなことを言っているのではなくて、「リンゴはあなたのハートをキャッチか？　お前は伝説の戦士か？」みたいなことを言っているかもしれない。いや、絶対そんなことは言ってないだろうけど。まあ、「好き」くらいに捉えておくか。

そんなことを考えていると、現在までいろいろな風味と品質の改善が行われた香り高き油分を主成分とした……つまり、バターのいい香りが漂ってきた。エレーナが耐熱プレートに何かを載せて持ってきた様子であった。

“ɤn ɱuюɱu зuɫɒuюu йc ʒэɒɒ <ɱuзnɱuз иuɱи>¡”(私は――――――「好き」！)

食欲をそそる香りに、釘付(くぎづ)けになった。

#27　Grammatical Mood(文法法)

“ɤn ɱuзnɱuз иuɱи ɱжБ¡”(俺これ好きだよ！)

手持ちの言葉で精一杯好ましい味や食感を伝えようとする。口の中で溶けるような食感に、バターの香りと程よい甘さがマッチした一つの傑作ともいえるその菓子をテーブルの上で翠やシャリヤ、そして作った本人であるエレーナも楽しんでいた。それは地球の菓子で例えるならクッキーに似ていた。
この傑作のおいしさを表すにも語彙力のなさがいつまでもついてまわる。ただ、今回は「好き」という一言を言えるようになった。これは、大きな進歩だ。最初は願望表現を引き出そうとしていたが、これで女の子に告白し放題である。

（そんな肝っ玉はないがな）

“ʒиюuɒиn（翠、）, ɱбʒu.”

エレーナが翠の言葉に答える。ニコニコと笑みを浮かべながら嬉（うれ）しそうな様子だ。“ɱбʒu（シャーセ）”という表現が「ありがとう」に当たる言葉であるのは、文脈の流れとして自明だろう。
シャリヤが満足そうに菓子をつまんでいるのを見るとこっちまで微笑ましく思えてくる。エレーナもお菓子を作って振舞うとは高い家庭力をお持ちである。エプロン姿もよく似合うし、いいお嫁さんになるだろう。
エプロンはエメラルドグリーンのチェック柄で、フリルが下の方についていて、腰のあたりのポケットには何らかの動物の刺繍（ししゅう）があしらわれている可愛らしいものだった。何の動物なのかは本当に謎だが。

（うちの幼馴染もこれくらいに家庭力があればな）

幼馴染？

ふと出てきた言葉に疑問を覚える。転生前の記憶はないはずなのに「うちの幼馴染も」なんておかしい。

翠は詳細にそれについて思い出そうと試みた。頭を押さえて考え始める翠をエレーナとシャリヤは怪訝そうな表情をして見た。それでも転生前の記憶への興味はそんなことでは尽きない。

幼馴染じゃないかもしれない。妹ではないのか？　母親だったか？　嫁と呼んでいたかもしれない。そもそも異性なのか。知人でもなく、全くの他人だったり？　いや、本当にそれは人間？

頭の中にふと浮かんだ像は見えなくなり、霧散した。今のは一体何だったのだろうか。記憶が上手く思い出せないように処理されていて、いい感じに条件が揃うと思い出す仕組みだったりするのか？

「はぁ……」

やめよう。これ以上考えてもきりがない。転生前の記憶が何だっていうんだ。転生者として目的のために今を生きていくことが大切じゃないのか。シャリヤに、エレーナに、レシェールたちに恩返しすることが直近の重要なタスクのはずだ。

しかし、転生前の記憶を求めようとする興味は本能に突き動かされたかのように湧いてくる。もう一体何なのか分からない。

頭の中のもやを払うように頭を振っていると、シャリヤは戸棚を物色して一つの小瓶を翠の目の前に差し出した。

君　食べる

“ɱn ʒэ nɒ xnпnч, uзɱ ɯuзnɔ пюзэБю иuпuБз ӥɔ зuиnɱ БɒюБɒи ɱɔБ xnпnч.”

“xnпnч……ɣ”

いきなりの長文。シャリヤでも誰でもこうやって異世界語の学習

者にやさしくない長文を投げかけてしまうのはしょうがないことに感じる。けれど、少しは手加減して欲しいというものだ。いくら習得が早い異邦人に見えても、単語力には限りがあるのだから。

文中に二回出てきた“xnпnч（ピキィ）”という単語が重要そうだ。長い文章だが最初の“xnпnч（ピキィ）”の後で一息ついているということは、そこで文が区切れそうだ。最初の文章の“ɯ̰n（フィ） ʒэ（君） nᴅ（イス） xnпnч（ピキィ）”の“nᴅ（イス）”は“uᴅ（～である）”に似ている。まあ、似ているといって関係があるとは限らないが、重要な情報にはなりそうだ。それで“ɯ̰n（フィ）”が“ʒэ（君）”を修飾している……？　まあ、「“ɯ̰n（フィ） ʒэ（君）”が“xnпnч（ピキィ）”に関して“nᴅ（イス）”である／する」という文章であることは、推測できるような気がする。つまり、ここでは“xnпnч（ピキィ）”という単語さえ理解できれば文意が読み取れるわけだ。

そういえば、今の語彙力なら「俺は“xnпnч（ピキィ）”を理解したい」って言えるんじゃないか？　「理解する」は確か“ɯ̰nɫзuɱ（フィーレシュ）”だ。「理解すること」と言いたかったら、“-э（オ）”を動詞の語尾として付ければよかったはずだ。無理やりっぽいがまあ通じるだろう。

“ɱ́бзnчбᴅиn（シャリヤ）, ðn ɯ̰uзnɯ̰uз иuɱи ɯ̰nɫзuɱэ <xnпnч>.（俺は「ピキィ」を知りたい）”
“cðð（うーん）, ɯuзnɔ ʒэ зnɔɫɯ̰（――君――） <ᴅuзuюu ðn ɯ̰nɫзuɱ xnпnч>.（――私は「ピキィ」を理解する）”

うん？　質問の仕方を修正してくれている？

確か、“nɫбюиuuɫз（クランテール）”から間違えて“nɫбюи（クラント）”を動詞語幹として取り出してしまった時に“ɯuзnɔ ʒэ зnɔɫɯ̰（――君――） <nɫбюиu（「クランテ」）>.”と言われて修正されていたっけ。「～したい」と言いたい場合は“ᴅuзuюu（ゼレネ）”を文頭に置くんだろうか。

“чб, ᴅuзuюu ðn ɯ̰nɫзuɱ <xnпnч>.（ああ、俺は「ピキィ」が知りたいんだ）”
“ðn（私） nᴅ xnпnч（ピキィ） ¡”

正しい質問をしたと思ったら、エレーナが席を立って、そう言いながら頭を抱えて床を転がり始めた！　痛そうに頭を抱えながら、廊下側からリビングを行ったり来たりしている。髪が乱れるのを押さえながら、わざわざ転がり続けているのを見ていると無意識に笑いが出た。

いきなりの行動にびっくりしたが、シャリヤは平然とごろごろ転がっているエレーナを指さして“ʒn nᴅ <xnпnɥ>.”（彼女は「ピキィ」）と言っているし、なんだろう、この地域ではこんなノリが一般的なんだろうか。

（んな、馬鹿な……）

席に戻ったエレーナとシャリヤは顔を見合わせて、お互いに笑いあっていた。

多分、“ʒn（シ）”がエレーナを指しているから「彼女」という意味の代名詞だろう。“nᴅ（イス） xnпnɥ（ピキィ）.”の意味は結局のところよく分かってないが、とりあえず翠はいきなり席を立って頭を抱えて床を転がりまわるような状態ではない。

元の文章に戻って、区切られた２つ目の“uзɱ ɯuзnɔ пюзэбю（食べる） иuпибз ụ̈ɔ зuиnɱ бɒюбɒи ɱ̢ɔб xnпnɥ.”について考えてみよう。“ɯuзnɔ（デリュ）”という単語は“ɯuзnɔ ʒэ зпɔɫɱ̢ <пɫбюиu>.”（君は「クランテ」と言ったほうがいい）という文章にも出てきている。“ʒэ（君）”が主語で、“пɫбюиu（書く）”が目的語として考える。すると、“зпɔɫɱ̢（ルクーフ）”が動詞で、“ɯuзnɔ（デリュ）”が「～するべき」という表現に見えてくる。なぜなら、“ɒuзuюu（～したい）”が文頭に来たからだ。どうやら、このように文頭に来て文全体にかかる単語があるらしい。

インド先輩的に言うと法（Mood）を表すものだろう。英語の直説法とか仮定法とか命令法とか、日本語の動詞の活用の仮定形とか命令形とかあの類である。

つまり結果的には、“ɯuзnɔ（デリュ） пюзэбю（クンロアン）”という句は「食べるべき」だと読める。あとの文章がよく分からないが、分かったところだけ

を読むと「あなたがよくない状態なら、食べるべきだ」と言っていたことが分かる。

（まあ、小瓶の中身は……）

小瓶の中身は思った通り、錠剤のようなものであった。シャリヤはつまり翠の体調が悪くなったのかと思って風邪薬か何かを出してきてくれたのだ。気の利いた女の子だ。でも、別に体調は悪くないので、そう伝えてシャリヤを安心させなければいけないだろう。感謝の意も添えて。

シャリヤ、俺は別に体調が悪いわけではないんだ。ありがとう
“ɱбзnцбвиn, ðn юnϱ nв xnпnц. ɱбзи.”
“ϱэнюэи.”

シャリヤは、にこりと笑って薬の入った瓶を戸棚に戻した。翠はといえば、疲れでお菓子を一気に三つ口に放り込み、机に突っ伏してしまった。

#28　嫌な夢

高校の図書室の扉の前。放課後、ここで落ち合う予定であった。
スカートを整え、近づいてきた人物に対して、軽く敬礼したりしてみる。インド先輩はこういう過剰に媚(こ)びる動作を見ると一気に顔が赤くなってしまうので可愛い。
一緒に図書室の中に入って隣に座る。

「インド先輩、遅かったですね！　何があったんです？」
「インド先輩と呼ぶなって言ってるだろう。全く、色々準備をする

のに手間取っただけだ。気にするな」

彼は小さく笑って、ぽかぽか殴るジェスチャーをする。翠（ミドリ）の呼ぶニックネームが気に入らないようだが、そこまで気にしている様子もなく茶化（ちゃか）しているのだろう。ならば、こちらからも茶化してあげるというのが関西人であるインド先輩への礼儀というものだ。

「じゃあ､浅上先輩とお呼びすればいいんですか？　浅上慧（アサガミケイ）先輩？」
「はー、何とでも呼べばいいさ。浅上だろうが、インドだろうが……お前が、敵でなく仲間としていてくれるならな」

一瞬見せたその哀（かな）しい顔の理由は、彼と長く交友関係にある翠にとっても理解できるものではなかった。
“敵ではなく仲間として”私は、インド先輩――浅上慧のために今まで何をしてきたのだろうか。友人として、後輩として、彼から色々なことを学んできた。敵対したことなんて今までない。

「先輩、私は先輩の敵になんかなりませんよ。先輩が色々教えてくれることを忠実に守っているじゃないですか」
「いや、俺は教えたわけじゃない。俺はただ目的のために……」

なんか意味の分からないことを言い始めた。
インド先輩はいつもこうである。少しでも疲れたり、疑心暗鬼に陥ったり、ストレスが掛かる状況になったりすると、意味の分からない高コンテクストな文章を吐き始める。こういう時はとりあえず話を聞いてあげるとじきに治っていく。その間に言ったことについては、不問にした方がいいとインド先輩をよく知る人物から聞いた。

「そうだ、八ヶ崎」

インド先輩が席から立ち上がり、翠を見る。

「お前の目的はなんだ。お前が言語を学ぶ理由は、一体なんだ」
「なんだって、前も説明したじゃないですか～」

インド先輩にウィンクして、手元にあるネタ帳をぺらぺらと捲(めく)る。ここには様々な言語での単語と意味が幾つも書いてある。

「私は文芸部に所属していますし、外国人のキャラクターを書くときにそういうのが要るんですよ。まあ、なんか最近の勉強会はインド先輩のうんちく話を聞く会になってますけど、何はともあれインド先輩の話は面白いですからね」
「外国人のキャラクターか。結局お前は何を書きたいんだ？」

インド先輩の疑問に満ちた目が翠に向けられる。

「それは、あれですよ」

翠が指さした先にある本棚。そこに入っているシリーズは著名なライトノベルシリーズの一つであった。小説自体は本編15巻、外伝5巻、短編集3巻からなり、アニメ化やゲーム化もされ、ボイスドラマからヒロインの声のアラームまで何でもある人気作だ。ストーリーとしてはいわゆる異世界もので、現実世界ではダメな主人公が異世界に転移し、最強の力を手に入れて、また持ち前の機転で敵をばったばったとなぎ倒していく痛快なストーリーが中高生にウケたのだろう。

「あの作品みたいに自分の作ったキャラクターを異世界に送ってみ

たいんですよ。楽しそうでしょ？　あ、インド先輩を送るのもまた面白いかもしれませんね」

話を聞いたインド先輩は固まっている。

その雰囲気はさっきのように意味の分からないことを吐き始めるときとはまた違ったもので、恐ろしさを感じるほど静かだった。表情が厳しくなり、目は翠を見ていながら何かを見通すように遠くを見ているようでもあった。席から立ち上がったインド先輩は背景と、光に溶け込んでいく。あまりにも非現実的だった。

「異世界に行けば、その世界の人間が日本語を話してくれると思っているのか。甘いな、異世界だったら異世界語を話すに決まってるじゃないか」

背景も光もインド先輩も図書室も、全部溶けて混ざり合う。聞こえるのは記憶に残っているその声だけ、私だけが残されて、他は全て混ざり合い、暗くなっていく。眩暈(めまい)だと思っていた非現実的な光景はさらに拡大していく。その光景の変化にやけに焦りを覚えた。

「今までの俺の話のどこを聞いていたんだ。まあいい、もう時間だから、俺は帰るぞ」

「い、インド先輩！　待って、私はまだあなたから何も教わってない！　まだ学ぶことはいっぱい——」

言いかけた言葉を聞き慣れた声が途中で打ち消す。

「もう、おしまい」

そして、私(オレ)は一人になった。

#29　音韻緩衝地帯

「ああ……ここか」

もう見慣れたシャリヤとの同居部屋の中のリビングだ。何か嫌な夢を見ていたような気もするが、よく覚えていない。
シャリヤの言うことを解析していたら、もうこんな時間になってしまった。窓の外からは傾いた陽の光が入り込んで、木々が陰影となって写し取られている。どうやら朝からずっと陽が傾くまでここで突っ伏して、寝ていたらしい。どう考えても寝すぎだろう。

“ᴅбзбɫɔб, ʒuюuᴅиn.”（おはよう、翠）
“あ、ᴅбзбɫɔб（おはよう）......”

シャリヤが上から覗（のぞ）き込むようにして起きたことを確認してくる。
そういえば、“ʒuюuᴅиn（翠よ）”の問題はまだ解決されていない。“ʒuю（翠）”に呼格っぽい“-ᴅиn（〜よ）”がくっついていることは大体分かるわけだが、間に謎の“u（エ）”が入ってるのが気に入らない。“ʒuюᴅиn（センスティ）”でも発音できそうだし、やっぱり名前を「セネ」だと思われてるんじゃないか。

“ɱ́бзnɥбᴅиn, ðnɿɯ ɱ̢uɫзп uᴅ <ʒuю>（シャリヤ、俺の名前は「翠」だ）. ðuɫ, ɯuзnɔ ʒә зпɔɫɱ̢（えっと、だから） <ʒuюᴅиn>（「センスティ」）. юnŋ̢ɤ（では）”
“ðuɫ（えーっと……）......”

シャリヤは棚からペンと紙を取り出して表を書き始める。紙には縦３×横５の表が書かれた。きっと文法的な説明が始まるのだろうが、語彙力がまだまだ足りなすぎる翠にそれが理解できるのだろ

うか。

“ɱбз（において） зпюuxбɫпюu, пɫбɱбпɔю ɱuюшuч бш пɫбɱбпɔю xuɫɋэч ʚэз（がある）.”

“пɫбɱбпɔю（クラシャユン） ɱuюшuч（フェンデイ）” と “пɫбɱбпɔю（クラシャユン） xuɫɋэч（ペーヴォイ）” とシャリヤが繰り返しながら、一番上のセルに２列目から語句が書かれる。文字は読めないが、発音してくれれば文字をどう発音するか分かってくる。すらすらと手慣れた様子で書いていくその字は、辞書で見たあの文字の活字とは異なり、丸くカーブしたところが尖（とが）るなどの変化をしていた。きっと手書きに特化した字体なのだろう。

“<ɱ́бзпцб>（「シャリア」） бш <uзuɫюб> uɒ пɫбɱбпɔю ɱuюшuч（――「エレーナ」は「クラシャユン　フェンデイ」である） ʚбз <ȝuю>（「翠」） бш <зuɱuɫз> uɒ пɫбɱбпɔю xuɫɋэч.（――「レシェール」は「クラシャユン ペーヴォイ」である）”

ふむ、どうやら “пɫбɱбпɔю（クラシャユン） ɱuюшuч（フェンデイ）” と “пɫбɱбпɔю（クラシャユン） xuɫɋэч（ペーヴォイ）” に関して例を示してくれているらしい。“ʚбз（マル）” という語を文を繋（つな）げる接続、“бш（アド）” を英語の “and” や日本語の「と」と同じで、単語を並列する接続詞とすると、“ɱ́бзпцб（シャリヤ）” と “uзuɫюб（エレーナ）” は、“пɫбɱбпɔю（クラシャユン） ɱuюшuч（フェンデイ）” で、“ȝuю（翠）” と “зuɱuɫз（レシェール）” は “пɫбɱбпɔю（クラシャユン） xuɫɋэч（ペーヴォイ）” と表を読むことができる。共通性があるから分類が同じ単語なんだろうが……共通性は何だろうか。最後の母音が б（ア） かそれ以外かとか、最後が母音で終わるか子音で終わるかとか？　いや、そんな単純なことでもないかもしれない。

そもそも、音韻の共通性なんだろうか。

もしかすると、インド先輩が言う文法性（Grammatical gender）または名詞クラス（Noun class）と呼ばれる単語の分類と似たようなものかもしれない。

この単語の分類は、例えば複数形だったり、格の変化だったり、それにつく冠詞の種類とかに影響したりするらしい。

例えばドイツ語では男性・女性・中性の三つの文法性があり、それによってそれぞれの名詞、名詞につく形容詞、冠詞の形が変わる。アフリカで話されるスワヒリ語の名詞クラスは15種類あるらしく、翠にしてみれば、その部分はただただ面倒くさい暗記ごとだが、インド先輩と彼の友人たちはこれに興奮するらしい。申し訳ございませんが、全くもってその感性が分かりません。

“ðбз（そして）, ɰбз пꞁбɱбпэю（――においては）, пэхжбꞁɯ（――の――がある） зuɱuɰ ðэз.”

シャリヤは表の一番左の列、２列目から４つの単語を書いていった。それぞれの発音は“цбꞁпuюзuɱuɰ（ヤーケンレシェフ）”、“uɒиɰбꞁюuюзuɱuɰ（エストヴァーンレシェフ）”、“юuэшuюзuɱuɰ（ネイデンレシェフ）”、“ɰпꞁцuюзuɱuɰ（フィーイェンレシェフ）”であるらしい。

もしかして、この言語には名詞に２つのクラスがあるとかそういうことはないだろうか。ただでさえ労力がかかる異世界語学習なのに、暗記する必要がある文法要素が大量にあると、もう覚える気も何もなくなってしまう。

“<ɱбзпцб> бɯ（「シャリア」と） <uзuꞁюб> uɒ（「エレーナ」は） цбꞁпuюзuɱuɰ（ヤーケンレシェフである） ðбз（そして、） <зuю> бɯ（「翠」と） <зuɱuꞁз> uɒ（「レシェール」は） uɒиɰбꞁюuюзuɱuɰ（エストヴァーンレシェフである）. <эшэю> uɒ（「鹿」は） юuэшuюзuɱuɰ（ネイデンレシェフである） ðбз（そして、） <юэuэ> uɒ（「本(？)」は） ɰпꞁцuюзuɱuɰ（フィーイェンレシェフである）.”

“цб......ðпзп......（うん……ちょっと待って……）”

一気に来られると困ってしまう。

単語の形をよく確認してみよう。“ɱбзпцб（シャリヤ）”と“uзuꞁюб（エレーナ）”はどちらも共通することは母音が３つであることと、語尾がб（ア）で終わることだ。では“зuю（翠）”と“зuɱuꞁз（レシェール）”で共通することはなんだろう。これは母音の数は違うが、どちらも子音で終わっていて、最後の母音はu（エ）だ。

つまり“цбꞁпuюзuɱuɰ（ヤーケンレシェフ）”と“uɒиɰбꞁюuюзuɱuɰ（エストヴァーンレシェフ）”はそれぞれ

「単語の中の最後の母音がБ（ア）の単語」と「単語の中の最後の母音がu（エ）で終わる単語」のことなんだろう。そうなると“юuɔɯuюзuɱuɱ（ネイデンレシェフ）”、“ɱnłɥuюзuɱuɱ（フィーイェンレシェフ）”は単語の形だけを見るとそれぞれ「単語の中の最後の母音がɔ（ウ）で終わる単語」と「単語の中の最後の母音がɔ（ユ）で終わる単語」となるはずだ。まあ、ラテン語の第三変化名詞（だっけか）のように「この名詞クラスの単語の辞書形の綴（つづ）り上での共通性はないよ！　てへ（はーと）」とかいう場合もあるかもしれない。いや、てへ（はーと）では済まないのだが。

で、それが“зuюuɒиn（セネスティ）”問題と何の関係が……？

“<зuю>（「翠」は） uɒ uɒиɱБłюuuюзuɱuɱ（最後の母音がuで終わる単語である） ðБз（そして） uɒ <пłБɱБnɔю xułɱэɥ>（「クラシャユン ペーヴォイ」である）.”

シャリヤの持つペン先が“пłБюɱБnɔю（クラシャユン） xułɱэɥ（ペーヴォイ）”と“uɒиɱБłюuuюзuɱuɱ（エストヴァーンレシェフ）”の列と行が交差するセルを指し示す。多分、“зuю（翠）”という単語は子音で終わっているか、最後の母音がuの単語であり、“ппłБюɱБnɔю（クラシャユン） xułɱэɥ（ペーヴォイ）”であるということを言いたいのだろうが、如何（いかん）せん“пłБюɱБnɔю（クラシャユン） xułɱэɥ（ペーヴォイ）”の意味がまだ分かっていない。

“ðБз（そして）, ɱn зэ（あなた） Бðэз <-ɒиn>（「スティ」） uз <зuю>（「翠」）, Бðэз <-u-> зuзnэ <-ɒиn>（「スティ」） Бɯ（と） <зuю>（「翠」）.”

シャリヤは表の横に“зuю（翠）”と言いながら3文字、“-ɒиn（スティ）"と言いながら3文字書いた。そしてその間に“uł（エー）”と言いながら1文字を置く。よく分かっていないが、もしかしたら、子音で終わっていて、最後の母音がuの単語の後に子音で始まるものがついたらuが挿入されるということか。

子音で終わっていて、最後の母音がu（エ）のほかの単語と言えば、覚えているものだと、“пłБюuuułз（書物）”、“ɱułзп（名前）”、“ɱnłзuɱ（理解する）”、

“пɫбюии(書く)”、“ɱбзи(ありがとう)”、“ɒизиюи(〜したい)” くらいだ。子音で始まる接辞で覚えているものは “-ɒин(〜よ)”、“-ɿш(〜の)” くらいだ。まあ、試しに言ってみるには十分な語彙力だろう。

“ɱбзпцб(シャリヤ、), ðбз(そしたら), шизпɔ ðп юпϱ зпɔɫɱ <пɫбюииuɫзɿш ɱuɫзп>(俺は「クランテエールドフェールク」と言うべきではなくて) ðбз шизпɔ ðп зпɔɫɱ <пɫбюииuɫзиɿш ɱuɫзп>ɤ(「クランテエーレドフェールク」と言うべきだった)”

“цб... хб зиюи зэ зпɔɫɱ <пɫбюииuɫзɿш ɱuɫзп> би.(あなたは「クランテエーレドフェールク」と言う)”

“зиюи(セーネ)”……？　シャリヤの応答の様子を見ていると釈然としない様子で答えていた。多分、この場合は “пɫбюииuɫзɿш(クランテエールド) ɱuɫзп(フェールク)” も “пɫбюииuɫзиɿш(クランテエーレド) ɱuɫзп(フェールク)” も何らかの規則の上ではどちらでも許されるのだろう。それとも、もしかして “пɫбюииuɫз(クランテール)” と “-ɿш(ド)” の組み合わせが偶然不規則形になっていたとかもありえる。ありえるが……

（さすがによく分からなかったよ……）

寝て起きて言語学習して、また寝てを繰り返す生活は一体いつまで続くのか知るよしもないが、そろそろ働かざる者食うべからずの法則に従って、自分は食い物もまともに貰(もら)える状態ではなくなるのではないか。エレーナが粉を貰っていた時は、会計らしき店の人は記帳していただけだったが、あれは美少女だから許されることで……。

“зиюиɒинꜝ(翠！) ɱ́бзпцбɒинꜝ(シャリヤ！) ɒcɫзэ пзпиꜝ”

エレーナの声が部屋の外から聞こえる。何か急を要するような声のトーンだった。

噂(うわさ)をすればなんとやらとは言うが、別に悪くない。緊急事態とあ

らば主人公・八ヶ崎翠、美少女を助けるためにどこへでも参上しよう！

（言語はまだまだだけど、人の心は十分持ち合わせている。少しでも手伝えれば恩返しができる）

　そう思って、翠はシャリヤと目を見合わせ、部屋から共に出ることにした。

#30　言語と方言

「なんだこれは……？」

　なにかと思って部屋を出ると隣の個室の小さく開いたドアの隙間からどす黒い煙が出ていた。エレーナはすでにドアの前にいて、心配そうに中を覗いていた。

（火事だろうか）

　部屋の中に入るべきか迷っていると、シャリヤが怪訝（けげん）そうな顔をしてエレーナを見つめていた。エレーナはドアから離れて、シャリヤに向き合う。

何　あなたは――である、　エレーナ
“cБƚƍnu ʒэ uᴅ u˦n, uзuƚюБᴅиn.”
えーっと……　レシェールが……
“ƍuƚ...... зuɱuƚз......”

　レシェールについてエレーナが言及しようとした瞬間、小さな爆発音が聞こえる。ドアが大きな音を立てて勢いよく開いた。

“uɫ……（えっと……） зuɱuɫзuɒиn……ɤ（レシェール……？）”

体中真っ黒になって出てきた人間はレシェールであった。ところどころ服の繊維が焼けていて、薬品を燃やしたような臭いがしている。エプロンらしき形のものが見えるが、服と溶着してボロボロになっている。一体何をしたらこんなことになるのか。

“ɱuииuю xuɫn̈uɫɒиn i зn ɱƃɒиnɫɒ ɱƃз ɡnxɜɱi”

よく分からないがレシェールは怒っている様子である。

また一人、体中真っ黒にしてレシェールの後ろからひょっこり顔を出していた。

“ɱuзnɫзƃi（フェリーサ！） aezsea fiasd zarafiina!”

“seasnza ziijilz, dzeasa riileiilsa a asdal. sa dzeasz a zzasfsea!”

なんだなんだ？

レシェールと体中煤塗（すすまみ）れの少女が言い合いをしている。少女は黒髪のポニーテールと見えた。雰囲気としてはエレーナに近いものだ。

しかし、なんだか違和感がある。雰囲気として翠が今まで触れてきた異世界語ではない。まあ、そりゃまだまだシャリヤたちの喋る異世界語を完全に理解できて、その他の言語と明確に区別できるかというとそんなわけではない。だが、一切分からない上に発音の雰囲気が一気にバカっぽくなった気がする。インド先輩は翠がこういうことを言うと怒り出すのだが、バカっぽく聞こえるものはしょうがない。

違う言語なのか、もしくはシャリヤたちが喋る言語の方言か。

方言というとめんどくさい問題があるらしく、インド先輩もその

ことを話すことを避けていた。というのも、方言と言語の違いって具体的には何をもって定義するのかということがあるからだ。どうやらフランス語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語はもともと同一の言語であるラテン語が崩れて派生したものらしい。なので「フランス語はラテン語の方言」ということもできる。でも普通はそんな言い方はしない。なぜなら、フランスという国があり、その国では公用語としてフランス語が使用されていて、経済力も軍事力もあるからだ。公用語でもなく、経済力も軍事力もない地域の方言は言語として認められない傾向にある。

また、この分類には政治的なことも関係してくる。言語学でヒンドゥースターニー語と総称する言語は政治的理由で、パキスタンイスラーム共和国において話されアラビア文字ナスタアリーク体で書かれるウルドゥー語と、インド連邦共和国の公用語でありデーヴァナーガリー文字で書かれるヒンディー語に分けられ、それぞれで違う言語規範を持っている。

しかし、それらは文法にあまり違いがあるわけでもない。日本語とは別の言語ともとれる琉球(りゅうきゅう)方言も、結局は政治的、経済的、軍事的理由によって、日本語の標準語話者とは相互意思疎通が難しいのに琉球語と認識されるまでになっていない。翠はインド先輩の話を聞いていて「でも、方言が全部言語になったら方言娘に萌(も)えることができなくなるのでは？」と思ってしまったものだが、それを言ったら次の週末に翠が琵琶湖(びわこ)の底に沈められているところを発見されそうなので口に出すのはやめておいた。

そんなことを考えているうちにポニーテールの少女は、今気づいたとばかりに翠を指さした。

“al, adza eaeana saanziasal, gasaz!”

「うわっ、えっと……？」

驚いて、日本語でリアクションしてしまった。
挨拶代わりなのかよく分からないが、いきなりハグしてきた。さすがに困惑するが、それ以上に問題なのは言ってることが全然！　全く！　なに一つ！　分からないということだ。
やっとシャリヤたちの話す言語が分かってきたというところなのに、一体あと何種類の言語を学ばせられるんだろうか。頭の中がそんなことでぐるぐるしていると、エレーナが近づいてきてポニーテール少女の肩に触れたのに気づいた。

“uц, ɡ̢Бц Бnɬɫuɫɒиn(よ), ʒuюu ʒэ зnɔɫɱ̢ <зnюuхБɫnюu>ɤ(「リパーイネ」を話すことができる) ȡБз(そして), зuɫю ɒn хзБɱ̢ɤ”

“ʒuюu(セーネ)”という単語。
“ʒuюu(セーネ) ʒэ(ソル) зnɔɫɱ̢(クーフ)……”という構文を今まで何回も翠は見てきたが意味は断定できていない。“зnюuхБɫnюu(リネパーイネ)”は、“ɱ̢Бз(ファル) зnюuхБɫnюu(リネパーイネ)……”と表を説明するときにシャリヤが使っていたことから分かるように、多分言語名だ。文脈から鑑みて「リネパーイネが話せる？」ということになるだろう。すると“ʒuюu(セーネ)”は“ɯuзnɔ(〜すべき)”や“ɒuзuюu(〜したい)”と同じ仲間の単語で、文頭について可能を表すのか……？
後の方はよく分からないが、エレーナの表情が何か怖い。おそらく、ポニーテールの子はリネパーイネとやらを話すべきなのだろう。
ポニーテール少女は翠から離れ、少しばつが悪そうな表情をする。

“юБʒu, хБ ʒuюu ȡn(私は) иuɒэз зэи зnɔɫɱ̢ юnɡ̢ зnюuхБɫnюu(リネパーイネを話さない……)……”

“юБʒu(ナーセ)”を繰り返して、頭を下げる。そのしぐさがこちらでも謝罪の意味を表すのであれば、“юБʒu(ナーセ)”は「ごめんなさい」の意味なのだろう。

少女が言いたいことは多分、「自分はリネパーイネが上手に話せない」だろう。“иuɒɔз（テズュル） зэи（ロット）”が多分「上手に」という意味の表現らしい。

ここまで来てやっと異世界語が話せない同志を見つけることができた。仲よくなって二人でリネパーイネの勉強ができるようになれば、素晴らしいことではないか。

“ʒuƚ（えっと）, ʒnɿɯ ɱuƚзп uɒ（俺の名前は） ɥƃи̤п̤ƃɒƃпn.ʒuю（八ヶ崎翠。）. ʒэɿɯ ɱuƚзп（君の） uɒ cƃƚʒnuɤ（名前は？）”

“ʒn uɒ ɱuзnƚʒƃ.ƃиƃʒ（私の名前はフェリーサ・アタムです、）, ɱnɥ（――） ɥƃи̤п̤ƃɒƃпn（八ヶ崎）.”

ほう、フェリーサ・アタムと言ったか。

肌の色はシャリヤほど白くなく、どちらかというとエレーナ似の色だ。目の色は黒っぽいようなので人種的にはエレーナに近いのだろう。肩に垂れた長めのポニーテールが武人っぽさを引き立てている。外見だけ見ると剣道とか弓道とかやってそうな容姿だが、その性格は容姿に似合わず大分フランクなもののようだった。

今までのシャリヤやエレーナの呼び方で怪訝な顔もされてこなかったことを考えると、名前の並びは姓–名のはず。だが、彼女の「リネパーイネをあまりよく話せない」という発言から考えると、言語、文化の違う場所から来た彼女の名前は、もしかしたら姓名の順番が逆かもしれない。まあ、呼び方くらい少し間違えても悪いことはないはずだ。

フェリーサは翠より小さい。年齢は中学生１年生くらいに見える。それで、母語とは異なるシャリヤたちの話す言語を勉強中とはよくやるなあ。

レシェールはフェリーサの言語を話せるようだが、ただ翠はそういう状況でもない。言語的に参照できるものがない状態で信じられるのは、記号的な対応と常識、そして様々な可能性を考えることが

できるこの八ヶ崎翠の頭部に搭載されている脳の働きだけだ。

レシェール、　彼女は　——の何を話す？
“зɯɱɯɫзɯɒин, ʒn зпɔɫɱ з пɔɫɱизɯɒɒɯɬɯ cʙɫϑnɯɣ”
ああ、　彼女は——を話す　彼女は——
“цʙ, ʒn зпɔɫɱ ʙnɬɫɯю зпɔɫɱизɯɒɒ. ʒn ɯɒ ʙnɬɫ.”

レシェールとシャリヤがフェリーサについて質疑応答をしていらっしゃるようだが、特に気に留めることもない。一番重要なのは、今はこの部屋で何が起こったのかである。

エレーナも同じように考えていたようで二人の話を手で止め、部屋の中を指さす。

これは何？
“ɱжʙ ɯɒ cʙɫϑnɯɣ”

部屋の中に充満していた煙は話しているうちに部屋の外へ出ていったようで、部屋の中がよく確認できる。部屋中が黒いペンキで塗られたかのような状態だった。

フェリーサは片目を閉じ、手を後ろに回して照れている。どう考えても、こいつが犯人だ……。

翠は掃除の手伝いをしなければならないだろうと思い、準備のために一旦部屋に戻ることにした。

#31　幻覚だったのかな

ベッドに身を投げる。

結局のところ、掃除は数時間続いたものの、全く汚れが落ちないので中断。部屋中に染み付いた黒い何かは、台所でその元凶と思わしきものが見つかった。鍋の上に炭化した何かが30cmくらい積乱

雲状に膨らんで固まっていた。一体何をどうしたらこんなことが起きるのか。料理が全くといっていいほどできない翠でも、理解が難しかった。

掃除を中断したのち、時計を見ると既に午前の２時半になっていた。夜型生活に慣れている体質らしい翠としてはそこまで気にならなかったが、シャリヤもエレーナもフェリーサも、うとうとしていた。レシェールは掃除の中断に乗り気ではなかったが、いい加減キリがないので無視して出てきてしまった。悪く思ってないといいけど……。

（……）

シャワーの音が聞こえる。

部屋に併設されている小部屋はトイレ、洗面台、バスタブを同室内に設置する西洋式だ。異世界は水道やトイレの環境が悪いかもしれないとも思っていた。中世ヨーロッパは一時期下水道の歴史が酷いことになっていて、街道に垂れ流しになっていた時期もあるという。ただ、この異世界はそういうこともなく、上下水道の整備がちゃんとしているらしい。

シャワールームに入っているのはシャリヤだ。お疲れの様子であったから、同室の女の子を優先した結果だ。シャワーといえばこの３日間、朝にしか浴びてなくて、そういうものかと思っていたのだが、特に浴びる時間が決まっているわけでもなさそうである。

今日も朝から色々あってラッキースケベなど望む気力もない。そもそも併設されたその別室の空間がわりと広いので、着替えなどはその中でやっていれば見えないわけで、まあそういった展開はない。逆に報酬をくれるなら、そんなことより疲労を解消してくれる薬でもくれって感じだ。

（はあ……）

起き上がり、ふと外の風景を見てみる。
黒で塗りつぶされた漆黒の空。止まって水が溜（た）まったままの噴水らしきモニュメントの水面には、月の光が写し取られている。街灯などがあまりないのでほぼ純粋な月の光を受けて輝いている。人影はないと思われたが、がさごそと茂みが揺れた。
多分小動物か何かなのだろうと理性的に自己解決する。でも、自然にそっちのほうに目がいってしまう。なんだろう。リスだろうか、それとも鳥？
だが、そこに見えたのは小動物でも鳥でもなかった。見覚えのある栗毛（くりげ）色のミディアムの髪、少し高めの背。黒のコートと特徴的な褐色の肌。

「インド先輩……？」

あまりに見覚えがありすぎるその姿にはさすがに驚いてしまう。見まがうこともない。言語学の知識を翠に教えてくれたその張本人——浅上慧だ。
ベッドから立ち上がってそれを確認する。寝ぼけ眼をこすり、よく見る。記憶の中に強く残っているその姿と相違ない。
浅上はというと、窓から乗り出して確認しようとする翠の姿を見て、焦る様子もなくゆっくりと背を向けて進み始めた。夜風に黒のコートがなびく。昼の気温があんなに高かったのに、窓から吹き込む夜風がこれでもかというほどに冷たい。
というか、こんなことをしている場合ではない。インド先輩が、浅上慧がこの異世界にいるとはどういうことなのか。

（待て、浅上って……誰だ？）

またもや思考の最中でいきなり出てくるイメージ。よく分からないが、これもボトルネック式記憶のせいで出てきた記憶なのだろう。インド先輩の本名はきっとその浅上慧とやらだ。
　考えるより先に体が動いていた。上着に目もくれずに、部屋のドアを突き飛ばすかのように開ける。開いたままのドアを閉める暇なんてない。浅上に追いつかなければ。追いついてなんでこの世界にいるのかを聞かなければならない。そうすれば、記憶がない理由とかどうやって異世界に転生してきたのかということも分かるかもしれない。

（待ってくれ！）

　階段を駆け下り転びそうになりながらも、その影を確認できた。ゆっくりゆっくりと翠に背を向けたまま歩いている。近づいて分かった。やはり間違いなくインド先輩だ。

「待って！　待ってください！」

　翠の必死の呼びかけには全く応じない。聞こえないかのように振る舞っている。これだけ近くにいるのに全く反応しないとは。
　翠は浅上を捕まえて気づかせようと彼の方へさらに近づく。だが、触れるすんでのところで走り出した。

（俺から逃げ……てる……？）

　何故(なぜ)？　何故逃げる必要があるのか。
　彼を追うために翠も走り出す。体力に自信があるわけじゃない。でも、ここで追いつけなければ、なんでインド先輩までこの異世界

に来ているのかが分からなくなってしまう。
　一本道を駆けていく。レトラの街は広く、いくつもの建物の間を通過して走る時間が永遠にも思えた。転倒しそうになっても、インド先輩が止まるか追いつくかして捕まえるためにひたすら走り続ける。激しい呼吸の音が聞こえても、走る疲れより何故インド先輩がここにいるのかという疑問に頭が支配されていた。
　インド先輩からは距離もあるとはいえ、呼吸の音も、走る足音の一つも聞こえなかったことも不思議に思えた。
　10分以上走ったところで、目の前に右折路が見えてくる。見失う前に追いつこうと意気込んだ時、路面の舗装が荒れているところに足を引っかけて転びかけた。体勢を立て直し、追いかけて右折したところは突き当たりだった。
　これでインド先輩を捕まえられると思い安堵（あんど）した瞬間、そこには人っ子一人いなかった。

　息苦しさとうるさい呼吸音が思考を乱す。
　行き止まりは高いバリケードとドアも窓もない建物の側面で構成されていて、簡単には乗り越えられそうもない。右に曲がったと見せかけて行き止まりに翠を駆け込ませて、反対方向に逃げたのかと周りを見渡すが誰もいない。気配も、何も感じられなかった。

「……」

　あの時見たインド先輩は確かに過去に見たまんまの、記憶通りの存在だった。物陰から出てきたときの、この世界で見た何者よりも現実感がある存在。それと追いかけっこをしていたら、あらぬところで跡形もなく消え去ってしまったなんて、一番現実的じゃない。

「疲れていたから……か……？」

息が整い始めると、段々と思考がクリアになってくる。
そうだ。インド先輩がここに一緒に転生してくるなどありえない。お友達を道づれサービスしてくれる神様なんて、都合がよすぎるじゃないか。そもそもこの世界で一番現実感がある存在って、それはつまりこの世界で一番現実感がない存在ということじゃないか。
幻覚だ。茂みのざわめきはきっと小動物か虫か鳥か。本当にそのあたりで、インド先輩が見えたのはきっと幻覚に違いない。危ないヤクとかそういうのをやっているわけではなくて、疲れすぎたために幻覚を見た。三日間、本来やるはずもない未知の言語の解読に脳を酷使していた。だから——、

“ɱбюɒиuзбʒ ɒэпзnɒuɒибю эз ðn ƚuиэ.”
「うわぁっ！？」

思わず大声が出てしまう。気配も何もないのに異世界語が聞こえたからだ。こんな奇妙なことがあった後の静寂でいきなり声が聞こえたら、誰でも驚く。たぶん近くの建物の中から話し声が聞こえたんだろう。
息を整えて、乱れた服装や髪も整える。部屋に戻ろう。そして、無限に寝よう。

翠はシャリヤのいる部屋に戻るために踵(きびす)を返した。

#32　なんて勘違い野郎だ、もう助からないゾ？

シャリヤと生活をしている宿舎まで帰ってくるのに、結構な時間がかかった。

レトラの街は非常に広い。インド先輩らしき幻を追いかけているうちに街の端まで行ってしまっていたらしい。
建物の中の階段の壁に掛けられた時計は既に午前三時を回っていた。いくらなんでも遅すぎる。さっさと部屋に戻って、すぐ寝よう。また幻覚を見たりしたらとんでもないことになりそうだ。

階段を上がってドアに手をかける。
シャリヤは寝ているだろうし、静かに入ってすぐ寝よう。奇妙なことがあったと説明できるほど語彙力があるわけでもないし、気持ちよく寝ている人間を叩(たた)き起(お)こしてまで言うべき出来事でもない。

「ただいま……ってうわっ！」

ドアを開けて、いきなり抱き付いてきたシャリヤに驚く。銀髪の頭は震えて、翠の胸に引っ付いている。
いきなりの出来事ですぐには分からなかったが、顔を押し付けられている胸から、震えた声で嗚咽(おえつ)しているのが聞こえたのでやっと状況が理解できた。

（泣いている……のか？）

地面に水滴が落ちる小さな音、嗚咽するシャリヤの声、震える体。何か尋常でないことが起きていることは確かだが、泣き付かれるまでのことを翠がした覚えはない。
とにかくこの状況では何が起こったのか聞くこともままならない。相当にリネパーイネ語力が溜まってきた今、ここで使わないでいつ使うのか。

シャリヤ、何があったのか言ってくれ
“ɱбзпцбоип, зпɔłɱ ʚэз сьłʚпu.”

シャリヤが顔を上げて、翠を茫然（ぼうぜん）と見上げる。大粒の涙が頬（ほお）を伝い、目は涙で満ちている。息もできないほどに感情が昂（たかぶ）って泣いてしまったためか、浅く激しい呼吸を繰り返している。
結果的にさらに翠の庇護欲（ひごよく）を掻（か）き立（た）てることとなった。

翠……　私は　――である　――――
“ʒuюouɒиn……ðn uɒ ʒuɫпuʔn xб юnзnɫɒ uɯnɱб……”

よく分からない。よく分からないが、悲しんでいる人にはよく分からないなりに対処してあげるべきだ。たとえ言葉が分かっても他人が悲しんでいる理由を自分が理解し、完全に分かってあげられるとは限らない。ならば、どちらにしても自分にはできる限りの慰めを与えることしかできない。

「大丈夫……大丈夫だから……」

何が大丈夫かなんて分からない。
でも、生きていればどんなに小さくても何かいいことが必ずやってくる。シャリヤが絶望のどん底にいたとしても、いずれ這（は）い上（あ）がってこられる。
そして、今それを手伝えるだけ手伝うのが翠の小さな恩返しになる。

日本語でやさしく呼びかけながらシャリヤの頭を撫（な）でていると落ち着いてきたのか、ふらふらとシャリヤはベッドに戻っていった。戻る前に何かぼそっと聞こえた気がするが、まあゆっくり寝させてやろう。翠も着替えてベッドに入る。疲れたのでシャワーは明日の朝でいいだろう。
結局泣いて抱き付いてきた理由は分からなかったが、翠に話す気

力がなくなるほどの出来事だったのだろうか。無理にとは言わないが、詳しい理由を知りたかった。でも、翠は語彙力も文法力もまだまだ全くないに等しいほどだ。それなのにこの世界がどんな様子で、紛争中の相手は誰で、シャリヤの親がここにいないのは何故で……などという感じで疑問はどんどん増えてゆく。そんな現状で彼女の悩みを理解することは可能なのか？

隣で眠るシャリヤの寝顔を確認する。
髪で口元が隠れているが、顔を見るに安心して眠りについている。まるで北欧のお嬢様みたいな感じだ。いや、それっぽいが、いきなり「私は北欧のギムリー出身で――」と今まで異世界語を喋（しゃべ）っていたシャリヤにべらべらと日本語を喋られたら卒倒して死んでしまう。
というかギムリーなんて国は北欧にはない。それはある事故を起こした航空機の機体の通称、もしくはカナダの空軍基地の名前だ。一体何と勘違いしたんだ……？
それはさておき、寝顔が可愛（かわい）いのはポイントが高い。悪戯したくなる衝動を増幅させるエネルギーがそこから放出されている。
涙の跡が頰に残っている。相当何かがショックだったのだろうと思ったが、翠はふと自分に非があるのではないかと気づいた。

（もしかして、俺がこんな遅くに部屋を勝手に出てしまったから、心配させてしまったのではないか？）

帰ってくるまでシャリヤが自分のことを待っていたというのもそれなら確かにつじつまが合う。だとしたら、“ʒuюouᴅиn（翠）, ðn uᴅ（私は） ʒuɫпuɿn（セーケイである）”の“ʒuɫпuɿn（セーケイ）”は「心配な」という意味の形容詞だろう。
その後の“xб（パ） юnʒnɫᴅ（ニリース） uɯnɱб（エディシャ）”はよく分からない。どれも知らない。シャリヤの迷惑にならない範囲で、もっと積極的に単語を学んでいくべきだろう。

正直なところ言語学習のやり方というものに王道はない。インド先輩は、語学を趣味としてやっている人間にも色々なアプローチをする人がいるから、どの学び方がいいと一概には言えない。だから、自分に合った学び方を探したらいい。そう言っていたし、無理のない限り、異世界人の言葉であるリネパーイネの会話に力を傾注して、楽しんで学んでいけたらいいな。

（楽しく、楽に……チーレムのために……）

そんなことを思いながら翠の異世界生活３日目は終わった。

・三日目学習内容

1. “-ᴅиn《スティ》”は呼格であった。
2. 「〜したい」と言いたいときは文頭に“ᴅuзuюu《ゼレネ》”を置く。「〜しなければならない」は“ɯuзnɔ《デリュ》”、「〜できる」は“ʒuюu《セーネ》”を同じように文頭に置くことで表す。

語彙

nuиэᴅи《イエトスト》（【名】水）、cɓɫʚnu《ハーミエ》（【名】何）、ɱuзnɱuз《フェリフェル》 иuɱи《テシュト》（【動句】好む？）、ɱɓʒu《シャーセ》（【間】ありがとう）、ɯuзnɔ《デリュ》（【助動】〜しなければならない）、зnɔɫɱ《ルクーフ》（【動】話す、言う）、ᴅuзuюu《ゼレネ》（【助動】〜したい）、ʒn《スィ》（【名】彼女）、nᴅ《イス》 xnпnɥ《ピキィ》（【動句】よくない状態になる？）、ɓɯ《アド》（【接】〜と〜）、ʚɓз《マル》（【接】そして）、ɥɓɫnuюзuɱuɱ《ヤーケンレシェフ》（【名】子音で終わっていて、最後の母音がɓの単語？）、uᴅиɱɓɫюuюзuɱuɱ《エストヴァーネンレシェフ》（【名】子音で終わっていて、最後の母音がuの単語？）、юuɔшuюзuɱuɱ《ネユデンレシェフ》（【名】子音で終わっていて、最後の母音がɔの単語？）、ɱnɫɥuюзuɱuɱ《フィーイェンレシェフ》（【名】子音で終わっていて、最後の母音がɔの単語？）、ʒuюu《セーネ》（【助動】〜できる）、юɓʒu《ナーセ》

（【間】ごめんなさい）、иuɒɔз зэи（テズュル ロット）（【副句】上手く）、ʒuɫпuɁn（セーケイ）（【形】心配な？）

Ex.3 side シャリヤ

シャリヤ姉！　セタ・カイカってできる？
“ƍʙч ɱʙзnчʙ¡ ʒuюu ʒэ uɒ ʒuиʙ пʙпnʙɁnɤ”

　そうフェリーサに言われたのが始まりであった。
　シャワーを浴びた後、部屋に戻ると翠がいなかった。翠が開けたのか、開きっぱなしの扉を閉め、そのまま寝てしまおうと思っていたけど、部屋をノックする音に起こされた。寝ぼけながらドアを開けると、そこにはフェリーサが立っていたのである。
　その手元には麻布で包まれた物体があった。緑色の糸で結ばれて、きつく閉じてある。多分これは「パイグ将棋（ʒ u ɫ п u）」だろう。

あなたの国ではパイグ将棋のことを「セタ・カイカ」と呼ぶの？
“ʒэɁɯ nʒʒэ nэ ɒиnuɒ ʒuɫпuɁn <ʒuиʙ пʙпnʙ>Ɂʒɤ”

　私は怪訝そうに尋ねた。するとフェリーサが“ʙɫ¡ ʒuɫпu¡”（ああ！パイグ将棋か！）と手を合わせて思い出したように言った。

あれはあたしの国っていうよりアイル語での名前ですよ。リパライン語での言い方が分からなかったの！
“зʙ зuɱ uɒ ðnɁɯ nʒʒэɁɯ ƍuɫзп зnɫɒ ʙnɁɫuю зпɔɫƍизuɒɒuɁɯ ƍuɫзп. ðn ɔɔюu юnƍ зnюuхʙɫnюuɁɯ ƍuɫзп¡”
なるほど、それじゃあ、あなたパイグ将棋をやりたいのね？
“ɱnɫзuɱ, ðuзɱ ɒuзuюu ʒэ uɒ ʒuɫпuɁn чʙɤ”

　そう尋ねるとフェリーサは首を縦に振ってそうであるという意思を表した。私が招くとフェリーサは部屋に入り、ベッドの上にパイグ将棋の盤になる麻布を広げた。
　パイグ将棋はお互いに24の駒と共有の駒「タム」を使って戦う

ボードゲームだ。リパラオネ系のボードゲームで有名なアツェフェーテとは異なり複雑なルールのゲームで、盤上には赤で色分けされた皇処と青で色分けされた皇水という地帯がある。皇処ではそこに居座る駒が強化され動き方が変わる。皇水に入るには入水判定ということにチャレンジして成功しなければならない。無限移動するような駒もあるが基本はさいころを振って、出た目しか移動できない。どの駒も移動するときには他の駒を飛び越えて移動することができる。

勝利条件はもっと複雑だ。取った駒の種類、その合わせ方、盤面での状況などによって役が定まっており、勝つためには役を合わせて目標点に達する必要がある。役を作り上げた側が、さらなる役を作るために続行宣言をしたり、それを防ぐことで既に相手が取っている役の点数を無効にしたりする駆け引きが繰り広げられる。

シャリヤ姉、季節と役はどういうふうにする？

“ȡɓч ɱɓзnчɓ, шuзnɔ ծnɒɒ uɒ uɬn ɱɓз cɓƚծnuɬш ȡэпзnɒэз ɓш xɓзиɓɔnзծ”

駒を所定の位置に並べ終わってから、フェリーサが思案顔で言う。

役が作られた時点で目標点に達していれば、一ゲームが終了する。しかし、目標点に達しない場合は最初の駒の位置から、役の成立で切り上げられるまでを一つの季節として、これを複数回行って目標点に到達するまで続けられる。この回数はルールで決められていて、短時間ルールでは上下半季制で行うことが多いが、正式なルールでは春　夏　秋　冬と四季制で行うらしい。春夏秋冬というのはラネーメの季節の移り変わりらしいが、季節といえば雨季と乾季だと思っていた私にはよく分からなかった。

二季制でやりましょう。役に関しては伝統ルールを

“зuʒɔ жɓɬш xɓзиɓɔnз nэ uɒ uɬn. ȡэпзnɒэз ծuзɒч зɔɒ ʒuзuuƚюэ.”

フェリーサがそれを了承して、ゲームが始まった。

そして、惨敗を喫して今に至る。フェリーサは“зuʒɔ onэзз(また一緒に) ϑnɒɒ ϑбп(遊ぼうね！) ɱnɱɫэюuϑi”などと言って、部屋を出て行ったが、シャリヤは悔しさで唇を噛(か)み切(き)りそうだった。

そもそもパイグ将棋をあまりやってこなかったこともあり、攻め方や守り方がよく分からなかった。フェリーサは手練(てだ)れの棋士だったようで、私の陣を一瞬で崩して、反撃の隙もなく負けてしまった。非常に面白くない勝負だった。しかし、年下であろうフェリーサの面前で駄々(だだ)をこねたり、途中で投げ出しては年上らしくないとも思った。静かに一ゲーム終わるまで耐えていたが、フェリーサが部屋を出て行ってから感情が溢(あふ)れてきた。ボードゲームの勝ち負け如(ごと)きで冷静さを失うのもどうかと思っていたが、悔しさが頭の中を、思考の自由を侵していくうちに涙さえ出てきた。

一人で長らく生きてきたのに、こんなことで冷静さを失って泣いてしまって、本当に情けない。情けなさすぎてさらに涙が出てくる。

そんな状況でドアノブが回転する音が聞こえた。どうやら、翠が帰ってきたようだった。

「＃◇＠■……＆■`？◆＃■！」

彼が入ってくるのを見て、自分の情けなさのあまり、勢いで抱き付いてしまった。翠が驚きのあまり、その母語が出てしまっているのを見ると申し訳なく思う。おかしいことは分かっていたが、ある程度落ち着くまで誰か受け入れてくれる人に甘えたかった。

“ɱбзnцбɒиn(シャリア), зпɔɫɱ(言う、) ϑэз(何に) cбɫϑnu(ある).”

翠の声が聞こえて、顔を上げる。そこには心配そうな表情で呼び

かけてくる彼の顔があった。多分、いきなり抱き付かれて翠自身も事情が呑(の)み込めず、混乱していることだろう。でも、詳しく説明できるほど落ち着いてはいなかった。

“ʒuɪoupɪn(翠)...... ծn uɒ ʒuŀпuʇn xƃ ɪonʒnŀɒ uɯnɱƃ(私はパイグ将棋をして、それで負けちゃった)......”

「＊■゛！■……＋■＃■？●゛％▲……」

翠は私の言葉を聞いて頭を撫でてくれた。その言葉は分からず、私の状況説明は一つも通じていない様子だったが、やさしく撫でてくれた。その事実だけで心のざわめきが一気に消えていった気がした。

元々眠かったから、泣き疲れて体力が本当になくなってしまった。後ろにベッドがあるのを認めて、翠に小声で“ɱƃʒu(ありがとう)”と言ってから、ベッドにふらつきながら入った。

落ち着いてから考えると、自分のパイグ将棋の経験は数回だったし、手練れそうなラネーメ系の人間に勝てるかというとそんなわけがないのだ。もっと戦い方を研究してから、フェリーサにはまたリベンジしよう。

そう思いながら、シャリヤは眠りについた。

ᴅuзuюu ∂n бпɫбюuп

四日目　文字を読みたい

#33　まるで将棋だな

今日も寝起きは至って良好だった。

シャワーを浴びて、着替える。この着替えは、シャリヤが用意してくれているらしいが、洗濯などはどこでどうしているのかよく分からなかった。1日と12時間ほどしかここにいないが、やっていることはシャリヤとかエレーナの話を聞いて、言語解析して、疲れて突っ伏して寝るの繰り返しである。言語を学ばなければ先に進めないことはこれまでで十分分かっている。

全くもって一般的な異世界転生作品の言語習得描写がファンタジーだと思えてくる。

翻訳魔法があったり、日本語とほぼ同じ言語が喋られていたりという設定ならまだ許せる。以前読んだ人気作のラノベを思い出して主人公のあまりの能力の優秀さに嫉妬したこともあった。天才だから古典語を含めて18ヶ国語を喋れて、その兄弟も6言語をマスターしているという。

インド先輩が言うに、言語習得数をその人の有能さを測る尺度として使うには脆弱性（ぜいじゃくせい）があるらしい。例えば、ヒンディー語とウルドゥー語、トクピシンとビスラマ語、セルビア語とクロアチア語とボスニア語とモンテネグロ語、スウェーデン語とデンマーク語とノルウェー語ブークモールとノルウェー語ニーノシュク、とまあそれぞれ片方の言語を習得すれば、それと似たような、あるいはほぼ同じ言語やその方言が理解できるようになる。

言語習得数を増やすだけならヒンディー語、トクピシン、セルビア語、ノルウェー語の4言語ができるだけで母語も含め13言語できると自称できることになる。あとはこれに漢文だの英語だの日本語だのとラテン語・古典ギリシャ語などを付け加えればすぐに18

言語なんかには到達する。と、インド先輩は言っていたが一般ピーポーである翠にとっては４言語できる時点で「はいプロ、世界一言語習得が上手。言語習得界の tourist、通訳時代の終焉を告げる者、実質言語、言語習得するために生まれてきた人間」と煽れるはずだが、きっとインド先輩のいた場所ではそんな人間はプロでも何でもなかったのかもしれない。

ちなみに tourist というのは、小学６年生でプログラミングの世界大会に出場し、高校３年生までにその大会で６連続で金メダルを獲得したりしている最強のプログラマーのことだそうだ。競技プログラミングという界隈では、この「はいプロ構文」というのを使って人を煽るらしい。インド先輩の友人がその界隈の人間で、彼もよくこの構文を使っていたわけだが、どうやらその癖は翠にも移っていたようだ。

（うーん……）

とりあえず、翠が今すべきことは言語習得界の tourist になることではない。リネパーイネ語をさらに習得するということだ。まあ、そのためには隣のベッドで未だぐっすり健康的に寝ているシャリヤお嬢様を起こさなければならないわけだが、如何せん、昨日にそれをやって大失敗して寿命を削っているので起こすのも億劫だ。かといって、勝手に出ていってまた心配させるのもよくない。さて、どうしよう。

そんなことを考えているうちにドアが大きな音を立てて開いた。ドアを開けたのは昨日台所で積乱雲状の謎の物体の生成に成功したフェリーサだった。真っ黒だった時とは一転して、ベージュのポンチョにパンツルックで落ち着いた雰囲気になっている。フェリーサだと分かったのは、ポニーテールでアホ毛が自己主張をしているかの如くはねるように動いているその特徴的なシルエットが、眠気ま

なこなりによく見えたからだった。

“ᴅʙзʙɫɔʙ（おはよう） ɱnɥ（——） ɥʙṳṉʙᴅʙпnᴅиn（八ヶ崎）.”
“あぁ……ɥʙ, ᴅʙзʙɫɔʙ（うん、おはよう）.”

そういえば、この子は毎度の通り「八ヶ崎」って呼んでくるけど、もしかしたらこっちの名前の並び方を間違えられているかもしれない。

まあ、なんていうかフェリーサやエレーナは一見するとアジア人に見えるし、翠も同じ民族だと思われたりしているかもしれない。そういう類推ができるほど、ここは民族のるつぼ状態なんだろうか。そんでもって紛争中ってことはユーゴスラビア内戦のような状態だとも考えられる。

正義だろうが悪だろうが、どっちにしろ生き残るために戦う必要があるわけだが、このレトラにいる限り当分は敵の侵攻を受けることはなさそうだ。あれだけ高いバリケードがあれば……っとこれ以上言及するとフラグになるのでやめておこう。

“ɷʙɥ（ヴァイ） ɱʙзnɥʙ ʚэз ɱʙз ɱɔжʙɤ（シャリヤはそこにいる？）”

フェリーサがシャリヤの寝るベッドを指さして言う。

一瞬シャリヤが身を震わせた気がしたが、気のせいだろうか。さっきまでぐっすり深い眠りについていたはずだから多分何かの見間違いだろう。それはさておき、フェリーサの質問に答えたほうがよさそうだ。答えないで怪訝そうにシャリヤのベッドのほうを見つめ続けているのはどう見ても不自然だ。

“ɥʙ, ʒn ʚэз ɱʙз ɱɔжʙ ʚʙз uᴅ cʙɫʚnuɤ（ああ、彼女はそこにいるが何の用かな？）”

フェリーサは部屋の中に入ってきて、翠の隣に座る。そして、その手元にある布で覆われた何かを見せてきた。中で小さいパーツがぶつかり合って小さな音を繰り返していたので、木片か何かが布の中に入っていることが分かった。

八ヶ崎は心配になることができますか？
“ʒuюu ɱnɥ ɥбйпбɒбпn uɒ ʒuƚпuɬnɣ”
「えっ……？」

「心配になることができる」ってなんだろう。この中身を見たら心配になるかもしれないぞとか、そういう意味なんだろうか。木片を見て怖がる人間がどれだけこの世界で普通かは知らないが、翠はそんなことはない。

いやそんなことはない、配慮ありがとう
“юnʊ, ɱɔжб uɒ юnʊ. ɱбʒu.”

　フェリーサはその返答によく分からないという感じの表情をしながら、その包みを結んでいた緑の紐(ひも)をほどく。多分、フェリーサ自身もリネパーイネ語の初学者だから会話が完全に通じるというわけでもないのだろう。

　開かれた布とその中身を見て、翠は驚愕(きょうがく)した。
　布を開いて出てきたのは漢字のような文字が彫られた正方形の木片、そして布には網目状に線が引かれている。これは……多分あれだな……？

「将棋か……？」
八ヶ崎は　——を話す？
“ɥʒɛ ɛu……ɛaɪ……ɣ ɱnɥ ɥбйпбɒбпn ʒпɔƚɱ xuƚпʊnƚʒuɣ”

　フェリーサが何を言っているかは全然分からないが、ついに暇つ

ぶしを見つけた。きっとこれはこの異世界のボードゲームなのだ。
　そんなことを思いながら期待感に胸を躍らせていると、シャリヤが恨めしそうにフェリーサの後ろに立っていることに気づいた。

“ɒn（彼は） зпɔłɱ̰ юnϱ̰ xułn̤̈ϱ̰nłзu（──を話さない）...... ɱ̰n бзɒби, ϱ̰зкюɔи. łułɱ̰ ðбпч ðn......”

　シャリヤは後ろからフェリーサの肩を摑（つか）んで、違和感しかない引きつった笑みでこちらを見つめていた。何か恐ろしい雰囲気を感じ取った翠はその威圧感に圧されるしかなかった。

#34　コロニー

　部屋の脇にあるテーブルには、布が広げられ、その上に正方形に整形された木片が並べられている。木片には漢字のような文字が彫られ、向かい合うように配置されている。

（赤い駒と黒い駒があるな……）

　装飾なのかよく分からないが、雰囲気は日本の将棋そのものだ。真ん中のどっち付かずのところに駒が置いてあるが、これは特殊なルールがあるんだろうか。
　二人はお互いにその盤面を間に置いて、駒を動かし始めた。シャリヤはまず自分側の最前列の駒を一つ前に出す。「失」の真ん中の線を取り除いたような文字はどうやら、将棋でいう「歩」なのだろう。
　フェリーサはずっとニコニコしながら考えている様子だが、シャリヤの方は何かイライラしている様子だった。フェリーサにこのボ

ードゲームで負け続きだったのだろうか。将棋とかチェスとか、気晴らしにやるのは良いけど負け続けると気分が悪くなるからなあ……。

（あれ？　とすると昨日の泣き付いてきたのってもしかして……）

頭の中から雑念を払う。自分が泣くほど心配されているなんて勘違いをしていたなら、穴を掘ってその中に入って爆撃してほしいほどに恥ずかしい。調子に乗った口ばかり、よく揃（そろ）えたものですな。
全くお笑いだ。インド先輩がいたら、奴も笑うでしょうな。
フェリーサは「申」みたいな文字の真ん中の線を伸ばしたようなものが彫られた駒を２回動かして、シャリヤが先程動かした「失」を取ってしまった。
シャリヤはしまったとばかりに驚いている。
そして、「申」の駒を二段階動かして元の場所に戻す。どうやらこの「申」は二人が共有して動かせる駒らしい。フェリーサは続けて攻勢を続ける。

ある程度お互いの盤面の駒が少なくなってくると途中でフェリーサが“иБɱэиi（タショト！）”と言った。シャリヤは驚いた様子で立ち上がってフェリーサの駒を数えていたが、暫（しばら）くするともう駄目だとばかりにベッドの方に飛び込んで潜ってしまった。らしくもなく手足をバタバタさせて悔しがっている姿はただただ可愛い。どうやら勝敗は決したようだ。
この将棋みたいなボードゲームができれば自分も暇つぶしに使えるし、この世界で新しく会った人間に対して「じゃあ、ボードゲームやらね？」という感じで親睦を深めるのにも使える。

“ɱuзnƚзБɒиn, ϑn юnϱ ɱnƚзuɱ ɱжБ. ɱжБ uɒ cБƚϑnuɤ”（フェリーサ、俺はこれが分からない。これは何？）

あなた——理解することは　——である。　あなたは理解しできないことができる　リネパーイネ

“ʚnuɬ…… ʒəɫɒи(あなた) ɱnɬʒuɱə(理解することは) uɒ ɒюnuииɥ(——である). ʒuюu ʒə юnɒ ɱnɬʒuɱ(あなたは理解しできないことができる) ——— юƃɒиuəюɥ ʒnюuxƃɬnюu(リネパーイネ).”

うん……？　多分文脈から考えて理解できないって言っているのか……？　リネパーイネ語ができないから、君には理解できないと……。言ってることは分かるが、リネパーイネ語を学習中のフェリーサに言われると精神的にずどんと来る……。

ただ、あまりフェリーサからリネパーイネ語を学ぶのはよくなさそうだ。翠よりはレベルが高い学習者っぽいが、学習者特有の言葉の癖とかが翠に移ったりすれば面倒なことになる。

インド先輩が言っていたピジン言語やクレオール言語のような状態になったらシャリヤやエレーナも困ってしまうだろう。ピジン言語は、貿易などの関係で別々の母語を話す人々の間で意思疎通するために自然に構築されていった言語のことだ。元の言語の語形が単純化され、文法も語彙も音韻も簡略化されたり、話者の母語に影響されたりする傾向にある。

例えば、フランス語の人称変化だったり、英語の三人称単数現在の s が消え、英語で sea というところが solwara、つまり salt water「塩水」という風に簡略化されたりする。

あらゆる理不尽を持ち合わせる英語が簡単になれば願ったり叶(かな)ったりのはずだが、大抵本国のその言語の基となった言語を喋る人々からは崩れた言語であると忌まれ、公式では使いづらくなってしまう。そのピジンの話者が子供に母語としてピジンを教え、文法や発音、語彙が発達してくるとピジンはクレオール言語になる。しかし、経済的、軍事的に強い言語の話者から蔑まれた言語の文化と文学の発達は遅れてしまう。

インド先輩はそれを非常に嫌なことだと言っていた。どのような言語であれ、その言語文化と文学は人類の価値になると。

翠とフェリーサだけでピジンを完成させるなんてことはなさそう

だが、変な癖がついてはこちらも困る。ここはシャリヤに正しいボードゲームの名前を訊（き）くことから始めよう。

“ɱбзnчбDиn, ɱжб˧ɯ ɱułзп uD cбłðnuɤ”（シャリヤ、これの名前は何？）
“бł, эłиnзэю юэю uз ðnị”（私！）

シャリヤが水を得た魚のようにベッドから一瞬で翠の目の前に出てくる。

“ɱжб uD зułпu.”（これは心配な）
「……」

やっぱり！
“зułпu˧n”（セーケイ）は「心配な」じゃなくて、“зułпu”（セーケ）と“-˧n”（イ）からできていて、“зułпu”（セーケ）はこのボードゲームの名前だったのだ！ “ðn（ミ） uD（エス） зułпu˧n（セーケ……） xб（パ） юnзnłD（ニリース） uɯnɱб（エディシャ）”とか言っていたけど、“uD～-˧n”で多分「～をする」という意味になるはず。“юnзnłD（ニリース） uɯnɱб（エディシャ）”はよく分からないけど、「負け続けた」とかそのあたりだろう。

（彼女の問題を自分への心配に間違えるとか勘違いも甚だしすぎる……）

言語学習では間違えながら覚えるということが度々ある。それにしても、間違い方が酷すぎた。彼女が翠のことを心配して泣いてくれたなんて思っていたのだからおめでたすぎる。というか、これはもはや言語学習とかいう問題じゃなくて普通にコミュニケーションの問題だ。泣いていてまともに話せないうえに、言葉も完全には通じない状況からどうして泣いている理由が分かろうか。

翠が沈痛な面持ちでいることに気付いたのか、シャリヤは“ʒэ（君は）юnзn（ニリ）ʒułпu......ɤ（セーケ……？）”とか言っている。心配そうに翠の顔を覗（のぞ）いてきた。

だが、これは好機だ。もっとセーケの事に詳しくなってシャリヤやフェリーサと仲良くなるチャンスだ。

いや俺はセーケを知りたい。そしてセーケをやってみたい！

“юnϱ, ɒuзuюu ծn ɱnłзuɱ ʒułпu ծбз ɒuзuюu ծn uɒ ʒułпuɬni”

#35　意外な点数

私は――すべき――――――

“ɯuзnɔ ծn пбюиn ɱбn cбծuз......”

シャリヤは悩んでいる。多分どうやってセーケを翠に教えようかということなのだろう。翠も「将棋を教えてくれ」と言われたら、どこから教えればいいかなんて分からない。駒の動かし方とか成り方とかは教えられるだろうが、戦法とかに至ってはさっぱり分からない。

そもそも戦術が教えられるほど、例えば通算5000兆勝でもしていれば異世界転生なんてせずに済んでいるはずだ。たいてい異世界転生するような人間はサブカルクソひきこもりで美少女だけ助けるようなジゴロで、殺戮（さつりく）を苦としない一般無能サイコパスと相場が決まっている。誰がジゴロだ。

あー　――シャリヤ、――――――

“бł, ϱбч ɱбзnчбɒиn, ɱuюɱnɒ ծбзɱбłюэ.”

悩んでいるシャリヤにフェリーサが話しかける。ボードゲーム上の駒の字を指の腹で撫でながら、持ち上げたり、打ったりしながら、話を続けていた。そして、翠は一つ重要なことを思い出した。

“-ɿn”（イ）の話である。
“uᴅ ʒułпuɿn.”（エス セーケイ）は「セーケをする」という意味らしいから、多分「〜を」の格を表す語尾のような気がする。“-ɿɯ”（〜の）と同じ、いわゆる対格（Accusative）を表す語尾なのだろう。

“ɱʙзnɥʙᴅиn, ʒuюu ðn зпɔłɱ ɱжʙɤ <ðn юɔнuɔɿn ʙпłʙюиn>”（シャリヤ、俺はこう言える？「俺は本を読む」）
“юnɷ, <ðnɿᴅ юɔнuɔɿn ʙпłʙюиn>.”（いいえ「私は本を読む」）

ふむふむ。
基本の語順はどうやらＳＶＯ（主語・動詞・目的語）らしいが、その語順を崩すこともできるらしい。例えば、ＳＯＶ（主語・目的語・動詞）にしたいときは主語に“-ɿᴅ”（〜は）、目的語に“-ɿn”（〜を）をつけることでどの単語がどの格に当たるのかを明示することができると。

つまるところ、“-ɿᴅ”（ス）は「〜は」という意味を表す主格（Nominative）を表す語尾だ。

“ʒułпuɿn ʒɘɿᴅ uᴅɤ”（セーケを君がする？）
“ɥʙ, ðn uᴅ ʒułпuɿn.”（うん、私はセーケをする）

珍しいのか何なのかについては、他の言語がどうなっているか知らないために分からないが、面倒なことに「〜だ」という意味の“uᴅ”（エス）はどうやら２つの用法を持っているらしい。
まず、一番最初に出てきた“単語 uᴅ（エス） 単語”の形だ。この形は「単語１は単語２である」という意味を表す。インド先輩の言葉を借りるとこの“uᴅ”（エス）はコピュラ動詞ということができる。

次に、“単語 uᴅ（エス） 単語 -ɿn（イ）”の形。
この形はまだ一例しか出てきていないが、“-ɿn”（〜を）の意味が確定

した時点でこの形の“uD（エス）”は「〜する」という意味に見えてくる。いわゆる代動詞というもので、英語の“do”や日本語の「する」に当たる単語だろう。面白いことにリネパーイネ語では代動詞とコピュラ動詞が同じ単語でも単語に付いた“-ɪ̃n（イ）”などで表される格によってきっぱりと用法を分けることができるということだ！

(変な言語だ……)

大抵 be 動詞にあたる動詞は存在動詞的であると言われる。英語の be は普通に存在動詞としても使う。しかも、インド先輩が言っていたタミル語の“இரு”もそもそも原義は「ある」らしいし、日本語の「〜である」もよく見るとそもそも存在動詞である。

だが、このリネパーイネ語はどちらかというとそうでもない。“uD（エス）”は代動詞の意味を持ち合わせる。ということは、何か違う意味のイメージを持ち合わせているのかもしれない。

もし、これに加えて“uD（エス）”に他の格がついて他の意味になる！とかになったら本当に面倒だ。というか、実はすべての動詞が名詞につく格の種類によって意味が変わるとか、そういうこともあるかもしれない。“uD（エス）”のように全然違う意味になるのならまだしも、名詞の格ごとに少しずつ動詞のニュアンスが変化していくようだと、自然な会話をするのは難しそうだ。

“ʒuюou ðn иuDɔɜ зэи ɱnɫзuɱ юnϱ（簡単には理解できないものだなあ）......”
“зnɫD, ɱnɥ ʒuюouDиn（翠）, ɯuзnɔ ʒэ зuɫDDu зnюuxБɫnюu（あなたはリネパーイネを——すべき）.”

フェリーサは手をひらひらさせて言う。駒はいつの間にか整理整頓されており、きれいに並べられて盤面だったうす茶色の布に包まれ、緑に染色された縄で結ばれる。フェリーサの手さばきは一流の

作法のようであったし、シャリヤを即座に打ち負かすほどの強さから見て、フェリーサはセーケのプロ棋士だったりするかもしれない。

（シャリヤがただ弱いだけかもしれないけど）

フェリーサが言ったことは多分、「とにかくお前はリネパーイネをやってまともに話せるようにしろ」ということなのだろう。“зuɫᴅᴅu”（レースゼ）は多分「勉強する」とかの意味だろう。顔に似合わず翠よりレベルが高いリネパーイネ語力を持っていて、そんなことを言われてしまうとさすがに傷つく。八ヶ崎翠の心はそこまで強くない。

こういうときはインド先輩のTOEICの点数が400点台であったことを思い出して心を落ち着けよう。彼、言語学的な知識だけは豊富にあるうえ、一応英語圏のインドに住んでいた経験があるのになぜか英語が苦手らしいのだ。世の中の七不思議くらいに入りそうなものだ。

“цБ, ðБз ɱuзnɫʒБ пБюиn зnюuxБɫnюu ʒuюuɬиц.”（うん、じゃあフェリーサはリネパーイネを――する――翠――）

フェリーサにシャリヤが何かの冊子を渡す。フェリーサは驚きつつもそれを受け取ったが、しばらくしてからシャリヤが内容を色々と説明している様子であった。

説明を聞いていると名詞クラスに関わる話も出てきたみたいだが、知らない単語ばかりでほとんど何も理解できなかった。というか、教科書があるなら渡してくれてもいいじゃないか？　先の授業の内容はまだ教えられないって？　そんな殺生な。

そんなことを考えていると、突然部屋のドアが開いてまた新しい訪問者が来た。そういえば、「訪問者」はエスペラント語では“viziti”「来る」の語幹“vizit-”に「する人」を表す“-anto”を付

けた単語らしい。どこぞのノベルゲーでは「異世界からの転移者」を表していたが。

“ɒбзбɫɔб(よう), зиʒɔ иɜшnиɒи ɱɔб шɔɱnиюэ.”

フランクな感じで入ってきたのは、先日フェリーサによって部屋をボロボロにされたレシェールおじさんであった。

#36　ドゥーシェ！　ドゥーシェ！　ドゥーシェ！

急に現れたレシェールの目的はよく分らなかったが身なりが以前のそれとは全く別であった。

ビニール製らしきブーツに、茶色のオーバーオールを着ている。ダサいと言ってはあれだが、汚れに対しては完全装備であるといえよう。手には鋤(すき)というか、スコップのようなものを持っているし、完全にアグリカルチャー仕様の格好だ。一体何しにきたのだろうか。

“ʒбɫзn ðnɒɒ шɔɱnию шuзnɔ.”(私はサーリをドゥーシェンしなければならない)

シャリヤがレシェールの来訪を確認すると、“ɒбзбɫɔб(ザラーウア)”と言ったのちにそう言った。

それはそうと、格語尾が分かったから大体文章の構造も分かるようになってきた。「ミス」は一人称“ðn(ミ)”と主格語尾“-ɿɒ(ス)”がくっついたものだ。「サーリ」は名詞語幹の“ʒбɫз(サール)”に“-ɿn(イ)”が付いたものだ。“шuзnɔ(デリュ)”は何故ここにきているのか分からないが助動詞か副詞のような何かだろう。

詳細な意味が分からなくても文章構造が分かるようになれば、さらに「お察しください」能力が向上する。

ところで、“ʒбꜰз（サール）”ってなんなんだろう。というか「サールをドゥーシェンしなければならない」ってルー語みたいだな……。

“чб, ðnꞁич（うん、私）иэшnuɒи. ϱбч ɱбзnчбɒиnı（シャリヤ！）”

フェリーサが立ち上がり、元気よくそう言い放って部屋から出ていく。シャリヤとレシェールはそれを見て何とも思っていない様子であったが、翠としては文脈が共有できておらず何が何だかよく分からない状況であった。

フェリーサが隣の部屋でまたやらかしているのか、がちゃがちゃと大音量の雑音が響いてくる。レシェールはフェリーサが出ていったほうを眺めながら啞然（あぜん）とした様子だったが、特に止めにいく様子もなかった。

（まあ、止められないだろうなあ……）

フェリーサが走って戻ってくる足音が聞こえる。

よく見ると、レシェールと同じ服装と手にスコップを携えていた。えっへんという感じで胸を張ってレシェールの後ろに立っている。

（ない胸を張るってか……）

何故これだけのことにあれだけの雑音が出るのか、不思議でしょうがない。

あれだけのおてんば娘を一夜にしてお淑（しと）やかなシャリヤのような人間にするには一苦労するだろう。身支度をしてきたフェリーサを一瞥（いちべつ）したレシェールも、ため息をついてお手上げの様子であった。

“ðбз, cбꜰðnu ðn шɔɱnuюɤ（それで、何を私はドゥーシェンする？）”

シャリヤがレシェールに問いかける。
“ɯɔɱnuю(ドゥーシェン)”が動詞であることが分かっているから文脈的には「何をドゥーシェンするか？」という問いなのだろう。どうやら「何」という意味の“cбƚϑnu(ハーミェ)”が目的語として出てくるときは、対格語尾“-ɿn(イ)”が付かなくても文頭に来ることができるらしい。ただ、語順が崩れたときには対格語尾も主格語尾も同時に出てきていたはずなのに、この文では“ϑn(ミ)”が“ϑnɿᴅ(ミス)”になっていないのは腑(ふ)に落ちないが。

“ϑnᴅᴅ ɯɔɱnuю ᴅюɔнƚ.”(俺はスニューをドゥーシェンする)

なるほど、スニューですか……。

スニューってなんだよ！？

レシェールの発言でドゥーシェンする内容が“ᴅюɔнƚ(スニュー)”であることが分かったが、“ᴅюɔнƚ(スニュー)”とは何なのか教えてもらいたいものだ。というか、“ɯɔɱnuю(ドゥーシェン)”の意味も知りたい。

“бƚ, ɱбзnчбᴅиn, <ɯɔɱnuю> бɯ <ᴅюɔнƚ> uᴅ cбƚϑnuɣ”(あー シャリヤ「ドゥーシェン」と「スニュー」って何？)
“ϑuƚ...... ɱжб uᴅ <ᴅюɔнƚ>.”(えっと……「スニュー」はこれだね)

シャリヤは寝床の横にあった手帳の空白のページにペンでササッとギザギザを描く。そこに「人」を意味する“збƚиб(ラータ)”を教えてもらった時の「大」のような文字が描かれる。加えて腕と思われる横線の端にはスコップが描かれる。これはまあ、つまるところ……農業か。

“ðn ɱnɫзuɱ......”（分かったぞ……）

“ɯɔɱnuю”（ドゥーシェン）の対象が“ɒюɔнɫ”（農業）ということは、“ɯɔɱnuю”（ドゥーシェン）の意味は働くとかだろうか。つまりレシェールは自分たちに働いてほしかった？　働かざる者食うべからずルールが自分に向かって急速度で接近しているらしい。ただやり方を知らなくてはどうにもならなそうではある。

“ɒuзuюu ðn ɱnɫзuɱ ɒюɔнɫ.”（俺は農業を知りたい）
“цБ, ðnɒɒ <пБюиn> <ɯɔɱnuюuз>.”（ああ、私は「ドゥーシェネル」を「カンティ」する）

ん？　“ɯɔɱnuюuз”（ドゥーシェネル）ってなんだろう。
たしか、“пБюиn”（カンティ）は今まで何回か言われていた。シャリヤにセーケを教えてほしいと言った時は“ɯuзnɔ ðn пБюиn ɱБз сБðuз”（ハーメルにて私はカンティする）とか言っていた。多分文脈的には“пБюиn”（カンティ）は「教える」だろう。つまり、「私はドゥーシェネルを教える」と読むことができる。“ɯɔɱnuюuз”（ドゥーシェネル）は「働く」という意味だと予想した“ɯɔɱnuю”（ドゥーシェン）によく似ている。分離された“-uз”（エル）は文脈的には「～のやり方、仕方」を表しそうだ。そうすると「私は働き方を教えよう」のような文章であることが分かる。

“Бɫ...... цБ ɱБзu ɱБзnцБɒиn.”（えっと　うん、ありがとうシャリヤ）
“ðБз, ɯuзnɔ зэ ðБпсɱБзɔɫ ɒюɔнɫзnɫɒɔнɔɫз.”（そして、君は――すべきだ）

そう言って、レシェールは彼が着ているのと同じような服を渡してきた。多分着替えてこいということなんだろう。衆人環境で着替える趣味はないので、シャリヤたちには別の部屋に行ってもらうことにした。
レシェールは早くしろよとばかりに小言をぶつぶつと言っていた

が分からないことを聞いていてもしょうがないし、結局部屋の外に出ていってもらった。

着替えをしているうちに一つ気になるものが目に入った。
シャリヤの手帳である。いつも翠に何かを筆談で教えるときに役立っているそれであるが、わりと古そうな手帳であった。

（少しくらい中を見てもいいだろうか）

多分書いてあることは文字も読めないし、分からないだろうが。一番の知り合いの手帳なんて好奇心が湧かないわけもない。
翠は閉じているそれを手に取って、開いた。

#37　ヴォイニッチ手稿ほどではない

——私は——
“зuʒɔ ðnᴅᴅ ɯuᴅıonumi”

そう言って街の人が水の入ったコップを持ってきたところで翠たちは作業を中断した。
結局のところ、シャリヤの手帳の中には何が書いてあるのかよく分からなかった。最初の方は、日付と内容を綴っているような日記と思われる部分があった。途中でそれは途切れていて、関係ない絵や文字が描かれていた。以前シャリヤが翠に筆談で言葉や文字を教えようとし、それを理解しようと頑張った翠の努力の残滓（ざんし）なのだろう。
それを懐かしいとは思いながらも、その前の内容にどうしても気が向いてしまう。以前の内容、つまり翠がここに来る前の内容が書かれているということだ。シャリヤにはいろいろと謎が多い。親族

が家に一人もいなかったこと、それに関して悲しんでいる様子もない状態、エレーナにも共通するこの内容はきっとこの世界の現状にも関わっているはずだ。

（それにしても、文字が読めないと本当に何も分からないなあ）

それが分かれば、分からない単語が出てこようが、今まで覚えてきた単語を駆使して国際言語学オリンピックの言語パズルのように読み解ける。つまり、文字が読めるだけで、苦労しないとは言わないが解読者としては爆アドになるのだ。シャリヤの手帳、スキュリオーティエ教典、辞書が存在しているうえ、レトラの広い街を探せば他にも文書が見つかるはずだ。それだけあれば十分なテキスト量で、言語理解もすいすい進むはずだ。
……文字が読めれば、の話だが。

シャリヤたちは談笑している。興味深く街の人間の話を聞いている彼女の顔はいつにも増して輝かしい。屈託のない笑みが周りに輝きを振りまいているようだ。
作業は“DЮƆHŀ（スニュー）”、つまり農作業だったわけだが苗を植えたり、成果を収穫したりする単純労働だ。そこまで疲れることもないし、毎日の作業は少しずつ変わってくるようでルーチンワークにもならなそうだし、朝早く起きることになるから自然に生活リズムが整っていくはずだ。夜型の身体も慣れてくれば、健康体に元通りというわけで青年には持ってこいの作業なのかもしれない。
それはそうと、休憩が終われば、あとは自由時間なのだろう。それぞれ持ち場から適当に離れていっていた。

（チャンスだ）

そう、シャリヤお嬢様に文字を教えてもらうチャンスである。前回は“ɜ（シェノネン・ウー）”の驚異的な謎の前に敗北してしまったが、今回はとりあえず全部の文字を一気に見てラテン文字に結びつけてしまおう。多くの文章を使った言語パズル的解析作業には別に発音は必要ない。発音は後々適当にあてるとして、文字の基礎的な発音の仕方とラテン文字を対応させれば脳内で大体の読み方も処理できる。

シャリヤ　俺は……文字を教えて……
“ɱБзnцБɒиn, ɒuзuюu ϑnɻɒ......зɜцэиɻn......пБюиn”

あれ、教えてもらうって何て言うんだ……？
いわゆる態（voice）というやつの表現方法が分からない。「～される」を表す受動態、「～させる」を表す使役態などがあるわけだが、リネパーイネ語ではどう言うべきなんだろう。

うーん　あなたは――教えること私――文字を？
“cϑϑ, ɒuзuюu ʒэ ɋuзuɒ пБюиnэ ϑnɻɒ зɜцэиɻnɣ”

うむむ、また長文だ。
“пБюиnэ（カンテョ）”は“пБюиn（教える）”に“-э（～すること）”を付けた形で、「教えること」だ。“ʒэ（あなた）”が主語として、“пБюиnэ（教えること）”が目的語になるとしたら多分“ɋuзuɒ（ヴェレス）”が動詞になるはずだ。
もしかしたら、“пБюиnэ（教えること）”が“ϑnɻɒ（私は）”と“зɜцэиɻn（文字を）”を主語と目的語に取っていて、合わせて「私が文字を教えること」なのかもしれない。そうすると、文全体では「私が文字を教えることをあなたは……したい？」と言っていることになるはずだ。
文脈的には「望む」とかが来るはずだが、“ɒuзuюu（～したい）”があるから「望みたい」になってしまっておかしくなる。

「ヴェレス」って何？
“<ɋuзuɒ> uɒ cБɫϑnuɣ”

考えるだけでなくちゃんと訊くべきだろう。別に座学をしているわけではないし、目の前にネイティブがいるのだから。
シャリヤは翠の問いを聞いて、悩んでいる様子であった。相手が知らない言葉を使ってその言葉を教えるのは非常に難しい。
インド先輩も同じような話をしていたが、彼の場合はインドのタミル・ナードゥ州に住んでいた時に国際タミル語研究所と呼ばれる語学研究機関に通っていたらしい。その時タミル語を使ってタミル語を学んだことがあるそうだ。
そのうえ、隣の席の学習者はドイツ人でドイツ語で喋(しゃべ)らないといけないし、またその横とは英語で喋り、その横とはマラヤーラム語で喋り……という地獄状態であったらしく、家に帰ってくるたびに脳の回路が焼けるかと思ったとスカイプで話していたのが記憶に残っている。
ともかく、今はシャリヤの手元に手帳もないし、こんなところでは落ち着いて話もできない。一旦部屋に戻ってから話をするべきだと思っているらしかった。

シャリヤに自分たちの部屋がある建物の方を指し示して一旦戻ろうと意思を伝える。シャリヤもそれに気づいたのか、頷(うなず)いて一緒に建物に戻ることにした。

「平和……だな……」
“юɤ cuŀŀ3Бɤ”

つい口から零れた日本語にシャリヤが尋ねてくる。何かリネパーイネ語を喋ったのだと勘違いされたのかもしれないが首を振って、何でもないと否定する。
この平和がフラグにならなければいいが。ともかく文字を学んで、語彙を増やして、この世界の現状を知ることも重要なことだ。

やっていかなくてはなるまい。

#38　させたりさせなかったり

それでは「ヴェレス」について教えてくれ
“ꝺбз, пбюиn <ɋuзuᴅ>.”

作業場から部屋のある建物までの距離はそこまで遠くない。歩いて数分もかからないくらいだ。レトラの街がいくら広いとはいえ、様々な生活に関わる設備や場所は密集しているらしい。レトラから一歩も外に出ることなく、すべてのことを済ませられるようになっている。今まで翠が見てきたものは農場や住宅地、製菓材料店や食堂だが、多分娯楽に関わる場所だとか図書館のようなものもあっていいはずだ。

えーっと、君は私の文字を学びたい――
“ꝺuƚ, ᴅuзuюu ʒэ зuƚᴅᴅu ꝺnꞁɯ зэҹэи инƚюuɤ”
あ、うん
“бƚ, ҹб.”

シャリヤが手帳とペンを持って、椅子に戻ってきた。女の子なので農作業の後に身だしなみを整えるのに時間がかかるだろうと思っていたが、それほどでもなかった。一体何をやってきたのかは詮索するつもりもない。英雄色を好むとはいうが、翠はどちらかというと来る<ruby>べき時<rt>ラッキースケベ</rt></ruby>を待つタイプである……って何の話をしているんだ。

そんなことを考えているうちに、シャリヤは紙に単語を書き連ねていた。それぞれ書き終わると文字が読めないことを知っているシャリヤは文字をなぞりながら読み上げてくれる。

シャリヤは文字を教える翠――
“ɱбзnҹб пбюиn зэҹэи ʒuюuꞁʒ.
翠は文字――シャリヤ――教えることを――
ʒuю ɋuзuᴅ пбюиnэ зэҹэиꞁnи ɱбзnҹбꞁᴅи.

ʒuю ʒuзuɒ пБюиnэ зэчэиɿnи ɱБзnчБɿɒи.”（翠は文字——シャリヤ——教えることを——）

３つの例文が例示された。

第一文は“ʒuюouɿʒ（セネス）”がよく分からないけど、多分与格語尾“-ɿʒ（ス）”が存在するのだろう。間に挟まれた“-u-（エ）”は緩衝音で“ʒuюouɒиn（翠よ）”のときにも出てきたやつだ。つまり、文意は「シャリヤは文字を翠に教える」で大方間違ってないだろう。

２番目と３番目の文章がやっかいだ。

“ϱuзuɒ（ヴェレス）”を教えてもらおうとしたとき考えたことは“пБюиnэ（教えること）”が後に来る名詞を主語や目的語として取っているということだ。しかし、今回は“-и（ト）”が付いている。文章はほぼ同じで、“ϱuзuɒ（ヴェレス）”と“ʒuзuɒ（セレス）”が入れ替わっただけだ。「シャリヤが文字を教えることを翠は〜する」という大体の文意は分かっているが、動詞の意味が今一つ摑めない。

“-э（オ）”がついてできる動詞の「〜すること」という形——動名詞形を、“ϱuзuɒ（ヴェレス）”や“ʒuзuɒ（セレス）”が目的語として取るのであれば、知っている動詞の動名詞形を入れて検証してみるのもいいかもしれない。手始めに“зпɔɫɱ（話す）”の動名詞形“зпɔɫɱэ（ルクーフォ）”から試してみるか。

“ɱБзnчБ <ϱuзuɒ> зпɔɫɱэɤ”（シャリヤは話すことを「ヴェレス」する？）
“чБ, ðn <ϱuзuɒ> зпɔɫɱэ ʒuюouɿɒи.”（うん、私は翠が話すことを「ヴェレス」する）

大体分かってきた気がする。

多分、“ϱuзuɒ（ヴェレス）”は「〜される」の意味を持つ動詞だ。そう解釈すれば、“ɒuзuюou（ゼレネ） ʒэ（ソ） ϱuзuɒ（ヴェレス） пБюиnэ（カンテョ） ðnɿɒ（ミス） зэчэиɿnɤ（リュヨティ）”は「私に文字を教えられたい？」という意味であることが分かるし、“ɱБзnчБ（シャリヤ） ϱuзuɒ（ヴェレス） зпɔɫɱэ（ルクーフォ）.”は「シャリヤは話されている」という文になっているので“чБ（はい）”で返されるのも合点がいく。動詞の動名詞形を目

的語に取って受動態を表すことができる。そして、目的語になった動詞の動名詞形が取る主語と目的語の格には何故(なぜ)かは知らないが“-и(ト)”が付く。

【受動動詞 ϱuзuᴅ(ヴェレス)構文】：（被動作主）ϱuзuᴅ(ヴェレス)（動名詞）（動作主）ɋᴅи(スト)（動作の目的語）ɋnи(イト).

なんだか煩雑に見えるが、要は英語で be 動詞＋動詞の過去分詞の形で受動態を作っているのが、ϱuзuᴅ(ヴェレス)＋動名詞に置き換わっただけなんだろう。されることを行う動作主としようとする目的語が取る格が特殊な形になるだけで、基本は簡単な構文だ。

まあ、ϱuзuᴅ(ヴェレス)の用法がこれだけと決まったわけではないが……。

“ȣʙз, ɱʙзnчʙ <ʒuзuᴅ> зnɔƚɱэɤ”(それじゃあ、シャリヤは話すことを「セレス」する？)
“юnϱ, ɱuз.”(いいえ)

否定されたとともにシャリヤは手にペンを持たせてくる。いきなりの行動に焦っていると、ペンを持った手を掴まれる。びっくりして体が硬直してしまう。女の子に手を触れられたことがないのかどうかは過去の記憶がないから分からないが、手を掴んで引っ張られたあの時と同じくらいに緊張してしまう。シャリヤの手はこんなにやさしく自分の手を包んでいるというのに。

シャリヤの方は、手を掴んで動かして字を書いているために難しそうに少し顔をゆがめていた。

気づけば、手を掴まれてペンは紙の上を踊るように動いていた。シャリヤの字のそれとはちょっと違うが、操られた結果として出てきたのは覚えようとしていたリネパーイネ語の文字そのものであった。読めない文字を書かせてどうしようというのだろう。というか“ʒuзuᴅ(セレス)”に関係ある事なんだろうか。

シャリヤは翠が文字を書くことを——する
“ɱбзnцб ʒuзuɒ пɪ̇бюиuэ ʒuюuɿɒи зэцэиɿnи.”

今シャリヤが翠にさせた行動を日本語で表すとすると「シャリヤが翠に文字を書かせる」だ。つまり、受動態ともう一つのメジャーな態である使役態を表す動詞が“ʒuзuɒ（〜させる）”だったのだ。ただ、“ϱuзuɒ（〜される）”とは違い、主語に使役させる人間が来るらしい。

【使役動詞 ʒuзuɒ（セレス） 構文】：（使役主） ʒuзuɒ（セレス）（動名詞）（動作主） ɿɒи（スト）（動作の目的語） ɿnи（イト）.

これも難しそうに見えるが、構造が分かれば簡単で“ϱuзuɒ（〜される）”と“ʒuзuɒ（〜させる）”には強い共通点がある。だから、シャリヤはまとめて説明しようとしたのだろう。

と、そんなこんなで文字を勉強する前に一つ有用な動詞と構文を覚えてしまった。これで人にされたとかさせるとか言えるようになったわけだが、文字を覚えるのにはもっと時間がかかりそうだ。だが、今日で全部の文字の基礎的発音を覚えてやる。

シャリヤ、それは分かったよ。だから文字を教えて欲しい
“ɱбзnцб, ðn ɱnɪ̇зuɱ ðбз ɒuзuюu ðn ϱuзuɒ пбюиnэ зэцэиɿnи.”

#39　文字

文字、それは人間の偉大なる進化の一つである。
文字、それは言語、言葉を記録し芸術へと昇華させる第一歩。
文字、それは異世界を象徴するシンボル……。

「読める……読めるぞ……」

某空からビームを出す空中要塞を操縦する大佐さながらの感想が漏れる。

シャリヤから文字の読みを教えてもらうことに成功した。即座にラテン文字に書き写すことができたが、よく分からない綴(つづ)りの規則も存在するようである。ただ、ほとんど文字通り読めば読み通せるのであまり心配することもない。少し間違えたくらいでネイティブに伝わらないなんてことはないし、辞書を引き、文章を読み、言語パズルをやるのであれば多少の読みの間違いなど些細(ささい)な問題にすぎない。

x → p,　ǫ́ → F,　ɯ̨ → f,　и → t,　ʒ → c,
ɱ → x,　п → k,　ж → q,　c → h,　ɂ̇ → R,
и̤ → z,　ʚ → m,　ю → n,　ɫ → r,　з → l,
ч → j,　o → w,　ỏ → b,　ɯ̨́ → V,　ǫ → v,
ɯ → d,　ᴅ → s,　п̤ → g,　ɱ́ → X,

n → i,　ɜ → y,　ɔ → u,　э → o,　u → e,　ʙ → a

基本ローマ字読みすれば済む話らしいが、ラテン文字転写だけでは分からないことが色々ある。

“ʒ” は基本的にサ行の音で “ᴅ” がザ行の音であるということだ。でも、“ᴅ” は後ろに母音がこなかったら “ʒ” と同じ音になる。なので、同じ接辞かと思っていた “-ꞁᴅ”(～は) と “-ꞁʒ”(～に) は同じ発音で別の接辞ということらしい。

“ж” はどうやら /kw/ と発音するみたいだ。“жʙ” という文字列があったらクヮと発音する。

“ɂ̇” と “ɫ” は似た文字だが “ɂ̇” が巻き舌の r とのことだ。英語

とは違ってぶるぶる震える音だった。“ŀ” はどうやら母音の後にきて母音を長く発音することを表すらしい。つまり、リネパーイネ語は母音の長短を区別する言語ということになる。

インド先輩によると地球の西洋人は母音の長短を区別しない言語を話している場合があって、彼らには日本語の音の長短の区別が難しくなるという。だが、リネパーイネ語はそうはならないらしい。

“ɥ” はヤ行の音。“ᴅ” の読み方がドイツ語っぽかったのでこっちもドイツ語っぽく転写しようと思い “j” を選択した。そういえば “ɥБ(はい) (ja)” とかドイツ語そのまんまの気がする。
“ɰ” と “ɰ́” は一文字でシャ行とジャ行の音を表す。“j” は、ヤ行音を表す文字に使ってしまったのでジャ行の音の転写は “X” にすることにした。

厄介なのが “ɑ̨́”、“ɰ̨”、“ɰ̨́”、“ɑ̨” の対応だ。

何が違うのかよく分からないが、口元をよく観察すると “ɰ̨”、“ɑ̨” は唇に歯が触れていて、“ɑ̨́”、“ɰ̨́” はそうではなかった。多分これだけの違いなんだろうが絶対に聞き分けられる自信がない。とはいえ、今まで正確に音を聞き分けて覚えてきたのだから、できるとは思うが。

母音はどうやら6種類あるらしい。この文字の書き分け方から見て上側に子音、下側に母音がまとめられていると考えると下側の6文字は全て母音だ。“Б”、“n”、“ɔ”、“u”、“э” の5つはどうやら日本語とほぼ同じのようだが、“n” と “ɔ” の後ろに母音がきたときはそれぞれ “ɥ”、“o” になるらしい。“ꙕ” についてはユみたいな発音の母音である。インド先輩が好きだったドイツ語のウー・ウムラウトやフィンランド語の y にあたる母音だと思って “y” の字を当てた。

約物についても少しばかり分かったことがある。“?”にあたる文字が“ɤ”みたいな形の文字だが、“!”にはそのまま上下反転した“¡”の形を使うらしい。ピリオドはそのままでデーヴァナーガリー文字の।のように特別な形にはなっていない。約物は結構地雷で、確認したい単語のアクセント部分につけるアルメニア文字の疑問符のようなよく分からないものが、この言語でも出てくるかもしれない。

「ふぅ……」

とまあ、ここまで解読したところで、シャリヤがいれてきたお茶で一息つく。シャリヤも教えることは好きらしいが、ずっとやっているとやはり疲れるようで、椅子に座りながら身体を伸ばしている。
昼の光が射しこんでくる部屋の中は暑いとも寒いとも言えないちょうどよい陽気に包まれていた。落ち着いてくると眠気が出てきた。シャリヤも同じように眠そうで、うとうとしている。

文字が読めるようになれば先は明るい。もうちょっとすらすらと読むのには鍛錬が必要だが、正直辞書なりを読むうちに流暢（りゅうちょう）に読めるようになるはずだ。言語パズルをやり続ければそっちの力もつくだろうし、なんといってもリネパーイネ語力の向上にもなる。
そういえば、文字全般の名前を訊いていなかった気がする。ついでなので訊いておくか。

ありがとうシャリヤ、それでこの文字の名前は何？
“ɱбзu ɱбзnцбɒиn, ϑбз ɱжбɬш зэцэиɬш ɱuƚзп uɒ cбƚϑnuɤ”
この文字の名はリパーシェ
“ɱжбɬш ɱuƚзп uɒ зnхбƚɱu.”

なるほど、リパーシェ文字というらしい。
リネパーイネ語とリパーシェ文字。なんとなく似ているのを考え

ると、どこかの文字を借用して使っている言語ではなさそうだ。辞書と教典をその言語で読めて、看板など街中で広く通じるところを見るとリネパーイネ語がこの世界で一般的な言語であることが分かってくる。
　そんなことはともかく、心地よい陽気のせいで非常に眠い。

（もう色々考えるのはやめて寝るか……）

　そう思ったとたんに翠は気持ちよい眠りの世界に行ってしまった。

#40　任意の北ソト語が読めない。

おぉ　翠はリパーシェを理解できる！
“эƚ, uɯnɱƃ ʒuюu ʒuю ɱnƚзuɱ зnxƃƚɱuı”

　同じ食卓についたレシェールはシャリヤの話を聞いて感心したようにそう言い返した後、手元の布で口元をぬぐった。
　シャリヤの部屋には催眠ガスのようなものが撒（ま）かれていて、一度寝ると数時間寝続けてしまうらしい。さすがにそれは冗談にしろ、あの陽気と脳の疲労の中で寝落ちしない人間はいないだろう。結局のところ翠は夕飯の時間まで寝続けてしまった。シャリヤに起こされて眠気が頭の中を彷徨（さまよ）っている状況で食堂まで連れていかれると、食べ物の匂いで空腹が想起され、さっぱりと起きて今に至る。
　眠気が強すぎて何が何だかよく分からなかったので、シャリヤに食事を色々と運んでもらってしまった。できるだけ迷惑はかけまいと思っていても、相手がなんでも世話をしてくるとこちらは何もしようがない。ありがたいことではあるが、どうしても申し訳なさが募ってくる。
　色々な形があるにしろ、来客者への世話が好きな民族というのは

往々にしているわけで、インド先輩もよく「タミル人は客人をもてなすのが本当に好きなんだ」という話をしていたものだ。
　シャリヤたちがそういった人懐っこい民族なのか礼儀を重んじる民族なのか色々な可能性があるだろうが、個人に民族性を完全に当てはめることはあまりいいことではないだろう。そういった傾向がある、程度に見るならいいだろうがシャリヤが例外だったりするかもしれない。日本人がいくら「時間に厳しくて、他人に礼儀正しい民族だ」と言われていても、翠自身が本当にそうなのかと言われると少し自信がないし、「お前ら～民族は○○だから――だ！」というのは常識的に考えてあまりにも断定的で偏見に満ちた考え方だ。
　異世界ファンタジーではエルフ族は何だの、ドワーフ族は何だのとかいう偏見が実際に性格として設定に現れたうえで、その例外が主人公の下にやってきてハーレムを構成する第一歩となったりするが、個人の性格や情動はそんな簡単じゃないなんてことは分かり切ったことだ。

はい、 ―― 彼はできない ―――― 理解する リネパーイネ語を ――
“ɥБ, xБ ɒn ʒɪюu юnϱ юБɒиэю ɱnɫʒuɱ ʒnюuxБɫnюu n̤uʒɱ
私はすべき ―――― 教える ――
ɯuʒnɔ ðn uпʒuзиэю пБюип зБ зuɱ.”
ああ ――
“ɥБ, ɥuɱnɬuɫи.”

　レシェールはそう答えてコップの水を飲みほした。
　どうやら、リパーシェは読めるようになってもリネパーイネ語はまだまだだということを話しているのであろう。それはそうだが、まあこれで第十三回国際言語学オリンピック団体戦問題のガチプロtouristを現実に実行することが可能であるわけだから、これから飛躍的に言語能力が向上するはずだ。

　かの団体戦の問題とは、南アフリカを旅行中の観光客（ガチプロtourist）の話である。彼は現地の言語を全く知らなかったが、ある書類を北ソト語で記入

する必要に迫られた。ちなみに北ソト語は南アフリカ共和国の11ある公用語の一つで、約460万人が母国語として使っている言語らしい。
　不幸なことにその観光客の下には通訳者がおらず、北ソト語の詳解辞書、つまり北ソト・北ソト辞書があるのみだった。観光者はその辞書に目を通すと北ソト語を理解できるようになり、書類を全て記入できた。さて、それでは問題です……という問題なのであるが、答えを聞くとなるほど言語パズルだという感想しか生じなかった。

　翠がこの言語パズルをリネパーイネ語に対してできるかどうかということは確かに疑問もあった。さすがに単語集や辞書がある環境なうえに、色々な意味でtouristではなくここで暮らしていく必要があるこのときに自分から勉強ができないのは不便も不便である。できるかできないかより、今は何でも試してみる時期だろうし……。

（リネパーイネ語をいきなり話せるようになったらシャリヤたちを驚かせることもできるはずだしな）

　そういえば、完全に忘れていたが図書館や本屋がレトラのどこにあるか全く知らない。今訊いておいて食後に行くのもいいかもしれない。しかし、どのようにして訊こう。
　本屋を表す単語も場所を訊く際の疑問詞も知らない。ここは、無理やり表現して理解してもらうしかないようだ。

レシェール、本は何にある？
“зuɱuɫзɒиn, пɫБюиuuɫз ϑэз ɱБз cБɫϑnuɤ”
ああ　　　　　　何の本だ？
“Бɫɤ зБ зuɱ uɒ cБɫϑnuɬɯ пɫБюиuuɫзɤ”

　うーん、やはり上手く通じていない。確かに図書館や本屋なんかがなくても、本があるところに連れて行ってもらえればいいわけだ

が。何か特定の本のありかを訊いているみたいな感じになっている。

俺はリネパーイネ語を勉強したい。 それで、俺は
“ᴅuзuюu ðn зuɫᴅᴅu зnюuxƃɫnюu ðƃз ᴅuзuюu ðn
本を読みたい
ƃпɫƃюuп пɫƃюuuuɫз.”
ああ 君は──を──したい？
“ƃɫ, ᴅuзuюu ʒэ uэɯnuᴅu пɫƃюuцзϱnзɣ”
“пɫƃюuцзϱnз……ɣ”

意図が通じたらしくレシェールが納得しているのを見て、思わずそのまま言葉を返してしまう。

ああ 本──なら「クランティルヴィル」にあるぞ
“цƃ, пɫƃюuuuɫзuᴅᴅ ðэз ɱƃз <пɫƃюuцзϱnз>.”

レシェールは懐からレトラの地図らしきものを取り出して、翠の前に広げた。自分の滞在している町という実感は異世界であるのに加えて、来てから数日も経っていないからか無きに等しいが、確かに製菓材料店だったり、走ってインド先輩の幻を追っていた時の大きい道だったりがあってレトラだと分かる。

レシェールはその“пɫƃюuцзϱnз（クランティルヴィル）”への道順を丁寧に説明し始めた。

#41 пɫƃюuцзϱnз

「пɫƃюuцзϱnз（クランティルヴィル）だ……」

はじめて来る場所というのはどうしても不安になり、その場所が行くべきところと本当に合っているか、確証がないと入りづらいものだ。だが、レシェールが地図で指し示した場所にはちゃんと看板に“ɫuuзƃɫɯ пɫƃюuцзϱnз（レトラのクランティルヴィル）”という文字がレタリングされていたの

である。

（文字が読めるだけで分かることも増えて安心感も違うな……）

多分欧米から来た観光客も文字が全く読めない日本よりヨーロッパとかの方が安心したりするんだろうか。まあさすがに日本でラテン文字を見ないことなんてないだろうが。

ドアを開けようと力んでも、鈍重に手前に少し動くだけで反応しない。腰を落として、体全体で引っ張っても少ししか動かない。というか、何かでロックされている雰囲気だ。

“пɪ̵бюицзՋпз(クランティルヴィル) хɬзɔɒՋuю, зuипɱ бйпɔɪ̵ṉ ипɪ̵юuɤ”
「あー、えっと……」

本を数冊持ったポニーテールのお姉さんに後ろから話しかけられる。髪の色はシャリヤと同じ銀色だが、瞳の色は黒だ。シャリヤともエレーナともフェリーサとも違う人種なのかもしれない。

それはそうと、このお姉さんは“пɪ̵бюицзՋпз(クランティルヴィル)”の関係者だろうか。発音の抑揚が尻上がりであったからきっと何かを訊いているのだろうと思う。確か「しかし」の意味である逆接の接続詞“хб(パ)”は何回も聞いてきたからここで使えるはずだ。

“ɱбʒu, ɒuзuюu ծп бпɪ̵бюип пɪ̵бюиuuɪ̵з хб ծп ɱпɪ̵зuɱ юпՋ ʒэɬɯ зпɔɪ̵ɱuɪ̵з......”（ありがとうございます、俺は本を読みたいのですがあなたが言っていることが理解できません）
“ʒэɬɯ зпɔɪ̵ɱuɪ̵зuɒип.......ɤ бɪ̵, <ʒэɬɒи зпɔɪ̵ɱuɪ̵з> ṉɬuɒ ʒuюu юпՋ ʒэ иuɒɔнз зэи зпɔɪ̵ɱ зпюuхбɪ̵пюuɤ”（あなたの言っていることよ……　あぁ、「あなたが言うこと」　上手くリネパーイネ語を話すことができないの？）
“цб......”（はい）

どうやら上手くリネパーイネ語で意思疎通が取れないという意思

疎通が取れたようである。

本を持っていることから彼女はここの司書か何かかもしれない。“пꞁбюиɥзᶑnз”（クランティルヴィル）に入ろうとする人に声をかけるということは多分そうだろう。まあ、この“пꞁбюиɥзᶑnз”（クランティルヴィル）をよく知る利用者ということもあり得るかもしれない。だが、どっちみち、ここをどうやって使うかの有用な手掛かりになるだろう。

“ꝺбз, ʒиюu ꝺn бпꞁбюиn ɱбз ɱɔжбɤ”（それで、俺はここで本を読むことができるんですか？）

“ꝺuꞁ, ʒиюu юnᶑ ʒэ uɒ uꞁn ʒɔю nɒ зɔɒᶑuюnз ɱбз юэ ꝺбп̤ uзɱ ɒcꞁзэ пзnu ɱбз ɱnюnꝺбɱзn хзбɱ.”（えっと あなたはuを することはできません―― ――に――がなる）

そう言って、お姉さんは鞄（かばん）をあさり始めた。よくある三つ折りのパンフレットを出し、翠の後方とパンフレットを交互に指さして渡してきた。彼女は仕事が終わったとばかりにそのまま去ってしまった。

このままこの建物の前にいてもどうにもならないので、シャリヤのところに戻ることにした。今回シャリヤにはちゃんと外出することを言っておいたので、心配をかけることはないだろう。まあ、あの時泣きついてきた原因は「セーケでフェリーサに負けた」なんだろうが、恥ずかしくて爆撃を受けたくなるような勘違いをわざわざ思い出す必要はない。

渡されたパンフレットを眺めながら、暗く誰もいない夜道を歩いていく。道の脇に並ぶ建物の灯りや楽しそうに話す声を聞いて人恋しさが湧いてきた。

あのお姉さんは翠が文字は読めると思ってパンフレットを渡してきたのだろうが、今の段階で母語話者向けのパンフレットを完璧に読めるとは全く思えない。語彙も文字の利用の癖もまだ全然習得で

きていない状態だから難しいだろう。しかし、“пŀбюиųзϱnз”（クランティルヴィル）はこれから利用していくことになるわけだから、眺めて雰囲気くらいは理解しておくべきだ。

まあ、今のリネパーイネ語の知識と少ない常識力を手掛かりに理解できるところまで解読してみよう。

＝ ʔuизбɺɯ пŀбюиųзϱnз（レトラのクランティルヴィル） ＝

ϱбɒŀnxnuиnз uɒ（──は──である） 0б00 (Γ900 ϱбз ɯuɒюбŀ).
зɔɒϱuюnз uɒ（──は──である） ΓΤ00 (Γб00 ϱбз ɯuɒюбŀ).

xзбϱ ɒcŀзэ иɔбю ʒэɺɯ пŀбюиuuŀзɺnи（あなたの本を──） збɯnŀŀnɒnз зɔ.
ʒuюu зэ（あなたは） збɯnŀŀnɒ пŀбюиuuŀз（本をラディーリスできます） ϱбn збɯnŀŀnɒбз uɒпn пŀбюиųзϱnз ϱбɒиб зɔɒϱuюnз.

なるほど、あまり分からないが数字が数字だと分かると“ϱбɒŀnxnuиnз”（ファスリピェティル）と“зɔɒϱuюnз”（ルスヴェニル）のうちどちらかが開館で、もう一方が閉館みたいな情報を表しているのだろう。

まあなんかの価格かもしれないが、「0б00」と書いてあるところや、通貨記号などが出てこないところから多分時刻であろう。

たしか、司書さんは“ʒuюu юnϱ ʒэ uɒ uɺn ʒɔю nɒ（あなたはウを することはできません──） зɔɒϱuюnз ϱбз юэ（──に──がなる） ......”みたいな長文を話していた。

“ϱбɒŀnxnuиnз”（ファスリピェティル）より“зɔɒϱuюnз”（ルスヴェニル）の方が数値が大きいことと、こんな遅い時間で何かをできないと言及しているということは“зɔɒϱuюnз”（ルスヴェニル）は「閉館時間」だ。とすると、対義語の関係にある“ϱбɒŀnxnuиnз”（ファスリピェティル）は「開館時間」ということになるはずだ。

3文目に“зБɯnƚƚnᴅnз(ラディーリズィル)”という単語がある。これも“ɱБᴅƚnxnuиnз(ファスリピェティル)”や“зɔᴅϱuюnз(ルスヴェニル)”の仲間かもしれない。4文目の“зБɯnƚƚnᴅ(ラディーリス)”と“зБɯnƚƚnᴅnз(ラディーリスィル)”はよく似た語形だし、もし、“ɱБᴅƚnxnuиnз(ファスリピェティル)”や“зɔᴅϱuюnз(ルスヴェニル)”からもこの“зБɯnƚƚnᴅnз(ラディーリスィル)”からも“-nз(イル)”という要素が分離できるとしたら、“ɱБᴅƚnxnuи(ファスリピェティル)”と“зɔᴅϱuю(ルスヴェン)”と“зБɯnƚƚnᴅ(ラディーリス)”という語幹が出てくる。そもそも、3文目で“пƚБюиuuƚзꞁnи(クランテーリト)”という形が出てきている時点で、“-э(オ)”や“-uƚз(エール)”の仲間であることが分かってくる。

こうなってくると“-nз(イル)”は「〜するとき」と考えることが自然になる。

すると、“xзБɱ ᴅcƚзэ иɔБю ʒэꞁɯ пƚБюиuuƚзꞁnи зБɯnƚƚnᴅnз зɔ.”は「あなたの本をラディーリスするとき」に言及していることが分かる。ラディーリスの意味が分からないが、“пƚБюиɥзϱnз(クランティルヴィル)”が図書館か本屋であるとすると「買う」だったり「借りる」だったりすると思われる。4文目を参照すると、“ʒuюu ʒэ(あなたは) зБɯnƚƚnᴅ пƚБюиuuƚз(本をラディーリスできます) ...... uᴅпn(エスキ) пƚБюиɥзϱnз(クランティルヴィル) ɱБᴅиБ(ファスタ) зɔᴅϱuюnз(閉館時刻)”と書いてある。間に挟まれている短い単語が分からないので何とも言いようがないが、“пƚБюиɥзϱnз(クランティルヴィル)”の閉館時間にも“зБɯnƚƚnᴅ(ラディーリス)”は可能であるということだ。つまり“зБɯnƚƚnᴅ(ラディーリス)”は無人でもできるということ。本を扱う建物までやってきて行うことと考えれば「買う」というより「借りる」の方がしっくりくる気がする。でも、閉館時間以降に本を借りられるというのも不自然だ。多分この単語は正反対の「返却する」だったのかもしれない。

その考えに基づくと、“xзБɱ ᴅcƚзэ иɔБю ʒэꞁɯ пƚБюиuuƚзꞁnи зБɯnƚƚnᴅnз зɔ.”は「あなたの本を返却するとき зɔ(ル)を xзБɱ(プラシュ) ᴅcƚзэ(シュロ) иɔБю(トゥアン)してください」と言っているのだろう。グー○ル翻訳大先生並みの直訳だが、段々分かってきた気がする。「返却

日を忘れるな」ということを言っているのだろう。つまり、“nɨбюиɥʒϱnз（クランティルヴィル）”はまさに図書館だったのだ。

（人の心を読んで適切な指示を出すレシェール恐るべし……）

そんなことを考えていると、いつの間にか目的地に着いていて、驚いてしまった。考えながら歩くと自分がどこを歩いているのか良く分からなくなってしまう。

シャリヤは“ʒэ uᴅ юэᴅиɔɥi（あなたはノスナゥイだ！）”と少しご立腹の様子だった。目を細めて、こちらを見てくる。腕を組んで頬（ほお）を膨らませているその表情を見ると逆に微笑ましく思えた。きっと帰ってくる時間が遅くて心配していたのだろう。もしかしたら、またセーケで負けて憤っているのかもしれないが。

今日はもう遅いし、早く寝て、明日“nɨбюиɥʒϱnз（クランティルヴィル）”に突撃しよう。

・四日目習得内容

1. 対格は -ɿn（イ）、主格は -ɿᴅ（ス）、与格は -ɿʒ（ス）で表す。
2. 動詞 uᴅ（エス）が対格 -ɿn（イ）を伴うと、代動詞「〜する」という意味になる。
3. 【受動動詞 ϱuзuᴅ（ヴェレス）構文】：（被動作主）ϱuзuᴅ（ヴェレス）（動名詞）（動作主）ɿᴅи（スト）（動作の目的語）ɿnи（イト）.
4. 【使役動詞 ʒuзuᴅ（セレス）構文】：（使役主）ʒuзuᴅ（セレス）（動名詞）（動作主）ɿᴅи（スト）（動作の目的語）ɿnи（イト）.
5. 動詞に -uз（エル）をつけると「〜する方法」という名詞になる。-nз（イル）をつけると、「〜する時間」という名詞になる。

語彙

юnзnɫᴅ（ニリース） uɯnɱБ（エディシャ）（【動】負け続ける？）、зuɫᴅᴅu（レースゼ）（【動】学ぶ）、ᴅюɔɫ（スニュー）（【名】農業）、ɯɔɱnuю（ドゥーシェン）（【動】働く）、пБюиn（カンティ）（【動】教える）、ϱuзuᴅ（ヴェレス）（【動】される）、ʒuзuᴅ（セレス）（【動】させる）、зnxБɫɱu（リパーシェ）（【名】リパーシェ文字）、xБ（パ）（【接】しかし）、ɱБᴅɫnxnuиnз（ファスリピェティル）（【名】開館時間）、зɔᴅϱuюnз（ルスヴェニル）（【名】閉館時間）、ɱБᴅɫnxnuи（ファスリピェト）（【動】開館する）、зɔᴅϱuю（ルスヴェン）（【動】閉館する）、зБɯnɫɫnᴅ（ラディーリス）（【動】返却する）、nɫБюиɥзϱnз（クランティルヴィル）（【名】図書館）

Ex.4 過去 side シャリヤ

——ピリフィアー歴 2002 年 5 月 21 日、アル・シェユ フィアーニュ州

第二次国家統一戦争後も革命派の活動は長らく続いていた。ユエスレオネの成立と共に一家が移ってきたのは、この国にしか自分たちに生きることができる土地がなかったからだった。政府の不安定さとか政治がどうなっているとか、その時はどうでもよかった。ユエスレオネに移ることで疫病や紛争の脅威から逃げられたと思っていた。心の中は安心で満ちていた。

政府軍が演説中の革命派を攻撃したとき、物騒な世の中だと思っただけだった。今のままで、生活に不自由がないのになぜこんなにも騒ぐのだろうと不思議でならなかったが、自分には関係なかった。革命派が配ったビラを持っていただけで、政府軍により連れ去られていった人がいたときも、自分の身に危険が及ぶとは思わなかった。自分と革命派に関する騒動は全く関係ないと思っていたから。それに新しいユエスレオネでの日常を生きていくのに精一杯だったから。

自分の家の隣には、見知った顔の女の子がいた。このユエスレオネに来てから数日後。親が引きこもりがちな自分を案じて連れていってくれた絵画教室に、いつも来ていたエレーナという名前の子。ラネーメ人っぽいから言葉が通じないかもしれないと思ったが、流暢にリパライン語を喋っていたからコミュニケーションに困ることはなかった。隣の家に住んでいたこともあり、すぐに仲良くなれた。
彼女は年のわりには静かな子で、紛争の恐怖にも怯(おび)えていた様子だった。ユエスレオネまで逃げてきて、私と気が合ってからというもの、そんな恐怖は忘れてお互いに日常を楽しんでいた。

しかし、ある日二人で教室に来てみると入口に張り紙がしてあることに気がついた。

“cбƚϑnu ɱжб uᴅɣ ʒuюu ʒэ бnƚбюunɣ”（なんだろうこれ？　シャリヤは読める？）

エレーナが指した張り紙に書いてある字は汚すぎる筆記体でよく読み取ることができなかった。恐る恐るドアの横の窓から中が見えないか覗(のぞ)いてみたが誰かがいる様子もなかった。

“nэнюuu ϑэз юnɳ зн.”（先生、いないみたい）
“зб зuɱ ʒuзɯu зɔɣ й̤ɔ, ᴅэᴅюɔз uᴅ ɯuᴅюбƚɣ”（そうなんだ？　じゃあ今日は休みってこと？）

エレーナが張り紙の文字を指でなぞりながら、こちらに顔を向けずに言う。全く読める気のしない張り紙の文を何とかして読もうと頑張っている様子だった。

“ɥэз uᴅ зб зuɱ.”（そうかもしれない）
“ϑбз, зuʒɔ ϑnᴅᴅ ɱnɱɿэюuϑ¡”（じゃあ、遊びに行こうよ！）

エレーナが嬉々（きき）として提案する。先生は真面目な人なのに、なぜか今日は全く読めない張り紙を残して何処（どこ）かへ行ってしまったようだった。時間も早いし、十分に遊ぶ時間はある。
一度家に帰って身支度をしてから遊ぶ約束をして、来た道を戻ることになった。とはいえ、隣なのだから家に入る直前まで帰り道は同じだ。一緒に話しながら帰ることになった。いつもは教室で絵の勉強をしてから、帰り道を楽しく話しながら帰っていた。

家の前の道に差し掛かった時、ちょうど自分たちの家の前で騒ぎが起こっていることに気づいた。多くの人が集まっており、みんな小声でざわざわしている。エレーナも怪訝（けげん）そうにこれを見ていた。

何だろう？
“cБɫϑnu ϱэзuɒɤ”
私が見てくるよ
“зuʒɔ ϑn ɱэюиnꞁБɫзɒи зБ зuɱ.”

エレーナが私の提案に対して、こくこくと頷いたことを確認すると、私は人ごみの中へともぐりこんだ。
人ごみの間を縫って何が起きているか確認しようとする。私たち二人の家の前にカーキ色の制服の人々が集まって、車に乗って去っていくのが見えた。車が見えなくなると集まっていた群衆は声を抑えていたのを忘れたかのように、シャリヤにはっきりと聞こえる声で話し始めた。その声の中でも特に耳に残る声があった。

可哀想に、スカースナさんが捕まるとは
“xзэɫɔз, ɒпБɫɒюБ ɱnʒn ϱuзuɒ Бзɱэ.”

その時やっと気づいたが、どうやらエレーナの家族が連れ去られたようであった。エレーナに対してはどう説明すればいいのだろう。政府軍に連れ去られたということは、彼女の親が革命派に関係して

いたかもしれないということだ。しかし、私はもっと身近な危険を感じていた。エレーナも連れ去られてしまうかもしれないという危険だ。

ともかく、エレーナを匿わなくてはならない。子供がいることを知れば、政府軍はエレーナも連れていこうとまたやって来るだろう。もしそんな事をしたなら、自分は友達を見殺しにしたことになる。それにやっと命の危険から自分を遠ざけられたと思ったら、自分は一人になっていたなんて絶対に嫌だ。

エレーナのところにすぐに戻ると、心配そうにこちらを見つめていた。

“u бзm̰ɣ cбƗϑбuɣ cбƗϑɜнɣ”（捕まったの？ 誰が？ なんで？）

“……”

どうやら彼女にも群衆の声が聞こえていたようだった。しかし、エレーナ自身も何故家族が捕まったのか理解ができていなかったようだ。革命派の活動をしていれば捕まることはさすがに子供でも知っている。家族が革命派に関与していることを知っていれば、“cбƗϑɜн”（なぜ）という問いにはならなかったはずだ。つまり、彼らは無実の罪で連行されたのかもしれない。

政府軍に対する怒りがこみあげてきたが、同時にそれに対して何もできない自分の無力さに虚しくなった。

結局、エレーナを匿う必要はなかった。政府軍は子供であるエレーナには興味がなかったようだったから、そのまま家で一人で生活することができた。

絵画教室も閉まったままだった。風の噂（うわさ）では、ここの先生も革命派に関係しているとして政府軍に捕らえられたようだった。

五日目　辞書と信仰と間違い（бзшбᴅ бш ӿɫзu）

#42　ヒンゲンファール・ヴァラー・リーサ

　その日の朝も非常に好調なスタートを切った。シャワーを浴び、用意された服に着替えた。リネパーイネ語で何かを説明するということができる段階まで来ていないので、身振り手振りと“пɫбюиɥзɲпз（図書館）”のパンフレットを見せることでシャリヤには当分外出すると伝えることに成功した。レシェールがしきりに“ʒэɿш шɔɱпиюэiɤ（お前、仕事は！？）”と言ってくるのもなだめて、“пɫбюиɥзɲпз（図書館）”までの道を間違えずにたどることができた。

　見覚えのある看板が見えてくる。
　インド先輩の友人から教えてもらったことがあるが、これは太字のスラブセリフというやつらしい。書体にはセリフ書体とサンセリフ書体がある。文字に飾りがついているのがセリフ書体で、なにもつかず寸胴（ずんどう）な書体がサンセリフ書体になる。セリフ書体の飾り（セリフ）にもいくつかの種類があり、飾りと縦線と横線の太さがほぼ同じで直線的なスラブセリフ、飾り部分が極端に細いヘアラインセリフ、飾り部分が三角形のようになっているブラケットセリフなどがある。
　日常的にパソコンを使っていてよく見るセリフ体のフォントはTimes New RomanとかCentury、サンセリフ体はHelveticaなどだろう。看板のこのレタリングがこの世界でスラブセリフというのかどうかは知らないが、素人目から見たらそれっぽい文字の装飾だった。

“ざ、ᴅбзбɫɔб.（おはようございます）”
“бɫз（あぁ）, ᴅбзбɫ ɱпɥ.”

昨日パンフレットをくれたお姉さんが入り口の脇のカウンターにいたので一応挨拶した。すると、作業を止めて、ポニーテールを振りながらこっちを向いて笑顔で返してくれた。挨拶だけでも通じると凄く嬉（うれ）しい。この瞬間のために言語を学んでいるということもあるかもしれない。やっぱり言葉が通じると気持ちがいい。
“ɱnч（シイ）”は、多分呼びかけだったり名前に付けて「〜さん」ということができる単語だろう。フェリーサが翠を呼ぶときにはいつもこれを付けていたので大体意味は察していた。対照にフェリーサがシャリヤを呼ぶときにはいつも“ϱбч（ヴァイ）”を付けていたからこれは多分“ɱnч（シイ）”の対義語で、Mr. Ms. Mrs. Miss. のような感じで性差によって使い分けがあるようだ。
“ᴅбзбƚ（ザラー）”は多分“ᴅбзбƚɔб（ザラーウア）”の短縮でくだけた気軽な挨拶という感じだろう。一度会ってさっと別れたくらいの仲で使えるのかは、このお姉さんの性格にもよるだろうから分からない。そういえば彼女の名前を知らない。訊（き）いておくべきだろう。

お姉さん、あなたの名前は何？
“ɱ́бч, ȝэɿɯ ɱuƚзп uᴅ сбƚȣnuɤ”
私はヒンゲンファール・ヴェーです。　君は八ヶ崎翠——だね？
“ȣn uᴅ спюп̈п̈июп̈ɱuƚз ɱ́. ȝэ uᴅ чби̇п̈бᴅбпn. ȝию иnƚюuɤ”

　ヒンゲンファール・ヴェー……なんか強そうな名字ですねえ。というかそういう話ではなくヒンゲンファールさんは何故（なぜ）自分の名前を知っているんだろう。昨日名前を教えたりしたっけ。

えっと　あなたは俺の名前を何において知る？
“ȣuƚ, ȝэ ɱnƚзuɱ ȣnɿɯ ɱuƚзп ɱбз сбƚȣnuɤ”
ああ　私のスヌトカセーゲーレスレシェールがラッシで言う　あなた——
“бƚ, ȣnɿɯ ᴅюɔиэпбȝuƚп̈uƚ зɿuᴅ зuɱuƚз зпɔƚɱ ɱбз збɿᴅȝn ȣuзᴅ ȝэ.”

　ふむ、詳しくは分からないがレシェールが先に翠の話をヒンゲン

ファールに伝えていたらしい。

"ϑбз, ϱбч(それではヒンゲンファールさんは……) спюп̤п̤июɯ̤uƚз……"
"юnϱ(いや), хзбɱ зпɔƚɯ̤(私を言う) ϑn зnɱч <спюп̤ϱбзnƚ>(「ヒンヴァリー」)."

（あれ？）

ヒンゲンファールさんは翠の言うことに被(かぶ)せて、そう言った。こちらから目を逸らして、すこし気まずそうに口を一文字に結んでいる。
文頭で否定して"ϑn(私)"が動詞"зпɔƚɯ̤(言う)"の後ろに来ているということは目的語として"ϑn(私)"が置かれているということだ。"зnɱч(スイシ)"が何かは分からないが、"хзбɱ(プラシュ)"はお願いする時に出てくることが多いことが感覚で分かっている。例えば、パンフレットに書いてあった"хзбɱ(プラシュ) ᴅcƚзэ(シュロ) иэбю(トゥアン)……"もそれを裏付けている。丁寧な依頼をするときに付いてくるのがこの単語なのだろう。
つまり、ヒンゲンファールさんは翠に何かを求めている。

"ɯ̤́бч спюп̤п̤июɯ̤uƚз(ヒンゲンファールさん), сбƚϑnu(何……)……"
"ϑnзn(待って)……ϑn uᴅ спюп̤ϱбзnƚ(私はヒンヴァリー) п̤uзᴅ ᴅcƚзэ зпɔƚɯ̤ юnϱ спюп̤п̤июɯ̤uƚз(ヒンゲンファールを言わない)."

あ、もしかしてヒンゲンファールと呼ばれたくないとかそういう話なんだろうか。ヒンゲンファール・ヴェーは実名だけど、日常的にはそう呼ばれたくないとか。
人から何と呼んでもらいたいかというのは自分で決める権利がある。インド先輩の知っている人には、しきりに戸籍名と自分が主張する実名を分けて使うように意識していた人工言語の作者もいるし、きっとヒンゲンファールさんもそのような感じなのだろう。

“ծuɫ, юбʒu.(えっと、ごめんなさい。) ծn ɱnɫзuɱ(分かりました).”
“ɱбʒu.(ありがとう)”

ヒンヴァリーさんの笑顔は呼び名が変わっても、変わらない。中へ入ることを促されので翠は図書館の中へと進んでいった。

「ふむ……」

市立図書館といった規模の図書館で、そこまで大きくもないし小さすぎもしないという感じであった。とりあえず今日はここがどのような感じか一日引きこもって雰囲気を摑(つか)み、本の置かれ方などを見て、言語学習の役に立ちそうな資料を探してみよう。

#43　辞書は大事

「面白いなあ……」

この図書館は三階建てで、周囲から見ても高めの建物だ。各階の踊り場と書庫はすりガラスのドアで隔てられており、書庫の部屋は全面ガラス張りで外が見渡せるようになっていた。これほど透明感のある建物はレトラの街に他にはなかった。

図書館というと文章だらけの本を押し並べているようなところと思いかねないが、中にはほとんど文字がなく絵が中心の本もある。これじゃ不思議の国のアリスの冒頭と逆パターンだ。

だが、やはり図書館は図書館。ほとんどの本は表紙に書かれた文字がかろうじて読めるだけで、中身を読もうとすると空白もなくびっしりと文字が並んでいる。作者は空白に大切な人でも殺されたの

だろうか。いくら文字が読めるようになったといっても、今の読む速度でこれを全部読むとか無理だし、地球で見たこともない文字がびっしりと並ぶ状況に圧倒されて卒倒しそうになる。

こうして、そっと本を閉じて本棚に戻すことを繰り返していた。いつか読める本が出てくるのではないかとは思うのだが、何故かやる気が削がれるばかりであった。

絵本を読めばいいじゃないかと思われるかもしれないが、子供たちが周りにいる衆人環視の中で絵本をかじりつくように見ながら解読を試みる……翠はそんな姿が頭に浮かんできて嫌になった。恥ずかしくてとてもじゃないが近づきがたくなってしまったのだ。

「ん……？」

見覚えのある背表紙が目に入る。

４日前のシャリヤの家での出来事が想起される。この辞書らしき本を引き抜いて頻度解析をやろうとしたが失敗した。言語パズルをやるなら辞書は最適だ。循環定義がある語釈は最悪の語釈だが、それに加えて類義語や対義語の表記、例文がある辞書は学習者兼解読者である翠にとって非常に助けになるものだった。

（この本は、зnıouxбƚnıouɟɯ зuᵷnx（リネパーイネ語のレヴィプ）と言うのか）

手始めに多分「辞書」という意味のこの“зuᵷnx（レヴィプ）”という単語を引いてみよう。辞書の単語はABC順に並べられているはずだからз は結構後ろの方だろう。

そう思って辞書の小口を見て驚いた。

（……ABC順じゃない……だと……）

小口に書いてある語頭の文字を指し示す表記はA、B、C、D、Eではなくx、ǵ、ɱ、и、ʒ順で並んでいるのである。冷静に考えてみればそれはそうで、この異世界ではリネパーイネ語特有の文字の並べ方で辞書の単語は並べられているのだ。英和辞書と国語辞書の単語の並べ方の違いと同じでA、B、C、D、Eとあ、か、さ、た、なの違いである。しかし言語が違えば、辞書の文字の並べ方も変わることになんて誰が気づくんだろう。辞書を引くことなんてめったにない現代の青年である翠には少なくとも無理だった。

（でも、並び順を覚えるの面倒だなあ）

やっと“ʒuŋnx（レヴィプ）”の頭文字のʒを見つけてそこから次の文字であるuを見つけようとする。文字順が英和辞書とは違うのでやっぱり手間取る。

ʒuŋnx（レヴィプ）

【ɱиэ.u】 uɫɒ nɫƃюи（本）uuɫʒ ӥɔ xʒƃɒn nɫƃɱƃnɔю эʒ ʚunƃжuɫӥ（と） ƃɯ uи.
nƃюиuʒuɫӥuю nɫƃɱƃnɔю : ʒnɔɫʒэɒ

:ʚn（私） ʚuʒɱuɫи <ʒuŋnx>（「レヴィプ」） ɱƃʒ ʒuŋnx（レヴィプにて）.:

見出し語と語釈、例文が簡潔に書いてある辞書のようだ。“nƃюиuʒuɫӥuю（カンテセーゲン） nɫƃɱƃnɔю（クラシャユム）”は何か違うものを表しているみたいだが、その後に一単語しか続いていないということは類義語か対義語か同義語か何かなのだろうか。
【】内の記述は多分品詞を表しているのだろう。その後にコロンみたいなもので挟まれた例文らしきものがある。:: は引用符だ。

つまり“<зuϱnx>”（「レヴィプ」）という単語を“зuϱnx”（レヴィプ）で“ʚn”（私）が“ʚuзϣuƚи”（メルフェート）するという文の構造が分かってくる。単語に関して辞書を使ってする行為といえば「辞書を引く」だ。多分“ʚuзϣuƚи”（メルフェート）は「引く」という意味に違いない。
“зuϱnx”（レヴィプ）が「辞書」なのであれば“зпɔƚзэɒ”（ルクーロス）は多分類義語の類なのだろう。そして、問題の語釈である“uƚɒ（エース） пƚɓюиuuƚз（本） ӥɔ（ツー） xзɓɒn（プラズィ） пƚɓϣɓnɔю（クラシャユン） эз（オル） ʚunɓжuƚӥ（メヤクェーツ） ɓш（そして） uи（エト）.”は全く分からない単語ばかりだ。

（いや、待てよ……？）

“пƚɓϣɓnɔю”（クラシャユン）という単語は聞いたことがある。
以前シャリヤに緩衝音の話をしてもらった時に彼女は“пƚɓϣɓnɔю”（クラシャユン）という単語を使って説明していた気がする。確か、リネパーイネ語には“пƚɓюϣɓnɔю（クラシャユン） xuƚϱэч（ペーヴォイ）”と“пƚɓϣɓnɔю（クラシャユン） ϣuюшuч（フェンデイ）”が存在していて、それぞれ単語の何らかの種別を表していたという話だった。ここで変化していない“пƚɓϣɓnɔю”（クラシャユン）が「単語」という意味で、“xuƚϱэч”（ペーヴォイ）や“ϣuюшuч”（フェンデイ）は形容詞か何かなのだろう。
しかし、リネパーイネ語の修飾語順——名詞とかと形容詞とかの並べ方はAN（形容詞名詞）ではなかったっけ。もしかしてこれはリネパーイネ語じゃなくて別言語なんだろうか。

“ɒɓзɓƚ（よお）, ʒuюuɒиn（翠、）чɓі（はい！）”
“うわっ!?　ʚuƚ……（えっと……） ɒɓзɓƚɔɓ（こんにちは）.”

集中しているときに声をかけられたので、体が震えるほど驚いた。
いきなり後ろから声をかけてきたのはレシェールであった。翠の控えめな返答で、驚かせてしまったことを理解したのか頭を掻（か）いて

ばつが悪そうな顔をしていた。

あぁ ごめん。 君が──したい ──────── 図書館 ──────── 俺
“ƃƚ, юƃʒu. ᴅuзuюu ʒэ uжшnuᴅu uз nƚƃюuɥзϱnз ṉuзɱ зnƃɱƃ ծn
──────── 君が何をやっている
зnэƚ юж зƃ зuɱ. ʒэ uᴅ cƃƚծnuɁn.”
えっと 辞書を引いています
“ծuƚ, ծn ծuзϱuƚu ϱƃз зuϱnx.”

どうやら何をやっているのか気になって来たらしい。単語を教えてくれる知り合いも図書館の中にいるわけでもないし、これは好機だ。いろいろと教えてもらおう。

それじゃあ、レシェールさん。俺は「プラズィ」について教えてほしいです
“ծƃз, зuɱuƚзuᴅun. ᴅuзuюu ծn ϱuзuᴅ nƃюunэ <xзƃᴅn>.”

レシェールは得意げな表情に戻って、翠の机に近づき、辞書を覗(のぞ)き込んできた。

#44　芋づる式は疲れるよ！

これが単語でこれがプラズェール
“ϱжƃ uᴅ nƚƃɱƃnɔю ծƃз ϱжƃ uᴅ xзƃᴅnuƚз.”

レシェールは翠が開いていた辞書にある単語を指して言った。そして、その下の語釈を指して“xзƃᴅnuƚз(プラズェール)”と付け加える。
“xзƃᴅn(プラズィ)”に“-uƚз(〜すること)”がくっついた形に思える。例によって“n”のあとに母音が続くと“ɥ”になる法則にちゃんと従って、「プラズィエール」ではなく「プラズェール」になっているところをみると、機械的にも思える音韻法則に従って発音をするレシェールたちが無機質なものに見えてきて、この視点の転換もまた面白いと思ったりした。まあ、レシェールたちは人間だし無機質な『もの』ではないけれど。

単語を指して“пƚБɱБпɔю”(クラシャユン)と言ったところを見ると、これが「単語」という意味であることは確実らしい。すると問題は“xзБɒn”(プラズィ)の方だ。語釈を指して“xзБɒnuƚз”(プラズェール)と言ったということは、つまり「語釈」は“xзБɒn”(プラズィ)の結果生まれたもの。“зuǫnx”(レヴィプ)の語釈には“xзБɒn пƚБɱБпɔю”(単語をプラズィする)と書かれている。つまり、“xзБɒn”(プラズィ)は「説明する」という意味の単語だろう。

—— 本 —— 単語を —— と ——
“uƚɒ пƚБюиииƚз и̤ɔ xзБɒn пƚБɱБпɔю эз ðuпБжuƚи̤ Бɯ uи.”

ここまでは何とか分かったが、なかなか細かい単語が分からない。考えているうちにレシェールが隣の席に座った。気になって隣を見ると、「勉強しろ」とばかりに辞書を指し示してきた。彼の様子から、集中しているところを邪魔したくはないが、勉強の様子を見て助けてあげようという感じか。ネイティブの助けは非常にありがたい。

さて、次は長めの単語である“ðuпБжuƚи̤”(メヤクェーツ)を引くことにしよう。多分これは名詞で他の細かいやつは接続詞か面倒な文法や句法が絡むやつだ。とりあえず名詞で大体の文意を掴もう。

ðuпБжuƚи̤(メヤクェーツ)

【ɱиэ.u】 uƚɒ жБюиииƚз зuɔɒ uɔɒиnƚБɿɯ пƚБɱБпɔю.(エウスティーアの単語)

:Бзuɒ зuƚɒɒu зпюuxБƚпюu ɿɯ ðuпБжuƚи̤.:(アレスはリネパーイネ語のメヤクェーツを学ぶ)

例文の“Бзuɒ”(アレス)は、シャリヤの苗字(みょうじ)と同じだ。多分この例文では主語に人名がきているのだろう。どうやら“ðuпБжuƚи̤”(メヤクェーツ)は学べるもので「リパライン語の」で修飾できるものらしい。あと語釈が“зuǫnx”(レヴィプ)と同じように“uƚɒ”(エース)から始まっている。「〜とは」みた

いな感じで辞書の語釈では定型句なのかもしれない。そう思って周りにあった他の単語の語釈を見てみると“uꜰD(エース)”から始まるものが多かった。
“ɔсБЮОИuuꜰз(クワンテール)”は「ɔсБЮОИu(クワンテ)するもの」と読むことができる。“зuɔD(レウス)”は多分前置詞で“ɔсБЮОИuuз(クワンテール)”と“uɔDИnꜰБꜰɯ пꜰБɱБnɔЮ(エウスティーアの単語)”の関係を指し示している。そうなってくると“uɔDИnꜰБ(エウスティーア)”と“ɔсБЮОИu(クワンテ)”が何なのかが非常に重要だ。

“зuɱuꜰзuDИn(レシェールさん)”

尋ねようとすると待ってましたとばかりに“сБꜰ8nuꙋ(何だい？)”と答えてくれる。

“DИзuЮu 8n ɱnꜰзuɱ пꜰБɱБnɔЮ. <ɔсБЮОИu> Бɯ <uɔDИnꜰБ> uD(俺は単語を理解したい。「クワンテ」と「エウスティーア」って) сБꜰ8nuꙋ(なんですか？)”

レシェールはそれを聞くと少し唸(うな)って考え始めた。
何というかレシェールは頼れるおじさんではあるが、外国語の先生というタイプじゃない。どちらかというと生活指導とか体育の先生といった感じ。言っちゃ悪いがどちらかというと肉体派というか……。
ただ、ネイティブに教えてもらえるほどいいことはない。説明力がなくても訊き出せるだけ辛抱強く訊き出そう。

“<ɔсБЮОИu> uD зпɔꜰɱэ Бɯ пꜰБЮОИuэ Бɯ DпɔꜰзБэ Бɯ uИ.(「クワンテ」は話すこと、書くこと、スクーラすることと——)”
“DпɔꜰзБэ...... uD сБꜰ8nuꙋ(スクーラオとは？)”

“зпɔꜰɱэ(話すこと)”や“пꜰБЮОИuэ(書くこと)”に並列しているとすると“DпɔꜰзБэ(スクーラオ)”も同じ動名詞で語幹の“DпɔꜰзБ(スクーラ)”は動詞のはずだ。

レシェールはその質問を聞くとノートの脇にあったペンを取って、ノートに何かを描き始めた。10秒ほどで描いた絵は簡単だが分かりやすい人間の行為の姿を表していた。

（なるほど、「描く」だ）

人が画筆を振るう姿をレシェールは描いていた。人がキャンバスに描いていたのは、あまりにシンプルで細かいところまでは分からないが、とにかく絵を描く姿が描かれたということは“ᴅпɔɫзб（スクーラ）”は「描く」という意味になる。

つまり、「ɔcбюиu（クワンテ）は話すこと、書くこと、描くこと」ということになる。何というかいずれも何かを表すことだから“ɔcбюиu（クワンテ）”の意味は「表す」ということが考えられる。

次にレシェールはその絵の下に一つの箱と多数の箱を描いた。

一つの箱の下には“ɱnıюnɫɱизu uᴅ <ᴅибɱnэɫи>（シニーフトレは「スタフォート」）”とあり、多数の箱の下には“uɔᴅиnɫб uᴅ <ᴅибɱnэɫибᴅᴅ>（エウスティーアは「スタフォータス」）”と書いてある。ᴅᴅが異様に強調して書かれているのを見るとここが重要な部分らしい。上の絵との相関性を鑑みるにこれは……。

（複数形と単数形ってやつですよね……）

あまり好ましくない兆候である。

日本語は複数であることに敏感ではない言語だ。兄弟が複数いても「兄弟たち」と言っても言わなくてもよい。でも、英語ならちゃんと“brothers”と“-s”を付けて言う必要がある。もし、リネパーイネ語が複数であることに敏感であれば少し面倒かもしれない。何せ常に複数かどうかについて気にかけていないといけないからだ。面倒くさいことこの上ない。

それはともかく、“uɔɒиnŀƃ（エウスティーア）”が「複数形」であることは簡単に理解できる。そして、絵で対照に表された“ɱnюnŀɱизu（シニーフトレ）”が「単数形」であることはもはや自明の理だ。あと、複数形の作り方もなんとなく分かった。

“ʒэ ɱnŀзuɱɤ（分かったか？）”
“あ…… цƃ（はい）.”

考察にどっぷりハマっていた翠は集中力を完全にそっちに向けていて、怪訝（けげん）そうに顔を覗き込んでくるレシェールに全く気づいていなかった。応答したことに対してレシェールは安心したのか、少しのけぞって座る。

これまで得られた情報で“ʚunƃɔcuŀụ（メヤクェーツ）”の語釈である“uŀɒ ɔcƃюииuŀз（表すもの） зuɔɒ uɔɒиnŀƃɻɯ nŀƃɱƃnɔю（複数形の単語）”は大体理解できるようになった。
つまり、辞書は「複数形の単語を使って表すもの」が“ʚunƃɔcuŀụ（メヤクェーツ）”であると言っているのだ。熟語というか句というか、そういうものが“ʚunƃɔcuŀụ（メヤクェーツ）”なのだろう。

“uŀɒ nŀƃюииuŀз（本） ụɔ xзƃɒn nŀƃɱƃnɔю（説明する、単語を） эз ʚunƃɔcuŀụ（熟語） ƃɯ（と） uи.”

（それにしても疲れた……）

色々調べてやっと単語の意味とかを理解したが、やはり初学者だから芋づる式に単語を引くことになる。これを調べたら、また次の分からない単語を調べてとやっていると、もともと引いていた単語が何だったのか分からなくなってくるし、頭の片隅に置いたまま探すのも疲れてしまう。インド先輩レベルなら何も問題なくささっと

やるんだろうか。もしかして、このやり方が悪いとか……。
言語パズルなど、やり始めたらどうということもないだろうと高をくくっていたら非常に疲れてしまった。だが、ここで断念するわけにはいかない。今日はこの図書館に引きこもって色々やっていこうと決めたのだし、“зuɒ̰nx（レヴィプ）”の語釈の分からないところを理解できるようになるまでは、絶対にあきらめたくはない。

長めの単語の意味が分かったところで小さい単語について考えてみるとしよう。未だ予想の域を出ないが、“эз（オル）”は接続詞、“uи（エト）”は名詞で、“ułᴅ（エース）”は辞書だけに出てくる定型句や省略のようなものだろうと思った。雰囲気だけでの予想だが、大体こういうのが当たっている場合もよくある。

（外れている場合もよくあるけどな……）

そんなこんなでまず最初に出てくる“ułᴅ（エース）”を引こうと思い、翠はuの文字を辞書の小口から探し出し、開いた。

#45　頭の悪い人による植物事典

ułᴅ（エース）

【пБю.u】ӥɔ uᴅ :u uᴅ:.（ツーは「エ　エス」である）

:ułᴅ（エース） пłБюи（本）uułз.:

ふむふむ、“ӥɔ（ツー）”がよく分からないが、コロンらしき引用符で囲まれた“u uᴅ（エ エス）”であると強調されて書かれているということは、

表現を置き換えたものなのだろう。

（ん……？　というより……）

“u uᴅ（エ エス）”と“uŀᴅ（エース）”は発音的に似ている。もしかして省略形とかくっついた形とかそういうのなんだろうか。でもそうなると、“u（エ）”の存在が気になる。が、単語的に小さいから文法的なものになるとして、説明が煩雑になって理解できる気がしないのと、省略語ということになるといよいよ辞書特有の表現な気がしてくるので、それを調べるのは後回しにしておく。先に“эз（オル）”を調べてみよう。

эз（オル）

【пŀи.б】（x эз ǫ́）збŀиб（人が――する） иuɱи ɱбззuŀ x бɯ（と） ǫ́.

:ɱжб uᴅ збŀиб（これは人――） эз ɯэзɔϐ.:

“x（ペー） эз（オル） ǫ́（ヴェー）”で構文を提示した後、その後の語釈でそれを数式の変数のように取って説明を付け加えている形式のように見える。

説明文に見覚えのある単語、“иuɱи（テシュト）”があるのが確認できた。“ɱuзnɱuз（好む） иuɱи”の“иuɱи（テシュト）”だ。そんな感情的な単語が辞書で出てくるとは思わなかった。もし植物事典の項目の説明に「ばなな、俺が嫌いなお花を咲かせる」とか書いてあったら読んでるこっちは複雑な気持ちになる。てか、その植物学者は「ばなな」に一体何の恨みがあったんだ？　リンゴによく似たバナナとかがもしかしてあったのか？　それで、普通のリンゴを見せられて「ばなな！」と答えてしまったのか……？　真相は如何に……。

馬鹿な考えはおいといて理論的な解決に手をつけていく。ここま

でくれば、そもそも“ɱuзnɱuз иuɱи(フェリフェル テシュト)”が「好き」という意味ですらないのではないかという疑いも出てくる。ただ、「～が好き」という表現として“ɱuзnɱuз иuɱи(フェリフェル テシュト)”は一応シャリヤやエレーナたちに通じていたはずだ。当たらずといえども遠からずという感じなのだろうか。もしかしたら彼女たちには不自然に感じるところがあったかもしれない。
“иuɱи(テシュト)”の意味を知るためには、やはりネイティブであるレシェールの力が不可欠だ。

“зuɱuꜰзuᴅиn, <иuɱи> uᴅ cбꜰϐnuɤ(レシェールさん 「テシュト」とは何？)”

それを聞いたレシェールは辞書をさっと確認し、すぐにペンを取って、先程ノートに描いた箱の複数形の方の一つを黒く塗り潰した。次に丸で箱全体を囲って、塗り潰した箱を起点に外側へと矢印を描いた。矢印とはいえ、この世界の矢印は矢の先の形が山ではなく、時刻表記号の「ⅰ」のようになっていた。
さらに続けて、レシェールは箱を囲んだ丸の上に“ɱбззuꜰ(ファッレー)”、そして今度は矢印の上に“иuɱи(テシュト)”、そして矢印の先に丸を書いてその中に“иuɱиuꜰз(テシュテール)”という単語を入れる。書き終えると、どうだとばかりにペンをおいてうかがうように顔を向けてくる。

（いくつかの対象の中から一つを取り出す行為……？）

“иuɱиuꜰз(テシュテール)”が「取り出されたもの」ということであるならば、“иuɱи(テシュト)”は「選ぶ」とか「取り出す」とかそこらへんの意味なのかもしれない。“ɱuзnɱuз иuɱи(フェリフェル テシュト)”の“ɱuзnɱuз(フェリフェル)”がどんな意味か気になるが、今回の文章にない単語なので本題ではない。では“ɱбззuꜰ(ファッレー)”はなんだろう……？
元の文章は“збꜰиб иuɱи(人が選ぶ) ɱбззuꜰ(ファッレー) x(と) бɯ ǫ́.”まで分かっている。

“ɱʙззuɫ”(ファッレー)は“иuɱи”(テシュト)の対象を指定していると考えるのが自然かもしれない。そうすると“ɱʙззuɫ”(ファッレー)は「〜の中から」という意味で“ʙɯ”(〜と〜)はその対象を繋(つな)げる役目なのだろう。つまり、“x эз ǫ́”の　語義は「人がxとǫ́から選び出す」ということになる。辞書の語釈に戻ると……。

uは　本である　——　説明する、単語を　と　熟語　と　——から選び出して

“uɫɒ пɪɫʙюиuuɫз и̤ɔ хзʙɒn пɪɫʙɱʙпɔю эз ʒuпʙжuɫи̤ ʙɯ　u　и　.”

うむ、大体意味が取れてきた。「単語または熟語とuи(エト)などを説明する本である」と書いてあるらしい。“и̤ɔ”(ツー)はなんとなく関係代名詞っぽいものに見える。関係節なんて英語で散々理解に苦しめられてきたあれじゃないかと思うが、一応今見た“и̤ɔ”(ツー)は“хзʙɒn”(説明する)が“пɪɫʙюиuuɫз”(本)を修飾するためにつけられている単語なのだろう。というわけで、あと調べなければならないのは“uи”(エト)かあ。

翠はまたパラパラと辞書のページを捲(めく)った。

uи(エト)

【ɱиз.u】 uɫɒ юnǫ(エは) зuɒɯnиuпɒиэю(レスディテクストン) зпɔɫɱuɫз(言うことではない).

:ʒn ɱnɫзuɱ uиuɫɯ ɯɔɱnuюuɫз.:(私はエトの仕事を知っている)

またよく分からない単語が出てきた。“зuɒɯnиuпɒиэю”(レスディテクストン)だ。その他は大体知ってる単語で構成されていたから理解できるが、多分最も重要なところがこの単語に含まれているのだろう。

“зuɱuɫзuɒиn……(レシェールさん……) あれ？”

レシェール、机に突っ伏して寝ている！！

ぐうぐうと寝息を立てて寝てしまっている。パワータイプっぽいレシェールにとって翠の独学を見守るのはさすがに退屈過ぎたのかもしれない。

（うーん、起きるまで待つのも時間の無駄だし、ヒンゲンファールさんにでも聞きにいくか）

そう考え、手持ちのペンで手帳に“зuɒɯnииuпɒиэю（レスディテクストン）”の文字を記して、席から立ち上がった。

#46 Code red

“cnюn̤n̤uюɱ̤uɫ……（ヒンゲンファー……） じゃなくて……cnюn̤ɱ̤ʙзnɫɒиn, ɗəз ʒэɫɒɤ（ヒンヴァリーさん いますかー？）”

階段を使って降りていくと、カウンターの向こうにヒンゲンファールが座っていた。
声をかけてカウンターに近づくが、彼女は翠を一瞥（いちべつ）すると手でこちらに来るなと合図する。ヒンゲンファールと何回も呼ぶから、嫌われたのかと思い一瞬悲しくなったが、ヒンゲンファールが硬い表情で目をやる窓の先を見るとその原因が分かった。

（なんだあいつら……？）

カウンターの向こうのガラス窓に物騒なものが見えた。
防弾ベストのようなものを着てライフルを手に持った民兵らしい人影。民兵はお互いに仲間と打ち合わせをし、無線で連絡を取り合いながら忙しく駆けていく。もしかしてこの街――レトラに敵が入ってきたのか、と思ったがレシェールたちとの移動中に見た政府軍

兵士の服装とはまた違う。そして、レトラのバリケードは十分に敵の侵入を防ぐだけの高さがあり、各所に見張りもついている。一日や二日で予兆もなしに侵入されたりするのはにわかに信じがたい。

“cʙƚϑnu（何） ɒэзuᴅ……ɤ”

ヒンゲンファールは自分自身に問いかけるように小声でつぶやいた。どうやら何が起こっているのかは彼女にもよく分かっていない模様だ。あれだけ茫然（ぼうぜん）としていれば異常事態であるということくらいは分かるが、情報がない以上どうしようもなかった。
民兵たちは図書館の前からは去っていったようなので、翠はヒンゲンファールのいるカウンターまで近づいていった。

“ʒэ ɱnƚзuɱ ᴅnᴅᴅ cʙƚϑnuɤ”（あなたは彼らが何かわかりますか？）

ヒンゲンファールに尋ねるも表情なく首を横に振る。
この街に長らく住んでいそうな彼女でさえよく分かっていない状況に一瞬恐怖感を覚えたが、悪い方にばっかり考えているだけのような気もした。
情報がない限り、彼らが何者で、何が起こっているかについて断定することは難しい。言葉もこの世界での慣習も何も分かっていないに等しいのに、情報を与えられても理解できるかどうか怪しい。結局こんな状況では、なるようにしかならないと開き直ることにした。

それはそうと、シャリヤやエレーナたちは今どうしているだろうか。もし彼女たちに何かあったら自分もただでは済まないだろう。せっかくここまで一緒に来て、お互いに少しずつ信頼を深めている人間を誰も失いたくない。彼女たちが怪我でもしていないか心配だ。

自分には手当てすらできないだろうが、それでも傍にいてあげたい。
　そんなことを考えていたが、ノートにある“зuɒɯnиuпɒиэю（レスディテクストン）”の文字を見て、思い出した。この単語をヒンゲンファールに訊こうと思っていたのだ。でも、こんな焦燥感に包まれた状態では言語学習なんてやっていられるわけがない。

（すぐに荷物をまとめて、とりあえず部屋まで戻ろう）

　急いでペンやノート、辞書を持って図書館から出ようとする。レシェールはいまだ寝たままだったがほっといて図書館を出た。

　図書館を出てから気づいた。辞書をそのまま持ってきてしまっていた。ただ、ヒンゲンファールもきっと翠が焦燥感に駆られて図書館を出たのだと分かっていたのだろう。特に注意はされなかった。広いとはいえ、レトラの街の人だけが利用する図書館なのだし、外部との繋がりがない分、そこらへんが緩いのだろう。
　何回かペンや重い辞書を落としかけたが、走ってシャリヤの部屋に戻ってきた。

「あ、あれ……？」

　シャリヤがいない。呼びかけてもどこにもいない。シャワールームの中にももちろんのこといなかった。
　お隣のエレーナの部屋はノックをしても誰も出てこない。何かあって避難のため何処（どこ）かに行ったとか、何者かに連れていかれてしまったとか……。
　ついつい、悪い考えが頭をよぎってしまう。考えに疲れ果て、椅子に腰かけて茫然自失（ぼうぜんじしつ）になっていると、テーブルに紙切れが置いてあるのに気づいた。黒インクで書かれたその筆跡に何か安心させる

ものを感じた。

（これは……シャリヤの手書きリパーシェ文字だ）

そう、丸いところが尖(とが)り、“ŀ”や“ĭ”が簡略化された特徴的な手書き文字を彼女に見せてもらったのは記憶に新しい。何が書いてあるか、紙を見て文字を読み込むことに集中する。

ʒиюuɒиn(翠へ)

ծnɒɒ(私たち) иɜшnuɒи ɱnɿбюɱб ɱɔб иɱбŀʒбŀɱэ.
ɱn ʒэ(あたな) ʒuиnɱ бӥnɔŀӥ, пʒnu ɱnɿбюɱб.

よく分からないが、確か“иɜшnuɒи(テュディエスト)”と“пʒnu(クリェ)”は移動系の動詞だ。前者はレシェールが“ɒuʒиюu(ゼレネ) ʒэ иɜшnuɒи(テュディエスト) пŀбюиɥʒɱnʒծ(クランティルヴィル？)”と言っていたことから、「行く」という意味であることが予想できる。つまり、“ծnɒɒ(ミス) иɜшnuɒи(トュデイエスト) ɱnɿбюɱб(フィアンシャ)”は多分「フィアンシャに行く」か。フィアンシャってなんだろう。近くの地名とかだったらすでに翠は置いていかれてしまったことになる。

昨日レシェールから受け取っていた地図を開いてみる。よく見ると“пŀбюиɥʒɱnʒ(図書館)”の目と鼻の先に“ɱnɿбюɱб(フィアンシャ)”と書いてある。確かに、図書館の前に変な外観の建物があるのには気づいていた。あれが“ɱnɿбюɱб(フィアンシャ)”なのだろう。

（しかし、有事にそんな奇抜な建物に逃げ込むか……？）

何か違和感を覚えた翠はとりあえずその“ɱnɿбюɱб(フィアンシャ)”へと向かうことにした。

#47 иϱбdюпuⱶ（トヴァスンケー） зпхбзбэюu（リパラオネ）

「やっぱり変な建物だ」

周りの建物が灰色じみていて無彩色の街であったのにそこに存在する建物にとても違和感を覚えた。

日の光を反射して輝くほどの真っ白さに加えて、キノコを連想させる建物の構造。周りにもぽつぽつと同じような形状で小さく真っ白なキノコが立てられている。祠（ほこら）のようなところに額に入った誰かの写真が花を掛けられて置かれているなど、異様なオーラを放っていた。

門は内側に開くスイングゲートで、もうすでに開いた状態だ。シャリヤはここにいるはずだ。

“dбзбⱶɔб（こんにちは） зɔ（――）.”
“あ、えっと……dбзбⱶɔб（こんにちは）.”

白いワンピースを着た女性がキノコ型の建物の前に立っている。街の人なんだろうが、通りですれ違う人とは違う雰囲気の服装だ。建物の色に合わせて服装も白いのにしなきゃいけないとかそういうマナーでもあるんだろうか。

そんなことはともかくシャリヤを探さなくては。

“ðuⱶ（えっと）, ɱбзпцб ðэз ɱбз ɱжбɣ（シャリヤはここにいますか？）”
“ɱбзпцбdипɣ（シャリヤ？） бⱶ, ʒп ud（ああ） зпхбзбпю ðпбю цб зɔɣ（彼女は――である、はい――）”

思い出したように、白ワンピースの女性は頷（うなず）いて答えた。

よく分からないが、“зпхбзбпю（リパライン）” って “зпюuхбⱶпюu（リネパーイネ）” とか

“зпхБƚɱu（リパーシェ）”に似ている。“зпхБзБпю（リパライン） ϑпБю（ミャン）”とシャリヤが呼ばれたということは、それらの元は一つの民族の名称だったりするのかもしれない。

“ϑБз, ʒп ϑэз（それで） ɱБз сБƚϑпuɣ（彼女は何に？）”

「どこ」という表現を知らないので“ɱБз сБƚϑпu（何に）”で代用する。知らない表現は適当に置き換えておくと教えるほうやネイティブが不自然さに気づいて正しい表現を教えてくれるし、学ぶか学ばないかはともかくとして、意思疎通しなきゃいけない場面でこういうことができることは大切だ。

質問に対して女性は出てきた建物の方を指し示した。“ɱБʒu.（ありがとう）”と感謝の言葉を述べて建物に入ろうとしたところ、止められた。

“ϑпзп（待って）, ʒэ uᴅ иɷБᴅюпuƚ зпхБзБэюu зэɣ（あなたは――ですか？）”

“иɷБᴅюпuƚ……зпхБзБэюu……ɣ”

何かを確認されていることは分かるのだが、よく分からない。“зпхБзБэюu（リパラオネ）”という単語もよく考えると“зпюuхБƚпюu（リネパーイネ）”や“зпхБƚɱu（リパーシェ）”、“зпхБзБпю（リパライン）”とかに似ているから、そのグループに関係する単語らしいが、細かいニュアンスが分からない。辞書を引いてみようと思ったが、辞書はシャリヤの部屋に置いてきたし、引いてすぐに理解できるようなものでもない。

（困ったぞ、訊かれていることがよく分からない……）

“Бƚ（ああ）, ʒuюuᴅиn（翠） пзпu ʒэɿᴅ ɱБз ɱжБ ип.（ここにあなたは来る――）”

聞き覚えのある声が建物の方から聞こえる。シャリヤだ。

こんな時にちょうどよくシャリヤが来てくれたのがありがたかったし、どうやら怪我とかをして焦って逃げている様子でもなかったから安心した。

――よ　彼は――にて　――ではない　しかし
“ɱБƚӥюnꞁБƚDиn, Dn uD юnϱ зnxБзБэюuuƚ ɱБз юэ xБ
は言う　私たちの
пБюиnuƚӥэзnDиБю зnɔƚɱ юэ зБ зuɱ иnƚюuɤ <ɞnDDꞁɯ зБ иэюnƚ
しない　私たち
иБDи юnϱ ɞnDD ɱБзu зБƚиБDиБюDD.>”
はい　でも　――したい　私
“ųБ, xБ Duзuюu uɯnɱБ ɞn uпʒu зБxэю юɔю xuзɱ ϱБюпБɞnuи
言わない
зnɔƚɱ юnϱ иn зɔ. ”

ぐぬぬ、白ワンピの女性とシャリヤが二人で何か交渉しているみたいだが全然会話が頭に入ってこないぞ。

毎度恒例だが単語力がなさすぎて会話の大意すら理解できない状態だ。だが、シャリヤはその白ワンピの女性と話し合ってどうにか納得してもらっていた様子だった。内容はよく分からないけど、結構長い言葉を言い合っていたのでわりと込み入った話だったのかもしれない。

シャリヤは交渉を終えるとその女性と別れ、翠を建物の中へと招いてくれた。様子から見て、この街で有事が起こっているという雰囲気ではない。それでは、あの慌てふためいていた様子の武装集団はなんだったんだろうか。訓練だったり、警邏（けいら）だったりとかだろうか。それにしてはヒンゲンファールは彼らに怪訝な表情を投げかけていた。もしかしたら事態は始まったばかりでシャリヤたちはそれを知らないということだろうか。

それで翠　あなたは「アレフィス」を知っている？
“ɞБз, ʒuюuDиn, ʒэ ɱnƚзuɱ <Бзuɱnᴅ>ɤ”
アレフィス……？　いいえ　アレフィスって何？
“Бзuɱnᴅ……ɤ юnϱ, Бзuɱnᴅ uᴅ cБƚɞnuɤ”

建物の内部では数人が床に直接座っていた。床は大理石で、前方

には数台のベンチが設置されている。最奥部には、天井から大きな白い布が掛けられていた。
　シャリヤと翠もそれに倣って、地べたに座ることにした。地べたとはいえさすがに建物の中であり、綺麗（きれい）にされていた。大理石の床は少しくすんだ色をしていたが、埃（ほこり）一つ落ちている様子はなかった。
　シャリヤは“бзuɱnᴅ（アレフィス）”を知っているか？　という質問をした。もちろん知らないので「いいえ」と答えたが、正直に答えたのにシャリヤは不思議そうな顔をしていた。この異世界では“бзuɱnᴅ（アレフィス）”という何かが中途半端に有名だから、そういう話の切り出し方ができるんだろうか。でも、知らないものは知らないのだ。そればかりはしょうがないので怪訝に思わないでほしい。

アレフィスは私たちの——
“бзuɱnᴅ uᴅ ðnᴅᴅuɟɯ иэюnɫ.”
ごめん　でも、俺は「トニー」が分からないんだ……
“юбʒu, хб ʒuюu ðn юnɳ ɱnɫзuɱ <иэюnɫ>......”

　分からないことはどんどん訊いていく。今いる違和感バリバリの建物についてやシャリヤがここに来た理由が分かる気がするからだ。
　翠はシャリヤの次の言葉に耳を傾けることにした。

#48　クワイエの教え

　シャリヤと謎の建物の中で話を続けていた。“бзuɱnᴅ（アレフィス）”や“иэюnɫ（トニー）”などの単語が分からない限り、ここの存在もよく分からないままになってしまう。

トニーは私たちのトヴァスンケールするもの
“иэюnɫ uᴅ ðnᴅᴅuɟɯ иɳбᴅюпuɫз.”
それじゃあ　君はトニーをトヴァスンクしているの？
“ðбз, ʒэ иɳбᴅюп иэюnɫɣ”
うん　私はアレフィスをトヴァスンクしている
“чб, ðn иɳбᴅюп бзuɱnᴅ.”

なるほど、“бзuɱnᴅ(アレフィス)”は“иэюnƚ(トニー)”で、いずれも“иϱбᴅюпuƚз(トヴァスンクするもの)”らしい。“иϱбᴅюп(トヴァスンク)”の意味が分かってくれば自(おの)ずと“бзuɱnᴅ(アレフィス)”や“иэюnƚ(トニー)”の意味が分かりそうなものだ。

そんなことを考えているとシャリヤは翠に向かって“ðnзn(待ってて)”と言って、白い布が掛けられている建物の奥の方に歩いていった。高い天井から吊り下げられている布の高さは２メートルくらいで、天女の羽衣という感じだ……天女の羽衣って何だろう。

“оuюзuюхuɱ, оuюзuюхuɱ, ðбю ðnᴅᴅuю иэюnƚ зɫuᴅ ðnƚзuuю бзuɱnᴅ nэ ðn(私) иϱбᴅюп бзuɱnᴅuɱunю.”

シャリヤはその白い布に手を掛け、何かをぶつぶつと念じていた。割って入ることをためらわれる異様な雰囲気は、日本では感じたことがなかった。

ここが宗教施設なのであれば、色々とつじつまが合う。街の景観に合わない色と変な形の建物だったのは、宗教的にそういう色と形が伝統的に何かを表すことになっているのだろう。シャリヤがぶつぶつと念じているのは何かの祈りで、シャリヤが訊いてきた“бзuɱnᴅ(アレフィス)”は宗教名や神の名前だったりするのだろうか。

“бзuɱnᴅ(アレフィス)”は“иϱбᴅюп(トヴァスンク)”する対象であることが分かっているが、白ワンピの女性は確か“ʒэ uᴅ иϱбᴅюпuƚ зnхбзбэюuɤ(あなたはリパラオネをトヴァスンクする者か？)”と言っていた。“зnхбзбэюu(リパラオネ)”も“иϱбᴅюп(トヴァスンク)”する対象になりうるのだろう。仮説は立つにしても、“зnхбзбэюu(リパラオネ)”と“бзuɱnᴅ(アレフィス)”と“иэюnƚ(トニー)”の違いが分からない。

シャリヤが祈りを終えて振り向いた。その姿は、白いキャンバスの中に描かれた絵画のように背景に映えていた。何事もなかったかのようにすまして歩いてくる。建物の窓から差し込む光が、蒼玉の

ような眼と白金で染めたかのような銀髪を輝かせた。翠の元に戻ってくると少し笑みを浮かべて隣に座った。
　先に耳にした３つの単語の違いに関しては、いまだよく分かっていない。どうにかして訊き出したいが、どう聞けばいいか分からない。
　とりあえず、三単語が理解不能であることを示すべきだ。

シャリヤ　俺は「リパラオネ」と「アレフィス」と「トニー」が
“ɱбзnцбɒиn, ʒuюu ծn юnϱ ɱnłзuɱ <зnxбзбэюu> бɯ
分からないんだけど
<бзuɱnɒ> бɯ <иэюnł>.”
“бłцuł……”

　おっと、シャリヤが困り顔になってしまった。
　宗教関係の話なのだから多分言い出しづらいのか。いや、こんな話を持ち出しづらいのは日本くらいだ。インド先輩の話を聞いていると、海外ではどれだけ宗教と生活や文化・風俗・習慣が密接に繋がりあっているのかよく分かる。
　生活の中にヒンドゥー寺院やキリスト教の教会、イスラム教のモスクなどがあり、暮らしに根付いている。まあ、異世界で宗教がどのような扱いを受けているのか、どのような宗教の信仰がなされているかなんて分からないので、一歩間違えれば大変なことになるナイーブな部分であることには変わりない。だからこそ、彼らに精神的に近づいていくために知っていくことが大事なのかもしれないが。

アレフィスをトヴァスンクすることはリパラオネであり、アレフィスは
“иϱбɒюпэ бзuɱnɒ uɒ зnxбзбэюu ծбз бзuɱnɒ
トニーの名前だよ
uɒ иэюnłɿɯ ɱułзп.”

　翠がそんなことを考えているうちにシャリヤが答えてくれた。この返答だけで大体分かってきた気がする。
　トヴァスンクは「信仰する」、「信じる」の意味で使う動詞だ。

“иϱбɒюпэ（トヴァスンク） бзиɱ̢пɒ（アレフィス）” は「アレフィス信仰」で、“иϱбɒюпиŀ зпхбзбэюu（トヴァスンケー）” は「リパラオネ信者」だ。すると、“зпхбзбэюu（リパラオネ）” は「アレフィス信仰」であるということになるので、“зпхбзбэюu（リパラオネ）” は宗教名か何かなのだろう。「アレフィス」が “иэюпŀɫш ɱ̢uŀзп（トニーの名前）” と言っている。つまり、アレフィスが名前であるということはアレフィスが “иϱбɒюпиŀз（信仰対象）” であるということになり、“иэюпŀ（トニー）” ≒ “иϱбɒюпиŀз（信仰対象）” とも考えられるのではないだろうか。

“うーん、ðп ɱ̢пŀзиɱ̢.（分かったよ）”

というか、こういう場合、信者じゃない人がこういう施設に入ってもいいものなんだろうか。もし信仰心がないことを知られたら、異教徒は出ていけという感じで、追い出されかねない。この地域でこのリパラオネ教が信仰されているとしたら、その慣例によっては異教徒をどうするかも翠は知らない。異教徒皆殺しみたいなことはないだろうが、控えめに言って翠もただでは済まないだろう。まあ、ばれたらの話でばれなければどうということもないはずだ。

そんなことを考えていると、部屋の横側の扉が開いて先程の白ワンピの女性が出てくる。手には二つの袋を携えていて、こちらに近づくとその袋を渡してくる。シャリヤは素直に受け取っていたが、翠は受け取っていいのか分からなかったので、ぎこちない動作になってしまった。

“ɱбзи ɱ̢эб июэ из ŀиизбɫш ɱ̢пɫбюɱб.（ありがとう――レトラのフィアンシャ。） зизэ ðпɒɒ зпэŀɱ̢ ипзич.（――私たちは話す――）”

自分たちの横に座った白ワンピのお姉さんは翠を一瞥してそう言った。

#49　八ヶ崎翠は何処にいる

　言っていることがよく分からなくても、「一緒にお話ししましょう」みたいな雰囲気だけは受け取れた。表情と言動、雰囲気から敵対的な感情を持ち合わせていないということは分かる。言語というのは記号で表されるだけではない、そんなことをここの人々は教えてくれる。
　ただ、リネパーイネ語が話せないので談笑という感じまでいけるかどうかは謎だ。

それで　――の名前は何ですか？
“ȝбз, ɱбɫйюnꞁбɫᴅиn, ɱuɫзп uᴅ cбɫȝnuɤ”
私は――される「フィシャ・レイユアフ」
“ȝn ꞑuзuᴅ ᴅиnuᴅэ <ɱnɱб.зunцэбɱ>.”

　シャリヤの質問に白ワンピの女性が答える。どうやら、名前を訊(き)いたようだが女性、フィシャ・レイユアフさんはよく分からない返答の仕方をしていた。普通は“ȝnꞁɯ ɱuɫзп uᴅ......”(私の名前は)で返していたものに対して、“ꞑuзuᴅ(ヴェレス) 動名詞”の受動態の形で返している。“ꞑuзuᴅ(ヴェレス) ᴅиnuᴅэ(スティェゾ)”で「呼ばれる」と訳すのが自然な気がする。試しに訊いてみるか。

それじゃあシャリヤ、俺は何て呼ばれてる？
“ȝбз ɱбзnцбᴅиn, ȝn ꞑuзuᴅ ᴅиnuᴅэ cбɫȝnuꞁnиɤ”
君は八ヶ崎翠でしょ？
“зэ uᴅ цбйп̤бᴅбпn.зuю иnɫюuɤ”
はい　――――
“цб, цuɱnꞁuɫи.”

　シャリヤに向けた質問にフィシャが答えてしまった。どこ経由かは知らないが、自分の名前と素性が漏れているかもしれない恐怖を感じる。
　まあ、バリケードで仕切られ、外との交流が制限された街中では

お互いが顔見知りみたいなものなんだろう。それにしても全く知らない人が自分を知っていたら驚くものだ。顔と名前がセットで伝わっているんだろうか。それともセットで伝わっているのはシャリヤの方か……？

いつもシャリヤのことをつけているストーカーとか……？

やめよう。誰に何を思われているかなんて考えるだけ無駄だ。変な風に考えが回るとすぐに人間が信用できなくなる。

そんなことを考えていると、がたごとと床下から音が鳴った。わりと大きな音だったので、びっくりしたが何の音なんだろう。

これは何？　フィシャさん
“ɱжб ɯɒ cбƚϑnɯ, ɱnɱбɒиnɤ”
ええと　この——は—の水です——
“ϑɯƚ, ɱжбɺɯ збɯnƚ ɯɒ ϑɯюбɒ nɯиэɒи зɔ.”

シャリヤも疑問に思ったのか、床を指さして疑問を投げかけていた。フィシャは即座に答えていたが、水という単語しか聞き取れなかった。水道か何かが整備されていて、その音なのかは分からないが、特にシャリヤが慌てる様子でもなかったのでそういった感じなのだろう。多分重大なことでもなく、日常的なことであるという様子だった。

フィシャは、何事もなかったかのように立ち上がり奥の方に引っ込んでしまった。シャリヤが袋の中から食べ物を取り出していたので、翠もそれに倣って袋に手を入れると、トルティーヤのようなものが入っていた。そのまま口に運ぶがぱさぱさしていて、あまりおいしくなかった。だが、シャリヤを見て気づく。何かをつけて食べているようだ。パンというかインド料理のナンのようなものだろう。

シャリヤ、シャーツニアーって何？
“ɱбзnɥбɒиn, ɱбƚӥюnɺбƚ ɯɒ cбƚϑnɯɤ”

訊き忘れていることがあった。シャリヤは先程フィシャのことを“ɱбɫӥюnɬбɫɒин”(シャーツニアーよ)と呼んでいた。フィシャが“ɱбɫӥюnɬбɫ”(シャーツニアー)という何かであることは明白なわけだが、その何かがよく分からない。好奇心がまた湧き上がっていた。

“ɱбɫӥюnɬбɫ uɒ……”(シャーツニアーは)

シャリヤがそこまで言ったところで、言葉を遮るように大きな音をたてて建物の最も大きいドアが開かれた。建物にはいくつか小さいドアがあって、自分たちはその中の開いていたドアから入ったわけだが、今開いた中央のドアは３メートルほどの高さの大きい扉だった。

ある程度暗かった空間だったその部屋に、大きく開かれたドアからまぶしいほどの光が射(さ)しこんでいた。

“cбɫϑɔu ɥбӥп̤бɒбпп.ʒuю(八ヶ崎翠) ðэзi(いる) ɯuɫэпɫбðʒэз ɒnɫп̤ɬni”

まぶしくて何も見えないドアの先から、神聖な空間にしては粗暴な声が聞こえてきた。威圧するような声に続けて、中に入ってきたのは図書館でヒンゲンファールと共に見た民兵連中だった。

よく分からないが、翠の名前を呼んでいたような気がするので名乗り出ようとしたが、驚いて戻ってきたフィシャが目を見開いて、何事か彼らの前に小走りで駆け寄った。それを見て出ていくにも出ていきづらくなってしまった。

“c, cбɫϑnu(何) ɷэзuɒ зɔɤ”

“ɯuɫэпɫбðʒэз ɥбӥп̤бӥбпп.ʒuю(八ヶ崎翠). ɱзбɫɒпбɷбз ɱзбnɒ ʒnɫʒэɫ ӥɔ ɯuɫэп ɒn(彼) ðuзɒ ɱюэɥɔзnɬэɬɯ(の) ʒuп̤.”

“uɫɒ ʒuп̤......ɤ”

叫んだ男は頭に血が上っているのか顔が赤くなっている。フィシャと話をしたのはその横の冷静そうな人だった。フィシャは後ろ向きだったので顔が見えなかったが、言葉の端々から血の気が引いていっているような雰囲気が感じられた。

“ʚбз(では、), cбɫʚɔu ɒn ʚэзi(いる)”

赤い顔の男がさらに激高して言う。フィシャはその怒鳴り声にびくりと震え、怯(おび)えながら翠を指さす。男はよく聞き取れない怒号を飛ばし、フィシャを横に突き飛ばしてこちらに迫ってくる。

尋常ではない状況を翠は雰囲気で察した。

・五日目習得内容

1. 名詞の複数形は名詞＋ -ᴅᴅ(ス) で表す。
2. ӥɔ(ツー) は関係代名詞として使うことができる。
3. 丁寧な依頼は語末に xзбɱ(プラシュ) を付ける。

語彙

ɱnɥ(シイ)（【前】〈男性に対して〉～さん）、ɷбɥ(ヴァイ)（【前】〈女性に対して〉～さん）、ᴅбзбɫ(ザラー)（【間】ᴅбзбɫɔб(ザラーウア) の親しみを込めた形）、xзбɱ(プラシュ)（【相】お願いします）、зuɷnx(レヴィプ)（【名】辞書）、ʚuзɰuɫи(メルフェート)（【動】引く？）、пɫбɱбnɔю(クラシャユン)（【名】単語）、xзбᴅn(プラズィ)（【動】説明する）、ɔсбюиu(クワンテ)（【動】表現する）、ᴅибɰnэɫи(スタフォート)（【名】箱）、uɔᴅиnɫб(エウスティーア)（【名】複数形）、ɱnюnɫɰизu(シニーフトレ)（【名】単数形？）、ʚunбɔсuɫӥ(メヤクェーツ)（【名】イディオム、熟語）、uɫɒ(エース)（【動節】u uɒ(エ エス) の短縮形）、иuɱи(テシュト)（【動】選ぶ）、ɰбззuɫ(ファッレー)（【前】～の中から）、ӥɔ(ツー)（【前】関係代名詞）、иɔɯnuᴅи(テュデェスト)（【動】行く）、пзnu(クリェ)（【動】〈良く分からないが移動系の動詞だろ

う〉)、бзиɱnᴅ(アレフィス)（【名】アレフィス神)、иϱбᴅюп(トヴァスンク)（【動】信仰する)、
зnхбзбэюu(リパラオネ)（【名】リパラオネ教)、иэюnŀ(トニー)（【名】神)

Ex.5 side シャリヤ

翠が部屋を出ていった後、ふと気づいたことがあった。それは今週１回も教会(フィアンシャ)に行っていないということだった。リパラオネ教徒の義務が書かれた三十条教典(フィアンシャン)には７日に１回はフィアンシャでの礼拝を行わなければならないと書かれている。フィアンシャンの違反は宗教的重罪と見なされる。

シャリヤは、教典書集を引き出しから取り出して、青色のポシェットに入れた。この教典書集はリパラオネ教徒が信仰に用いる教典を網羅している。八条戒律から三十条教典(フィアンシャン)、ファシャグノタールからアンポールネム、ユーラガードからスキュリオーティエ叙事詩まで、読み物として読んでいても飽きがこないものだった。

翠に置き手紙をしようと思った。彼が帰ってきたとき、私が部屋にいなかったら、きっと戸惑うだろう。近くに置いてあるメモパッドから一枚紙を切り取ってペンを取りだし、手早く二行、簡潔に言葉をまとめた。

зиюuᴅиn(翠)

ϑnᴅᴅ иэшnuᴅи ɱnˀбюɱб ɱɔб иϱбŀзбŀϱэ.(私たちはフィアンシャに礼拝にいっています)
ɱn зэ зuиnɱ бӥnɔŀп̈, пзnu ɱnˀбюɱб.(もし、用があれば、フィアンシャに来てください)

書き終わってから思い出す。気づけば癖で、手記体で書いてしまっていた。彼は果たしてリパーシェ文字の手記体を読めるのだろうか。数日間一緒に暮らしているが、いまだにリパライン語が覚束(おぼつか)な

い。少しくらい読めなくても、大意は取れるだろうと思ってそのままにしておいた。
　彼はリパーシェ文字すらも所々読めないときがある。どうせなら一緒にいてあげて、この地域のことやリパライン語を教えてあげたい。だが、かといってアレフィス様を後回しにすることもできない。こればかりはしょうがなかった。

　大通りを歩きながら思う。リパラオネ教徒の礼拝の場所、フィアンシャ。最高地位のフィシャ・フォン・フィアンシャの下に連なる各派閥の総本山、その下にある礼拝堂統轄庁のさらに下にある末端フィアンシャが一般の教徒にとっては日常の祈りの場だ。
　調べたところ、このレトラの街の末端フィアンシャは自分の信仰とは教派が違うらしい。てっきり多数派であるフィシャ派の信者が多いのだろう思っていたのに、レトラでは改革派のほうが主流なのだそうだ。だから、ここのフィアンシャも途中からフィシャ派の信者が追い出されて、改革派の教会になったということらしい。
　フィシャ派の指導的地位にある教会――フォン・フィアンシャの一つが、反教会主義を唱えた科学主義的読解をしたりするリパラオネ教徒をまとめて改革派と呼んだのが始まりだが、それが教会を持っているということには何か違和感を覚えた。しかし、レトラでは問題は特に起きてはなさそうであった。

“ɱжɓ uɒ иnłюuɤ（これね）”

　白いキノコ状の建物、植物のつたを思わせる装飾のスイングゲート、全てフィシャ派の名残りのようなものだった。図書館の目の前に立つこの建物こそ、目的地であるレトラの末端フィアンシャだった。

“ɓłюuʒɓ.（礼拝ですか）”

建物からシャーツニアーが出てくる。白のワンピースと独特な上着——フラニザが、近づいてくる女性がシャーツニアーであることを示していた。フィアンシャの手入れや信仰の導きを行うのが主なシャーツニアーの仕事だが、本来、改革派にはシャーツニアーはいない。これもフィシャ派の教会だったときの名残なのだろうか。

はい　初めて来るのでここのジェパーシャーツニアーに
"ɥб, ɒuзuюu ðn ɒбзбɫuɒ ɱжбɺɯ ɯӥuxбɫ ɱбɫӥюnɺбɫɺʒ
挨拶がしたいんですけど
ʒɔю ɱэюизuɒэю пзnu ðnɺɒ."

初めてのフィアンシャに行くときはそのフィアンシャのシャーツニアーを統括し、フィアンシャを管理する最高責任者であるジェパーシャーツニアーに挨拶をするのが慣例だ。シャリヤもその慣例に従おうとしたが、相手のシャーツニアーは苦虫を嚙(か)み潰(つぶ)したような顔をして、一瞬黙ってしまった。

うちのジェパーシャーツニアーは死にました。
"u ɯ n э з з　з n б ɱ б　ɯ ӥ u x б ɫ ɱ б ɫ ӥ ю n ɺ б ɫ　ɥ n ɒ u ɒ ю.
革命派がこの街を占拠したとき
uɯnɱб ɱэзuɫɒɒuɺɒи ðбɫзбɒибюɺnи юuɒиnuɒиnз nэ
彼らはジェパーシャーツニアーをフェンテショレーとして殺したんです
ɒnɒɒ ɫuиэ ʒn ʒnɱɥ ɱuюиuɱэзuɫ."

シャリヤはきまりが悪い思いをしていた。フィアンシャとそこに基本的に住むシャーツニアーたちはお互いに家族のような関係だ。ジェパーシャーツニアーは彼女たちを管轄する最上位の存在でありながら、彼女らの間でのいさかいや思い違いを解決しようとする力が必要である。だからこそ、ジェパーシャーツニアーはどこのフィアンシャでも"зɔ ðбззб(母様)"と呼ばれ、慕われる。その死が与えるフィアンシャへの衝撃は、それぞれのシャーツニアーの心に深い悲しみの影を落としているに違いない。

ごめんなさい。　この街のことはまだ全然知らないんです
“ʒuɒxʙз. ðn ɱʙʘ жɔюu юnʘ ðuзɒ ðʙɫзʙɒuʙю.”

シャリヤの言葉を聞いて、フラニザを着たシャーツニアーは首を振って理解を示してくれた。
シャーツニアーは努めて笑顔であろうという雰囲気が感じられた。作り物の笑顔には、何かジェパーシャーツニアーの死について受け入れきれない出来事があったことを表していた。

さあ、行きましょう。　礼拝をしに来たのですよね？
“зuʒɔ uжшnuɒu. ɒuзuюu ʒэ uʘʙɫʒʙɫ чʙ unɤ”

シャーツニアーは沈痛な雰囲気を振り払ってシャリヤを帛神（はっきん）のある本堂に連れてきた。帛神もフィシャ派のフィアンシャにあるものであった。高いところから吊（つ）るされる白い布が祈りを捧（ささ）げる場所を表している。古くなった帛神は綺麗に洗われて、シャーツニアーの着るフラニザに使われる。このため、フィシャ派ではフラニザは多数の祈りが含まれる神聖な布で作られた神と民衆との契約の服とされる。
そんな帛神が吊るされているところを見て、やっとシャリヤは理解した。死んだジェパーシャーツニアーはフィシャ派だったのだ。革命派が来てから、このフィアンシャは改革派の教会に変えられた。しかし、その本質にはまだジェパーシャーツニアーの思い、フィシャ派が残っているのだ。

シャリヤは目を瞑（つぶ）って黙禱（もくとう）した。
革命内戦は未だ続いている。ジェパーシャーツニアーの死が無駄にならない未来を願って、深く祈った。

六日目　本質的な羸弱さ（ðuŀɜnɫuɪoʊŀɱu ɱuŀɜɘ）

#50　誤認

　灰色の壁にある小さい窓から差し込む光でやっと夜が明けたことを理解できた。そこに昨日までいた部屋の暖かい色の床、テーブル、椅子などはない。
　窓以外の壁が灰色の牢屋（ろうや）。鉄製のドアは半開きで、外には看守らしき民兵が小銃を携えてこちらをちらちら見ている。いくらきつく締めても部屋の隅にある蛇口は壊れているのか、ぽたぽたと水を垂らしていた。
　そこで翠は自分が牢屋に閉じ込められていることを認識していた。冷たい床に敷かれた布団に体温も体力も吸い込まれてゆく中で、翠は何一つすることがなく虚無感と共に過ごしていた。

　何故（なぜ）こうなったのか。
　話は民兵連中がフィアンシャという建物に入り込んできたときに遡る。どうやら自分は何者かからのお呼びがかかって、捕らえられたという状況らしい。しかし何が悪くて捕まえられたのかは全く分からない。まるで難民が命からがら母国や紛争地域から逃げ出すも、第三国で不法入国扱いにされ、入管の収容所に収容させられているようだ。
　そういえば、どこかの国で収容所の医療体制が整っていなくて、「死にそうだ」と訴えていた収容者を放置して、そのまま死亡させてしまったとかいうニュースがあった気がする。転生前の記憶がないくせにこういった記憶は何故かあるのが悔しい。確か、後に明るみに出たのはこれまでに何名もの収容者が医療体制の不備で体調不良を放置されて死亡したり、大勢の職員に蹴り続けられて片目を失

明したり、腐った給食を出されたりなどだった。大半は命からがら外国に逃げだしてきたのに受け入れ国でも残酷な扱いをされたということであった。こんなニュースに向けられたコメントは「無償で治療してもらう目的で違法入国してきているんだろ」などである。
　このように他人事なら義憤さえ感ずる人も少数だろう。確かに自分とは違う世界の出来事だと割り切って考えることもできる。別に薄情な人間というわけではない。自分に関係ない人間がどうなろうと、自分に危害が及ばないのであればどうでもいい話だというのも理解できなくはない。

（でもこれは……）

　まさにそういう感じではないだろうか。いきなり異世界から来て、言葉も分からずやっと安定した生活を送れるようになったと思ったら、捕らえられて独房に入れられてしまった。
　難民のことを自分とは違う世界、自分とは関係ない人間、と考えていたら自分がまさにそれになってしまった。
　でも、こうなるとどうしようもない。戦時中の国でまともな収容所の運営がされているなんて思えるはずもない。何が悪かったなんて考えても分かるはずもない。入国管理法とかに違反している？それとも信徒じゃないのに宗教施設に入ったから？

「はぁ……」

　これで溜め息は何回目だろうか。どうすることもできずに、小さな窓から差し込む光が灰色の壁に当たっている様子を見る。現状に抗うことは難しい。抗ったとしてただでは逃げ切れまい。逃げる最中に射殺されたら、もう二度とシャリヤたちに会うことはできなくなる。安易な行動をすれば何が起こるか分からない。

翠　いるか？
"ʒиюuᴅиn, ʒэ ծэзɤ"

独房のドアの小さい窓からは何も見えないが、聞き覚えのある声が聞こえる。たったっと足音が聞こえたのちにドアが開いた。つい昨日まで図書館で一緒に勉強していたレシェールだ。後ろに看守らしき人間がアサルトライフルを持って立っていたものの、レシェールと少し話をすると奥の方に行ってしまった。知り合いなのか、賄賂を渡したのかは分からない。

翠は数少ない知り合いと会えて安堵（あんど）するとともにそれまで抑え込んでいたフラストレーションによって疑問が言葉になって噴出した。

「レシェールさん……。何があったのか説明してくれ！　全然何も分からなくて、なんでこんなところに――」

えっと、ごめん。リパライン語を話してくれ、翠君
"Бƚ, юБʒu. зпɔƚɱ зпюuхБ ƚпюu хзБɱ, ʒиюuᴅиn."

はっと我に返る。レシェールに日本語でまくしたてても通じないので意味がない。あまりに混乱した自分の姿に悲しみが込み上げてくる。何をやろうにも言語の壁が障害となって立ちはだかってきた。これまではちゃんと対応できたのに、命の危機が迫る状況になって冷静に頭が回っていないことに気づいた。

えっと、えっと、俺はここにいる理由が分からないんです……
"ծuƚ, ծuƚ, ʒиюu ծп юпϱ ɱпƚзuɱ ծэзэ ɱБз ɱжБ......"
複数の――があって俺は教える――を
"uɔᴅиnƚБɥɯ пɔзэ ծэз ծБз ʒиюu ծп пБюиn ϱuƚᴅ пɔзэ зБх."

そう言って、レシェールは懐から紙きれを取り出し、何かを描き始めた。中央を隔てて両側に銃を持った複数の人の象形が描かれ、右側の集団の上に"ծnᴅᴅ（我々）"、左側の集団の上に"ɱuюиuɱэзuƚ（フェンテショレー）"と書かれていた。続けてレシェールは、"ծnᴅᴅ（我々）"の内の一人を丸で囲

み、矢印で引っ張ってきた先に“ЧБИ̤П̤БИ̤БПn.ЗиЮ uD（八ヶ崎翠は）ɱuюиuɱэзułɤ（フェンテショレーか？）”と書いていた。理解できたかといわんばかりにレシェールが顔を見てくる。

“ɱnłзuɱɤ（理解できた？）”
“ЧБ（はい）……”

いろいろなことをすっ飛ばしてまとめると、「八ヶ崎翠は敵側の人間ではないかと疑われている」ということだろう。シャリヤやレトラの街の人間は“ɱuюиuɱэзuł（フェンテショレー）”と戦い続けてきたが、なんらかの理由で翠が怪しまれた。結果、翠が“ɱuюиuɱэзuł（フェンテショレー）”であると誰かが吹聴（ふいちょう）し、街の自警団的な存在がとりあえずここにぶち込んだのだろう。

レシェールは、持ってきた鞄（かばん）をがさごそとあさり、翠に一冊の本とノートを渡してきた。その本は見覚えのある表紙であった。

“ɱжБ uD…… Зuɋnxɤ（それは……辞書？）”
“ЧБ（ああ）, шuЗnɔ ʒn ПБЮИn ɋ́БDɱБ（俺は教えねばならない）.”

そう言ってレシェールは翠の持っているノートに再び図を描き始めたのであった。

#51　残り時間

レシェールがノートに描き始めた図は今度は結構大きめのものだった。二人の人間が向き合って、その間に一人の人間がおり、その前方にも一人の人間がいる風景の絵だ。中央に描かれた人の上に“ЗиЮ（翠）”と書かれていたので、多分自分がこの先どうなるかについ

て説明しているのだろう。

“ʒuюoudиn（翠）, onэзз（——） ʒэ иэшnudи（君は行く） ɱзБƗdпБ（フラースカ）.”
“ɱзБƗdпБɤ（フラースカ？）”

フラースカ。多分絵に描かれている状態のことを指すのだろう。見たところ何か会議をやっているようだが、つまりどういうことなんだろう。

“зБƗиБdd xзБdn ʒuюɁn ɱБз ɱзБƗdпБ（人々は翠をフラースカで説明する）.”
“ðnɁd ɱuюиuɱэзuƗɁn юnɱ udэ udɤ（俺がフェンテショレーでないこと？）”
“цБ, uƗd ɱжБ（ああそうだ）.”

どうやらフラースカは翠が怪しい人間かどうかを判断する場所のようである。裁判か会議か、そこらへんの訳が与えられるだろう。
そんなことはともかく、裁判に引きずり出されてまともに反駁（はんばく）できるとは思えない。未だに覚えた単語数は100語にも達してないし、まともに話をすること自体ままならない。そんな状態で不当嫌疑を晴らすことなんてのは難しいことだ。ただ、レシェールに聞いて分かることはまだあるはずだ。翠が裁判に引きずり出されることだけを伝えに来たわけがない。

“зuɱuƗзudиn, шuзnɔ ðn зnɔƗɱ cБƗðnu ɱБз ɱзБƗdпБɤ（レシェール、俺は何をフラースカで言うべき？）”
“ʒэɁd ɱuюиuɱэзuƗɁn юnɱ udэ ud（君がフェンテショレーでないことだ） ðuзɱ（——） ʒuюu юnɱ（君が）
ʒэɁd зnюuxБƗnюuɁn зnɔƗɱэ ud（リパライン語を話せないということ）.”

ふむ、難しいことは言わず、簡単な事実を伝えることが大切なんだろう。どうせ何もまともなことは言えないだろうから、分かることは答えて、分からないことは分からないと言うべきなんだろう。

しかし信用できる人間が誰かというのが分からない。弁護してくれる人がレシェールだったら、その意見に同調すればいいだけなのだが、そうでもなければ誰が自分の無実を支持してくれるのか分からない。
　そもそも紛争地でまともな司法が働いているとも思えないし、弁護人もたてずに自己弁護することになるかもしれない。
　そんなことを考えているうちにレシェールの後ろから足音が聞こえた。レシェールもそれを気にしたのか、早々と部屋から出ていこうとしていた。

翠　君はリネパーイネ語を——に勉強するべきだ
"зuюuɒиn, шuзnɔ зэ зuɫɒɒu зnюuxБɫnюu ɱБз юэ."
ああ
"...... цБ."

　そう言い残して、そそくさと行ってしまった。シャリヤたちを引っ張ってきたグループのリーダー的存在であるレシェールが、身の危険を冒してまで自分を救うことは理にかなわないことだ。もしかしたら、ここまで会いにきてくれたこと自体が危険な行為だったかもしれない。だとしたら翠より翠の嫌疑でレトラ市民に疑われるようになった彼自身の仲間を擁護しに行ったほうがよかったのではないか。自分にどんな嫌疑がかけられているのかはよく分からないが、シャリヤたちは間違いなく無罪だ。自分のせいで連座に処されるなんて酷すぎる。
　辞書とノート、ペンを持ってきてここまでされたら、言葉が喋（しゃべ）れない状態で裁判の的にされるとしても、最後まで努力すべきなのは当然だ。だけど、まともな教育者がいない状況でどう学習をするかは問題がある。裁判に連れていかれるのがいつなのかも分からない。どのみちいずれ来るときまで、何もしないなどという選択肢はない。

（といっても、裁判に使える用語なんて知らないし、適当に分かる

ところを詰めていくほかないな）

　まず、ヒンゲンファールに訊きそびれた“зuɒшnииuпɒиэю（レスディテクストン）”を辞書で引くことからはじめるとしよう。窓からの少ない光のなか、辞書の小口にある“з”を探し、開いた。

（あれ……？）

“зuɒшnииuпɒиэю（レスディテクストン）”という単語を引こうとしたが、“зuɒшnииuпɒи（レスディテクスト）”という単語は出てくるものの、そのままの単語は出てこなかった。単語の変化形みたいなものか、それとも全然違う意味の単語なのかよく分からないが説明文をとりあえず読んでみよう。

зuɒшnииuпɒи（レスディテクスト）

【nłɱ.u】 ułɒ（……である） ɱuзϱnю nłбюииuułз（書くことか） эз зnɔłɱułз（言うこと）.

:ɱбпбюи uɒ зuɒшnииuпɒи（レスディテクスト）.:

　なるほど、やっぱりよく分からない。なんだろう、「書くこと」または「言うこと」らしいけど“ɱuзϱnю（シェルヴィン）”とかいうのが付いているのが、一番よく分かららん。“ɱuзϱnю（シェルヴィン）”も引いておくとしよう。

ɱuзϱnю（シェルヴィン）

【ɱиэ.u】 ułɒ uɒэ uɿn（することである） uшnɱб.

:ϑn ɱuзϱnю（私はシェルヴィン） ɱnłзuɱ зэ（あなたを知っている）.:

なんだろうか、名詞の前に来ていないあたりをみると副詞っぽい単語の気がする。“uDэ（エゾ） uɁn（エイ）”は“uD（〜である）”に動名詞を付けた形の“uDэ（であること）”になるわけだが、“-Ɂn（〜を）”という格が付いているから“uD（エス）”は「〜をする」だ。つまりこの節は「すること」になる。“uɯnɱƃ（エディシャ）”は“юnзnꜰD uɯnɱƃ（負け続けた）”についているように「〜し続けた」という意味を表すだろう。“uꜰD（エース） uDэ（エゾ） uɁn（エイ） uɯnɱƃ（エディシャ）.”は「し続けたこと」ということになる。“ɱuзϱnю（シェルヴィン）”が副詞とすれば「続けて」とかいう意味を表すんだろうか。

つまり、“uꜰD ɱuзϱnю nꜰƃюиuuꜰз эз зnɔꜰɱuꜰз.（書き続けたことか言い続けたことである）”ということになる。

と、そこまで分かったところでおそらく看守が無言のまま翠の独房のドアを叩（たた）いてきた。ドアが半開きのくせに、声もかけてくれないとは完全にこちらを見下している態度だと感じた。看守はこちらが気づいたことを確認して乱暴にドアを開けた。

“uɥ（おい）, иɔнɯnuDи（行くぞ）.”

こんなに早くその時が来るとは思わなかったが、ついていくほかない。もしかしたらレシェールがここまで会いに来ていたことを知った人物が時間を早めた可能性も考えられるが、そんな細かいことを考えている余裕はない。

翠は重い腰を上げて、看守についていった。

#52 ɱɔнзnDƃꜰɯ（ジュリザード）

看守についていき、裁判の場所と思われる部屋まで着くと、すでに何人かが中にいた。日本でもよくニュースで見る法廷の様子に似

ている。

看守が自分の後ろに二人立っていた。自分の面前には法服のようなものを着た裁判長らしき人がいて、左手にも同じような服装の人間がいる。

部屋は大体が木材で作られており、ニスが塗られた表面が光沢を見せている。無彩色の街とは違って色はあるところに好感を持てた。しかし、厳粛な雰囲気は翠の視界を狭めて、木目とその色を楽しむことを許さなかった。

“юэ зuɫ uзϑnɻuɒϑnзuɫǵбюпбɻɯ(の) ɱзбɫɒпбɻn ɱбɒ.”

翠の前に立つ男の一人が言う。

これから裁判が始まるのだろうと考えると唾を飲み込むことすら苦労するほどだった。緊張が体に影響を及ぼしていた。だが、一つだけ疑問が頭の中に浮かぶ。

（いない）

レシェールの描いた裁判所の部屋の図では、自分の左右のブースに人がいるはずなのだ。その時は検察側と弁護側と解釈したが、つまりどちらか片方がいないということ。すぐに絶望的な考えが想起される。弁護人もおらず、自己弁護することになるかもしれない。そんな考えが現実になりそうなことに驚いていた。

“ϑбз(それでは), ɱ́ɔнзnɒбɫɯ(ジュリザード) зпɔɫɱ хзбɱ(言ってください).”

正面にいる裁判長じみた人が翠の左側に立つ人の方を向いて何かを言わせようとしている。“ɱ́ɔнзnɒбɫɯ(ジュリザード)”というのが名前か役職なのだろう。ジュリザードは席から立ちあがって、裁判長に手を掲げ

た。

八ヶ崎翠はフェンテショレーです。彼は——です
“цБйп̈БɒБпп.ʒию иɒ ɱиюииɱэзиɫ. ɒn иɒ ɱ́юэцɔзnɬэɬɯ ʒип̈.”

裁判長が翠をじっと睨(ね)め付(つ)ける。

八ヶ崎翠よ、あなたはフェンテショレーですか？
“цБйп̈БɒБпп.ʒиюиɒип, ʒэ иɒ ɱиюииɱэзиɫɤ”
“まや むんそんしっしすく うぬぬむ？”

裁判長の質問の直後に即座に言葉を被(かぶ)せてきたのは、自分の真横に立っていた人物だった。通訳か何かなんだろうか？　日本語のような発音だが、何を言っているのかさっぱり分からない。リネパーイネ語とも関連があまりなさそうだし、どう伝えるべきかさっぱりだ。

そんなことを考えているうちに通訳さんは、返答がないことに焦り始めたようだ。

“あ……のや たかんせんき せまるむ？”
ごめんなさい　でも、何を言っているか分からないんです
“юБʒи, хБ ʒиюи юпɒ ðп ɱпɫзиɱ зпɔɫɱиɫз.”

通訳さんは「なん!?」と驚いていた。頭を掻きながら、何故という表情を浮かべている。

通訳さんは自分の仕事がなくなってしまったことに気づいたのか、きょろきょろと周りを見渡す。裁判長が見苦しそうに出ていけと手を振ったので、そそくさと法廷から出ていってしまった。どうでもいいが、せっかく助けになろうとしてくれていたのに可哀想な人であった。同時に自分を弁護なりなんなり、助力してくれる人もいなくなったことになる。

それはそうとして、気づいた時には議場は騒然としていた。よく分からないが、リネパーイネ語を話せることがそんなに驚くことだろうか。それとも、話せるのに通訳を立てていた法廷の手際の悪さに驚いているのだろうか。知るよしもない。

戦中の法廷には信用性もクソもないということは百も承知だが、傍聴席の人間までマナーがなってないとなると裁判長も苦労することだろうと思う。まあ、自分の弁護人を用意せずに法廷を開いた責任者に同情の余地はないが。

それでは 私は ―――― あなたはフェンテショレーですか？
“ʚБз, ʚn юɔюuɒп юɔн зБ зuɱ. ʒэ uɒ ɱuюuuɱэзuɫɤ”

仕切り直しというわけで、裁判長はしっかりとした口調で翠に訊き直してきた。フェンテショレーがレトラ市民やレシェールたちの敵であることはレシェールの説明で分かっている。

いいえ、俺はフェンテショレーではありません
“юnϱ, ʚn uɒ юnϱ ɱuюuuɱэзuɫ.”
ふむ　それではジュリザード　私は――したい ――――
“cʚʚ, ʚБз ɱɔнзnɒБɫɯБɒun, ɒuзuюu ʚn ɒuюэɒu ɒюБзɔ ʚuзɒ
―――― フェンテショレーであることを ―――― 彼？
unɒэɯэ cБɫʚnuʚnuuq uɒэɬn ɱuюuuɱэзuɫ ɱuБɒ ɒnɤ”

そのように裁判長に訊かれていたジュリザードは、翠を睨（にら）みつけた。そして、さらに威勢よく、半ばヒステリー状態になっているかのように反駁し始めた。

―――― 彼はフェンテショレーだ ―――― 言う
“ɱuxБɫпɔнʚuɫɱuɒunі ɒn uɒ ɱuюuuɱэзuɫ ʒɔю зпɔɫɱ
―――― リパライン語を 話せないこと。
qБɫɱБюпБuuБ ɱБзu uзɱ зпɔɫɱэ ʒuюu юnϱ зnюuxБɫnюuɬnu.
リパライン 語を 教わること ―――― である ――――
зnюuxБɫnюuɬnu пБюunэɬn ϱuзuɒэ ɱБзu ʚБɔɱuзuюэю uɒ ʒuɱɬn
～し続けた ――――
uɯnɱБ ɯuБі”
―――― お願いします、 ジュリザード ―――― いる？
“uɔɫюuuɒ x з Б ɱ, ɱɔнзnɒБɫɯБɒun. uɔппюuɫ ʚэзɤ”

続けようとするジュリザードを止めて、裁判長は何かを訊いていた。ジュリザードがヒステリックに事を荒立てようとしても、裁判長は冷静に証拠を出すように命じているらしい。ジュリザードはその裁判長の質問に対して、“ЧБ.”（はい）と肯定すると法廷を出て別室に行ってしまった。

しばらく待っていると別の部屋から人を連れてきたようであった。

（フィシャさんか……？）

見覚えがある顔は捕まる前、最後に会った異世界人、宗教施設であるフィアンシャで会ったフィシャであった。自分に対して敵意を持たずに接してくれていたはずなのに。そんな人物が自分を糾弾する立場として出てきたことに翠は非常に驚いていた。まさか、フィシャもシャリヤもレシェール以外の全員が何かの工作員で自分を嵌（は）めようとしていたとか？　そんなことを考えてしまったが、翠は感情的な憶測を飲み込んでしっかりと今この法廷でできることを果たすべきだということを思い出した。

法廷では、誰もがフィシャを注視していた。

それでは、ジュリザード、――を引きなさい
“ϑБз, ɱ̛ɔнзnɒБɫɯБɒиn, ɒcɫзэ ϑuзɱ̰uɫи uɔпnюuɫ.”

裁判長がそう言うと、フィシャは翠と裁判長の間まで進み出てきた。

#53　まるで将棋（セーケ）だな

フィシャさん、　あなたは　――　八ヶ崎翠　――
“ɱ̰uɱБɒиn, зэ ϱnɫэи ЧБӥп̈Бɒбпn.зию ɯэɫюuɤ”

ジュリザードはフィシャに質問を投げかけた。証人尋問といったところだろう。何を聞かれているのかはよく分からないが、翠にできることはフィシャの答えに耳を傾けて、分かるところまで理解することだけだ。

はい
“ЧБ.”

フィシャは怯えながらもジュリザードの質問に短く答えた。

それでは、彼があなたのフィアンシャにいた時何をしていました？
“ϑБз, иɯnϖБ cБɫϑnuˀn ɒnˀɒ uɒ ϖБз ʒэˀɯ ϖnˀБюϖБɤ”
——していた　彼は ———　リネパーイネ語　シャリヤ——　—
“иɯnϖБ ɒn юɔю зnюuxБɫnюuˀn ϖБзnчБˀʒ зɔ.”

なるほど、ジュリザードは翠がフィアンシャで何をしていたのかを訊いたようだ。それに対して、フィシャは“ϖБзnчБ”(シャリヤ)と“зnюuxБɫnюu”(リネパーイネ語)の二単語を出して説明している。多分、フィアンシャで言葉についてシャリヤに質問していたことを言っているのだろう。

———————　言う　———————
“ϖuз зБ зˀi ɒn зnɔɫϖ чБɫϖБюпБиБ ϖБзu uзϖ
リパライン語を　話せないこと。　リパライン語を
зnɔɫϖэ ʒuюu юnϱ зnюuxБɫnюuˀnи. зnюuxБɫnюuˀnи пБюиnэˀn
教わること ——————— である ——— 〜し続けた ———
ϱuзuɒэ ϖБзu ϑБɔϖuзuюэю uɒ ʒuпˀn иɯnϖБ ɯuБi”
八ヶ崎翠、　あなたは　リパライン語を喋れません ———
“чБйпБɒБпn.ʒuюuɒиn, ʒuюu юnϱ ʒэ зnɔɫϖ зnюuxБɫnюu ϖБзu
——— にて ———
зБ зuϖ ϖБз ʒnɫзБɤ”

裁判長がフィシャの後ろにいる翠に呼びかける。フィシャは自分が邪魔だと思ったのか前後をきょろきょろと見ていた。

リネパーイネ語が話せるのか何故今、訊いてきたのだろうか。もしかして、裁判長は翠がリネパーイネ語をちゃんと話せるか心配になったのか？　翠がフィアンシャにいた時にリネパーイネ語のこと

を訊いていたからだろうか。いや、最初によく分からない言語の通訳が入ってきたときに翠はちゃんとリネパーイネ語で返したし、その後、裁判長自身もリネパーイネ語で質問してきたではないか。
　質問の意図が分からないが、事実を言うしかない。今まで翠はシャリヤやレシェールたちと意思疎通を図り、認められ、そして相手を知るためにリネパーイネ語を勉強してきたということを。

いえ、俺はリパライン語が分かります
“юnᶑ, ʒuюu ზn ɱnɫзuɱ зnюuxБɫnюu.”
ふむ
“cზზ.”

　翠の答えに傍聴席はまた騒然とした。一瞬何か変な答えをしてしまったのではないかという考えがよぎるが、そもそもよく分かっていない質問にどう答えればいいんだという感じだ。自分は正しい答えを言ったんだと信じるほかない。
　違和感を覚える。ジュリザードがやったぞとばかりの表情をしているのは何故だろう。

——彼——であること　彼——
“ɱuз. ᴅn ɥБи uᴅэ ᴅn ɱuБ ʒuṉ̈ i”
彼——
“...... ᴅn ɥБи зн ɱБз ʒnɫзБ.”

　傍聴席が騒ぐ様子は一向にやまない。自分を差し置いて、裁判長やジュリザード、傍聴席の野次馬たちが質問に一喜一憂し、言い合っている様子を見ると先日の出来事を思い出す。
　木片に漢字のような文字が彫られ、網目状に区切られた盤の上で遊ぶボードゲーム。自分が見たことがあるはずだった将棋と同じようなものだろうと思いきや、対戦中のシャリヤとフェリーサが共有しているルールを翠は理解できていなかった。
　ここもそうだ。裁判なんてイメージ上でいくらでも考えられるが、言語(ルール)が分かれば何がおかしいことで、本当に分からないことが何か

なんてすぐに訊けば分かることだ。でも、ここは異世界で、しかも司法の場での振る舞い方も分からない状況だ。言葉も分からず、何を疑われているのか詳細も不明な状態はルール未通告のボードゲームと同じだ。

（ふっ……まるで将棋（セーケ）だな……）

　そんな極めて的確な洞察が、この事態の解決に役立つとも思えない。裁判長が人を呼んで、数人の民兵じみた人間を呼んでくる。来るまでそう時間はかからなかった。禄（ろく）でもない洞察に時間をかけて浸っているうちに、事は進行していたということだ。
　ここでルールを曲解したり、いきなり神に雷で撃たれて超能力を得て危害を加えようとする者の目玉でも、アポーツ（Something brought）できれば逃げることくらいできるのだろうと考えたりした。だが、こんなファンタジーの欠片もない世界でそんな超常現象が起きるなんて考えられない。そもそも、この魔法名は一体どこから生まれたんだろうか。そもそも異世界語があるのに魔法名が英語って……。

“ьзщ зиñиɒибюі”

　ジュリザードが大声で指示すると裁判長の横に集っていた民兵たちがぞろぞろと翠の周りに寄ってきた。また変な考えに浸っているうちに事が進んでいる。
　一人が翠の腕を摑（つか）んで、力強く乱暴に引っ張った。バランスを崩して倒れてしまう。民兵たちは無理やり腕を持ち上げて、立ち上がらせようとしてくる。何が起こっているのか確認しようと後ろを見ようとしたところ、銃口が背中に触れていることに気づいた。もはや逃げられる見込みはない。
　民兵に抱えられて、法廷から連れ出されそうになった時、傍聴席

側の大きなドアが開いた。

―――― である ――
"cБƗϑБu uᴅ ɯБi̇ɣ"

私はヒンゲンファール・ヴァラー・リーサ。 待て ――――
"ϑn uᴅ cnюп̤п̤uюɰuƗз ϱБзБƗ зnƗʒБ. ϑnзn ᴅnиɔϱuƗзuᴅиБю
フラースカ！
ɰзБƗᴅпБi̇"

ヒンゲンファール。聞いたことがあるその名と共に見覚えのある顔が現れた。背から差し込む強い光は、フィアンシャで翠を捕らえた民兵たちを想起させたが、ヒンゲンファールのその姿は危害ではなく救いのように見えた。

#54　もしあなたが望むならば

「助かった……のだろうか……」

翠はヒンゲンファールに図書館に連れ込まれていた。体に異常がないことを確認されるとヒンゲンファールは着替えを用意してくれたし、温かい飲み物まで出してくれた。一口飲むと気分が落ち着いた。それと共に自分が法廷で何もできず無力であったことを再度思い出させた。

翠を連れていこうとしていた民兵たちはヒンゲンファールの乱入によって止められた。裁判長もジュリザードも共にその乱入者を注目していたわけだが、ヒンゲンファールは二人に一言の反論も許さない様子で長文の意見書を読み上げた。裁判長やジュリザードの質問に対しても毅然（きぜん）とした態度で対応していたので、事前に準備でもしていたのだろうか。

まあ、準備でもしていたら最初から翠を弁護していただろうから、偶然というか裁判が始まったことを知って、慌ててやってきたのかもしれない。

ともかく翠は彼女の努力によって裁判所とむさ苦しい民兵たちから解放された。結果として、図書館でヒンゲンファール女史とゆったりした時間を取り戻しているわけである。
異世界転生作品の主人公がいきなり独房にぶち込まれ、裁判を受けて有罪判決を受ける直前、サブヒロインですらない女性に助けられるなんて、自分でも全くもって思ってもみないことだった。まあ、現実とはこういうものでファンタジーな異世界なんて存在しなかったということか。

ヒンヴァリーさん、ありがとう
“cnюņ̤ɒбзnłɒиn, ɱбʒu.”

書庫の整理に使う帳簿の整理でもしているのだろうヒンゲンファールの背中にぼそっと呟(つぶや)いた感謝の言葉は、かすれていた。
長時間強いストレスを受け続けていたからか、今はあまり大きな声が出せないでいた。

あなた ―――― 私 ―――― あなた ―― ではない
“ʒэ n̤ˀuɒ цбиипсюuɱ, ծn ʒuзшnю ʒэ. бзɒ юnɒ uɒ.”

うむ、あまりよく分からないのは恒例だが、どうにも自分が悪い感じではないらしい。

それでは、彼らには何を言ったんです？
“ծбз, cбłծnu ʒэ зnɔłɱ ɒnˀʒɤ”
私が言ったとしてあなたは分かる？
“ծn зnɔłɱ ɱжб ծбз uзɱ ʒuюu ʒэ ɱnłзuɱɤ”
“……”

ごもっともです。
おおよそ自分には分からない高度な法的知識を使ったに違いない。そもそも日本の法律ですら満足に理解できているか怪しいのに、異世界の法律なんて理解できるわけがない。そもそも言語もまともに話せないので、理解できるできないの問題ですらない。

気分が落ち着いてきたところで、一つやらねばならないことを思い出した。シャリヤやレシェールに心配を掛けているに違いないと思ったから、彼らに会って自分の無事を示さなければならないと思った。

ヒンヴァリーさん、俺は行かなくてはならない
“cnюn̤ŋ̰Бзnɫᴅиn, шuзnɔ ðn иэшnuᴅи.”
私はあなたを——しないけど、——に行く
“…… cБɫðɔuɤ ðn xɔᴅюnᴅи юnŋ̰ ʒэ xБ uзɱ̰ шuзnɔ
べきではない
юnŋ̰ иэшnuᴅи uиuɥʒ.”

どうやらヒンゲンファールはここに翠を留め置きたいようだった。窮地に陥った人を助けた人間特有の怪我人から目が離せないという感情なのだろうか。怪我などしてないし、声がかすれていること以外は体に異常はない。
しかし、ヒンゲンファールは心配そうにこちらを見てくるので、体調も何も特に悪くないということを伝えたかった。

上手く言うことはできないけれど頭痛はない
“ʒuюu юnŋ̰ ðn иuᴅэз зэи зnɔɫɱ̰ юnŋ̰ xБ ðn nᴅ юnŋ̰ xnпɥ.
俺はシャリヤのところに行きたい
ᴅuзuюu ðn иэшnuᴅи ɱ̰БзnɥБɥʒ.”

そう伝えるとヒンゲンファールは少し物憂げな表情をして、すぐに帳簿の整理作業に戻った。

あなた
“ɱ̰n ʒэ nБɫɱ̰ юuБɥ. ……”

「えっ？」

あまりにも気弱そうな声を意外に思って、つい日本語で反応してしまう。ぼそぼそとヒンゲンファールが言った言葉はあまりはっきりと聞き取れなかった。

自分のことを心配してくれているのだろうが、翠には危険を顧みずやってきてくれたレシェール、一番心配しているであろうシャリヤのことが今まで気にかかっていた。ヒンゲンファールには、落ち着いてからお礼をするとして、今はやるべきことがある。

“cnюn̤ƍбзnɫɒиn（ヒンヴァリーさん、ありがとう）, ɱбзu.”
“...... ვnɒɒɗɯ（私たちの） зб（—） иэюnɫ（神） ибɒи（——） юnƍ（—ない） ვnɒɒ（私たち） ɱбзu збɫибɒибюɒɒ（——）.”

ドアに触れた途端にヒンゲンファールはまたぼそっと呟いた。今度ははっきり翠の耳に聞こえてきた。“иэюnɫ（神）”という語が出てきたことから鑑みるに、心配する彼女なりのけじめとして自分に対して祝福してくれたのだろう。

図書館の外に出て風を感じる。１日とはいえ、独房や裁判所の中に押し込まれて窮屈に感じていた体も、解放感を感じたのかすごく気持ちがいい。背伸びしてみたり、腕や足を伸ばしてみたりすると独房にいた頃のストレスもすっかり感じなくなっていた。

たったの１日でも会えない時間が心苦しくて、無限に感じていた。自分が今まで暮らしていたシャリヤ、エレーナ、フェリーサ、レシェールやらがいたあの建物にやっと戻れる。

図書館から出て左の道に入る。大通りの道の脇は日中にもかかわらず、わりと人が多く、世間話などをする様子が見えた。この道を通って、与えられた部屋との行き来をしていたので当然よく覚えて

いる。しかし、この時は様子が違った。

#55　勝手な期待

街の住民の様子がおかしい。というか、自分に多くの視線が注がれている気がする。こちらを見てこそこそと話をする者もいれば、明らかに嫌そうな目でこちらを睨んでくる者もいた。歩いていくたびに、注目を受けていることをひしひしと感じることができた。

何故注目を受けているのか？　街を危機から救ったとかそういう英雄的行為によるものではないことは分かっている。では何か。確実に思い浮かぶものがあった。未だに自分が“ɱuюиuɱэзuł（フェンテショレー）”でないことを全員が全員信じていないのである。

敵と疑われて幽閉された人間が裁判を受けて、処刑されるものと思っていたところを、のほほんと外に出てきて歩き回っているのだから、そりゃ人目を惹（ひ）くことだろう。

そんなことを考えていると、後ろから何かを投げつけられた。振り向いても誰が投げたのか分からない。本当に投げつけられたのか、事故なのかも判断できない。でも、道端の人の様子が自分を嘲笑（あざわら）っているかのように見えたし、意味は分からないが大声で煽（あお）ってくる者さえいたので確信した。

未だに彼らは翠のことを敵のスパイか何かなのだと信じているのだろう。だが、こんなことで八ヶ崎翠は挫（くじ）けない。不当嫌疑を完全に払拭してこそ主人公であろう。

背中に当たったと思われる紙屑（かみくず）が下に落ちている。嘲笑う声もまだ聞こえてくる。だが、レシェールもヒンゲンファールも自分のことを敵ではないと信じてくれているはずなのだ。シャリヤもきっと

同じはずだ。心配しながら自分が戻ってくるのを待っているに違いない。すぐに戻らなければと心が急いた。

（ん……水滴……？）

　宿舎まで戻ろうと再度決意したところで、ぽつぽつと雨が降り始めていることに気がつく。
　のろのろ歩いていたら雨でびっしょり濡（ぬ）れてしまう。そんな姿で会いに行けば、さらに心配をかけることになるだろう。どこかで傘を借りよう。今すぐ走って帰るか迷ったが、走っても濡れることには違いないので、近くの店で傘を借りようと思った。

　みんながみんな自分のことを敵側の人間であると思っているわけがないし、傘を貸すくらいのことはしてくれるであろう。八ヶ崎翠は異世界転生作品の主人公なのだから都合のいい時に皆、都合のいい行動をしてくれるに決まっている……くらいに思わねば。

（……行こう）

　手元にはレシェールが独房まで持ってきてくれたノートとペンがある。ノートのページを捲（めく）り、そこに傘を差す人の絵を描く。

　この道は商店街のように店が連なっている。１軒目で貸してもらえなかったとしても２、３軒目と試行できるに違いない。とはいえ、最初から失敗を考えていてもどうしようもないから、意を決してノートの絵を見せて話しかけることにした。

これありますか？
“ɱжб ծэзʊ”
私 ――― しかし ――― しない ―
“ծn зuиnɱ xб зэɯnuз юnϱ цб.”

シッシッと動物でも追い払うように手を振って立ち退けと指示される。うむ、きっと傘をすでに別の客に貸していたのだろう。いきなり降った雨だし、天気予報のようなものがあるとは聞いたこともない。多分いろんな人が店に立ち寄って、傘を貸してしまったのだろう。

しょうがないので次に行くしかない。隣の店の人に同じく絵を見せる。

“юбзu.”（ごめんなさい）

申し訳なさそうに謝る様子を見ると、こちらも傘を持っていない様子だった。ここら辺は人も多そうだし、いきなりの雨で全部持っていかれたのかもしれない。雨を避けながら商店街を進む。ちょっと行ったところにある店は人気（ひとけ）があまりなさそうだった。こちらに訊（き）いてみるしかなさそうだ。

店の軒先の傘立てには傘が数本立てられていた。

“юбзu（すみません）, ɱжб ϑэзɣ（これありますか？）”

“ɒюɔɒuɒи йɔ зэɯnuз зuпuɟзи n ϑэз юnɒ（ない）. зɔɒ ɱжбхu.”

「え……？　でも……」

通じないと知っていても衝撃を受けたときはついつい日本語が出てしまう。ないと言われながら差し出されたのは壊れた傘だったからだ。雨を防ぐ布の部分が２か所ほど破れており、骨も１か所折れている。しょうがなく受け取ると店員は店の奥の方に行ってしまった。結局壊れた傘を差しながら、シャリヤの元に向かうしかなくなった。

壊れた傘の隙間から滴る雨で結局のところ袖が濡れてしまってい

た。どっちみち分かってしまったことは、街の多くの人間は自分に悪意を持っているということだ。生きづらくなったものだとは思うが、自分にはレシェールやヒンゲンファール、それにシャリヤやエレーナ、フェリーサと多くの知り合いがいる。たかが傘を借りられなかったくらいで、命に危害はないし、彼らとの親睦と信頼を十分に深めれば、この先もこの街で生き続けることは可能だろう。

（……あれ？）

　シャリヤが荷物を引きながら歩いている。
　白のブラウスに灰色がかった青色のバルーンスカート、安物のビニール傘のような傘を差して、褪（あ）せた水玉柄の旅行バッグを引いて、寂しげに俯（うつむ）きながら歩いていた。
　ちょうといいところで出会ったので無事を伝えるために近づこうとして“DБЗБŀ（やあ）”と言ったころ、彼女は少し驚いた表情をしていた。そして、次の瞬間、翠から逃げ出すように走り始めた。

「えっ？　なんで」

　一瞬何が起きたのか理解できず、何も考える間もなく追わざるをえなかった。何故逃げるように走り去ろうとするのか理由を訊きたかったからである。傘を持ちながら走るなんてまどろっこしいことはできない。市民の悪意の象徴である壊れた傘を投げ捨て、シャリヤを追いかけ続ける。
　シャリヤは動きやすい服装とはいえず、荷物を片手で引いて傘を持ちながら走っていたので、翠はすぐに追いつくことができた。何も考えられなかったが、とにかく理由を知るために、そこに留め置くためにシャリヤの手首を掴んだ。

「なんで、なんで逃げたんだ。一体何があったんだ、ねえシャリヤ――」

混乱の中では冷静な考えが浮かばなくなる。ちゃんと異世界語を話そう、意思疎通をしようなんて常に冷静な状況の人間だけが考えられる事象だ。これまで挫折してこなかった自分がむしろ珍しいぐらいだろう。

この瞬間、翠は初めて挫折した。異世界語を話そうとして、声が出てこなかったから、日本語で心からの疑問を呈する他なかった。

利那、翠の手は強い力で振り払われた。翠の声はシャリヤが手を振り払ったという拒絶の意志を感じてしまったことで止まってしまう。翠が衝撃を受けていることを感じ取ったシャリヤは、えも言われぬ表情で翠を見つめていた。

ごめんなさい　翠。　でもあなたのところには続けていられない
"―― юбзи зиюuриn. хб, зиюu юnϱ ðn ɱизϱnю ðэз ɱбз зэ."

謝罪の言葉を述べてその場を去るシャリヤに何と声をかければよかったのか、どう説明すればよかったのか。翠の頭ではまともに考えつくことはできなかった。

少なくとも、頭に浮かぶことは「異世界言語(зпюuxбɫпюu)なんか理解できなければよかった」という非論理的な後悔のみであった。感情的で、後先考えていない思考であることは翠にも分かっていた。けれども、それだけシャリヤを信じていたのに理由も分からず期待を裏切られてしまったということは強く心に傷を残したのであった。

#56　ご都合主義のご都合はなんて意味だ？

大いなる誤算であった。

最初から全員、翠が“ɱuюиuɱэзuɫ（フェンテショレー）”であると思っていることを知っていた。自分が害を加える敵であると一部で見なされていると知っていた。長らくの戦争の間、お互いの陣営がその思想や力関係によって対立し、相手方を軽蔑していただろうことはよく分かる。それが自分に向かってきたのもちゃんと理解していた。
でも、シャリヤとの関係だけはそんなことが当てはまるはずもない聖域だと思っていた。この数日間、自分が試行錯誤しながら、この世界に慣れようと努力してきた末に得た信頼関係。しかし、それは脆（もろ）くも崩れ去った。主人公（ヤツガザキ・セン）にもかかわらず理由も理解できずに。

自分は異世界転生作品の主人公だし、この世界にやってきたのも何らかの意図があって、女神とかそういうのが関係しているに違いない。
そんなことは一言も言われていなかったが、自分なりに異世界生活を楽しんで主人公としての快楽を最後まで求めるのが当然であろう。
翠にとっての異世界転生とはチートで最強になって可愛（かわい）いヒロインを集めてハーレムを作る事であったのだ。別にラノベの世界だけの話ではない。他人に自分のことを受け入れてもらうこと、認められるということは多くの人が求めるところだろう。

そういった妄想に浸（つ）かって、自分が世界に受け入れられている状態、つまり自分が主人公である限りハードモードは訪れないだろうと楽観視していた。
しかし、それは大きな誤算で遮られた。言語が通じず、ライフル銃があり、人同士が争いあって、出会った女の子たちが無条件に自分の行為を評価せず、持ち上げたりもしなかった。そこでこの世界が異世界でも何でもなく、ごく普通の人間社会の中での外国のよう

な場所であることに気づくべきであった。

だから、多分シャリヤが悪いんじゃない。
人は一人で生きていくことは難しい。だからこそ社会を形成して他人と共生していく。
翠に広く人々からの疑いがかけられたならば、その翠に関係していたシャリヤたちの身はどうなってしまうのだろうか。シャリヤにも手助けを求められる人間がいるとは考えられない。レトラの人間ではないうえに、親兄弟がどこにいるのかも分からないのだ。それなのにこの主人公（オレ）は、皆が自分に都合のいいように動いてくれるに決まっているなどと高をくくっていたのだった。

「馬鹿だ」

投げ出した傘を拾うこともできず、ただ茫然（ぼうぜん）と立ち尽くしていた。どれだけそうしていたかは全くもって覚えていない。それくらい何も感じず、何も考えられずに立ち尽くしていたので服は完全に濡れてしまっていた。くしゃみを一つしたところで我に返り、体が小刻みに震えていることを自覚した。

同居人がいなくなった部屋はすっかり寂しい状態になっていた。隣の部屋にいるはずのフェリーサやエレーナもドアを叩いても表に出てこなかった。多分シャリヤと同じように翠から逃げたのだろう。彼女らは悪くない。恨むべきは自分たちが戦っている相手“ɱuюиuɱэзuɫ（フェンテショレー）”なのだろう。そんなことを思いながら、部屋の中で食べられるものがないか探していた。異様にお腹がすいていたというのと、何か食べて気を紛らわそうとしていた。

（ん……？）

テーブルに1枚の紙が置いてあった。赤いインクで書かれた文字は当然翠の書いたものではないので、リパーシェ文字で書かれている。即ち、リネパーイネ語で書かれていることは確実なのだが、一つ気がかりなことがあった。

（筆跡がおかしい）

筆跡鑑定とかそういう技能を持っているわけではないが、確実に自分に教えてくれた時のシャリヤが書いたものではないと気づいた。筆跡がなんとなく男性的でおどろおどろしい感じなのだ。記憶と感覚がそう伝えてくる。シャリヤが書いたものでないとしたら、何者が書いた書き置きなのだろうか。レシェール？　フェリーサ？　エレーナ？　それとも……ヒンゲンファール？

憶測はやめるべきだ。この時のために自分は言語を学んで、さらに学べる状況を作った。今の状況はシャリヤたちにも翠にも何の落ち度もない。はっきり胸を張って、「何でしょうか、翠に落ち度でも？」と言える身だ。

だからこそ、普通の異世界転生作品の主人公なら、首を吊って死ぬようなこんな場面でも生き続ける事ができる。市民らの勘違いを解いて、シャリヤとまた一緒に暮らすために、とりあえず誰の書き置きであれ、不自然に机の上に残されているのであれば読まざるをえないだろう。

決心したとたんに文字が頭に入ってくる。分かる単語が浮かんでくる。この力は魔法でもチートでもなく、努力の結晶。これまでの興味と目的への純粋な努力だという事実を噛み締める。その流れを絶やさないために翠は書き置きに目を凝らした。

ʒэ(あなた) ɔзuɒю ɱuюuuɱэзuɫ uɫз.

ɱƃɒuƃʒuɫŋэю ɱɫɔзuɒю, ծƃɫзuɫ цƃu uɒэ(であること) ʒэ(あなた) ɱƃɔ зƃɫuƃ(人) ʒnɱч ɱƃɔзnɫuɫuюnƃю.

u nuззcзnɫuɒ ɒn(彼または) эз nuззcзnɫuɒ ʒэ(あなた) .

ծn(私) ƃɔծuɒзnɔɫɱ юɔн зƃ зuɱ.

uю юnŋ(しない) uз ɱnɫƃюɱƃ(フィアンシャ).

— юnзnuɫ ʒэɒɒ(あなたたち)

分からない単語が多いために、辞書を引こうとしたところ強烈な眠気に襲われた。無理して文章を読もうとしても頭に入らないので、一度しっかり寝て次の日に読むべきだと思った。

翠は寝床に入ろうとして、自分の着替えがないことに気づいた。いつもはシャリヤが用意してくれていたのであまり考えていなかったが、こういった弊害もあるのだ。この先は当分自分で身の回りの物事を片付けなければならない。今まで何もやっていなかったのかという自責の念もあるが、異世界は何も分からない状況なのでそう簡単に自分でできるはずもない。ご都合主義ならとんとん拍子で金が手に入って、服を買って、ギルドに行ってなんてことができるのだろうが、ここではそう簡単にはいかない。

翠は乱雑に服を脱ぎ捨てて、下着のままで布団の中に入った。こっちの方が身軽でいいし、びしょびしょに濡れた服のままで寝床に入るなんて到底気分が悪くなる。だから、これでいいだろうと思った。

翠はそのまま眠気に襲われて、意識を失ってしまった。

・六日目学習内容
1.　文法的なものは学ばなかった。

語彙
ꝳзƃƚᴅпƃ（フラースカ）（【名】裁判）、ɱuзϱпю（シェルヴィン）（【副】続けて？）

Ex.6 side シャリヤ

　ドアが開き、翠が帰ってきたことが分かった。
　今日はフェリーサと“ʒuƚпu（パイグ将棋）”をやっているのを見せて、規定労働を一緒にやって、言葉を教え、文字を教えた。夕食の後で、翠はこの街の図書館に行っていたらしかった。
　多分もうすでに閉じているからまた明日行ったほうがいい——と翠が食堂を出る前に言ったが、あまり通じなかったようでそのまま行って帰ってきたようだった。

“ᴅƃзƃƚɔƃ.（ただいま）”
“ʒэ uᴅ юэᴅиɔɥ（遅いよ）ɪ”

　翠は少し疲労している様子だった。多分図書館が閉館していて、無理やりドアを開けようとしたとかだろうか。
　食堂に残っていたレシェールの話では、あの図書館の管理はヒンゲンファール・ヴァラー・リーサという人が一人で行っているらしかった。
　ヒンゲンファールという名字はスキュリオーティエ以来革命派には忌まれてきた苗字（みょうじ）だから、省略名称のヒンヴァリーで呼んであげてくれ——とも言われた。話を聞いていたレシェールの旅団の知り合いが後ろから顔を出して「あの人、ユエスレオネ中央大学研究院

まで行ってラネーメ王朝時代の刑事訴訟法の研究をしてたらしいぞ。頭良さそうだよな」とか言っていた。
　私は、この内戦の世の中で研究院などずっと遠くの関係ない話だと思っていた。しかし、この街には勉強熱心な人もいると知って、少し彼女への興味が湧いていた。

　翠は疲れからか、窓際の椅子に腰を下ろしてうとうとしていた。顔から力が抜けていてアンニュイな表情で窓の外を眺めていた。

「ホシ……」
ホシ……？
“cэɱn……ɤ”

　翠がうわごとのように呟いた一言は夜空の静寂に吸い込まれるように消えていった。私は椅子を持っていって、翠の隣に座った。「ホシ」というのが何か気になったからだ。

ねえ翠、ホシって何のこと？
“ʒиюɒип, cэɱn иɒ cƃɫɞnиɤ”

　そう訊くと、翠は何も言わずに窓の外の空を指さしていた。その黒色の瞳に映る光にはっとして指さす方を見ると夜空には、星が輝いていた。翠が元々いた国でもきっと同じ星が見えていたのだろう。言語や風習、文化は違えど、月は夜を照らし、太陽は昼を照らす。星々は天を飾り、風は頬（ほお）を撫（な）でる。
　この静かな自然を享受できるのもレトラが平和だからこそだ。
　しかし、この平和のために戦い、お互いの血を血で洗う内戦はまだ続いている。多くの人々が無実の罪で連れ去られ、死んでいった。争いの中で孤独な人々が生まれ、町々の間を彷徨（さまよ）っていった。ある者は人に助けられて、ある者は乞食（こじき）となり、ある者は戦場で誤って殺された。ユエスレオネ全体の平和はまだ遠い。

左肩に何かがのる感触がした。何かと思って見てみると、翠が完全にこちらに寄りかかってぐっすりと寝ていた。
普段の私なら恥ずかしさですぐに引き離そうとしたかもしれない。でも、今はそんな気はしなかった。
お互いが同じような境遇で、孤独になり手を合わせて生活していくうちに気づいた。私と翠、この二人は補い合うために出会うことが運命づけられていた存在だと。

部屋の電灯を切っていたから、部屋を照らす光は月明かりだけ。二人を窓の外から照らして、影が長く部屋の床をつたっていた。
安定という名の幸せがいつまでも続いてほしいと思っていた。

зuɫɥ xэзиnюɒuɫɯ̰uɔı

七日目　地下道から

#57　誰がサイコパスじゃ

　度重なる振動、悲鳴、逃げる足音。
　爆発音と銃撃音、激しい光。
　破壊と死。

「うわっ！？」

　強い空気の振動に驚いて起きてしまう。窓の外の空は未だに暗かったので、まだ夜も明けていない時間だ。それでも爆発音と銃撃音が鳴り響いている。すぐに窓際に行って外がどうなっているのか見ると街中から灰色の煙が上がっていた。爆発音の度に衝撃が身を震わせた。フルオートで自動小銃を撃つ音も聞こえてくる。悲鳴と足音、怒声と不自然な静寂。最初に異世界に降り立った時と同じ感覚を覚えた。
　レトラが何らかの攻撃に晒（さら）されていると考えるのが自然だ。

　どんな異世界においても、自分のことは自分で守らねばならない。どんなにご都合主義の物語であったとしても、見えてくるのは何らかの格差を元にした弱肉強食の世界だ。特に平和とは無縁であるこの世界では、死なないためには自分で行動を起こす必要がある。だかしかし、翠の頭の中には一つ思い出すことがあった。

「……」

　転生した当初、シャリヤの家から移動しようとしたとき、翠は銃

を向けてきた兵士に手を挙げて無抵抗を表したのに撃たれてしまった。防弾チョッキとか小銃とか持ち合わせてすらいない翠には対抗手段もない。

どう考えても攻撃の前に無力だし、そもそも何が攻撃してきているのかもよく分からない。それが“ɱиюииɱэзиɺ（フェンテショレー）”なのか、それともレトラの内部で撃ち合っているのか状況は不明だ。

とりあえず、逃げようと考えて鞄（かばん）を取り上げ、辞書やメモ、ペンを突っ込む。読む予定だった書き置きも辞書の間に挟んで突っ込んでおいた。そんなことまでしたところになって、自分の着る服が存在しないことを思い出した。昨日、床に無造作に脱ぎ捨てた服は湿り気どころではなく、びしょびしょの状態であった。シャリヤもレシェールもヒンゲンファールも、この状況でのほほんと着替えを持ってきてくれるはずもないだろう。

（しょうがない、スカートでもフリルブラウスでも、着られるものがあれば何でも着てやる）

シャリヤが置いていった服があることを願ってワードローブを開けると、そこには衣服が整理整頓されて詰め込まれていた。全て男性向けの衣服で、女性向けではなかった。驚いたことにシャリヤは翠が衣服に困ることを考えてこれらを用意していたのかもしれない。やはり、シャリヤと引き裂かれたことは彼女自身が望んだことではなかったという気がしてくる。

服を着て、荷物を携え、玄関から外に出て、初めてどちら側に逃げればいいのかという疑問が浮かんできた。それまで何も考えず漠然と逃げなければとだけ考えていたからだ。今までいた部屋の窓側から煙が上っていることを考えるとまず出口方向に逃げていくのが

良さそうに思えてくる。ただ、煙が上っている側が危険ということは分かるが、その反対側が安全地帯とも限らない。レトラが全体的に包囲されている可能性だってある。もしそうだとしたらどうしようもないが、どのみち死ぬなら試してみる価値はあるはずだ。

「あ……」

　建物の前で男性が一人倒れていることに気づいた。うつ伏せになっているから惨い状態を見ないでいいとはいえ、倒れた地面に真っ赤な血溜まりができていた。
　普通、異世界転生作品の主人公ならここで「リザレクション！」だの「リカバリー！」だの言えば生き返るんだろうが、この世界には魔法なんてちっとも見受けられない。
　血を流して倒れているところを見ると、この建物で戦闘が行われていたのかもしれない。死体を見たという事実はそこまで心に響かなかった。それはもたもたしていれば次は自分であるという事実と「人は死ぬときは死ぬし、生き残るときは生き残る」という誰かの発言を思い出したからであった。それに人並みに死体に対して分別は持っている。別に自分はサイコパスじゃない。

「……」

　それでも死体を見てしまうのは死体から何らかの情報を得られないかということを考えたからであった。死体の胸元に見えたのは小銃である。自然に手が動いて、死体が大事そうに抱えている小銃を引き出そうとしていた。敵らしき人間がいるところでたったの一つも対抗手段がないのは酷すぎるから、追い剝ぎまがいでも自分の命を守るにはしょうがないことだろう。
　小銃はうつ伏せに倒れた男の下敷きになっていたので死体を動か

さないように気をつけて小銃を引きずり出した。もしうつ伏せになっているところをひっくり返して死に顔を見ることになったら、心に傷を負いそうだったからだ。

銃を引きずり出すと、これだけでは不十分なことに気づいた。ゲームやラノベと違い銃弾が無尽蔵にあるわけでもない。弾薬がどれくらい入っているか確認する必要があった。シャリヤに撃ち方を教えてもらった時のリロードの要領で弾倉を外して確認すると、銃弾が上まで詰まっているように見えた。これなら大丈夫そうだが、この人がフルで装塡(そうてん)された状態で死んだのかもしれないと思うと、非常に可哀想に思えてきた。誰かが言った通り、人はあっけなく死ぬときは死ぬのかもしれない。

あとは銃弾がなくなった時のために装塡済み弾倉を貰(もら)おうと思ったが、タクティカルベルトを引きずり出すには体に触れる必要があった。あまり触れたくなかったが背に腹は代えられないので、腰あたりのバックルを外してベルトを一気に引き出す。すると体ごとぐるりと一気に回ってしまった。見たくない死に顔が見えると思い、すぐさま目を瞑(つぶ)ってタクティカルベルトらしきものを引き出すと即座に死体に背を向けてしまった。からからと物音がした方を向き、目を開けたが内容物は全部落ちてしまったようだった。もしかしたら、いくつかは残っているんじゃないかと希望をもって手元を見ても血まみれのベルトしか残っていない。

「…………」

我ながら情けないと思うが、普通の人間なら死体に触ったり、その死に顔を見たりしたいとも思わないはずだ。だが、この場合はしょうがない。見てしまっても知らぬ存ぜぬのふりをしていれば大丈

夫だと思う。というか、そう思わなければ何かが自分の中で壊れそうで怖かった。

振り向いて自分の後ろに落ちた同型の弾倉だのもろもろをすぐ拾い上げるが、ポケットに入れるだけでは持ち切れない。血まみれのタクティクスベルトを着用する他ないことに気づいた。嫌々ながらこれを着け、落ちたものを拾い上げて色々と収納していくうちに、不意に死体の顔を見てしまいそうになって顔を下に向けたまま頭を振った。

拾ったのは弾倉４つ、ピンの付いたグレネード弾のようなもの。あとよく分からない注射器もあったが、分かる人に訊けば使えるか教えてくれるかもしれないので回収しておいた。ナイフや食糧のようなものも見えたが、接近戦なんて引きこもりもどきにできるわけがないし、食糧のようなものが入ったビニールは血が表面を這う水滴のように付いていたので触りたくもなかった。

取るものを盗ったら、次は自分がこの状況を抜け出すために動かなければならない。敵側に見つかれば殺そうと仕掛けてくるはずだ。この撃ち殺された男と同じように。でも、ここで死ぬことは許されない。未だ自分が何者か、この世界が何なのか、自分の今いるところが何故戦いに溢れているのかを知らない。そんな状況で死んでいくなんて嫌だ。

「……リカバリー」

去り際に罪悪感を感じ、背を向けながらも手を死体の方に、つまり後ろ側に向けて魔法でも発動すればと思いながら小声で言ってみた。どうせ、この世界には魔法など存在せず、倒れている男が生き返ることもない。そういった現実的な冷たさに逆に安心感を持った。

しかし、そんな予想とは反して翠の耳には小さいうめき声が聞こえた。

「えっ？」

お願いだ……フェンテショレーを……
“хзбɱ......ɱuюouuɱэзuꞁꞁn......”

か細い声を出す方に振り向いてしまう。今まで死体だと思ってあさっていた人間は少なくともまだ意識を持っていたのだ。彼が力を振り絞って自分に何かを伝えようとしている。でも、怖くて、得体の知れない気持ち悪さがあって、しっかりとその目を見ることができない。焦点の合わない目でその傷ついた体を見ながら、声を聴くことしかできなかった。

フェンテショレーを……
“ɱuюouuɱэзuꞁꞁn......”

いたたまれなさが募ってつい目を瞑ってしまうと、ばたんと何かが落ちる音がした。手かもしれないし、上半身かもしれないし、頭かもしれない。いずれにせよ、それ以上声は聞こえなくなった。誰かがレトラに攻め込んでいるというのに蚊の鳴くような声ほどの音も聞こえなかったので本当に怖くなってしまった。しかし、それと共に自分が対峙(たいじ)しなければならない敵が明確になってきた。つまり、レトラ市民もレシェールたちも、そしてその濡(ぬ)れ衣(ぎぬ)を着せられた翠自身が誅(ちゅう)するべき諸悪の根源であるフェンテショレーである。

翠は決意を新たにして、歩き出した。

#58　再会

歩き回ること数時間、翠は街から出られそうな場所を探していた。
レトラの市内は一通り回っていた気になっていたが、それは以前にインド先輩に見えた幻覚を追いかけたからだった。しかし、あの時は、一心不乱に追いかけていたから街の中がどうなっているのか理解していなかった。よく覚えている宿泊地だったところから図書館までのルートも道が分かれているわけでもない。
結局、出入り口の目印となるバリケードを見つけることはできなかった。動き回り過ぎればフェンテショレーに見つかる可能性も高まることは自明で、自分に想いを託したあの男性のように死体になる可能性だってある。

長らく歩いているうちにレシェールから貰った地図を持ってこなかったことに気づいた。数日前に行った図書館までの道のりはその地図で確認しながらだったことを思い出したからだ。しかしながら、目の前の光景を見て、もうその必要はないと思われた。

「高いな……」

外敵を防ぐために建てられた街のバリケードは当然なから簡単には登れない高さと構造になっていた。しかしながら、バリケードの上には日々見張りがいた。つまり、見張りが毎日上り下りできるように梯子（はしご）なりなんなりが設置されていると考えるのが自然だろう。
そう思ってバリケードの方に近づこうとすると向こう側に人影が見えた。敵かと思い身構える。しかし、その人影は敵ではなかった。

翠……？
“ʒuюuɒиn......ɤ”

「シャリヤ……」

思わず日本語のカタカナ発音になってしまった。

シャリヤが一人で立ちすくんでいるのが見える。武器も何も持たずに一人だけで逃げ出している様子だった。シャリヤは、走ってこちらまで来たものの、ばつが悪そうな表情を浮かべて、なかなか視線を合わせようとしてくれなかった。きっと彼女もこの非日常的状況に対して一人で心細かったのだろう。知り合いを見つけることができて一安心といった雰囲気だったが、その相手が翠ではなかなか心を落ち着けることはできないだろうと思う。

頭痛とかなってない？
“ʒэ nɒ юnǫ xnпnɥɣ”
翠……ありがとう。　私は——よ
“ʒuюuɒиn...... ɱɓʒu. ðn uɒ ɱɓɫпṇ̈nɫɱ́n.”

多分話の雰囲気から考えて、大丈夫と言っているのだろう。普通に話しかければ普通に答えてくれる。翠はシャリヤが何も気負うことはないと精一杯の雰囲気を醸し出して伝えようとする。

言葉で伝えられればそれが最高だが、まずは態度と気持ちが大切だ。実際は言葉で伝えられないことの言い訳に過ぎないが、外国人に対してジェスチャーと伝えようとする気概だけでわりと通じるように、態度や視覚的情報は重要なことだ。人間は何も記号としての言語だけで通じ合っているわけではないということが、気持ちを伝えようとする価値の論証となる。

それで、君はどこに行けばいいか知っている？
“ðɓз, ʒэ ɱnɫзuɱ иэшnuɒиэ ɱɓз cɓɫðnuɣ”

シャリヤは頷（うなず）いて、バリケードの脇の方を指さした。物陰に隠れた暗がりになっていて気づかなかったが、ちゃんと梯子がかけられている。予想通りちゃんとそういったものがあった。もしこれで、

実は見張り番は全員筋肉モリモリマッチョマンでバリケードをよじ登っていくんだぜ！　とかいう話だったらどうしようもなかった。

　梯子さえあればあとは安全確認して、レトラの外部に出て逃げ延びることができるはずだ。ルールもマナーもタブーもほぼ知らない翠が一人っきりで脱出するより、現地人のそれもシャリヤと共に脱出できるのであれば万々歳だ。

「それじゃあ、行くか」

　バリケードに近づこうとした瞬間、不穏な雰囲気を感じる。なぜならバリケードの外側から声が聞こえたからであった。つまり、それが意味することは……。

“зɔзБD ϑэ ——”

　シャリヤが何かを言いかけたとき、耳をつんざく衝撃音と共に目の前は一瞬でグレーに塗(まみ)れた。強い振動と嵐のような爆風を受けて何が起こったのか理解したつもりだったが、内心翠は焦っていた。背負っていた小銃を取り出し、片手で構える。シャリヤの手をもう一方の手でしっかりと摑んで、後退する。

　バリケードを爆破するとして、それがレトラ民やレシェールたちの行動でないことは明白だ。バリケードを作った本人たちがわざわざそんなことをする意味がない。
　だとしたら、自分たちの敵であるフェンテショレーがやったに違いない。彼らとの戦力差がどれくらいなのかは分からないが、バリケードを爆破できるほどの戦備を整えているようなグループが小規模のゲリラとは考えにくい。

土煙が晴れ始めると号令と共になだれ込んでくる軍靴の音が聞こえてきた。それも一人や二人ではなく、もっと多くの人数のものだった。視界が回復すると相手側の位置や状況が分かると共に、どうすればいいかが理解できてくる。下手に攻撃をすれば自分たちの位置を知らせることになり、武器を持っている翠は真っ先に殺される。ならば静かに後退しながらどこかの建物の中にでも入って静かにやり過ごすほかないだろう。

そう思って後退を続けていると、足元でばきっと何かが折れる音がした。一斉に兵士たちがこちらに目を向けた。
“юn ϐэзi(いたぞ)” と声があがる。
憎たらしく足元を見ると不運にも木の枝を踏みつけていた。もうやるしかないと思って構えた小銃で敵兵に照準を合わせて撃ち抜く。一瞬の出来事に反応できなかった兵士が倒れる。
初めて人を殺したが、罪悪感はなかった。とっさの判断で生死が決まるのだから、そんなことを考えている暇もない。倒れた兵士を踏みながら前進してくる兵士たちをさらに倒し、自分一人で安全を確保できそうなことに自信と安心を覚えていた。

「どうだ、これが主人公の——」

調子に乗った文句を言いかけて言葉を止める。
銃の引き金を引いても引いても銃弾が出てこない。薬莢(やっきょう)が詰まったのか、弾薬がないのか、原因はどうでもいいとして一瞬で形勢が変わった。相手方はこちらにすでに銃口を向けている。後退しようがもう遅すぎる。逃げようがない。射殺されて終わりだ。
シャリヤの表情をみると怯えて、こちらに助けを求めるような表情をしていた。彼女を助けられるのは今、自分しかいない。死ぬに

しても、人間には最期の時まで足掻(あが)く自由がある。シャリヤを最期まで大切な人としていたい自分の決心がここにあった。

（死ぬなら、最期まで主人公を演じてやる……ッ）

握ったシャリヤの手を力強く引き寄せ、覆いかぶさるように抱き着く。シャリヤと面と向かって密着したのはこれが初めてだろう。小さく整った顔が目の前にある。蒼玉のような目が窄(すぼ)まって心配を伝えてくる。銀髪が砥粒で荒く削られた金属面のように鈍く光る。真新しい石鹸(せっけん)の匂いが鼻腔(びこう)に入ってきた。翠は命を賭して守ろうとしている対象に別れを告げる代わりに、その頭を撫でた。

シャリヤも一瞬顔を赤くするが、翠が何をやろうとしているか理解して顔が一瞬で真っ青に変わる。それ以降シャリヤがどのような表情をしていたのかを翠は見ることはなかった。いくら足掻いてヒーローを演じようとも、自分の死ぬ未来を知りながらそれを待つほど怖いものはない。

それでもその怖さに抗って、シャリヤだけでも救えるように、ちっぽけな自分でもできることを最大限でやっている。

自分が身代わりになるということだ。

数発の銃声が聞こえた瞬間、翠は死を覚悟した。1秒経っても、10秒経っても体に痛みを感じないので頭でも撃ち抜かれて即死したのだろうかと思いつつも、体の感触はあるし、目も開けられた。背後を振り返るとフェンテショレーの兵士たちは血を流して倒れていた。誰が彼らを倒したのかと周りを見ると、得意げに手を掲げるレシェールとその後ろに集う者たちの姿を確認することができた。

真打ちは、最後に登場ってなぁ！
“ǿчьзбѡп ижшпиди ѡбз ѡбłӥпиѡипэз шбі”

何を言っているかはよく分からなかったが、得意げな表情で言われた言葉は、翠の耳にはそう聞こえた。そう解釈するほかなかった。

#59　置き手紙より

フェンテショレーによる突然の侵攻はレシェールたちによって食い止められたようだった。実際に戦闘がどのように行われたかについてはよく分かっていないが、話を聞く限りシャリヤと翠が再会した頃には大体外部の敵は排除できていたようだ。

敵が勝てなかった理由は300対5000でも楽々に勝つことが可能であるとされた崇高伝統文学（ラノベ）作品群が残した偉大な戦術「包囲殲（せん）滅（めつ）陣」を利用しなかったからであることが明白であろう。レトラを囲んで、順序立ててバリケードを壊して侵入してきたなら、スターリングラード攻防戦も泣いて逃げるような状況になっていたはず。フェンテショレー側に勝利の絵を描く力がある人間がいなかったことに感謝するばかりである。

冗談はさておいて、身を捨ててシャリヤを守ろうとした翠の行為は英雄的であると見なされたようだ。結果としてレトラにおいて自由人として解放され、シャリヤやレシェールと再会したことによってまた生活が元通りになった。

しかし、未だ疑問に思うことはいくつかあった。

１つ目は、部屋に置かれていたシャリヤではない筆跡の置き手紙。シャリヤが何らかの外圧で翠と共にいられなくなった原因として、まず考えられるのはフェンテショレーである疑いをかけられた翠を排斥しようとする風潮だ。手紙がそれに関係していれば、翠の不当嫌疑を利用しようとした何者かの本当の目的や、誰が翠を追い出そ

うとしたのかが分かるはずだ。

２つ目に安全だと思われていたレトラがフェンテショレーによって侵攻された理由。元々レトラはレシェールが知っていた安全な街だった。レトラ市民たちが安心して街の中で産業や農業を営み、戦時中にもかかわらず、図書館まで運営できたことから、きっと長い間そういった安定した状態が続いていたのであろう。何の理由で今この街がフェンテショレーに襲われたのかは謎だ。

３つ目に自分が何故フェンテショレーだと思われたのか。そもそもフェンテショレーとは何なのか。この紛争の根幹的なことは何一つ理解できていない。もし自分がフェンテショレーと怪しまれる行動を無意識にやっていたのであれば、それはこれからも繰り返す可能性が高い。

変な行動を起こせば翠とシャリヤ、それを助けたレシェールの立場も危うくなることは理解できている。だが、自分に危害を与えようとする存在がいるとすれば、それが何であれ予見できるようにしておくべきだろう。

まず最初に調べるべきことは三番目の内容であったが、言語がよく分からない状態で歴史書などを読んでも理解できるとはあまり思えなかった。かといって人にフェンテショレーのことを訊いて回るようなことをすれば、また怪しまれることは必至だ。ともあれば、手紙の単語量ならば解読ができるであろうと踏んで、部屋に帰ってきてから手紙を見返していた。

ʒэ（あなた） ɔзuɒю ɱuюuuɱэзuɫ uɫз.

ɱбɒuбʒuɫïэю ɱɫɔзuɒю, ðбɫзuɫ цбu uɒэ（であること） ʒэ（あなた） ɱбɔ збɫuб（人） ʒuɱц

ɱБɔзnᏧuꜰиюnБю.

u пuззсзnᏧuɒ ɒn(彼または) эз пuззсзnᏧuɒ зэ(あなた).

ծn(私) БɔծuɒзпɔꜰɱЮɔн зБ зuɱ.

uю(しない) юnϱ uз ɱnᏧБюɱБ(フィアンシャ).

— юnзnuꜰ зэɒɒ(あなたたち)

まず、短くて簡単そうな後ろから２行目の文章を調べることにしよう。

分からない単語は“uю(エン)”と“uз(エル)”だ。辞書を引いてみよう。

uю(エン)

【ɱи.n】(ɒ-Ꮷɒ n-Ꮷn з-Ꮷз) uꜰɒ uɒпБϱэю БծэзэɒᏧɒи nᏧnи зᏧзи.

【ɱи.n】(ɒ-Ꮷɒ n nэ) uꜰɒ ɒ ծэзэ ɱБззuꜰ n.(nから選んでɒがあることである)

【ɱи.n】uꜰɒ ϱuзuɒэ uзծnюБзᏧɒ иuꜰюuцБɱюБэᏧn.

【ɱи.ɒ】(ɒ-Ꮷɒ з-Ꮷз/uɒпБ) uꜰɒ иэшnuɒиэ ɒᏧɒи uɒпБ з.(ɒがз――行くことである)

:ծn(私は――) uю nuиэɒиᏧn(水を) БꜰɱuзБзuɱuᏧз.:(――――)

「なんじゃこりゃ……」

複数の語釈が書かれていてさらに混乱してしまった。それによく分からない括弧と記号までついてきている。これをさらに解読するのは面倒なので、保留にしておく。

とりあえず“uю(エン)”の意味は「〜から選んで〜が存在すること」、「〜が〜……行くこと」という風に考えておこう。次は“uз(エル)”がどうなっているかを見てみよう。

uз（エル）

【nꝉm̡.】(uз ᴅ) uꝉᴅ（である） ᴅˀ1зэз ᴅˀ1ʒ（またはᴅに）.

:ʊnᴅᴅ иɔшnuᴅи（私たちは行く） uз（エル） ʙзum̡nᴅ（アレフィス）:

なるほど、この語釈によると“uз（エル）”は“-ˀ1ʒ（～に）”と同じように解釈していいと言っているらしい。つまり、“ʊnᴅᴅ（ミス） иɔшnuᴅи（テュデェスト） uз（エル） ʙзum̡nᴅ（アレフィス）.”は「私たちはアレフィスの下に行く」みたいなことを言っているのだろうか。アレフィスは確かシャリヤたちが信仰している宗教の信仰対象、神様だったからきっと死んだらみんな神様のところに行くんだよ、くらいの意味の例文なのかもしれない。

（あれ……？）

ここまで調べたことを総合すると、最後の文“uю（エン） юnn̡（ニヴ） uз（エル） m̡nˀ1ʙюm̡ʙ（フィアンシャ）.”は「フィアンシャに行くな」ということになるのではないだろうか。何故この置き手紙を書いた人物はシャリヤにフィアンシャに行くなと指示しているんだろうか。

（これは信用できる人間に訊いてみるしかないな）

シャリヤが部屋にいれば彼女に訊くが、今彼女はエレーナと共に何処（どこ）かへ用事で出かけている。
思い立った翠は立ち上がり身支度を始めた。

#60　ヨークオラ・フォックスは非実在の舞踊です

翠は図書館に向かっていた。まずこの街の人間では図書館のヒンゲンファールが一番信用できると思ったからだ。自分を不当な疑惑の中から救い出してくれた人間が信用できないわけがない。この手紙に何故「フィアンシャに行くな」と書いてあったのか、ますます謎は深まるばかりだ。

商店街を通って図書館に向かうルートを通ろうと考えていると爆破されたバリケードが気にかかった。もしレトラを襲撃したフェンテショレーに生き残りがいるとしたら、本拠地に逃げ戻ってこのことを報告することだろう。そうしたら、第二波の襲撃が起こることは簡単に分かることだ。しかしながら、翠は軍師ではない。バリケードを修復するくらい手伝うが、戦略を立てることなんてできない。そもそもレトラから一人で出ていって安全な地に逃げることも難しいのだし。

ある程度進んでいくと図書館が見えてくる。人が出入りしているのを見る限りちゃんと開いているのだろう。
近づくと向かいに建つ特徴のある建物が目に入ってくる。宗教施設のフィアンシャである。レトラのフィアンシャがここにしかないのであれば、置き手紙が示唆している入ってはいけないフィアンシャはここだろう。

（ん……？）

フィアンシャの中から音楽が聞こえてくる。雅楽のような音楽が気になって、目を向けると半開きになった扉から踊っている人々を

見ることができた。
　わざわざ宗教施設の中でやっているうえ、非常にゆっくりした動きを見ると、厳格で伝統的な踊りなのかと思ってしまう。伝統的な舞踊といえば以前、「ヨークオラ・フォックス」のことをインド先輩に教えてもらったことを思い出した。
　ヨークオラ・フォックス（Yorkhola fox）とはイングランド北部のノース・ヨークシャー州ヨーク近辺で発展した舞踊の一つであるという。香港がイギリス領になってから、ヨークに出稼ぎに渡った中国人が故郷の踊りを忘れないようにしようとイギリス華僑（かきょう）コミュニティの中で伝承されてきたらしい。
　掛け声が「オラ、オラ」と聞こえたために York ola「ヨークのオラ」と呼ばれていたが、新聞記事として取り上げた記者が「オラ」をスペイン語の挨拶である“Hola”と間違えて、現在のスペル Yorkhola が定着した。
　Yorkhola fox はスペイン人技師であるホセ・フォックス・コヴァルビアス・レオン（Jose fox Covarrubias Léon）によって成立したこのヨークオラの現代風のダンスのことらしい。
　両手を前に伸ばし腰を落として上下に激しくシェイクしながら体を左右に揺らす不可思議な振り付けに対して、当時のイギリス人の知識階級が「見ていて理性が飛びそうだ」と評したとされている。伝統的な中国舞踊と現代的な要素の合流を先進的と見たドイツ人生物学者ヨハン・パウル・ガッセー（Johann Paul Gassé）が 20 世紀末に日本に持ち込み「よっこら狐（きつね）踊り」や「よっこらふぉっくす」として一部の地域で現在でも伝承が続いているらしい。近年この伝統的舞踊はライトノベルに取り上げられ話題になり、昨今地域を挙げた継承に向けたプロジェクトを始めたようである。
　ここまでの話を聞いて、伝統舞踊というものはどのような流れを経てもその文化を継承し続けるのだなあと感動したものだが、すぐ後でインド先輩に今説明した舞踊の話は全部大嘘（おおうそ）であると言われて

ずっこけてしまった。ただ、インド先輩も実際にインドに住んでいたころに何回かインドの伝統舞踊の一つであるバラタナーティヤムを鑑賞したことがあるらしかった。
　結局のところ、文化を凝縮した伝統舞踊はとっても重要なんだよ、ということを伝えたかったのだろう。

　確かに伝統舞踊を理解しようとするのも重要だが、今はもっと重要なことがある。

“DБ3БłɔБ, cnю n̤ ϱБ3nłDиn.”（こんにちは、ヒンヴァリーさん）
“Бł, DБ3Бł ʒuюuDиn.”（あら、こんにちは）

　図書館に入ると何もなかったかのようにヒンゲンファールがいて安心した。近づいていって挨拶をすると、色々と感情がこみ上がってくるが、今回は救い出してくれたことに感謝するために来たのではない。
「手紙」という単語は分からないが、できる限り伝えてみよう。司書であるヒンゲンファールなら手紙の内容が何か分かるだろう。

“ðuł, ɱжБ ðэ3 ɱБ3 xułюБ3 ðБ3 Duзuюu ðn ɱnł3uɱ nłБюииuł3.”（えっと　これが机にあってそれで俺は書いてあることが知りたい）
“cðð......”（ふむむ）

　一気に言ってから細かいことが気になる。“xułюБ3”（ペーナル）は「机」じゃなくて「椅子」じゃなかったかとか、“nłБюиu”（クランテ）は「書く」で、“-uł3”（エール）は「〜するもの」を意味するわけだが、直訳の「書くもの」ではなくて「本」を意味しなかったかとか。しかし、多分大意は通じているだろう。置き手紙が机にあろうが、椅子にあろうが書いてある内容は変わらないし、ヒンゲンファールにとってもどうでもいい話だろう。

そんなことを考えているうちにヒンゲンファールの表情は酷く深刻にものを考えているような顔になっていた。手紙の内容が分からなかったのか、それとも……。

翠君……
“ʒиюuɒиn……”
はい……？
“ɥБ……ɣ”

ヒンゲンファールは深刻な表情のまま、手紙を掴(つか)んでこちらを見てくる。翠もその反応に、次の言葉を待つ。
すると、ヒンゲンファールは翠から目をそらして手紙に指を滑らせて尋ねた。

君、フィアンシャに行きたくない？
“ɒиʒиюu ʒэ иэɯn uɒи uʒ ɱnɬБюɱБɣ”

ヒンゲンファールの指は手紙に書いてあるフィアンシャの文字を指し示していた。

#61　業者が必要ね

私
“ðn иnɒэɯ uɒэ ʒn ɱиБ юэиɔʒ……”

ヒンゲンファール女史の身支度を待っている間、フェンテショレーが何なのか知っておこうと思って本をあさっていた。ただ、やっぱり内容はよく分からなかった。鳥の紋章がいくつかの本の表紙で共通していたところを見ると、どうやらフェンテショレーは鳥の紋章をシンボルに使うようだった。そういえば、フェンテショレーの兵士たちの胸にもこの紋章を模したバッジが付けられていた気がしなくもない。

本の中の図を流し読みして解釈できたことは、その紋章の件とフェンテショレーと対峙する人間たちの旗のようなものだった。フェンテショレーと対立する人間は“ꓘɔuɒɯuɫб(ユエスデーア)”だとか“ɱɔɫuɒ(シューエス)”だとかいうらしい。“ɯɔɱnuюuɫ(労働者)”とも書いてあったが正直文字を読んで、関係があるのかよく分からなかったし、ユエスデーアやシューエスが何なのかもよく分からなかった。前者が青色の旗を用いていて、後者が黄色の旗を用いているようだった。

用意ができたようなので、共に図書館を出てすぐのフィアンシャに向かう。未だに中では謎の踊りが続けられていた。ヒンゲンファールも何も説明をしてくれないから、踊りが気になってしまう。いや、ここのヨークオラはもうどうでもいいからさっさと手紙の内容が何だったのか知りたいところだ。

フィアンシャの施設の中に入ろうとすると一つの人影が見えてきた。

“чэз ʒuп̈uɥич ʒэ ию uз ɱnɥбюɱбɣ(フィアンシャへ入る？)”

人影の正体は、フィシャだった。証人として呼び出されて翠の不当嫌疑の迷惑を被った一人であろうが、入っていこうとしたヒンゲンファールに向かって非難がましく嫌そうな表情で話しかけていた。

“ʒuп̈ɒиnɣ cбɫðnu ʒэ(何を言ってるの？) зпɔɫɱɣ ɒn(彼は) ʒuзɯnю ɱбзnчб(シャリヤ) ɯuʒбɱuзuðuɥич ðбп̈ nɒ(なる) чбиuпcюuɱ.”
“ðn(私は) иʠбɫʒбɫ юnʠ(しない) иn. ɱзбɫɒпб(裁判は彼が) зпɔɫɱ(である) uɒэ ɒnɥɒи(ことを言っている) ɱuб ʒuп̈. эз ʒэ(またはあなたが) uɒ зб ʒuɱɣ”

ヒンゲンファールの言葉に突っかかるようにフィシャが言葉を被(かぶ)せてくるが、ヒンゲンファールは口論には取り合わないとばかりに

手でその言葉を押(お)し止(とど)めた。

話　私は来ない
"зnłɒ, зпɔłɱэю ɱɓɓnłзɒиэ ɱɔɓɥ ðn пзnu юnɒ̨ ɥэз."
はいはい、お願い
"ɥɓ ɥɓ, хзɓɱ ɱuз ɥɔшnɥułз зɔ шɓ."

そこまで話すと、フィシャは不承不承という感じで去ってしまった。ヒンゲンファールも真顔でフィアンシャの中に入っていく。
内部に設置されているベンチに座ってしまったので、同行するしかない翠も目の前で少女たちがこの地域のヨークオラを踊っているのをゆっくり見るしかなかった。一体インド先輩の言ったヨークオラとは結局何だったのだろうか。やっぱり伝統舞踊の抽象的概念なんだろうか。ならば彼らもヨークオラ演者ということに……一体何を考えているんだ？
自分が今何をやっているのかよく分からないし、しまいには変なことを考え始めてしまった。
ヒンゲンファールが何を考えているのかもよく分からない。フィアンシャに入るなと置き手紙には書いてあったが、フィアンシャに入ってそのまま謎の伝統舞踊を見ながら何もしないなんて。
そんなことを考えているうちに、ヒンゲンファールは怪訝(けげん)そうな顔で地面を見つめていた。

翠君……　これって何かしら……？
"ʒuюuɒиn...... ɱɔжɓ uɒ cɓłðnu......ɤ"

「何って地面ですよ、お姉さん」と答えかけてやめる。がたごとと床下から大きな音が鳴っていた。そういえば、以前もフィシャさんにこれを訊(き)いて、水がどうたらとか言っていたような気がする。

えっと、彼女は言っていた。これはメナス……　水？
"ðuł, ʒn зпɔłɱ. ɱɔжɓ uɒ ðuюɓɒ...... nuиэɒиɤ"
彼女？
"ʒnɒиnɤ"

フィシャ・レイユアフさんのことです
“あっ……ʒn uɒ ɱnɱƃ.зunцɔƃɱ.”

ヒンゲンファールは目つきを鋭くして思案顔になる。

彼女は言う
“ʒn зпɔɫɱ юuɒюuɫз ɳэзuɒƃзɤ”
「え？」

残念ながらヒンゲンファールの質問がよく理解できない。ヒンゲンファールも低い声で尋ねたのちにそれに気づいたのか、ため息をつく。ともあれ、このフィアンシャに関して持っている情報は図書館の目と鼻の先にあり、時々地下から大きな音が響き、フィシャ・レイユアフという人物がいて、白い大きな布が前方に吊(つ)るされていて、屈強な民兵が翠を捕まえた場所ということくらいだ。

ヒンヴァリーさん、俺はこれ以上知りませんよ
“cnюɳɳƃзnɫɒиn, ðn ɱuзɳnю ɱnɫзuɱ юnɳ.”
ふむう……　彼女は――水を　働く人――　――来て欲しい　私――
“cðð…… ɒuзuюu ʒn пзnu шɔɱnuюuɫ ðuюƃɒ nuиэɒи. ðn иnɒэш зƃ зuɱ.”

いきなり軽い調子で話し始めたヒンゲンファールに驚いていたが、次の言動に驚かざるをえなかった。

ちょっと待っててね、翠君
“ðnзn xзƃɱ. ʒuюuɒиn.”

ヒンゲンファール女史はそう言い残して翠を置いてどこかに行ってしまったのであった。

#62　ただの工事だよ

“uɥi ðnɒɒ(私たちは来る) пзnu шuƃ шэ, зunɥɔƃɱƃɒиn(レイユアフよ！)i”

　フィシャは奥の方で仕事をしていたのか、急いだ様子で出てきて驚いた表情を浮かべていた。翠もその集団を見て驚く。
　ヒンゲンファールを先頭にヘルメットを被った男たちがぞろぞろと集まってきていた。服装も作業服っぽさがある屈強そうな男たち。
　翠に待っていてと言っておいて、作業員を連れてきたというわけらしいが、これと手紙に何かの関係があるとは思えない。

“ðuƚ, cnюn̤ƍƃзnƚɒиn, ɒnɒɒ uɒ cƃƚðnuɤ(えっと、ヒンゲンファールさん、彼らは何？)”
“зэ ɱnƚзuɱ юnƍɤ(分からない？) ɒnɒɒ uɒ шɔɱnuюuƚ зuзƃnɔðɔɒи(彼らは——労働者よ).”

　フィシャも困惑して、ヒンゲンファールに尋ねるが返ってきた答えがこれである。やっぱりなんかの作業員らしいが、一体これから何をしようというのだろう。

“ðuюƃɒ nuиэɒuƃ˥ш(水の) зuзƃƍжзnɔð nɒ(なる) ƍƃй̈nƚɥɔ зжɤ ɥэз ðnɒɒ(私たち) ɔɒэɒю зƃ зuɱ.”
“cƃƚðnu……ɤ(何ですって……？)”

“ðuюƃɒ(メナス) nuиэɒи(イェトスト)”、つまり何らかの水を問題にしているということは水に関する作業、つまり水道工事でもやるのだろうか。
　そんなことを考えていると、またがたごとと床下から大きな音が響いていた。ヒンゲンファールが引き連れた作業員たちも不思議そうに地面を見る。

“ɱжб uɒ.（これよ。） шuзnɔ（すべき） ɔɒэɒю зб зuɱ（——）.”
“ðnɒɒ шuзɔɒuɒ юnϱ......（私たちは——しない……） ðбз ʒэɒɒ（そして、あなたたち） шэɒиnɒзu（——） хзбɱ（お願い）.”
“cбɫðnuɣ（何故？） ɱuюɱnɒ（——） ʒэ（あなた） ӥuɒиuɒ ɱэб（——） шэɱnuюэ（労働）.”

慌てるフィシャに詰め寄るように話しかけるヒンゲンファール。その時点でフィシャの顔は一気に血が引いて真っ青になっていた。
何だろうか、このフィアンシャは違法建築だから抜き打ち調査だ！　とかそういうことなんだろうか。

“ðбз（それでは、）, зuʒɔ（——） ðnɒɒ（私たち） ɱбɒ（——） шэɱnuюэ（労働）¡”

ヒンゲンファールが作業服の男たちに呼びかける。男たちは一人一人バラバラと建物内に散って、測量やら図面を広げて作業を始めた。
フィシャはといえば、バラバラと散っていった作業服の男たちを止めようとするものの人数が多すぎるのか、混乱してあっちこっちをきょろきょろと見回しながら何もできない様子だった。

“ʒэ¡（あなた！） ʒэɒɒбɒиn¡（あなたたち！） ɱжб uɒ ɱnɁбюɱб¡（ここはフィアンシャよ！） onэзз（——） ʒэɒɒ（あなたたち） nʒϱu ибюnɫибɱ（——）¡”

フィシャはそう言って走り去ってしまった。また床下からがたごと音が鳴っていた。ヒンゲンファールはというと、小さい箱状のものをバッグから取り出していた。何かと思う間にさらにバッグから軽機関銃を取り出して箱状の（弾倉）ものをかちゃりと装着する。

“nʒϱu（——） ɱжб（これを） ɱэб（——） ʒэ（あなた）.”
“......”

ヒンゲンファールはさらに拳銃をバッグから取り出して翠に渡すと、共にフィシャが走り去った後を追い始めた。翠もそれに従う。フィアンシャの建物の外に出ると、自分が追いかけられていることを知ったのか、驚きの表情でよろけながらも逃げるフィシャを確認することができた。

“ɞnзnꜝ（止まれ！） эз.....（または……）”

ヒンゲンファールが公道で銃撃を示唆する。しかし、フィシャはそれでも止まらず走り続けていた。建物の裏に回って逃げるフィシャを走って追いかける。動きを止めるだけなら威嚇射撃でもすればいいのにと思い、翠は拳銃を構えるが思いとどまる。シャリヤを助けようとした時は確かにどうにかできたかもしれないが、今回は当ててはならない威嚇射撃だ。フィシャから狙いを外して別の被害が出たらそれこそ翠は重罪人だ。

建物の裏にある異様なドアを開いて駆け込むフィシャを目にして、ヒンゲンファールもそのドアの中に入ろうとして止まる。直後、ヒンゲンファールの止まれと合図する手に翠は転びかけた。

ドアの内部は地下に続く暗い階段だった。ヒンゲンファールは軽機関銃を構え直し、慎重にドアの中へと進んでゆく。フィシャの姿が見えなくなってから、周囲は変に静かになっていた。

“c̄ɞ̄ɞ̄, n̄ɒ̄п̄Б̄ ̄з̄ɔ̄ӣ ɱuюoиuɱэзuɬ（フェンテショレー）.”

「はあ、クソ……」

同時にため息を漏らしながら、面白くないとばかりに言い捨てる。それにしても銃を持って特殊部隊のように中に入り込むヒンゲンファールはフィシャの…

っているが、有事には特殊部隊として活動する敏腕スパイとかそういうあれだったりしたら面白い。だが、そんなことは今はどうでもいい。

何？　これは……
“cБłϑnu ɱɔcБ......uDɤ”

下りていくと、地下には厚そうな鉄の壁に囲まれた部屋があった。大量の書類に次ぐ書類、加えて通信機器のようなものなどが置かれている部屋は階段ほど暗くなかった。
部屋の奥には少し窪（くぼ）んだ地面から先に伸びる真っ暗な地下道が続いていた。舗装などがされていないところを見ると、どうやら掘って作った地下道のようだった。ヒンゲンファールは通信機器を弄って何かをしようと試みていたが、翠にはそんなことよりもいくつかの書類の上部に示されている相手の正体に驚いていた。

「これは……フェンテショレーの紋章じゃないか……」

図書館で見たのと同じデザインの鳥の紋章が書類の上部に示されている。パラパラとめくった書類のほとんどに鳥の紋章が描かれている。引き出しを開くとそこにも書類があり、これもほとんど見覚えがあるその紋章が描かれていた。よく見ると通信機器にもフェンテショレーの紋章が刻まれているではないか。
フィシャはこのフィアンシャに工事業者が入ることを嫌い、ヒンゲンファールと翠が追ってきたときにここに逃げ込んだ。
つまり……それから導き出されることは。

それじゃあ、フィシャ・レイユアフは……
“ϑБз, ɱnɱБ.зunɥɔБɱ uD......”

ヒンゲンファールが言った瞬間、銃声が聞こえ、彼女の手から銃

が弾かれたように飛んだ。そのままヒンゲンファールは衝撃に耐え切れず壁に叩きつけられて頭を打ち、失神してしまった。正確に狙って撃たれたのか、手から大量の出血をしているのが見えた。手放された軽機関銃が悲しくも床で回転して、止まる。ヒンゲンファールを撃った人間の正体に怯（おび）えながらも、翠はその銃声が聞こえてきた方向に拳銃を向けざるをえなかった。

“цɓ, ðn uɒ ɱuюuиuɱэзuƚ.”（そうよ、私はフェンテショレー）

銃を片手に暗い奥の地下道からシニカルな笑みを浮かべて出てきた人物は、信じたくもなかったが紛（まぎ）れもなくフィシャ・レイユアフ本人であった。

#63　粉塵（ふんじん）爆発

“ɱuƚɔпuɒ xɓи̤, ʒuюuɒиn......”
（どうすればいい……考えろ……考えるんだ……）

ヒンゲンファールが昏倒（こんとう）してしまっている今、対抗できるのは翠しかいない。銃口を互いに向けあっている。先に動いた方が撃たれることになるのは明白だ。先に撃てば相手の動きを止めることができるが、何故かフィシャは撃ってこなかった。緊張感がお互いの体を縛り、膠着（こうちゃく）状態に陥っていた。

（ん……？　あれは……）

文書が山積みになっている反対側のテーブルには、見覚えのある紙袋が置かれていた。確かこの世界に来てから３日目にエレーナに

連れていかれた製菓材料の店の紙袋であった。紙袋の下部が全体的に膨らんでいるところを見ると、その内容物は粉なのだろうと思えてくる。

　そこまで分かってくるとフィクションの伝家の宝刀「粉塵 the 爆発」を試したくもなってくる。しかし、動けば撃たれる状態で粉をばら撒（ま）けるとも思えない。それに粉塵爆発はちゃんとした条件が揃（そろ）わないと急激で破壊的な燃焼が発生しないという。

　もし、条件を満たしてマズルフラッシュとかで点火できたとしても問題は色々と残る。こんな空気の抜け場が少ない密室にも近い室内で破壊的な燃焼なんかが起これぱフィシャだけでなく、翠もヒンゲンファールもただでは済まない。

　３人とも死んで、文書も全て燃え尽き、機械に刻まれた紋章も読めないほどになってしまったとしたら、あとに残る煤（すす）だけで何があったか解明することは難しいだろう。フィシャがフェンテショレーの関係者だったという事実は、３人の死体と共に完全な謎に包まれてしまう。

　銃口を向けあってから、30 秒以上が経った。お互い神経をすり減らしながらも緊張状態は続き、二人とも動くこともしゃべることもできないでいた。翠はフィシャの動きに意識を集中していたために周りの音が何も聞こえていなかった。

“ɱnɱбɒиnį”（フィシャさん！）

　いきなりの声に驚き、声の方向に振り向いた瞬間、銃弾が風を切る音がする。一瞬遅れてフィシャが発砲したという事実に気づくが、その対象は自分ではなかった。何故なら声の主はすでに殺されていたからだった。

　撃たれたのはヒンゲンファールが呼んできた作業員の一人のよう

であった。額から血を流して、手は万歳したまま倒れている。頭に一発。聖職者のわりにいい腕だ。

「ここまでやられて逃がすものかよ」

　緊張が途切れ、音もまともに聞こえるようになった。視界も開けた。フィシャが地下道の奥に走り去ったことに気づくが絶対に逃がさない。人を騙（だま）し情報を敵に流し、レトラで安寧に生活する人々を殺そうとする勢力を街に呼び込んだその罪は重い。
　拳銃を捨て、ヒンゲンファールが落とした軽機関銃を拾う。軽機関銃の方が連射性能がよさそうだと思ったからだ。フィシャが逃げていった地下道を進んでいくと、ずいぶん先の方にその影が見えた。

「止まれ！」
“onэзз ɥэз зэ（お前は） иnɒэɯ зэнxnиэ¡”

　フィシャがこちらに向き直り、何やら叫びながら拳銃を撃ってくる。姿勢を低くしてこちらも応戦する。
　守るべきものが自分以外いなくなったという時点でもう相手に遠慮する必要はない。フィシャがまた背を向けて走り始めたので追い始めるが、フィシャは５歩くらいで足を絡ませる。つまずいて倒れてしまった。

「主人公から逃げようだなんてな、ðnзn ɱuюиuɱэзuɫɒиn¡（止まれ、フェンテショレー！）」

　倒れたフィシャに対して言葉で牽制（けんせい）しながら、軽機関銃を構え直し、その間隔をじりじりと詰めていく。フィシャは転んだ際に頭でも打ったのか、全く動かない様子だ。少しずつ近づいていく。銃口はしっかりとフィシャに向いている。今更動いても避けることはで

きない。彼女をこのまま捕らえて、地下室の文書といった証拠とともに突き出せばいい。ヒンゲンファールという証人もいる。

“ипɒэɯ ɱƂзu зƂ зuɱ ʒэ˥ɒi”（あなた）

いきなりフィシャが動き出して目の前に銃口が向けられる。刹那、複数の銃声がし、体が衝撃を受ける。痛みは感じなかったが、衝撃を受けた腕の関節があらぬ方向に弾かれた。目を向けると銃弾が左の肩にめり込んでいる。しかし、すぐに命にかかわる傷ではない。体を奮（ふる）い立たせて次の行動に移る。

「くっ！」

瞬間的に体が動いて、フィシャが拳銃を持つ手を蹴り上げる。拳銃は５メートルほど先に飛んでいってしまった。彼女がこれから動き始めたところで勝ち目はない。倒れたフィシャを跨（また）いで立ち、銃口を突きつけ、これ以上の行動を制限する。

“...... xƂйuɒ.”（……撃て）

フィシャが目を瞑（つぶ）っていた。
その言葉は、単語を知らなくても自分の最期を悟って無駄に抗わないという意思の表れであると理解することができた。
多くの人が作り上げてきたレトラの平穏を乱し、多くの人間が死ぬ原因となったフィシャの行為は当然許されるべきことではない。
翠は機関銃のグリップを強く握った。

“cпп......”（うっ……）

大量の薬莢が地面に落ちる。銃声が狭い地下道の中に響き続けていた。弾切れになるまで、翠はトリガーを引き続けた。

「だが、俺はお前とは違う」

フィシャが横たわる床には一つも弾痕が残っておらず、弾は全て天井に埋まっていた。

#64　国家の犠牲

フィシャを拘束したものの何も縛るものがなかった。自分の上着を裂いて縛ろうと思ったが、上着は厚手すぎて引き裂くことが不可能だったので投げ捨てた。撃たれた肩は疼(うず)くように痛むが、アドレナリンが出ているのか見たところ酷い傷でもそこまで痛みはしなかった。普通に動けるものの動作がいちいち大雑把(おおざっぱ)になるのが面倒だったが。

肌着を脱いで引き裂いて拘束しようとする。フィシャは瞑っていた目を開いて茫然(ぼうぜん)とこちらを見てきた。上半身裸の翠に、何を勘違いしたのか頬(ほお)を赤らめているが、翠にはそんな気はない。

フィシャの手と足をしっかりと縛り、完全に動けないようにしておいた。あとはヒンゲンファールさんを起こすか、誰かを呼んできて助けてもらうのがいいだろう。

地下道を戻って部屋に入ると、ヒンゲンファールはまだ倒れたままだった。ぺちぺちと頬を叩(たた)いて起きないかと試してみたところ、目を覚ました。撃たれたのは手なのだし、命に別状はなさそうだ。しかし、押さえている手は痛ましかった。

“зuʒɔ ϑnɒɒ иɜɯnuɒи（私たちは行こう）. ɯuзnɔ зnɔɟɯ̰ зɓɟиɓɟʒ（人に言わなきゃ）.”
“…… ɥБ（ええ）.”

　ヒンゲンファールと共に暗がりの階段を上っていく。そういえばフィシャは裁判の時、自分を告発した側に立って証人になっていた。もしかしたら翠がフェンテショレーでないことを知りながらわざと内紛を起こそうとしてやったのかもしれない。これでやっと自分の無罪も完全に証明されるであろう。
　清々（すがすが）しい気分で地上に出ると手から血を流すヒンゲンファールと肩から出血している翠を見て驚いたのか、作業員たちがわらわらと集まってきた。何があったのかだとか、大丈夫なのかだとか訊いてきた上で傷の手当てをしてくれた。
　医者がやってきて、銃創から銃弾を抜いたときは痛いという感覚を超えていた。だが、生きていてよかったとも思った。なぜなら死んだら二度とシャリヤに会えなくなる。助けてもらった人々に恩返しもできなくなるのだから。

（そのわりには敵に情けを掛けたんだなあ、自分は）

　しばらくすると民兵たちが７人ほど来て、階段を下っていく。ヒンゲンファールの説明で事情を理解した作業員たちが民兵を呼んできたのであろう。数日前に誤認で自分を捕まえにきた民兵たちが、自分が中心となって敵を捕まえた後の始末をやっているというのは、ある意味で皮肉だろう。民兵たちの一部も傷ついた翠を異様な目で見て、それから地下に下りていった。

“зuюuɒиnǐ（翠！）”

　手当てを受ける翠の元に駆け込んでくる人影に見覚えがあった。

「しゃ、シャリヤ……どうしたんだよ……」

泣きついてくるシャリヤに疑問を呈した自分に気づいて再度自分が愚かしく感じてくる。信頼関係を取り戻したばっかりのシャリヤに対してまったく時間を掛けて話をしてやれなかった。ヒンゲンファールと共に置き手紙のどうでもいいような調査とアクション映画紛いのことをやっていた自分があまりにも薄情すぎるように感じてくる。

“юБʒu.....(ごめんな……)”
“......(……) юБʒu(ごめん) ðn(私) Би(——).”

赤くなった頬、潤んだ瞳、いつ見ても変わらない銀色の髪。すべてが愛おしく思えた。頭を撫(な)でてやると、落ち着きを取り戻して恥ずかしくなってきたのか少し距離を置かれてしまった。
恥ずかしがっているのか、リネパーイネ語でまくし立ててきた。言っていることは何一つ分からなかったが、どうやらお怒りのようだ。怒っている彼女もまたかわいい。
ヒンゲンファールはそんなシャリヤを見て安心したのか、微笑んでいた。これで全てが終わったのだ。すべてが日常に戻る。

“...... сБƚðnu ɱжБɺɯ(何この) юuɒюuƚз(——) uɒɣ(です？)”
「え？」

ガタゴトと足元から聞こえる音にシャリヤが呟く。そういえば、元々作業員が呼ばれた理由というのはこの床下から聞こえる妙な音だったはず。誰もがその奇妙な音に疑問を持っていた。ヒンゲンファールの表情が急に険しくなる。

その瞬間、銃声が聞こえた。民兵が持っていたと思われる小銃の度重なる発砲音と地下から聞こえる騒ぎ声で何かよからぬことが起きているということが分かる。もしかしたら、自分が行った拘束が甘かったか。外れて逃げようとしたフィシャが民兵と交戦しているのかと思い、自分の不手際でまた人が死んでしまうのではないかとおどおどしていた。
加勢しようと考えたのか、外で待機していた民兵の一人が小銃を構えて入ろうとしたところ――、

――するな！
“ӥnłз юnŋ¡”

何かに気づいたかのようにヒンゲンファールは民兵や近づこうとした作業員たちを大声で牽制する。ヒンゲンファールの声にぎょっと驚いた人々は地下室への入り口から後ずさりする。
瞬間、地下室の入り口は爆発した。爆風で舞った砂ぼこりが肌を摩（す）る。強烈な衝撃音と共にドアが吹き飛ばされ、あらぬ速度で近くの建物にめり込んだ。そこに人がいればひとたまりもなかっただろう。砂ぼこりが晴れると、地下室から地下道が下にあった地面が陥没していることが見て取れた。

一瞬何が起きたのかよく分からなかったが、大破した鉄製のドアを見ると事を理解することができた。爆発物らしきものは翠たちが潜入したときには存在しなかった。
粉塵爆発の原因となるものはあったが、この数分で条件を揃えて爆破させることは難しい。いくら脳筋っぽく見える民兵たちとはいえ、自爆になることは分かっているはずだし、そんな軽はずみなこともしないだろう。そもそも小銃を持ち込んでいるのでそんな手段を実行する理由がない。

つまり、別の誰かが持ち込んだもので爆破されたということだ。この地下室に繋（つな）がる地下道がフェンテショレーの工作員の連絡通路と考えれば、フィシャが捕らえられる前にフェンテショレーが機密を隠蔽するべく、彼女ごと地下道を爆破したと考えるのが自然だろうか。

フェンテショレーめ……
“ɱuюuиɱɘɜuꞁɒиn……”

厳しい表情で大破したドアを見つめるヒンゲンファールの目は、義憤に満ちていた。

異世界転生作品といえば、大抵の人間は次のようなことを想像しないだろう。
言語が完全に通じない状態で女の子と意思疎通を図りながら、首っぴきで辞書を引き、文章の意味を理解しようとしたりとか。
何も分からず敵と誤解されて独房にぶち込まれ、剣と魔法のファンタジー異世界ではなく、小銃と火薬の臭いの紛争地帯で、一番親交があった女の子と引き離され、敵のスパイとのハリウッド映画のようなチェイスをするとか。
まともな異世界転生作品の主人公であれば確実に気を病んで死ぬだろうが、翠は今まで死なずにやってこれた。それもシャリヤやレシェール、ヒンゲンファールたちの協力者がいてこそのことだ。

まともな異世界転生作品にしろ、翠が立ち向かっているこの現実にしろ、敵と戦わざるをえないことには違いはない。
翠でさえ情けを掛けて、殺せなかったフィシャをフェンテショレーは難なく爆殺した。彼女は爆破で即死したか、落盤した土砂に飲まれて圧死しただろう。
生き延びられると安心していたであろうときに、惨い死に方を強

要されたのだ。
　誰だってそんな死に方をしたいだなんて思わない。フェンテショレーはそんなことを軽々と実行できるような血も涙もない連中である。翠が今まで読んできた異世界転生作品の主人公と同じように、自分が対峙（たいじ）しなければならない敵はこのフェンテショレーなのだろう。

　だが、自分は日常的な生活が戻ったところでわざわざ戦争を一人でおっぱじめようとするような馬鹿でもない。「殺（や）らなければ、殺られる」は本質としては正しいが、何も考えずにやるべきことではない。
　しかし、フェンテショレーが一体何者なのか。彼らが何を望み、自分たちと戦うのかについてはちゃんと知らなければならないだろう。そうすれば、自分だけでは難しいかもしれないが、フィシャのような不必要な犠牲者をこれ以上出さないようにすることができるかもしれない。そのためにも、またしばらくヒンゲンファールのところに通うのがよいだろう。

　ともあれ、日常が戻ってきたことは嬉（うれ）しいことだ。市街戦の経験などない小市民の生活は平和に限る。

・七日目学習内容
1.　文法的なことは学ばなかった。

語彙
ɋɔнюɔи（ヴュヌト）（【形】大丈夫な？）

Ex.7 決心 side シャリヤ

　襲撃から数日が経ち、市民評議会が開催されていた。評議会はレトラの住民が一斉に大きなホールに集い、昨今の街の様々な事情について報告を行ったり、役員の信任投票を行ったりする機関らしいが、ここ数年は開催されてはいなかったようだ。
　それでも、さすがにバリケードが破壊されて、政府軍に侵入されたという事実にレトラの自治組織も危機感を募らせたのか、住民全員を集めてこの評議会を開催すると発表したのであった。

　シャリヤはレシェールにこれを伝えられて、翠やエレーナ、フェリーサを連れて席についていた。ホールはパーティー会場のようなレイアウトになっていて、大きな丸テーブルが並んでいたので、そのうちの一つを占領するように席を取った。

“ϑn uᴅ cnɔꟾю.”（退屈ね）

　エレーナが頬杖（ほおづえ）をつきながら、壇上を一瞥（いちべつ）して呟（つぶや）いた。
　壇上ではバリケードの修理費用を誰がどのように負担するのか、バリケードの再構築の資材をどこから調達するのか、瓦礫（がれき）の撤去はどうするのかなど、民兵の男が様々な疑問を投げかけていた。
　横に座る評議員がそれぞれ何か答えていたが、エレーナは聞く耳を持たないで本を読むことに没頭していた。
　フェリーサはといえば、翠と何かを話してこちらも全く壇上の話を聞いていない様子だったし、自分でさえ話を聞くのがバカバカしく思えてきた。

　襲撃にこれからどのように対処するのかを考えるのは私たちの仕

事ではなく、大人が決めていくことだ。バリケードの修復も、防衛の強化も私たちがどうにかできることではない。レトラでの規定労働も私たちはまだ農業だけで、本当に関係のない議題なのだ。
　しかも、襲撃されたときに民兵は誰も自分を守ってくれなかった。もし、レシェールが来なければ、きっとあのバリケードの脇で政府軍に撃ち殺されたに違いない。しかし、そこで率先して身を挺(てい)して守ってくれたのは翠だった。

“ŋɔDuɜ.(嬉しい)”

　自分に言い聞かせるように誰にも聞こえない小声で呟いた声は、壇上のマイクで喋(しゃべ)る会話に掻き消されていた。一瞬、翠がこちらを振り向いた。笑顔を返すと、彼も笑顔になった。そして、フェリーサが袖を引っ張るのに気づいて会話に戻っていった。
　彼は自分を庇(かば)って死のうとするほどに私のことを大切に思ってくれている。最初こそ、リパライン語も話せず、ユエスレオネでの振る舞い方もよく知らない異世界人のような人間だったから、助けることに使命感を感じていた。彼は家族や知り合いがいなくなった私やエレーナと同じような存在でお互いに助け合うべきだと。

　でも今は違う。
　お互いに紆余曲折(うよきょくせつ)を経て、色々なことを理解しあってきた。それに、周囲の目からを避けるように翠から逃げた私を叱責することなく、その上、命を懸けてまで守ろうとした。ならば、自分も命を懸けて彼の存在を守ろう。
　未だに彼を政府軍のスパイだと思っている者がいるなら、それが偽りであることを証明しよう。彼が言語に困ることがあれば、分かるまで彼の勉強に付き合おう。彼の行くところの障害をできる限り排除し、共に前身しよう。

そんな決心を強く心に刻んだ。仰いで見えた天井の照明はそれを祝福するかのように眩(まぶ)しかった。

異世界語入門
～転生したけど日本語が通じなかった～

著者あとがき

私がとある言語を勉強している――と話すと、いろいろな反応をされます。例えば、「そんな言語より英語を勉強しろ」だとか「なんか喋ってみて」だとか。

人によって、外国語を勉強することに対する接し方は変わってきますよね。私は２年前までインドのチェンナイというところに住んでいました。青年海外協力隊のボランティアや国際協力基金の日本語教師の方々の中には、現地語であるタミル語が話せる人もいましたが、チェンナイにいる日本人にタミル語を勉強する人はほとんどいませんでした。訊くと、「英語すら上手に話せないのにタミル語なんて」と言うのです。

彼らは数ある言語の中でも簡単と思われている英語への苦手意識があるから、他の外国語を学ぶなんてとんでもないと思っているのです。同じように私が他人に言語学習を楽しんでみないかと勧めると、「英語もできないのに」と否定的になる人が多く見受けられます。

正直、英語でつまずいてしまうのも分かります。しかし、英語を外国語の代表とするのはどうでしょう。世界には数千を超える言語がありますし、それぞれの言語は異なる多様な言語文化を持つのです。

言語を習得する理由は様々なものがあります。多くの人は仕事や何かを知るために習得するのかもしれません。

しかし、本作で翠君と共にリパライン語の仕組みを楽しめたなら、

もしかしたらあなたも言語を学習すること自体を楽しめるようになるのではないでしょうか？

最後になりますが、素敵なイラストで本書を彩ってくれた藤ちょこ様、挑戦的な作品にもかかわらず根気強く本作と向き合ってくれた担当編集の堤様、並木様、いきなりのお願いにもかかわらず言語学監修をしていただいた関西外国語大学の中江先生、ギリギリのスケジュールで設定資料を揃えたり、内容について一緒に考えてくれたりした『総合創作界隈悠里（そうごうそうさくかいわいゆうり）』と創作世界観（そうさくせかいかん）『大宇宙（だいうちゅう）』の皆さん、そして何より、リパライン語に触れ合ってくれたすべての皆様に、心からお礼申し上げます。

——Fafs F. Sashimi

著者あとがき（異世界語版）

ცБззuꞁꞁп̈uю збꞁuБ Бзcpu uucpu ცБззuꞁ зпɔꞁცuзuɒɒuꞅɯ зuꞁɒɒuꞅɯ зБϐnuu. ცБꞁცuзuю збꞁuБɒɒ зuꞁɒɒu ცɔБ ɯuзɔɒuɒэ жэюuэ ꞗБɒცБ эз uюꞅnБꞁꞅɒʒn.

xБ, юэuɔɒuБю nэ ʒuюuꞅuч ʒэ uБucБ зnxБзБnю ʒuзБ ცuзcp onэзз чэз ʒэ uБucБ зuꞁɒɒuэʒu зпɔꞁცuзuɒɒ ϐuюϐ

onuuꞁϐ ცБз xuuucpБз, uɒცБცnʒБ ɒпɔꞁзБცuꞁз зuɔɒ чэюɔuɔɒuБюꞅnu зucp ӥБзnӥБзuɒ зɔ ცɔꞅnʒcэпэ cpnʒn Бɯnu uзϐnзnꞁცuю Бӥnɔп ცnзcpч uӥэю зucp ცuꞁзuɒ зɔ ӥɔӥɔϐn cpnʒn Бɯ зɔ юБϐnпп cpnʒn, эɔncɔꞁп пБꞁcpэ ცnзcpч зпɔꞁცuзuɒɒuюuꞅɯ ცnꞁзucpБnюэ ϐuзɒч зucp ცuꞁзuɒ зuю юБпБu cpnʒn, зБюcpuꞁცБ Бӥnɔꞁп̈unю nэ uʒʒБзБꞅɯ БʒnꞁзБю пэюзБცэ Бɯ зБcpюuꞁз ϐuзɒч ϐnɒʒБэю unɒэɯэꞅn зꞅuɒ <чɔꞁзn ӥꞅuɒ зБӥӥnчБცuю зпɔꞁცuзuɒɒ Бɯ зnппБცuꞁз> Бɯ <п̈nꞅэюcpБюuცuꞁu>, xБꞁcpБϐ зnюuxБꞁnюu uзч Бзɒ Бюп̈ცnꞁзuꞁɒɒ uзч Бзxnзuэю cpБʒuuɒ ϐnꞅɒ ცБзnꞁзБ.

——ცБცɒ ცБзnꞁБ ɒБɒcnϐn

リパライン語とは？　#1

結局リパライン語ってどこの言語なんだ？

“зпłю, сбди зпюохбłнюи ир зпṁу зпэłṁизиddʒ”

リパライン語はシアン大語族リパライン語族
ユナ・リパライン語派に属する言語のうちの一つよ。
私が話しているのは標準語とされているフェーユ方言ね

“зпюохбłнюи ир зпэłṁизиddиdиs łкэи сй ṁиdиdиdиs ṁпłбюбłw łиззшбциблw шłбиблbłw
зпхбзбию łиззшбłw эюэюэ шłбюэх зпхбзбию ṁэłшпиззэюбłз.
ʒп зпэłṁ ṁэбзиłпззбюи йэ ṁизи dиdиdиw ṁиłэłw зэłпṁбłэ ип цб.”

シアン大語族……リパライン語族……よくわからないけど、
似たような言語が他にもあるってことかな？

“ṁпłбюбłw łиззшбциблw...... зпхбзбию łиззш......
ʒп юбdиэю ṁпłзиṁ юиṁ йэ dиdиd зпэłṁизиdd ʒэз идпп зб зиṁʒ”

まあ、リパライン語の方言もあるし、
近縁の言語としてはヴェフィス語やフラッドシャー語などね

“ʒиł, цэṁиишпззэłw зэłпṁбłэ би ʒэз идпп ṁэбзиłпззбюп.
ṁиṁиdи бш зэбdиńиз ид зэṁппłłиззшию зпэłṁизиdd ип.”

なるほど、それでこの世界で広く使われている言語はどれなんだ？

“ṁпłзиṁ, ʒбз сбłʒи ип зпэłṁизиdd йэ ṁизи
зэdэ ппюпиdэю ṁбз эюшиdибю шэłюиʒ”

地域ごとに違いはあるけど、
少なくともレトラの周辺は現代標準リパライン語という言語を使うわ。
この標準語はフェーユ方言を基礎に標準化された言葉よ

“ṁбззиłłṁию цэṁиишпззэdибю пэ зб зиṁ ṁэизиłэззэю
обṁиd хб łиизбłw ṁпб пэ пзиdṁзэю зпэłṁ ṁбппэбию зпюохбłнюи.
ṁэбзиłпззбюпбdибю ип зпэłṁизиdd йэ ṁэппэбиd ṁиłэłw зэłпṁбłп.”

広く使える言語を勉強しないと
この異世界で生きていける気がしないしな。
もっとリパライン語を勉強しなくちゃ！

“ʒп юиṁ зиłddи зпэłṁизиdd йэ ṁизи зэdэ ппюпиdэю ṁизṁ цэз ʒп цdиdию зэдu.
ʒбṁ, шизэ ʒп и зи зпюбdиńłиdэю зиłddи зпюохбłнюи!”

私は広く使えなくても翠の言葉が勉強してみたいけど……

“ṁп зиюиłw зпэłṁизиdd ṁизи зэdэ ппюпиdэю
юиṁ хб dизию ʒп зиłddи зб зиṁ ип......”

え？

“сииʒ”

言葉って、その人のことをつぶさに映し出す鏡なの。
だから、私は大切に思っているあなたの言葉を学びたいの
……って言ってみると恥ずかしいわね……

“зпэłṁизиdd ип цбłзиб йэ изиdиdэю ппю збłибdибю.
ʒбṁ, dизию ʒп зиłddи ʒпłdи зиṁ эзиибłидэю зэłw зпэłṁизиdd
...... ʒп ид идэшэз зи łиłэи......”

リパライン語とは？　#2

シャリヤ、君のことを愛している——

"ɱбзпцбопи, ðп эюιопиłзип зэ——"

えーっと、いきなりどうしたの？

"зсδпбł, сбłðпи ио оипо ɱбз зэʊ"

って、この本に書いてあるんだけどこれは一体何の本なの？

"——ɱбзи пɔзэłпи пłбюииэłп ɡизип пłбюииıłзипибюбłр.
ðбз, цэиюэипибю ио ðизо сбłðпиʊ"

……それは、スキュリオーティエ叙事詩ね。
ピリフィアー歴紀元前1998年に編纂された口承詩集よ。
元は古典リパライン語で書かれていたみたいね。

"...... зб зиɱ ио опɔзэпłэłиŀиłиłw ɱиюωэопłз ип. иłр опɔзэпωŀłłɡию
ωэłɱиłɡиɡ ɡизип ɡэɔэɡ ɱбз ðэłзпɔзэхɔзпзłw Гðð⁴łw łэзи. бɥпэпизωł ɡизип
пłбюииэ зизоц хиюэз зпиюхбłпиюи зэ ип."

古典リパライン語かあ、リパライン語は歴史のある言語なんだね。

"хиюэз зпиюхбłпиюоии иоð, зпиюхбłпию ио юопиюпиюłɥпоиωзию
зпэłɱизиоо иоð цб."

リパライン語の歴史は7000年以上あって、
リパライン祖語から派生して、エタンセンス語、古リパライン語、
中期リパライン語、古ユナ語と変遷して
今の現代標準リパライン語があるのよ。

"зпхбзбпию зпэłɱизиоопłцэłэх ɡизип ипзбюэ зизпэц Т000 ɱэ łэзи.
пиипłзпиэ ɱипбюłцɱɱ цэцэз ðбз зб зиɱ оп иибюзиюзи ðбзи хиюэз зпиюхбłпиюи
ðбзи хбзибэɱпбɡию зпиюхбłпию ðбзи хиюэз эюэ ðбзи
юэиэłłw ɱэðзиłпэзбюпию зпиюхбłпию ɱбз юэ."

へえ、古典リパライン語って
今のリパライン語とどれくらい違うんだろう……？

"зпłзб, сбðи хиюэз зпиюхбłпию эðпиo
юэиэłłw зпиюхбłпию ɱбз юэ ðию......ʊ"

"ЗНКХСVФБЗЗ ZНDʊ"

え？　今、喋ったのが古典リパライン語？　どういう意味？

"сииʊ зпбɱэ юэ пэ зэ зпэłɱ хиюэз зпиюхбłпиюʊ сбłðпиłп пбюииʊ"

内緒だよ（私のこと好き？　って訊いたとは言えない）

"иłр ɡпипипий (зиюи юоɡ ðп цɥɱłиłиип
ɱб юэюэ юэ нэ сэюэ зб зиɱ--зэ зпłɱ ðпʊ)"

監修・スペシャルサンクス

●本作全体の言語学監修●

中江加津彦氏

関西外国語大学（言語学）

※現在世界各地で実際に使用されている言語に関する、
事実関係についての監修。

●スペシャルサンクス●

Fafs.lavnutlart（KPHT=YY）

ラテン語・アラビア語の専門家。本作ではラテン語およびアラビア語の監修。

Jekto.vatimeliju

国際言語学オリンピック日本代表経験者、
CEFR C1 レベルに相当する英語話者、
本作では言語学・英語・フランス語の監修。

Falira.lyjotafis（S.Y.）

東洋文字学の専門家。
本作では文字学の監修、ボードゲームの制作・小火器の設計。

Jaya āzhavāl

南インド考古学者、タミル語 CEFR C2 レベルに相当する話者。
本作ではタミル語の監修。

Skarsna haltxeafis nirxavija（えかとん）

林学・生態学の専門家。
本作では樹木や分類学の監修。

Fafs F. Sashimi
ファフス フェー　ザシミ

滋賀県出身。小説サイト「カクヨム」にて連載中の本作がツイッターやネットで話題となり書籍化が決定。中学生のころから言語研究に努め、本作にて異世界語の題材となっているリパライン語という人工言語の構築に至る。

異世界語入門
～転生したけど日本語が通じなかった～

著者　Fafs F. Sashimi

2018年7月5日　発行

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました
『異世界語入門 ～転生したけど日本語が通じなかった～』
2018年7月5日　初版第一刷発行

発行者　三坂泰二
発行　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

ＫＡＤＯＫＡＷＡ　カスタマーサポート
[WEB] https://www.kadokawa.co.jp/ （「お問い合わせ」へお進みください）

担当編集 堤 由惟・並木 勇樹（プライム書籍編集部）
ブックデザイン　鈴木 勉（BELL'S GRAPHICS）
イラスト 藤ちょこ